

ドイツ語現在完了の語用論的意味 : その通時的考察

著者	金子 哲太
発行年	2013-09-19
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416乙第465号
URL	http://doi.org/10.32286/00000330

2013年9月 関西大学審査学位論文

ドイツ語現在完了の語用論的意味
—その通時的考察—

金子哲太

【論文要旨】

本論文は、ドイツ語の現在完了時制の意味をあらためて問い直し、その時間性、アスペクト性、またとりわけ語用論レベルの意味を歴史的に跡付ける実証的試みである。論述では、時制記述のさいにしばしば援用される Reichenbach の3つの操作概念、すなわち発話時点、事象時点、観察時点を用いることになるが、このうち概念設定が不明瞭な観察時点については、その機能を2つに分割することを提案し、議論の出発点とした。

第1部では、現代語の主要な文法書の記述に沿っていくつかの時制論を吟味することで時制全般にわたって何が問題となっているかをまず概観し、つぎに現在完了時制の位置づけや意味用法の検討に入った。これにより、この形式の時間的、アスペクトの本質がどこにあるかを考察した。その結果、現在完了時制を用いた文には、後時的観点を基点としたアスペクト (Rückschau-Perspektive) が認められ、その基準点は、移動可能性の点で現在時制的な特徴をもっていることが示された。後時的観点の位置がことなることで、動詞行為の時間性とアスペクト性の出現に差が生じると考えられるが、他方で、出来事はその都度の発話状況 (の何か) に関係づけられることに注目し、そこには何らかの話者の主観的な態度が現われているという指摘を行なった。つまり語用論的な意味レベルで発話状況中心性を重視した。

第2部では、ドイツ語史における時制体系や動詞アスペクト表示についての意味的、形態的發展を、ゲルマン語や古い印欧語にもさかのぼってまず概観した。haben/sein を用いた迂言形式の成立事情やその原初的状況を見ておいたうえで、優位にあった過去時制との競合関係のなかで、また完了アスペクト表示手段の変遷という流れのなかで、これが発展・拡充していった姿を古高ドイツ語期から中高ドイツ語期まで追っていった。文法書等の記述にしたがって、形態、意味を具体的に分析した結果、再分析を被ったあと、sein 完了だけでなく、文法形式へと展開するうえでより負担の大きかった haben 完了にも定動詞の現在時制性が残存し続ける一方、過去分詞ではアスペクト表示を残す姿が見て取れることとなった。また、後時的観点が現在時以外に位置するとき、とくに動詞の完了アスペクトが前面に現われるという現代語に似た傾向があると見なした。

第3部では、歴史的資料を用いた用例収集によって古高ドイツ語と中高ドイツ語の共時的分析を、使用される人称、コンテキストにおける時間性および話法性という観点から行なった。調査結果や用例分析にもとづき、共時的、通時的傾向に考察がなされた結果、現在完了時制が用いられた文のコンテキストは原初期から現在性が基盤にあったこと、当該文に使用される人称として 1/2 人称が増加したことが認められた。これらの点は形式に想定される現在時制性に

ふさわしいが、さらに話法性を帯びたコンテクストの増加傾向も見られた。それは、この迂言形式が、過去の、完了的出来事が発話状況（の何か）に話者の何らかの主観的態度をともなって結びつけられるというパターンを指向するようになるプロセスを意味すると考えた。そこに成立している意味は広義には話法性であり、歴史的に見ると現在時制性をもつアスペクト単位の構成とともにこの語用論的意味が現在完了時制を特徴づけてきたのではないかと指摘した。以上の議論を踏まえたうえで結論として、現在完了の発展には過去時制との決定的な違いである「非過去性」と「現在性」が重要な役割を果たしてきたことをとくに主張した。加えて、現在完了時制の意味機能について、共時的にも通時的にも時間性、アスペクト性、話法性を取り入れた体系的記述への道が開かれるのではないかと指摘した。

目 次

序 論.....	1
第 1 部 現代語の現在完了.....	6
第 1 章 時制論における現在完了の位置づけ.....	6
第 2 章 現在完了と過去の違い.....	17
第 3 章 観察時間.....	27
第 4 章 発話状況との関係.....	40
第 2 部 現在完了の通時的変遷.....	53
第 1 章 現在完了の起源と原初的状況.....	53
第 2 章 動詞時制体系の変遷.....	64
第 3 章 現在完了の形態的・意味的発達.....	82
第 4 章 中高ドイツ語における現在完了の意味用法.....	97
第 3 部 時間性、人称性、話法性.....	113
第 1 章 コンテキストの時間性.....	115
第 2 章 現在完了文に使用される人称.....	122
第 3 章 コンテキストに見られる話法性.....	127
第 4 章 文接続における意味関係.....	146
結 論.....	158
文献一覧.....	166

序論

ドイツ語には、現在、過去、未来、現在完了、過去完了、未来完了と6つの時制形式がある。意味用法の観点から言ってその区別がもっとも難しいのは現在完了時制と過去時制であると言って良い。ドイツ語に取り組むものはこの過去を表わす2つの時制の使い分けに少なからず頭を悩ますであろうし、この問題をめぐって盛んに議論がなされてきたであろうことは、文法書記述の当該箇所をいくつか見比べてみるだけで見えてくる。

周知のとおり、日常会話では、ドイツ語圏全域にわたって過去に起きた出来事はふつう現在完了時制で表わされる。この点で「完了」(Perfekt)という名称からして実情にはそぐわない。日常会話での現在完了時制優位の傾向は、とくにドイツ語圏南部では非常に強く、この地域の方言においては過去時制の使用はほとんど失われていると言われる。ここに方言差という問題が浮かび上がってくる。他方で過去時制が優位を占めるのは小説や物語などの文章語であるため、それは一般的には「語りの時制」とみなされている。しかしまた、たとえば新聞のドイツ語を見ると、とくに簡潔な表現が好まれる大見出しやニュース速報においてはふつう過去形が用いられる。すなわちテキスト種や文体上の違いもまた両時制の使用の差にかかわってくることになる。しかしさらにもし通時的観点をも視野に入れるのであるなら、初期新高ドイツ語期に生じた大きな体系的変化について指摘しておかなければならない。弱変化動詞の過去形に生じた語末音消失が引き金となって広まったとされるドイツ語圏南部での過去時制消失(Präteritumschwund)は、この地域における現在完了時制優位の要因であると指摘される。これとは別に、ゲルマン諸語にわたって古来より確認される、総合的形式(synthetische Form)の衰退と分析的形式(analytische Form)の興隆という大きな漸次的潮流あるいは両者の交替プロセスによって現在完了時制の機能領域が広がっていったという見方も可能となってくる。

以上のように、現在完了時制には形式に備わった意味機能を問う以前に、過去時制とのあいだに見られる用法上の相違点や類似点がつねに横たわっている。意味分析や考察を行なうためには、使用条件や分布の差といった制約をあまり受けない、あるいは一定の環境下におけるばあいを想定しなければならない。

さて、文法書等を見ると、これら過去を表わす時制の決定的な違いが生み出されるのは視点の置きかたによるとされることがある。またしばしばそれは形式に内在する意味機能であると読めるように記述されている。すなわち現在完了時制(Es hat geschneit)では、現在時に視点が置かれるのに対し、過去時制(Es schneite)では出来事が生じる過去に置かれるという意味構成上の差が見られる。動詞が表わす行為に目を向けると、完了時制にはしばしば形式の名称

にふさわしい完結性や結果性が前面に現われる (Der Bus **ist** vor 3 Minuten **abgefahren**)。これはその都度の動詞がになう時間局相的意味、すなわちアクションスアールト (Aktionsart) あるいはアスペクト性 (Aspektualität) の問題である。たとえば現在完了時制に新しい状態への移行を表わす変容相の動詞を用いるときには結果性が付随してくると言われる (いま挙げた例では「バスは出発してしまい」もうここには残っていない)。言うまでもなくこの意味的側面は、自動詞か他動詞かという使用動詞の統語的性質とも連動して、現在完了時制で **sein** か **haben** のどちらを用いるかという助動詞の選択に干渉を及ぼすことになる。

時制形式の意味分析をおこなうばあい、動詞の形態や意味だけの問題にとどまらず、つねに文全体の意味がかかわってくるので、ともに用いられる時間副詞 (句) とで構成される複合的な時間意味にも目を向けなければならない。現在完了時制のばあい、共起する時間副詞は現在のであっても過去のであっても良い (*Jetzt habe ich mein Referat fertig gemacht / Gestern hat er viel gearbeitet*) が、過去時制のばあいにはふつう前者は認められない (**Jetzt machte ich mein Referat fertig*)。また意味用法上の相違について言えば、過去時制の意味機能は (本来的には) 過去指示に限定される。他方で現在完了時制では、過去指示のみならず未来指示あるいは超時間的な用法が見られたり、過去以外の出来事に対する推量的表現を作ることにも可能である (*Morgen hat er die Arbeit beendet / Unglück ist schnell geschehen / Wahrscheinlich hat er die Prüfung bestanden*)。これらの時制にはいわば唯一の過去指示といくつかの相対的過去指示という用法における分布上の差が見られるため、過去性を問題にするだけの分析では限界が生じてしまう。

このように時制論において意味分析を行なうばあいにはつねに大小の問題がつきまとうため、どの側面においても単一のレベルの意味を検討するだけでは不十分である。したがってわれわれがある時制形式を扱おうとするばあい、どのような観点でどのように分析を行なうのかを明確にするだけでなく、時間性以外の他の要素との関連を視野に入れて複眼的に考察をすすめる必要がある。

分析レベルについては次の問題点を付け加えておかなければならない。過去形をあつかうばあい、助動詞を必要としない総合的形式であるという点から文意味の分析がそのまま時制形式の意味を問うことになりうる。すなわち、母音交替による強変化動詞にしても (**binden** – **band** – **gebunden**)、接尾辞添加による弱変化動詞にしても (**machen** – **machte** – **gemacht**)、その都度用いられる動詞の過去形が定動詞として主格主語と文法的関係を結ぶため、さしあたって動詞形態素の意味を直接問うことができる。一方完了形はといえば、複数の語を用いる分析的形式で構成される。ここでは **haben/sein** + 過去分詞という構成体は抽出

できても、その意味を問うことは決して容易であるとは言えない。と言うのは、haben や sein は助動詞として機能化した文法的用法のほかにも「～をもっている」、「～がある」などと語彙的意味（あるいは連辞的意味）をになう動詞としてごく普通に現われるからである。たとえば話法の助動詞は本動詞としての用法をもつことがしばしばあるが、そのばあい助動詞がになう意味領域のなかで現われるのであって、本来の意味からかけ離れた意味を発揮することはない(Er kann Deutsch sprechen / Er kann Deutsch)。一方の構成要素である過去分詞は、その都度用いられる本動詞によって形成される。そのさい、sein 完了では本動詞が分詞化されることで生じる動作様態の意味（完結性あるは結果性）を残したまま構成されるが、haben 完了のばあい、転換した態によって生じるはずの過去分詞の受動の意味はまったく現われないまま主格主語とともに能動的関係を結ぶのである(eine verbesserte Auflage / Der Lehrer hat den Aufsatz stilistisch verbessert)。また、完了の助動詞と過去分詞を用いた構成単位は、完了不定詞として他の助動詞と共起したり zu と結びついて不定詞(句)を作ることも可能である(Er scheint die Verabredung vergessen zu haben)。一方で過去形は、たとえば過去不定詞といった単位を構成する能力を持ち合わせておらず、つねに定動詞で現われる形態にとどまる。

現在完了時制のこうした形態上、統語上あるいは意味上の特質を考えると、過去時制との比較・対照は決して容易ではないことが見て取れる。意味分析の手法としては、しばしば文法書等でなされているように、まずはその都度現われる意味用法を時間、アスペクト等一定の基準を用いて分類整理するというアプローチをとるのが妥当であろう。

さてこの論文は、現在完了時制がもっていると考えられる視点の問題と現在時制性(「非過去性」)に着眼して共時的および通時的考察を行なった。Es hat geschneit という文に与えられる現在時における視点とはなにか、あるいは具体的に現われるさまざまな意味用法のなかでそれはどのような役割を果たしているのかが議論の対象となる。この形式には広義のアスペクトと呼ばれる意味要素が内在していると考えるのであるが、他方でまた過去の出来事に対する話者の何らかの主観的態度がコンテキストを通じて現われるという広義の話法性も認めることになる。主要な現代語の文法書記述から意味を議論したあと入っていく通時的考察から、ドイツ語の現在完了時制は、この二つの特徴を重要な意味要素として自らにもちつつ発展を遂げてきたのではないかと主張する。

分析では、まずもって形態や構造の意味を求める必要があるため文意味を出発点とするが、これにはさらに話者の存在が関与してくるため、コンテキストの意味も積極的に視野に入れなければならない。重点を置いたのは、現在完了文に好まれるコンテキストタイプの調査および当該文との意味関係という語用

論的分析である。また、いまや時制分析のさいにきわめて一般的に用いられる Reichenbach のアプローチを援用するが、そこで用いられる 3 つの時間概念のうちの参照時点 (point of reference) に検討を加えた結果、これを 2 つの概念に分けて分析する手法を提案することになる。通時的には、現在完了時制の萌芽的形式が初出する古高ドイツ語とその拡充期にあたる中高ドイツ語のテキストを用いて両時代の具体的用例を抽出し、使用環境を積極的に視野に入れた意味分析を行なう。ゲルマン語や古い印欧語の動詞体系をも視野に入れながら、動詞の時制、アスペクト表示にかんしてどのような形態的、カテゴリー的な変遷があったのかを概観することで歴史的背景を把握しておき、これを踏まえたうえで用例調査によるデータ結果から現在完了時制を通時的に位置づける試みを行なう。

第 1 部では、現代語の主要な文法書の記述に沿っていくつかの時制論を吟味することで、まずは現在完了時制の位置づけや過去時制の違いなど意味用法を検討する。これにより、この形式の時間的、アスペクト的本質がどこにあるかを探る。そのさい、ドイツ語の時制論でもしばしば援用される 3 つの時間概念のうち観察時間 (Betrachtzeit) が問題視されることになる。現在完了時制を用いた文には後時的観点を基点とした一種のアスペクト単位が見られ、そこから過去の、完了的出来事が眺められるのであるが、その観点が移行しうる時間的領域に鑑みれば、この形式には現在時制性が備わっていると考えることができると指摘する。動詞行為の時間性とアスペクト性の境界が不明確であるケースが少なくないなか、設定される後時的観点がとる位置によっては広義の完了アスペクトが優位に立つ環境がある程度限定づけられる。総じて、出来事はテキストにおける過去の叙述のなかで「語られる」のではなく、その都度の発話状況 (の何か) に関係づけられることに注目する。そこには何らかの話者の主観的な態度が現われているという指摘を行なって通時的分析、考察につなげる。

第 2 部では、ドイツ語史の流れのなかで時制体系や動詞アスペクト表示についての意味的、形態的發展を概観するが、そのさいゲルマン語や古い印欧語にもさかのぼって関連づけを行なう。まずドイツ語で現在完了時制が成立した原初期の状況を見ておき、優位にあった過去時制との競合関係のなかで、また完了アスペクト表示手段の変遷という流れのなかで、これが発展・拡充していった姿を追っていく。考察対象となる歴史的言語は、とりわけ原初期の古高ドイツ語と拡充期の中高ドイツ語である。先行研究や文法書の記述を通じて、これらの時代の形態的、意味的側面を具体的に分析し、あらためて整理する試みを行なうことによって、歴史的にどのような意味構造をより本質的に残してきたかを考察する。その結果、再分析を被ったあと、sein 完了だけでなく、文法形式へと展開するうえでより負担の大きかった haben 完了にも定動詞の現在時制

性が残存し続ける一方、過去分詞ではアスペクト表示を残す姿が見て取れることになる。また、動詞行為の時間性とアスペクト性については現代語と同様の出現関係が見られる傾向にあると指摘される。

第3部では、歴史的資料を用いた用例収集によって古高ドイツ語と中高ドイツ語の共時的分析を、使用される人称、コンテキストにおける時間性および話法性という観点等から行なう。用例分析やその調査結果にもとづいて、共時的傾向のみならず通時的傾向についても分析、考察がなされた結果、現在完了時制が用いられた文のコンテキストは原初期から現在性が基盤にあったこと、当該文に使用される人称として1/2人称が増加したことが認められた。これらの点は形式に想定される現在時制性にふさわしいが、さらに話法性を帯びたコンテキストの増加傾向も見られた。それは、この迂言形式が、過去の、完了的出来事が発話状況（の何か）に話者の何らかの主観的態度をともなって結びつけられるというパターンを指向するようになるプロセスを意味すると考えた。そこに成立している意味は広義の話法性であり、通時的に見て、アスペクト単位の構成、その時間的特性とならんで、この語用論的意味がとりわけこの迂言形式の発展を支える特徴であったのではないかと指摘する。

以上の議論を踏まえたうえで、結論では、現在完了時制は、動詞行為の完了アスペクトを表示する手段ではあるが、過去時制との決定的な違いである「非過去性」と「現在性」がより重要な役割を果たす迂言形式として発達してきたのではないかと主張する。その2つの特徴とはすなわち、一方ではアスペクト単体を構成する後時的観点の属性である現在時制性と、もう一方では広義の話法的意味が現われる基盤として認められる発話状況中心性である。また、現在完了時制の意味機能について、共時的にも通時的にも時間性、アスペクト性、話法性を取り入れた体系的記述への道が開かれるのではないかと指摘される。

第1部 現代語の現在完了¹

第1部では、現代語の現在完了がこれまでの時制論研究のなかでどのように議論されてきたかを概観し、そのうち重要であると思われるいくつかに考察を加える。このことによって問題点の所在を明らかにし、その解決策あるいは新たな視点の可能性を探りたい。焦点となるのは、Pf.が時制カテゴリーとしてどんな本質的意味をもっており、これがどんなふうに現われるのかを共時的に考察することである。これはのちに行なう通時的考察の出発点にもなる。

第1章 時制論における現在完了の位置づけ

時制とは、人称、数、法などとともに定動詞の形態に現われる文法カテゴリーであり、ドイツ語は一般に6時制体系をもっていると言われる。すなわち、現在時制 (Präsens)、過去時制 (Präteritum)、現在完了時制 (Perfekt)、過去完了時制 (Plusquamperfekt)、未来時制 (Futur I)、未来完了時制 (Futur II) である。これらの呼称はおもにラテン語文法に由来しているのであるが、ドイツ語とはことなり、ラテン語の時制はきわめて規則的な形態体系のうちの一つの屈折形態を通して時間やアスペクトの違いを表わす (emô – emêbam – emî : ich kaufe – ich kaufte – ich habe gekauft)。したがってドイツ語の時制形態やその意味について少しでも思いを巡らせれば、術語が意図するところと言語事実とのあいだに大きな隔たりがあることがすぐに見えてくる。たとえば、ドイツ語では屈折形態素を用いたいわゆる総合的な時制形式は現在時制と過去時制だけであって、他の4つは別の補助語、すなわち助動詞を必要とする分析的形式である。また、未来時制を用いて表わされる出来事は未来的というよりはむしろ推量的であることが多いし、反対に、未来の出来事はコンテクストに副詞など未来指示要素があれば未来形を使う必要がなく、現在時制のままで事足りるのである。

それでは時制体系はどのような観点のもとで構築され、そのなかでPf.はどのように扱われてきたのであろうか。主要な時制論研究を見通すことのできるThieroff (1992) を見れば分かるように、これまで数えきれないほどの先行研究がなされてきており、ドイツ人であってもその膨大な量の論文すべてに目を通すことは不可能であろう。本章ではThieroff や Radtke (1999) の記述にもとづ

¹ 本論文の考察対象は、直説法における現在完了時制とする。ふつうPf. (Perfektの略記) を用いるが、現在完了と表記することもある。過去時制もまたPrät. (Präteritumの略記) あるいは過去と記す。それらの表記は、体系内の存在としての時制カテゴリーや時制形式を指すが、なかには文中に現われる具体的形式を指すばあいもある。

いて、6 時制体系を中心にドイツ語の時制論においてもっとも重要と思われるアプローチを概観しつつ考察を進めたい。

さて学校文法で認められてきた伝統的あるいは規範的な 6 時制とはどのような観点にもとづいて構成されるのであろうか。ここではラテン語文法の影響については立ち入らないことにして、ドイツ語の時制形式と意味の関係から時制体系の仕組みを見ておきたい。するとそこにはまず「現在」「過去」「未来」という自然の時間を重視する分割法が基盤にあることがわかる。記述のしかたに少なからずの違いはあるにしても、これら 3 つの客観的時間が分類基準となつて、現在時制と過去時制と未来時制が分類されるのである。これらの時制は「絶対的」(absolut)あるいは「直接的」(direkt)時制グループとみなされる。そしてこれらの基軸の時制形式にもう一つの意味基準が設けられることによって、合計 6 つの時制体系が作られることになる。その 3 つの副時制、すなわち現在完了時制、過去完了時制、未来完了時制を位置づけるさいの設定基準には二通りのアプローチがある。一方では「前時」(vorzeitig)か「同時」(gleichzeitig)によって区切る方法であり、これは相対的時間にもとづくものである²。もう一方は「継続」(Verlauf)か「完結」(Vollzug)であり、これは客観的時間ではなく時間の局相すなわちアスペクトを基準とするものである³。このようにしてできる時制体系はつぎのように整理される。

【表 1-1】

Zeit	aspektuell	Verlauf	Vollzug
	zeitrelativ	gleichzeitig	vorzeitig
Gegenwart		Präsens	Perfekt
Vergangenheit		Präteritum	Plusquamperfekt
Zukunft		Futur I	Futur II

(Thieroff (1992: 47)を一部改変して作成)

現在時制と現在完了時制のあいだ、また過去時制と過去完了時制のあいだに認められる差異が相対的時間 („zeitrelativ“)にあるにせよアスペクト („aspektuell“)にあるにせよ、このような体系化は形態に意味機能に対応する点に利点があると言えよう。すなわち完了形態 (haben/sein + 過去分詞) を用いる表内の右側の

² ただし Admoni (1970: 181ff.)のばあい、Pf.を前時性にも過去性にもかかわる存在とみなしている。また Blatz (1896: 494ff.)は、絶対的時間を軸として設定される前時性のほかに、相対的時間としてさらに後時性 („nachfolgend“)性も認めている。こうした相対的な時間の把握のしかたはむしろ後述する 9 時制体系モデルにしばしば見られる。

³ Eisenberg (1994), Jung (1973), Schmidt (1973)など。

系列とこれを必要としない左側の系列が意味的にも対立を結んでいる。とは言え、一つの時制形式が一つの意味機能しか持っていないと言うわけではない。たとえば、さきに触れたように、現在時制を用いてごく普通に出来事が未来時に起きることを表わすことができるし、未来時制ではしばしば時間性ではなく、現在や未来の推量を表わすのである。

また、Duden (1995) に代表されるように、やはり自然の時間を出発点としてはいるが、現在と未来を一つにまとめて非過去 (Nichtvergangenheit) というカテゴリーを設けることによって過去 (Vergangenheit) と時間対を結ばせる手法をとる文法記述もある。このばあいには、現在時制と過去時制の2つが中心時制とみなされる。この主軸となる時制を基盤にして、それぞれの形式に追加して認められる完結 (Vollzug) と推量 (Vermutung) という時間以外の追加要素が加わることによって6つの形式が体系化される⁴。Duden の記述にもとづいてまとめるとおおよそつぎのようになる。

【表 1-2】

aspektuell/modal „Zeit“	Vollzug	(Haupttempora)	Vermutung
Nichtvergangenheit	Perfekt	Präsens	Futur I
Vergangenheit	Plusquamperfekt	Präteritum	Futur II

(Duden (1994: 144f.) をもとに作成)

さきに挙げた表 1-1 とはことなつて、縦軸には現在、過去、未来という3つの自然の時間ではなく、現在時制と過去時制にあてがわれる過去と非過去という対立が基軸となる⁵。この基本時制 (Haupttempora) に加わる新たな指標とはアスペクト性 („aspektuell“) と話法性 („modal“) である。こうして現在完了時制や未来時制を有標形式として対立させることで全体の体系化を図っている。

このアプローチのポイントはいくつか指摘できる一方で、問題点が少なくと

⁴ 時間やアスペクトの点で見解がことなつているが、Flämig (1991) や Hentschel/Weydt (1994) も基本的にはこの立場をとっていると言える。

⁵ この表中の „Zeit“ とは、Duden のばあい出来事が起こる時間すなわち事象時間 (Ez) を想定している。非過去と過去とはそれぞれ現在時制と過去時制がになる指示時間であるが、完了時制の2つを考えると矛盾が生じる。たとえば現在完了では現在と未来を表わし、過去を指示しないことになる。しかし Duden の各時制の主要な意味をまとめた欄で現在完了の記述 (Duden (1994) 145) を見ると、Zeit とは出来事が起こる事象時間ではなく、関係づけがなされる基準時 (Bezugspunkt) あるいは観察時間の時間性を重視している姿が伺えるためこのような表記にした。おなじ問題がさきに挙げた表 1-1 にも含まれるが、この基準時についてはこのあとすぐ、そしてまた第2章以降で議論の争点となる。

も一点あるように思われる。長所から挙げておくと、一つには、体系の主軸となる2つの時制に認められる基本的な時間意味を基準とすることで形態と意味の関係が明確となっていることである。すなわち、一つの時制形式に実際に現われる意味用法をも視野に入れた記述となっている。たとえば非過去という基準は、現在時制と現在完了時制では定動詞で現在人称変化を行ない、現在時のみならず未来時をも表すことが可能であるという実情にふさわしい⁶。もう一つには、総合的形式による時制と分析的形式を用いた時制を峻別している点である。現在形と過去形以外の4つの時制にはすべて **haben** や **werden** などの助動詞が用いられている。さらにまた、時間性以外にアスペクト性 („Vollzug“) だけでなく話法性 („Vermutung“) の表出もある程度秩序だてて視野に入れられているからである。時制形式の意味分析をおこなうにはこの2つの意味構成要素を避けて通るわけにはいかない。

しかし他方で、表を見るとすぐにわかるように、話法性を示す2つの未来時制では、時間上の対立化が他の時制ペアと同じようにはならないという不完全さを孕んでいる。未来時制 (Fut I) には非過去を想定できる一方で、未来完了時制 (Fut II) には「過去」という時間的基準を想定することはできないであろう。Duden は、未来完了時制は時間的観点では現在完了時制と似ていると指摘している⁷が、その類似性を関係づけることや、前時性あるいは完了性をもつ未来完了時制とこれのない未来時制との違いを1つの時制体系概念図のなかで示すこともまた不可能である⁸。ただしここに挙げた表は、Duden の時制機能の総論的記述を整理し、これにもとづいて筆者が作成したものにすぎない。時間指示機能にプラスアルファされる意味要素であるこうした2つの指標が時間性などのような関係を結ぶのかといった詳細については何も記されてはいない。

このように、一口に6時制と言ってもそのアプローチには違いがあることが分かるし、また個別的看着て言語実態にはそぐわない点もすぐに浮かんでくる。ここではさしあたって Duden の記述にしたがって、体系化の試みと実際の意味用法とのあいだに生じる問題点をより具体的に浮かび上がらせておきたい。つぎの例文は各論で挙げられた箇所である。

Perfekt

1. Bezug auf Vergangenes: Kathrin hat ein Klavier gekauft.
2. Bezug auf Allgemeingültiges: Ein Unglück ist schnell geschehen.

⁶ 注5を参照。現在完了時制のばあい指示される出来事の時間性を言っているのではない。

⁷ „In zeitlicher Hinsicht gleicht es (= Futur II) dem Perfekt.“ Duden (1994) 145.

⁸ 同様のアプローチをとる Brinkmann (1962: 319f.)では、未来完了時制をもはや体系内に認めず、全体で5時制としている。

3. Bezug auf Zukünftiges: Morgen hat er sein Werk vollendet.

4. Szenisches Perfekt: Und aus einem kleinen Tor, das ... sich plötzlich aufgetan hat,
bricht ... etwas Elementares hervor.

(Duden (1995) 149)

うえに挙げた時制体系表に示される通り、Pf.では関係づけが行なわれる基準点が「非過去」(Nichtvergangenheit)に位置づけられ、その範囲のどこかから見て完結した出来事が表わされることになる。一方でここに示したように、各時制の意味用法を見ると、動詞行為のアスペクト性ではなくそれが起きる出来事の時間を基準にして4分類されている。たとえばPf.の一用法に挙げられている例 *Morgen hat er sein Werk vollendet* で考えてみると、「未来的なことへの関係づけ」とはPf.を用いた文意味をもとにした出来事のありかたであって、それは決して時制の機能的側面を出発点とした記述であるとは言えない。未来時を直示する直接のファクターは未来の副詞 *morgen* と考えられるからである。確かに個別の用法に添えられた説明には、時間指示についてはたとえば副詞、前置詞句、時間文などふさわしい時間規定語によってなされると述べられている。しかし「～への関係づけ」(Bezug auf...)との表記はまるで現在完了時制が未来時を指示する機能をもっているかのような誤解を招く恐れがある。このままでは、ほぼおなじ4つの意味用法をもつ現在時制(Bezug auf Gegenwärtiges, Allgemeingültiges, Zukünftiges, Vergangenes)に等しい時制機能をもつ時制形式ということにもなりかねないだろう。つまり「非過去」と特徴づけられるのは、完了的意味を構成するさいの基準点の移動しうる領域であって、出来事が生じる時間のそれを行っているのではない。われわれは文法書の記述において羅列的に挙げられる文意味上の意味用法を時制の意味機能と同一視しないよう注意を払わなければならない。

以上、自然の時間を基準にしながらもこれに対応する形態を基盤とした6時制のアプローチを見てきたが、この他やや古い時代にはさらに論理を推しすすめた9時制体系モデルもあった。Bauer (1830)によれば、Gedicke (1801)は理想の時制体系として、前時性、同時性の他に後時性も認められなければならないと唱えている。教育学者の立場から構築された時制は、自然の3つの時間点を基本軸としてこれに3つの相対的時間点があてがわれることによって、合計9つの時間的關係が成立するというものである⁹。ただし一方では実際に現われる時制形とは食い違いがあるとも指摘しているようである。たとえば3つの

⁹ Bauer (1830) 52ff. この9時制モデルは、のちのReichenbachの基本時制に一致する。13ページ図1-1を参照。

基軸のうちの1つである現在 (Zeitraum der Gegenwart) に対して後時的時間を示す後時性と、未来 (Zeitraum der Zukunft) と同時的時間を示す同時性は同様の未来領域に属し、まったくおなじ構文 *ich werde schreiben* が当てはまる。また未来の後時性 (*ich werde schreiben wollen*) はふつうほとんど使われないであろう¹⁰。また、印欧語の時制体系を追求した Paul はそれをこの理想モデルに依拠したのであるが、過去の後時性や未来の後時性を具現する時制形式はないとして7時制体系を提唱した。しかしドイツ語史に入ってから現われる過去未来を考慮に入れたため、最終的には8時制を認めている¹¹。これらのアプローチには論理にもとづいて構築された理想体系に時制形式や動詞表現を無理やり押し込めている姿が見えるだけであって、実現形態の実情に沿って作られるべき時制体系からはかけ離れてしまっている。

このほか、個別言語を超えたレベルで時制体系を追求した Jespersen (1924) は7時制にたどり着いている。彼は出発点としてはやはり絶対的時間と相対的時間を織り交ぜたアプローチに依拠してはいるが、「今」(now) という基本軸を3つに区分すること、そして時間を2次元的にとらえることに異議を唱える¹²。すなわち、3つの基本時のうち過去と未来にのみ相対的な前時性と後時性を認めることのできるつぎの7つの時点を一本の時間軸上で位置づけている：*before-past, past, after-past, present, before-future, future, after-future*。しかし根本的にはうえで述べた9時制とおなじように実際の形態にもとづくものではなく、自然の時間を基準にした論理上の産物であることには変わりがない。未来後時という時間段階の例である *I shall be going to write* は、これに対応する一つの時制形を示す例であると言えるだろうか。そしてこのモデルをドイツ語にそのまま当てはめることは困難である。なぜなら、ここでは英語の Pf. は完全にアスペクト表現とみなされているため、時制体系のなかにもともとそれがまったく現われてこないからである。ただし、彼の時制論は、「諸言語においてそれら(7時制)が実際にどのように表現されるかを調べることをその目標の一つとしており、この基本モデルはあくまでもその出発点に過ぎないという態度をとっている¹³。

さて、以上のどのアプローチを見ても「時制」であるからには自然の時間を出発点としなければならないとし、これに相対的時間を組み合わせて論理的に時制体系を構築しようとしている姿が垣間見える。そこにはまた、Comrie の明

¹⁰ Thieroff (1992) 47f. 中村(2000) 64.

¹¹ Paul (1958) 64, 148.

¹² この批判は直接的には Madvig のラテン語文法に想定された9時制体系に向けられたものである (Thieroff (1992) 51f.)。

¹³ Jespersen (1924) 257.

言を挙げるまでもなく、時制がになう機能とは発話時間をもとにした時間直示 (Zeitdeixis) であるとの共通の理解が横たわっているのであろう¹⁴。

...tense is grammaticalised expression of location in time... all clear instances of tense cross-linguistically can be represented in terms of the notions of deictic centre, location at, before, or after the deictic centre... …時制とは時間における位置づけの文法化された表現であり…時制の明々白々の例証は通言語的に、直示的中心という概念のもとで表わされうる。すなわち直示的中心にある位置、これより前にある位置、これより後にある位置である。 (Comrie (1985) 9)

とは言え、さまざまに現われる実際の意味用法は時間直示だけでアプローチするには限界があり、すでに触れたように、これに絡んでくるアスペクト性や話法性をどうしても視野に入れる必要がある。Jespersen や Comrie に代表されるように、Prät.との意味機能上の差が比較的明確である英語では、Pf.を時制ではなくアスペクトとみなすことは問題ないのかもしれないが、このあと見るようにドイツ語ではこの2つの時制は同様の意味で用いられるとみなされることがしばしばあり、どちらかのカテゴリーに収めることは決して容易ではない。観点の違いによって結果的に認められる時制形式の数もことになってくるのは当然であるが、形態やカテゴリーを基準にして出発するにしても、時間性以外の要素をも包括するような時制体系を描くにはどうしても困難が伴うのである。

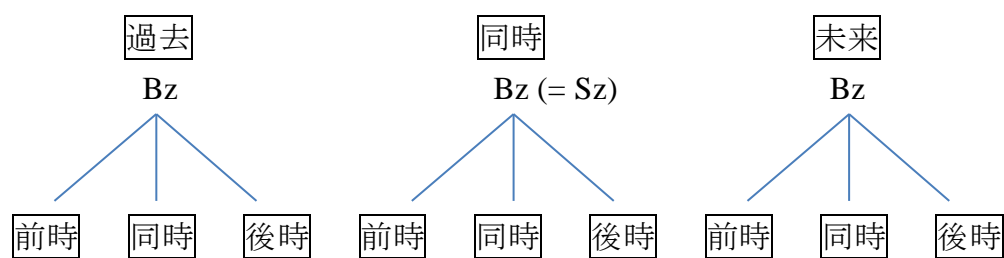
逆説的に聞こえるかもしれないが、ここで、純粹に時間のみを基準として時制の体系化を試みた、そして現在もなお影響力をもっている Reichenbach (1947) のアプローチを見ておきたい。記号論理学から生まれた彼の時制理論は、部分的に修正や改変がなされることもあるが、現在ではきわめて一般的に文法記述のなかに取り入れられている。

このモデルでは、時間直示機能ではなく3つの時間点の関係が重視されることによってすべての時制形式の意味が説明できるとされる。それは事象時点 (point of event)、発話時点 (point of speech)、そして参照時点 (point of reference)

¹⁴ たとえば以下のような記述が見られる： „Sie (=Tempora) gehören ... zu den deiktischen Kategorien der Sprache ... Ihre konkrete Bedeutung gewinnen sie jeweils erst im Sprech- bzw. Schreibakt durch den Bezug auf das „Zeigfeld“ des Sprechers/Schreibers mit den Dimensionen „Person“, „Raum“ und „Zeit“ 「それら (=時制) は…言語の直示的カテゴリーに属する…その具体的な意味は、「人」、「場所」、「時間」という面を備えた話者・書き手の「指示場」に関係づけられることによって、話す行為ないし書く行為のなかでその都度ようやく得られるものである」 (Duden (1995) 144); “the tenses determine time with reference to the time point of the act of speech” 「時制とは発話行為の時間への指示をもって時間を決定づけるものである」 (Reichenbach (1947) 287f.).

である¹⁵。発話時間はまさに話者が発話を行なう「いま」であって、時間軸上でつねに基準時となっているが、これと事象時間との関係で3つの時制が決まる。「発話時間の前」、「発話時間と同時」、「発話時間の後」を表わす過去時制、現在時制、未来時制である。しかし事象時間が発話時間と直接的な関係を結ぶことでは表わせない過去完了時制には、別の時点を設定しないとうまく説明できない。たとえば Peter had gone という文では、過去における参照時間を用いることによって「行ってしまった」という事象時間の位置づけが決まる。このようにして完了時制3種もすべて説明が可能となる。この3時点を用いることによって時間的配列を考えていくと、理論的には全部で13パターンが想定される（次ページ参照）のであるが、可能な時制を体系化しようとするなら、つぎに示すように9つの基本形式（fundamental forms）に集約されるという¹⁶。

【図 1-1】 Reichenbach による 9 基本形式¹⁷



その手順はつぎのとおりである。まずは原点としての Sz を基準として、相対的に位置づけられる3つの時点をも Bz とする。すなわち過去であるか、同時 (= 現在) であるか、未来であるか。つぎにこの3つの Bz を基準として相対的な位置関係に想定される3つの時点をも Ez とする。すなわち前時であるか、同時であるか、後時であるか。こうしてできるイメージを図式化した図 1-1 を見ると、Thieroff が指摘するように、1世紀も前に Bauer らが打ち立てた考えかた（上述参照）と根本的にまったく一致していることがわかる。しかし Reichenbach の

¹⁵ ドイツ語圏ではたいてい、Ereigniszeit (= Ez)/Aktzeit, Sprechzeit (= Sz), Betrachtzeit (= Bz)/Referenzzeit と呼ばれることが多い。それぞれの時間を原義通り時点 (point) と捉えれば、-zeitpunkt (たとえば Ereigniszeitpunkt) となるが、出来事とは反復あるいは習慣や性質を表わすばあいもあるため、このように -zeit とくくっておくほうがより扱いやすいのではないかと考える。たとえば Er lernt Deutsch という例では「彼」が現在時にドイツ語を勉強していても良い。3つの時間点の一致ではなく、当該の動詞行為がある程度の幅をもった現在時ないし「今」に認められればそれで有効である。

¹⁶ If we wish to systematize the possible tenses... We thus arrive at $3 \cdot 3 = 9$ possible forms, which we call fundamental forms. 「われわれがありうる時制の体系化を欲するなら…われわれはこうして基本形式と呼ぶところの $3 \times 3 = 9$ の可能な形式に達する。」 Reichenbach (1947) 296.

¹⁷ 図中4つの「同時」のうち、基本軸としての「同時」(上段)が point of speech に対する same time であり、残りの3つの「同時」(下段)が reference point に対する simultaneous である。

ばあい Sz や Ez だけでなく Bz という操作概念を導入することにより、単なる理論的構想から脱却し、時間軸上で位置関係を具体化することが可能となった。Reichenbach が新しい名称を与えるために挙げた見取り図を挙げておく¹⁸。

構造	新しい名称	伝統的名称	
Bz < Sz	Ez < Bz < Sz	過去前時	過去完了
	Ez, Bz < Sz	単純過去	単純過去
	Bz < Ez < Sz	Bz < Ez	—
	Bz < Sz, Ez		
	Bz < Sz < Ez		
Sz, Bz	Ez < Sz, Bz	現在前時	現在完了
	Sz, Bz, Ez	単純現在	現在
	Sz, Bz < Ez	現在後時	単純未来
	Sz < Bz	Sz < Ez < Bz	Ez < Bz
Sz, Ez < Bz			
Ez < Sz < Bz			
Sz < Bz, Ez		単純未来	単純未来
Sz < Bz < Ez		未来後時	—

(Reichenbach (1947) 297 加筆等一部改変)

図 1-1 とあわせて見れば分かるように、主軸となる 3 つの構造は Ez, Bz < Sz (単純過去)、Sz, Bz, Ez (単純現在)、Sz < Bz, Ez (単純未来) となる。3 大時間グループに分けられる段階では Sz を基準として Bz の相対的位置が決めるのみで Bz と Ez は同時である (Bz, Ez) ため、Ez の位置は問題にならない。つぎにこの 3 主軸が基準となって今度は Ez との前時的 (Ez < Bz)、同時的 (Ez, Bz)、後時的 (Bz < Ez) 関係が決まる。たとえば過去 (Bz < Sz) であれば、過去前時 (Ez < Bz < Sz)、単純過去 (Ez, Bz < Sz)、そして理論的には 3 つの関係ができる過去後時 (Bz < Ez) となる。このレベルではじめて出来事が起きる時間 Ez が位置づけられる。こうして純粋に理論的には合計 13 通りの時間構造ができあがることになる。

ちなみに未来前時では Sz < Bz と Ez < Bz が重要なのであり、Ez が Sz とどのような位置関係になるのかは言語表現としてはほとんど問題にならないため一つに括られる。たとえば Er wird diese Arbeit schon fertig gemacht haben というば

¹⁸ 不等号記号の < では左側が時間的前時、右側が時間の後時を表わす。またコンマ(,) は 2 つの時間点が同時にあることを示す。

あい、Bz と Ez との関係が重要なのであり、コンテキストによっては仕事を終える時間 (Ez) が発話時 (Sz) と同時であっても、それ以前あるいは以降であっても一向に構わないのである。同様のことが過去後時にも当てはまるため、9通りの主要形式に集約される。

さて、ここでは Jespersen のモデルでは出てこなかった Pf. が説明可能となる。そして単純過去とは意味機能がことなることが明確に見て取れる。時間軸を用いて示すとつぎのようになる。



(Reichenbach (1947) 290 記号を改変)

この図式からわかるように、両時制の違いはひとえに Bz の位置にかかわっている。すなわち Bz が Sz に重なるばあいには Pf. が用いられ、Ez と重なるばあいには Prät. となる。しかし私がジョンに会ったという行為にかんして、Pf. に構成される Sz に一致する基準時 Bz はどのように決定され、Prät. に構成される Ez に一致する Bz とどのように区別されるのであろうか。そもそも完了時制 3 種を説明するために導入された、 $Ez < Bz$ を構成するのがもっとも自然であると考えられる Bz が、どのような操作概念であるのかについてはつぎの章であらためて問うてみたい。

このアプローチの長所は、時制の意味機能を 3 つの操作概念のみを用いて説明しようとした点であると言えよう。一本の時間軸上で 3 つの時間点の位置関係によって示される手法はまた個別の意味用法の記述にも有効である。そしてまた Pf. が視野に入れられ、Prät. と時間意味構造上の差が説明されるこのモデルは、Bz のはたらきにより、アスペクト性についての説明をも可能にしている (第 2 章および第 3 章参照)。しかし、Bauer や Jespersen のばあいと同様に未来時制が 2 つあったり、未来後時に対応する形式についての問題等、時制体系を描くさいには問題点が残るだけでなく、いま述べたように 3 つの操作概念のうち完了時制にしか必要がないと思われる Bz の扱いにどうしても疑問点が生じる。また各時制に想定される基本的な意味機能と具体的に現われる意味用法とのあいだの区別については何も述べられていない。

さて、この他まったく別のアプローチとして Weinrich の時制論が挙げられる。ヨーロッパの諸言語を視野に入れた彼の言語論は、文学テクストにおける時制

の用法分析を詳細におこなうことによって、時制形式とは自然の時間とはまったく関係をもたない別の機能をもつとする。彼はおもに2つの基準を用いる。まずは発話の態度 (*Sprechhaltung*) により、論評 (*Besprechen*) の時制グループと語り (*Erzählen*) の時制グループを分けることで時制の機能を記述した¹⁹。たとえば論評の時制グループである現在形、未来形、現在完了形、未来完了形は聞き手に緊張の態度で自分の発話内容を聞くように求めるのに対し、それ以外の時制形式では弛緩の態度を求める機能をもつという。他方で、発話の方向 (*Sprechperspektive*) という基準を導入することによって話者の視点が向かう3種類の方向づけが決められる。基本となるゼロ段階 (*Null-Stufe*) には現在形と過去形、回顧時制 (*Rück-Perspektive*) には現在完了形と過去完了形、そして予見時制 (*Voraus-Perspektive*) には未来形と未来完了形というふうに分類される²⁰。結果として、基本の2時制をもとに話法性とアスペクト性を設けることのできる *Duden* のばあいとおなじ6時制体系という分類となっている。

Weinrich が重視したのは、言語使用が発信者と受信者のあいだでのやり取りされるコミュニケーション機能であるという点であり、動詞の時制形式については発信者から受信者への指示をおくる信号の切り替え装置とみなしていると言える。しかし、テキストの時間経過 (*Textzeit*) における信号とは相対的意味であり、言語形式にもとづいたものではない。すなわち時制形式の意味をテキスト機能に求めたものであり、言語体系あるいは文法体系内の位置づけにはならない。また、発話の態度を要求する信号についての分析には限界があるのではなかろうか。文学テキストではない状況において、たとえば話し言葉ではテキスト単位を認定するのは容易ではなく、緊張と弛緩の指示機能によって説明するには無理があると思われる。たとえば **Gestern Abend haben wir Besuch gehabt** という文は聞き手に緊張を引き起こす文であると言えるだろうか。このようにこのモデルはテキスト言語学の手法で構築されたものであり、いまや言語の体系的記述を求める時制論モデルとして扱われることはないと言って良いだろう。

このように主要な記述をいくつか見てきただけでも、時制論には大小の問題が横たわっていることがわかる。基準をどう設定し、どう用いるかによって認定される時制形式の数もことになってくるし、Pf.の位置づけについても時間表現かアスペクト表現かあるいはその両方かについては明言が避けられている。各々の意味用法どうしの関係やこれと時制カテゴリーがもつ基本的機能との関係についても統一的な見解が得られないため、文法書では実際の用例にもとづいた意味用法の羅列という形をとらざるを得ないというばあいが多いためである

¹⁹ Weinrich (1994) 33ff.

²⁰ Weinrich (1994) 55ff.

う。また 6 つの時制形式のうち使用動詞に形態素を用いて時制表示される総合的形式は 2 つだけであり、他のすべては複数の語による分析的手段によって形成される。形態的手続きがことなっている点は、英語のばあいも同様であるが、それは均一な意味レベルでの体系化を困難にしていると思われる。ドイツ語ではとりわけ、werden＋不定詞にしばしば現われる話法性や haben/sein＋過去分詞のアスペクト性が時制機能のうちに数え入れられるのかあるいはそのさい時間性とどのような関係を結んでいるのかについては統一の見解が得られていない。これらの問題を解決するには、少なくとも同質的な基準に依拠するだけでは不十分であり、異質的な基準を意識的に導入する必要があるだろう。

Pf. という時制形式の意味機能の本質はどこにあり、話者はこれを用いて何を言い表わそうとしているのであろうか。以下、これまでの分析アプローチを適宜考慮に入れつつドイツ語の Pf. がになう機能をあらためて具体的に考察したい。時間性以外の意味要素にも注目して分析を進めるが、争点となるのはとくに Reichenbach が導入した操作概念 Bz である。

第 2 章 現在完了と過去の違い

さて、本章では Bz についての議論に入るまえに、そもそもドイツ語の Pf. は形式的、意味用法的にどのような特徴をもっているのかを Prät. との比較において見ておきたい。しかしまた言語外的要因について最初に触れておかねばならないことがある。Hentschel/Weydt は Pf. と Prät. とのあいだに横たわる問題を 5 点挙げているが、そのうちの 2 点をつぎに引用する。

In einigen Sprechlagen des Deutschen, besonders in der familiären Umgangssprache, hat das Perfekt das Präteritum im ganzen deutschen Sprachraum schon weitgehend ersetzt. So sagt man umgangssprachlich kaum noch *Ich rief Klaus an*, sondern man verwendet statt dessen die Form *Ich habe Klaus angerufen*. Dagegen ist das Präteritum das übliche Tempus in geschriebener erzählender Prosa. Helbig/Buscha (1984: 148ff.) tragen diesem Phänomen durch das Beschreibungsmerkmal \pm *Colloqu* Rechnung. ドイツ語のいくつかの言語状況では、とりわけ家庭で話されるような日常語では、現在完了時制はドイツ語圏すべてにわたってすでに広く過去時制の代わりを務めてきている。たとえば日常語では *Ich rief Klaus an* とはもはやほとんど言わず、その代わりに *Ich habe Klaus angerufen* という形式を用いる。これに対し過去時制は、書き言葉の語りの散文におけるふつうの時制形式となっている。Helbig/Buscha はこの現象を「±日常的」

という記述素性を用いて説明している。

Im deutschen Sprachgebiet sind die Verhältnisse nicht einheitlich geregelt: Im süddeutschen Raum, südlich der sogenannten „Präteritumslinie“ (oder „Präteritalgrenze“), die südlich von Frankfurt in west-östlicher Richtung verläuft, kennt man das Präteritum mit Ausnahme der Form *war* in den Dialekten gar nicht (...) ドイツ語圏ではこの使用関係は統一的に規則化されているわけではない。南部ドイツ語圏において、フランクフルトの南に東西に向かってつづくいわゆる「過去時制線」(あるいは「過去時制境界」)の南部では、*war* という語形をのぞいて諸方言にはまったく過去時制は用いられない(…)

(Hentschel/Weydt (1994) 100f.)

一つ目の指摘にあるように、一般に日常語では Prät.の代わりに Pf.を用い、他方で Prät.が書き言葉における語りの時制として用いられるとされる。日常語における Pf.の優位性については、文法書等では個別に指摘される形態統語的な理由が関与していると考えられる。日常語においては簡潔性あるいは利便性が求められる。定動詞として用いる助動詞 *haben/sein* の変化形をたとえば第 2 位に据え、使用する動詞の過去分詞形を文末に付け加えれば容易に完了表現が作られるため、Pf.のほうがそもそも好まれるのであろう。Prät.のばあい、当該動詞の語幹に *-te* がつけられる弱変化形を用いる、あるいは数あるアプラウトタイプから選んで作られる 1 つの強変化形を用いるというだけでなく、主格主語にふさわしい人称語尾をこれに加える必要があるため、その形成にかかる操作には少なからぬ負担がかかる。

なかでも一部の不規則動詞のばあい、文体的理由や話者の心理的要因のためとくに Prät.が避けられやすい。たとえば *Man barg die Verletzten* という代わりに *Man hat die Verletzten geborgen* (「負傷者が救出された」)のほうが好まれるし、*scholl* か *schallte* あるいは *backte* か *buck* で迷うようなときには *hat geschallt* とか *hat gebacken* と表現するほうがはるかに心理的負担が軽減されるのである²¹。また、Prät.を作ることでおなじ音や似た音が隣接してしまうとぎこちなく響くため、Pf.が好まれるということもある (*du schossest, du berichtetest* の代わりに *du hast geschossen, du hast berichtet*)²²。話法の助動詞のばあい反対に完了時制を作ると動詞が 3 項になってしまったり、*sein, haben* ではことなる語形とは言えおなじ動詞が複数回用いられることになるため文体的にあまり好ましいとはされない状況もあろう。この他、たとえば *stammen, verlauten, münden* のようにもっ

²¹ Helbig/Buscha (1994) 150 および Hentschel/Weydt (1994) 101.

²² Helbig/Buscha *ibid*; Hentschel/Weydt *ibid*.

ばら Prät.にしか使用されない動詞があるなど、語の特性によって時制に選択制限が生じることもある。日常語における時制選択の優位性については、このように形態・統語的、音声的、あるいは文体的要因が絡み合っているとと言える。なお、Helbig/Buscha が取り入れている日常語的か否かという基準を用いると、Pf.の3つの用法はどれもが+となるが、Prät.は±ということになる。

もう一方の記述を理解するには通時的観点を視野に入れる必要がある。この地域的偏りはつまり、Prät.が被った通時的プロセスを経て出来た状況なのである。その現象はドイツ語圏南部に生じた「過去時制消失」(Präteritumschwund)と呼ばれている。この地域におけるテキストには15世紀ごろより話し言葉でPrät.が使われなくなっていったことが、当時のテキスト調査からわかっている。要因は伝統的には、上部ドイツ語のおなじ地域に生じた語末音脱落(Apokope)に求められる。弱変化動詞のPrät.では1人称と3人称においてこの現象が生じることによって、現在時制との区別がつかなくなった。たとえば過去形と現在形の3人称・単数では本来 *machte vs macht* という語形上の違いが明瞭であったが、とくにこの地域で発生した語末音-eの脱落によって *macht vs macht* となった。この弁別機能の消失が発端となってPrät.の時制上の機能が損失し、その影響は強変化動詞にも類推を引き起こすこととなる。こうしてPrät.のパラディグマが消失し、過去を明示する主要な手段が失われたため、代わりに過去の出来事を表わしえたPf.が過去一般を表わすようになったという説である²³。

このLindgren(やReis)の他に、Dalは弱変化過去の接尾辞-teに生じた機能的転換に要因を求めている。彼女によれば、直説法過去と接続法過去の文法的差異が *suoch-ta vs suoch-ti* (< „suchen“)といった語形上の違いによって明示できていた古高ドイツ語期の状況が、しだいに波及していった末尾母音弱化現象の影響を被ることで、弁別不可能な語形 *suochte* に合流してしまうこととなる。こうしてこの地域では、-teが時制機能を犠牲にして接続法表示マーカーとなったという歴史プロセスが過去時制全体の消失につながったという主張である²⁴。

他方でまた、より長期にわたるドイツ語史の観点からPf.がPrät.にかわって徐々に浸透しつつあるという指摘が文法書ではたとえばHentschel/Weydtでなされている²⁵。これは、総合的形式から分析的形式への大きな言語的潮流、動詞に注目するなら助動詞の発達という発展プロセスのなかで起きた現象である。Pf.が波及するなかで中高ドイツ語以降しだいに過去時制の機能領域に入り込んでいくが、15世紀以降顕著になる上部ドイツ語の話し言葉における過去時制

²³ Nübling (2008) 254. Schrodtd/Dornhauser (2003) 2518f.

²⁴ Nübling *ibid.*

²⁵ Hentschel/Weydt *ibid.* 他に Helbig/Buscha *ibid.*

の減少は、まさにその Pf.の意味機能の拡張の結果によるというものである²⁶。この Pf.の「過去化」は過去時制消失の直接的な論証とはならないが、少なくとも2つの時制がたどった勢力関係の推移に符号し、過去形の衰退を増長させるはたらきをある程度になったとみなすことができる²⁷。

いずれにしても、こうして今日の上部ドイツ語の方言においては sein を除いて動詞は Prät.を形成しなくなっている。そして Prät.を用いない地域の広がりには北へ北へと波及しつつあり、今や中部ドイツ語にまで及んでいる。

このように、Pf.と Prät.という2つの時制に見られる意味の差を問う以前に言語外のさまざまな問題が横たわっている。ここで Pf.が優位に選択される要因がおおむね話し言葉にかんするものとなっていることがこのあと意味をもつことになる。本論文では、Pf.と Prät.をおなじ土俵で分析することは容易ではないことを承知のうえで、形式に内在すると考えられる意味要素、あるいは言語使用のさい伴われると考えられる意味に焦点を当てたい。すなわち地域的、テクスト的、文体的な差異に可能な限り左右されない、あるいは制限されるばあいにはそれを踏まえたうえでの両者の意味用法、意味機能の差をめぐって考察を進めたい。

さてここからは具体例を用いての分析に入っていきたい。Pf.は Prät.とどのような類似性をもっているのであろうか。まずは文法書の記述を手掛かりに意味用法を確認しておく。たとえばつぎの例(1)では、いかなる理由で a), b)が同一の意味であると解釈できるのであろうか。

(1) a) Kathrin **hat** ein Klavier **gekauft**.

(Duden (1994) 149)

b) Kathrin **kaufte** ein Klavier.

これらの例文では、Kathrin がピアノを買ったという動詞行為が発話時以前、すなわち過去に起きたことが表わされている。動詞行為の時間性にのみ着目すると時間的意味に差はないということになる。Reichenbach の操作概念を用いるとまずは以下のように図示される。

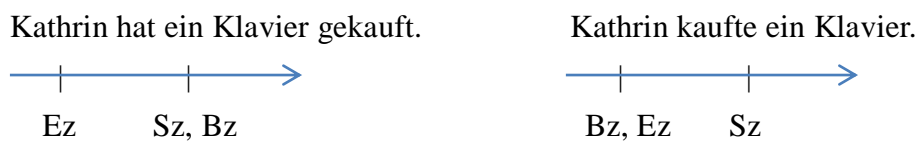


²⁶ Nübling (2008) 253, Schrod/ Dornhauser ibid.

²⁷ ただし嶋崎 (2004: 185/242f.) は、中高ドイツ語期に始まる過去形衰退化と初期新高ドイツ語の上部ドイツ語での過去形衰退および消失を分けてとらえる必要があると主張し、前者にのみ Pf.の使用拡大の影響を想定している。

Pf.と Prät.が同一の意味をもっているとしばしば指摘されるのは、このように動詞行為が起こった時点 (Ez) と発話時 (Sz) という 2 時点の位置関係に $Ez < Sz$ という一致が見られるからであると言ってよい。この 2 つの時制形式には出来事の過去性を表わす機能があると言う点で同義であると言うこともできよう。

それでは差異性はどのように説明されるのであろうか。これには、もう一つの時間点すなわち観察時間 (Bz) が有効となる。すでに引用したように、Pf. では Bz が Sz と一致するのに対し、Prät. で Bz が重ならなければならないのは Ez のほうである。これはふつう英語に限らずドイツ語においても同様の関係を示していると考えられている。



右の Prät.の文では、Kathrin がピアノを購入したという過去の出来事を、話者はその生起時間とおなじ時間点に立って眺めて (=観察して) いることになる。話者は視点を、出来事が起きた過去の時点にずらして見ていると考えて良いであろう。Pf.の時間構造では、観察時間はその基点からの移動がなく、出来事が生じた事象時間からはなれた発話時から眺められるという位置関係となる。両時制の差異は、Bz の位置づけ、言いかえれば視点の置きかたの違いに表われていると言える。このように見えてくると、観察時間が問題とならないばあいに両時制の書き換えが可能となることになるだろう。しかしつぎに見ていくように、Prät.から Pf.への書き換えはつねに可能であっても、その逆は必ずしも成立するわけではない。

Duden、Eisenberg、Flämig などの主要な文法書はこのように Pf.が時間構造的に Prät.とことなった意味機能をもっていると考えている²⁸。しかしおなじ記述方法をとる Helbig/Buscha は、過去を表わす Pf.につねに時間構造 $Ez < Sz, Bz$ の成立を認めているわけではなく、一定の条件下においてのみ Prät.との差異が現われるとしている。そこでは Prät.とおなじ意味構成をもつ用法 i) $Ez, Bz < Sz$ 、

²⁸ Duden (1994) 149f., Eisenberg (1994) 120ff., Hentschel/Weydt (1994) 101f., Flämig (1991) 392f. Eichler/Bünting (1996) 105f. usw. ただし $Sz = Bz$ について明記されているのは Eisenberg と Eichler/Bünting のみである。3つの操作概念を用いない時制記述ではその時間関係が暗に読み取れるに過ぎない。たとえば Duden (ibid) は、「過去の時制」(Vergangenheitstempus) としての Pf.は「ある行為の実行や完結を一発話時点 (現在) に与えられる一事実あるいは特徴として確認する」としている。確認 (feststellen, Feststellung) という語を用いていることから、Sz とおなじ時点にはある基準点を想定していることがわかる。

そしてこれとは別に動詞行為の結果状態を表わす用法 ii) Ez < Sz, Bz が設定される。Helbig/Buscha の記述には Bz を Pf.の意味構造を考えるうえで示唆に富んだ内容が含まれるため、しばらくはこれを検討材料にとして考察を進めたい。この ii) は、Duden に代表される考えかたとはことなり、まったく Prät.とは書き換えられない Pf.独自の用法である。Duden に代表される他のアプローチと比較してみるとつぎのようになる。

<Duden>

Perf. Prät.
Ez < Sz, Bz ≙ Ez, Bz < Sz
(時間的にのみ同義)

<Helbig/Buscha >

Perf. Prät.
i) Ez, Bz < Sz = Ez, Bz < Sz
(時間構造的に同義)

ii) Ez < Sz, Bz
(Pf.独自の時間構造)

Helbig/Buscha が記述しているような Pf.の 2 つの用法がその都度明確に区別されるのであれば、同時に Prät.との交替関係もはっきりしてくる。しかしたとえば冒頭の例(1) - a) Kathrin hat ein Klavier gekauft が Pf.独自の時間構造をとる ii) の結果的用法に該当し、Prät.で表わされる例(1) - b) Kathrin kaufte ein Klavier とはまったくことなる時間構成となっていることになる²⁹が、本当にそのように断定できるのであろうか。Pf.に想定される用法 i) と ii) を峻別するメカニズムはつぎのように説明される。

Helbig/Buscha によれば、用法 ii) は用いられる動詞のアクツイオーンスアールトの作用によって生じる。つぎの例 (2) では、Peter が数時間前に眠りに入ったことが述べられている。しかしそれにとどまらず、Pf.が用いられることにより、主格主語である Peter はその後も眠り続け、現在に至るまでなお眠っているという結果性の含意が生じると説明される。

(2) Peter **ist** (vor einigen Stunden) **eingeschlafen**. (> Peter schläft jetzt.)

(3) Der Lehrer **ist** (gestern) **angekommen**. (> Der Lehrer ist jetzt da.)

(Helbig/Buscha (1994) 152)

動詞行為の結果的意味が現われる理由は、einschlafen 「眠りに入る」という変容相動詞 (transformative Verben) を使用している点に帰せられる。同様に例文 (3) では、到着したという事実が現在にまで影響を及ぼし、主格主語であるそ

²⁹ 動詞 kaufen は Helbig/Buscha によれば変容相動詞とみなされる。以下参照。

の教師はたとえば話者が住んでいる国や町に今もなお居ると解釈される。状態変化や場所移動を表わす動詞を用いることによって、「過去に位置する事象時間よりも情報伝達を行なう上でより重要な、発話時にとって重要な状態が」³⁰含意されることから $Bz = Sz$ という関係が読み取れるとの説明である。次例のようにこの文の時制を *Prät.* に書き換えてもそのような含意がつねに生じるとは限らない³¹。

(3′) Der Lehrer **kam** gestern **an**. (> [?] Der Lehrer ist jetzt da.)

こうした違いから、用法 i) とはことなり、用法 ii) では *Prät.* との書き換えはまったく不可能であるとみなされる。決定的基準は、変容相動詞の使用と *Pf.* を用いたばあいの含意的意味にある。したがって、これ以外のアクティオンスアールトをもつ動詞で *Pf.* を用いたとしてもそのような含意は生じず、それは用法 i) ということになる。

(4) Sie **sind** (neulich) im Gebirge viel **gewandert**. (Helbig/Buscha (1994) 151)

用法 i) で挙げられる例 (4) では「たっぷり山歩きをした」という行為は、彼らが置かれた現在の局面と直接的なかわりをもたず、過去に起きたことのみが述べられていると解釈される。動詞行為 *wandern* がなされる前と後では主格主語にかかわる具体的な変容がそもそも生じないため、現在時に直接的な影響がもたらされることはない³²。*Pf.* の用法に $Bz = Sz$ が成立する要因を動詞のアクティオンスアールトに求めた、すなわち変容相動詞の使用によって現在時に含意される結果的意味を基準とした Helbig/Buscha の説明は一つの有効な手立てであるように思われる³³。

³⁰ Helbig/Buscha (1994) 151f.

³¹ Wunderlich によれば、*Pf.* と *Prät.* の書き換えが不可能であるのは、使用される動詞が *Pf.* で現在の意味 (Gegenwartsbezug) を含意するばあいであるとされる。これに属する動詞として *einschlafen*, *ankommen*, *fallen* のほか *kaufen* や *schneien* が挙げられている点や、*Pf.* にやはり同様の 2 つの意味用法が存在すると述べている点から、Helbig/Buscha の記述は少なからず Wunderlich に依拠していることがわかる (Wunderlich (1970) 142f.)。

³² ただしこれは $Ez < Sz$ であることの説明にはなりうるが、彼らが分類する i) の用法、すなわち $Bz = Ez$ が成立していることを示す理由にはなっていない。

³³ うえで触れたように、*kaufen* が変容相動詞であるという見解については検討の余地があるだろう：Der Reisende **hat** sich in der vergangenen Woche einen neuen Hut **gekauft**. (> Der Reisende hat jetzt einen neuen Hut.) この例では「その旅行者が現在も新しい帽子をもっている」という結果的状态が現われていると解釈される。同書では、変容相動詞は「ある状態や出来事の変化」を表わす動詞と定義され、起動相 (*inchoativ*) 動詞と同列に扱われている (Helbig/Buscha (1994) 78)。この解釈についてはしかし第 3 章でまた議論の対象となる。

しかし、Pf.が過去指示的用法として唯一の時間関係 $Ez < Sz, Bz$ だけをもつとする文法書では、Prät. ($Ez, Bz < Sz$) とたんに時間的に同義性を示しているだけなのか、まったくおなじ意味構造をもつことがあるのかについて十分な説明はなされていない。もとより、過去の出来事を発話時から眺めるという時間的構成 $Sz = Bz$ が Pf.に認められる理由については明らかにされていない。

さて Helbig/Buscha は時制の意味用法を記述するさいに話法性や口語性などいくつかの指標を一貫して使っており、そのなかに時間規定語 (Temporalangabe) の共起可能性がある。その都度の文が見せている時間関係や時間的ありかたを説明するには、いうまでもなく動詞の時制形式だけでは十分とは言えず、語彙的な時間規定語の助けをも借りざるを得ない。 $Bz = Ez$ が成立しているとされる用法 i) にはたとえば以下のような例が挙げられている。

(5) Wir **haben** (gestern) die Stadt **besichtigt**.

(6) Seine Tochter **hat** (in den vergangenen Jahren) in Dresden **gewohnt**.

(いずれも Helbig/Buscha ibid 文中カッコは原文どおり)

過去の一時点を表わす時間規定語として挙げられている副詞類は、gestern, im vorigen Jahr, neulich, 1914 である。たとえば例 (5) では「われわれがその町を見学した」のが昨日 (gestern) であり、例 (6) では「彼の娘が Dresden に住んでいた」のがこの数年のあいだ (in den vergangenen Jahren) であることが述べられている。これらの時間副詞類は Ez であると同時に Bz の役割を担っていると考えられるかもしれない。しかし Helbig/Buscha の記述では、その使用はここでは任意である (fakultativ) となっている。必須の要素ではないということは、すなわち過去の用法 i) を生み出す決定的要素ではないことを意味する。しかしまた変容相動詞を用いる用法 ii) においても、さきに挙げた例 (2) の vor einigen Stunden や例 (3) の gestern に示されるように、まったく同様に任意に用いられると記述されている。このことは、この種の時間規定語は i)、ii) の意味用法を差異化する要素ではなく、 Bz の位置づけにはなんら関与していないことを意味する。過去の一点を表わす時間規定語は、Pf.のその都度の意味を成立させるさいの一定の視点、つまり Bz を与える積極的存在とは言えず、 Ez の時間軸上の位置づけを明確化しているに過ぎない。この点にかんしては Pf.の過去の用法に一つの時間的構造しか認めていない Duden らの見解でもまったく同様である。

さて Pf.が許容する時間規定語には、この他 jetzt, gerade など現在指示の副詞類がある。この点については Helbig/Buscha に記述がない。過去の出来事を表わすとみなされる Pf.にこの種の副詞類が共起するとはどういうことであろうか。

(7) *Jetzt hat er sein Werk vollendet.*

(Duden ibid)

この例では、取り組んでいた仕事を彼はいまようやく終えたことを表わしている。この副詞 *jetzt* は **Bz** の時間的位置を明示していることになる。すなわち、完了した直後の出来事を眺めるまなざしが現在時にあることが読み取れる³⁴。しかしこの現在指示の副詞類の使用もまた、**Duden** や **Flämig** 等の記述からわかるように、任意である³⁵。他方 **Prät.**において、少なくともおなじ意味でこの種の副詞が共起することはない。

(7') **Jetzt vollendete er sein Werk.*

Prät.での使用がそもそも不可能であるとは、**Helbig/Buscha** の用法 i) には用いられないことを意味する。そしてまたこれを用いた **Pf.**は **Prät.**との代替可能性についても否定されることになる。以上のことから、**Pf.**に現在指示の副詞類が使用可能であるという点は **Prät.**とはことなる大きな特徴であり、また **Ez < Sz**, **Bz** を成立させるうえで少なからぬ役割を果たしていると言える。**Helbig/Buscha** の解説に加えるなら、用法 ii) で任意に用いられる副詞類として補足的に挙げられることになるだろう。

Pf.には過去指示以外にさらに未来時を指示する用法がある。これまでとはことなり、動詞行為が生じる時間は未来時にある。**Prät.**には見られない未来完了の用法であり、文法書等ではこの用法は必ず言及される場所である。共起する副詞類には未来を表わす *morgen, in einer Woche* などが挙げられるが、ここでは必須の要素であるとされる³⁶。

(8) *Morgen hat er sein Werk vollendet.*

(Duden ibid)

例 (8) では「彼が仕事をやり終える」時点は、**Sz** より後時に位置する。過去指示的な用法 (**Ez < Sz**) とはまったくことなる時間関係 **Sz < Ez** を構成する。つぎの例 (8') のように、未来完了時制の未来指示的用法とおなじ時間構造を生み出すことになる。

³⁴ 現在時「いま」とは拡大解釈されうる概念であるため、**Ez** の位置づけにも寄与しているとも言える。ほとんど **Ez = Sz = Bz** という関係が成り立っていると考えても良いような例である。

³⁵ **Duden ibid. Flämig** (1991) 393. ただし現在指示の副詞を用いた文例を挙げている **Flämig** の分類「現在の意味」(*Gegenwartsbedeutung*) では、その現在性は **Bz** についてではなく、**Ez** の時間的ありかたに結びつけて説明されている。

³⁶ たとえば **Duden (ibid)**, **Helbig/Buscha (ibid)** を参照。

(8') *Morgen wird er sein Werk vollendet haben.*

Duden では Pf.の未来完了的用法は、標準語の書き言葉ではあまり用いられないと指摘されている一方、未来完了時制については Pf.に比べより不確実性を含んだテキストで現われやすいと記されている³⁷。そして例 (8') のように Prät.にはこの用法はまったく不可能である³⁸。

(8'') **Morgen vollendete er sein Werk.*

例 (8) では Sz < Ez < Bz という時間関係ができあがっているが、この用法の成立に必要な Bz の位置づけは、時間規定語の未来性に依拠していると指摘しなければならない。

このように Pf.と共起しうる時間規定語は、過去、現在、未来とすべての時間にわたって可能となる。この 3 種の時間規定語のうち、過去指示のそれは Pf.を用いた文にあっては、他の 2 つとはことなつた意味的寄与をしていることがわかる。現在指示、未来指示のばあい出来事が後時的な基準点から眺められるという構図となっている。これに対し、出来事が生じた時点と同位置にある過去指示のばあい、事象時間 Ez の時間的位置づけを明確にしているに過ぎない。これがもし他の 2 つのばあいとおなじ意味での基準点 (Bz) としてのはたらきをになっていると考えるなら、過去完了のような解釈が成り立ってしまうだろう。たとえば例 (3) では、彼の到着 (ist angekommen) は昨日 (gestern) 以前、つまり大過去になされたことになる。

時間規定語の共起可能性とその意味的寄与から考えると、Pf.を用いた文では、Bz は現在時と未来時にのみかかわってくるものであり、決して過去領域には現われないことが明確になる。繰り返して述べてきたように、過去指示の時間副詞類は Ez の位置づけを明確化するに過ぎない。こうして Pf.の意味機能に「非過去」(Nichtvergangenheit) を付与した Duden の見解に辿りつくことになる。すなわち 8 ページに作成した表 1-2 に見られる „Zeit“とは、すでに指摘したように、

³⁷ Duden (1994) 149/152.

³⁸ ただし Prät.もまた *Morgen war Weihnachten.*とか *Wer erhielt das Bier?*など未来の副詞と共起したり、まだ起きていない出来事を表わす文で現われることがある。前者は現前の発話状況が過去に移される小説の技法であり、おもに体験話法 (erlebte Rede) としての用法、後者は特異混交性の変形省略 (idiosynkratische Ellipsentransformation) による用法とみなされている。時間指示が矛盾する Prät.の特殊な用法についてはここでは詮索しない。Prät.については通常現われる基本的意味のみを Pf.分析の比較材料とする (Thieroff (1992: 107/116) を参照)。

Perfekt や Plusquamperfekt のばあい、出来事が起きた時間 (Ez) ではなく出来事を眺める基準時、すなわち Bz の時間的ありかたを表わしているのである。Pf. の意味用法を見渡してみると、動詞行為じたいのAspect性や時間性の分析もさることながら、意味構造的に見てつねに考慮に入れなければならない後時的な時点 Bz およびその移動可能性 (ここでは「非過去」) に重点を置くというアプローチにも分析の余地が残されているように思われる。その考察を通じて、Prät.とはことなる意味機能に別の角度から迫ることができるのではないかと考える。

ここで見てきた、動詞のアクティオンスアールト、つまり変容相動詞や現在指示の時間規定語の使用が時間関係 Sz = Bz を生み出す重要なファクターとなっていると言っても過言ではなかろう。この意味構造の出現は、いわば時制形式の内部 (アクティオンスアールトの種類) および外部 (時間規定語の種類) からの制限によってある程度は左右されうるとも言える。しかし冒頭の例 (1) のように時間規定語が用いられていなかったり、使用された動詞のアクティオンスアールトが明確ではないようなばあいでの両形式の違いがどこにあるかという疑問点はまったく不明のままであり、a), b) 両者には双方向に書き換えが可能であるように見える。次章では、Bz を改めて問うことを出発点にして考察を進め、別の機能的側面を探っていきたい。そのさいまた分析レベルや手法についても言及したい。

この章で最後に付け加えておかねばならないことがある。ここで見てきた時間規定語の使用とは時制形式に付加される要素を問題にしているのであり、形式じたいの意味機能にそのまま還元することはできない。このことは、アクティオンスアールトを視野に入れた分析にも当てはまる。Ez < Sz, Bz が成立する要因と考えられるのはつまり、時間規定語やアクティオンスアールトという時制形式そのものの機能ではない要素に帰せられているのである。すなわち意味用法をもとにした分析は文意味を対象にしているのであって、時制形式そのものあるいは時制カテゴリーの意味ではないという点は十分に意識しておかねばならない。

第3章 観察時間

前章では、Bz が、使用動詞のアクティオンスアールトによる含意的意味によってあるいは部分的には時間規定語によって提供されるあるいは明示されることを見た。そもそも観察時点はどのように設定されているのであろうか。英語の時制分析を出発点にして普遍化を試みている Reichenbach の説明モデルで

は3つ目の操作概念として *point of reference* が加えられるが、実はその明確な概念規定はなされていない。以下、いくつかの文法書や事典等でなされている説明から、ドイツで一般に想定されている *Betrachtzeit* の輪郭を浮かび上がらせておきたい³⁹。まずは Helbig/Buscha, Eichler/Bünting から引用する。

die Betrachtzeit [Betrz], d. h. die Zeit der Betrachtung (der Perspektive) des verbalen Aktes durch den Sprecher... 観察時間、すなわち話者によって動詞行為が観察される（に視点があてられる）時間… (Helbig/Buscha (1994) 144)

Betrachtzeit = die zeitliche Perspektive, die der Sprecher einnimmt und von der aus er den Akt (sprachlich) betrachtet... 観察時間とは、話者がとる時間的観点であり、話者が（言語を用いて）行為を観察するために出発点とする時間的観点である… (Eichler/Bünting (1996) 102)

この2つの記述で重要となるポイントは、*Bz* の観点が話者の存在に支えられているという点であろう。これに対し、発話の基準時点となる *Sz* は、客観的時間軸上に位置づけられるし、また出来事の生起時間である *Ez* は *Sz* との相対的位置で決められる。したがってこれら残りの2つの時間は話者のはたらしに直接関与することのない、より客観的に決定づけられる操作概念であると言える。つまり *Bz* の意味を考えると、観察する主体である話者の存在を無視することはできないと解釈することができる。このように考えれば、出来事が生じる時間 *Ez* というより出来事じたいが重要性を帯びてくる。話者によって観察されるあるいは確認されるのは事象が起きた時間 (*Ez*) ではなく、動詞によって示される行為 *E* (= Ereignis)⁴⁰ であるからである。すなわち *Bz* とは、話者が *E* に対して視線を投げかけるための基点、視座であると読み替えることができる。このように、3点間の論理的時間関係で説明しようとした Reichenbach のモデルには、話者によって動詞行為との関係が結ばれる一種のアスペクト ($E < Bz$) が内包されると考えることができる。この点に注目して考察を進めたい。

それでは *Bz* はどこから得られるのであろうか。Reichenbach にはこれに関連した説明がなされている。

This determination is rather given by the context of speech. これ [筆者注：言及の時間 *point of reference*] は、発話の文脈によって決定されることなのである。
(Reichenbach *ibid*, 石本新訳 300 頁)

³⁹ うえで触れたように、ドイツでは *Betrachtzeitpunkt* という表記よりも *Betrachtzeit* のほうが主流である。

⁴⁰ Helbig/Buscha では *verbaler Akt* となる。うへの引用を参照。

端的に言えば、**Bz** の位置を決定づけるのはコンテキストであるということになる。前章で見た時間副詞類や動詞のアクツィオーンズアールトのはたらきもまたこの観点なしでは説明が成り立たないであろう。ここで想定されているコンテキストとはしかし、**speech** という語に示唆されるように、文単位以上の発話状況やテキストレベルのそれをも含んでいることが窺われる。この点に鑑みると、**Bz** が「話者によって自由に選択可能」である⁴¹との記述にも頷くことができる。時制の意味用法は、時制形式に備わった意味と当該文で共起しうる他の要素を話者が顧慮することによって文意味レベルで構成されるが、前提としてその都度のコンテキスト知識を踏まえているのである。すなわち「発話の文脈によって」(by the context of speech) と言っても、**Bz** は、時制の意味機能、動詞の意味、文内の他の要素、発話状況レベルのコンテキストが相まって決定づけられることが示唆されていると考えられる。

うえに挙げた未来完了的用法の例 (8) *Morgen hat er sein Werk vollendet* で見ると、話者の観点は副詞 *morgen* によって与えられ、**Bz** が未来時に位置していること (**Sz** < **Bz**) がわかる。このばあい、副詞 *morgen* は絶対的に未来指示の役割を行なっている。一方たとえば *Bis zur Wintersaison haben wir den Lift überholt* という文で見ると、副詞句 *bis zur Wintersaison* 「冬季までに」は意味用法を決定づける役割を果たしていない⁴²。この副詞句は客観的な時間指示機能をもっていないため、発話状況に居合わせないわれわれがこの文だけを聞いても、これが過去指示的用法なのか未来完了的用法なのか判別できない。この発言がいつどのような状況でなされたのかという「発話の文脈」が不明であるからである。

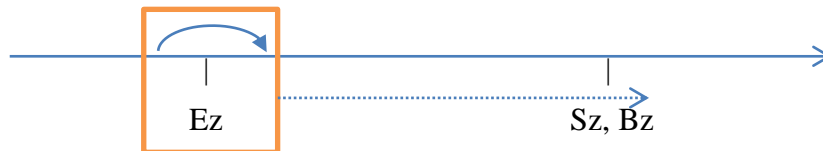
さてこのように見てくると、うえで見た *Helbig/Buscha* の用法 ii) には **Bz** の概念とは折り合わないところがあり、その解釈は十分に説得力のあるものとなっていない点が浮かんでくる。再び例 (2) *Peter ist (vor einigen Stunden) eingeschlafen* や例 (3) *Der Lehrer ist (gestern) angekommen* が表わす意味関係を再び見ておきたい。これらの現在時に含意される結果的状态とは、主格主語が表わす主体についての特徴である⁴³。例 (2) では *Peter* が数時間前に眠りに入

⁴¹ Im Gegensatz zur Aktzeit ist die Betrachtzeit eine durch den Sprecher frei wählbare Perspektive... (Metzler Lexikon Sprache (1993) 598).

⁴² Z.B. *Bis zur Wintersaison haben wir den Lift überholt*. Der Sprecher kann seine Perspektive in die Zukunft oder in die Vergangenheit legen. (Metzler Lexikon Sprache *ibid*).

⁴³ 主格主語を基準とした結果状態を指していることは、*Helbig/Buscha* (1994: 152) が挙げるもう一つの例示からも明らかである。すなわち *Der Reisende hat sich (in der vergangenen Woche) einen neuen Hut gekauft*. という文には、その結果的状态として *Der Reisende hat jetzt einen neuen Hut*. という含意が見られるとされる。旅人が現在も新しい帽子をもっているという事態には話者の関与はまったく見られないと言えよう。

り、その彼が現在も眠っていると説明される。また例 (3) でも *der Lehrer* の動詞行為から生じている現在の状況が **Bz** の位置づけの判断基準となっていることがわかる。*Reichenbach* の図を少しアレンジして改めて図示すると以下のようになる。



Peter:	ist ... eingeschlafen	schläft jetzt	(例 (2))
Der Lehrer:	ist ... angekommen	ist jetzt da	(例 (3))

つまり **Bz** が現在時に想定されるとは、主格主語に認められる結果的状态にもとづいた判断である。しかし、含意される結果的状态とは、動詞行為終了直後に入る新たな状態が現在時まで継続し続けることを意味するのであるから、**Bz** はその継続的時間帯のなかに設定すること ($Ez < Bz < Sz$) も可能となるのではなかろうか。あるいはもっと言うならば、これを動詞行為が生じた時点とほぼ同時に設定すること ($Ez, Bz < Sz$) さえ可能になるように思える。結果的状态が現在時 (*jetzt*) に観察されなければならない理由は述べられていない。

ところで主格主語の人称を変えてみるとどうであろうか。たとえば例 (3) の主格主語の人称を 1/2 人称にしてみたい：*Wir sind gestern angekommen / Du bist gestern angekommen*. これらのばあい、発話の場に居合わせている当事者、つまり話し手や聞き手の行為が述べられることになり、どちらも発話時に明確に結果的状态が認められることになろう。したがって $Bz = Sz$ が成立していることにもなるように見える。それは、到着しているという結果的状态を当の本人である話者や発話状況に居合わせる聞き手が目の当たりにしているからである。ただし人称性を視野に入れたこの考えかたはまた **Bz** の定義に反することになる。なぜなら、うえの引用で見たように、観察されるべき対象は動詞行為であって、含意される結果的状态ではないからである。

Helbig/Buscha の記述のように、使用される動詞のアクティオンズアールトの意味論が文単位的时间構造に影響を及ぼすという点は事実であろう。しかし現在における結果性を認定する基準として、観察を行なう話者や観察がなされる発話状況を視野に入れる必要があるように思われる。同書では、**Bz** についての記述で、それは話者に依拠して構成されるものであると明記されている。

Dabei ist die Aktzeit eine logisch-grammatische Kategorie, die vom Sprechenden

Menschen unabhängig ist. *Die Sprechzeit und die Betrachtzeit sind kommunikativ-grammatische Kategorien verschiedener Art, aber beide abhängig vom Sprecher.* このばあい事象時間とは、話者には関係のない論理的・文法カテゴリーである。発話時間と観察時間はことなる種類の情報伝達の・文法カテゴリーであるが、どちらも話者に依存するものである。

(Helbig/Buscha ibid 強調は筆者による)

Bz は、Aktzeit (= Ez) とはことなり、話者が介在する「情報伝達」レベルの文法カテゴリーであるとみなされているのである⁴⁴。動詞行為終了後に含意される主格主語にとっての結果的意味が Bz の位置づけを決定するという説には、どのように話者がかかわっているのかは不明確である。またそれは少なくとも情報伝達に依拠した考えかたとは言えないのではなかろうか⁴⁵。

一方で、Eisenberg は Bz とコンテキストの関係についてつぎのように述べている。「たとえ *Es schneite* という文だけが発話されるとしても、観察時間はつねにともに理解される」⁴⁶。この文に *als wir ankamen* が伴なわれると Bz が与えられるという説明の後になされた指摘である。これは時制形式が観察時間を提供するということを意味しているのではなく、時制意味をとらえるさいにはテキストだけでなく発話状況レベルにまでコンテキストの範囲が広げられるべきであることを意図している。ここで注目したいのは、実際の発話状況では観察時間がつねにともに理解される (*ist immer mitverstanden*) という点である。ここにはコミュニケーション相手である聞き手の認識も視野に入れられている。つまり言語化される時制形式や文内で用いられる時間規定語だけでなく、言語化されないコンテキストをも含めて聞き手は観察時点を認識することができるというのである。ここでは意識的であれ無意識的であれ話者によって設定される観察時間は、聞き手にも共通して理解される客観的観点でありうることが示唆されている。

⁴⁴ Admoni はこれを論理文法カテゴリー (*logisch-grammatische Kategorie*) とならんで文法カテゴリーを形成する 2 大単位としているが、この情報伝達の・文法カテゴリーを話者のみならず、発話行為全般にかかわるものとみなしている。そして動詞文法カテゴリーのうち、時制と法をこのカテゴリーに属する重要な単位とみなしている (Admoni (1970) 5f./181/192)。ほぼおなじ見解の Flämig も情報伝達の・語用論的カテゴリー (*kommunikativ-pragmatische Kategorie*) という術語を用いている (Flämig (1994) 32/36/39/386)。

⁴⁵ ただしつぎの第 3 章で再び言及するように、過去に位置する動詞行為は「発話時に重要な結果状態という観点で」観察されるという注釈がついている。この記述には情報伝達の視点が入っていることが伺われる (Helbig/Buscha ibid)。

⁴⁶ Auch wenn nur der Satz *Es schneite* geäußert wird, ist eine Betrachtzeit immer mitverstanden. (Eisenberg (1994) 120).

以上もろもろの記述を整理してみて、Bz は時制形式、動詞の意味、文内の他の要素、また発話状況レベルのコンテクストからもふさわしく与えられる観点であるが、話者によって自由に提供され、聞き手の了解も得られうる操作概念とみなされていることが窺われる。しかしながら Pf. に構成されるとされる関係 Sz = Bz が、どのような仕組みで生み出されるのかについては依然として不明確なままであると言わざるを得ない。そこで以下では、これらの特徴づけを参照しつつ、本章冒頭で注目した話者の観点と動詞行為とに結ばれる単位 (E < Bz) についてももう少し詳しく考察を進めてゆきたい⁴⁷。まずは従来の Bz を 2 つの概念に分けて考えることを提案したい。一つには各々の動詞行為へ視線を注ぐ基点を構成する客観的な観点であり、いま一つにはその都度の発話状況を取り込む命題外の原点を構成するより主観的な観点である。後者については次章で考察することにして、本章の後半ではまず前者の観点について見ていくことにする。

いくつかの文法書を見ると、Pf. がになう統一の意味の一つに abgeschlossen「完結した」、vollzogen「遂行した」を挙げる記述がしばしば見受けられる⁴⁸。たとえば Eisenberg はつぎのように述べている。

Meist wird angenommen, daß der Zeitbezug von Pf und Prät weitgehend identisch sei, **das Pf sich aber dadurch auszeichne, daß es einen Vorgang als abgeschlossen signalisiere.** たいてい想定されていることは、現在完了時制と過去時制の時間指示が広く一致しているのであるが、現在完了時制は事象を完結したこととして信号化することによって特徴づけられるというものである。

(Eisenberg (1994) 125 強調は筆者による)

Pf. が Prät. と決定的にことなる点として挙げられているこの意味特徴は、これまで見てきたような文単位で成立する意味ではなく、形式じたいに備わった意味を追究する立場によるものであろう。第 1 章でも言及したように、時制形式によって構成される意味要素には発話時を基準とした時間性 (Temporalität) に加えてアスペクト性 (Aspektualität) も含まれると一般に考えられている⁴⁹が、この記述は後者に注目したものである。そこでは時間の局相的意味、つまり完了したかどうか、継続的であるかどうか、あるいは反復的であるかどうかなど行

⁴⁷ 旧来の用語を用いれば、Sz と Bz ではなく、Ez と Bz との関係にのみ注目するということになる。

⁴⁸ Duden ibid, Engel (1988) 450, Flämig (1991) 392, Hentschel/Weydt (1994) 102 usw.

⁴⁹ Thieroff (1992) 162. Eisenberg (1994)のほか Engel (1988)や Flämig (1991)も、時制形式に含まれる構成要素としてアスペクトを重視している。

為や出来事のありかたが問題となるのであるが、その都度用いられる動詞のアクティヴ・インフinitiveも関与してくる。

Pf.にこのような意味単位が抽出できるのは、例 (7) *Jetzt hat er sein Werk vollendet* や (8) *Morgen hat er sein Werk vollendet* で見たように、動詞行為がほとんど現在時に、あるいは未来時にも位置づけられる用法が見られるというだけではない。このほか、つぎに挙げるようなまったく時間とは関係のない用法、事実ではない過去の出来事を表わす用法が見られるからである。こうした諸用法から、この形式には発話時に依拠した時間性には縛られないアスペクトという単位の意味が備わっていることが分かる。

(9) Ein Unglück **ist** schnell **geschehen**. (Duden *ibid*)

(10) Junge Katzen **haben** bald **gelernt**, Mäuse zu fangen. (Flämig (1991) 393)

(11) Er **hat** *vermutlich* seinen Schlüssel **verloren**. (Duden *ibid*)

(12) Du **hast** es *sicher* schon **erfahren**. (Jung (1973) 229)

例 (9) で述べられる事象「災いというものは不意に身に降りかかる」は、不定期に生起する、われわれには予測不可能な事態が表わされている。一回的に起きた出来事のように時間的位置づけができない反復的な出来事である。例 (10) が表わす意味「若い猫もすぐにネズミを捕まえられるようになる」には未来指示の **bald** 「すぐに」が共起しているが、それはやはり相対的な後時を表わしているに過ぎない。どんな猫にでもあてはまる習性を意味するこの文は、Pf.を用いることでより一層完了性が強調されていると考えられる(「あっという間に習得してしまう」)。このような諺や格言的な表現で Pf.が用いられるばあい、動詞行為は物理的時間の流れのなかでとらえられないだけでなく、完了性が前面に現われている⁵⁰。また副詞 *vermutlich* 「おそらく」を用いた例 (11) で、推量の対象として重要なのは「彼が自分の鍵を失くした」という過去性ではなく、「鍵を失くしてしまった」という完了的行為である。同じように例 (12) でも、Ez < Bz が成立しているとは言えるが、**hast erfahren** 「聞き知った」は過去の完結的行為あるいは現在の結果的状态を事実として言い表しているわけではない⁵¹。

⁵⁰ Prät.にはこのような用法がないとみなされるが、つぎの例に見られるように、まったく現われないわけではない。Der stärkste Baum **war** auch ein Reis. 「どんな強い大木ももとは小枝に過ぎなかったのだ」(浜崎・野入・八本木 (2008) 64) また、Pf.では反復の意味は時間的に中立の *wenn* 文などにも現われる。Jedesmal, wenn sie Alkohol **getrunken hat**, bekommt sie starke Kopfschmerzen. 「彼女はアルコールを飲むといつもひどい頭痛に見舞われる」(Buscha (1989) 128)。

⁵¹ なお、この用法は未来完了時制がになう一用法と一致する。そのばあい推量の副詞は必須の要素ではない。すなわち動詞の時制形式に推量的意味を生み出す機能が備わっている

これらの文をパラフレーズすれば、このことがより一層明確になる：*Ich vermute, dass er seinen Schlüssel verloren hat / Es ist sicher, dass du es schon erfahren hast.*

しかしまた、形態に目を向けると、人称と数によって行為者と行為の関係が生み出される定動詞形だけでなく、それがまったく表わされない不定形をとることが可能であることをわれわれは知っている。

(13) Er soll noch im Institut **gewesen sein**. (Helbig/Buscha (1994) 128)

(14) Er beschuldigt dich, das Buch nicht **zurückgegeben zu haben**. (Helbig/Buscha (1994) 658)

完了不定詞には、例 (13) 「彼はまだ研究所に残っていたとのことである」のように助動詞によって要求されるだけでなく、例 (14) 「君が本を返さなかったことを彼は咎めている」のように **zu** をともなって比較的自由に不定詞句を作るばあいもある。時間的観点から見ると、「研究所にまだ残っていた」とか「本を返さなかった」という動詞行為は客観的時間ではなく、定動詞に現われる現在時を基準にした前時性あるいは完了性を表わしている。一方 **Prät.** はそもそも形態的に不定詞をもっていないため、このような同一文内の定動詞の時間性を基準とした相対的時間やアスペクトを表示することはまったくできない。また、言うまでもなく、未来完了時制や過去完了時制の構造のなかにも完了形態が含まれている。

以上のような **Pf.** の意味上、形態統語上のふるまいを考えれば **haben/sein** + 過去分詞という統語単位を取り出すことができ、客観的過去しか表わさない **Prät.** とは違った、時間的には中立な何らかの意味機能を抽出することができるという点が見えてくる⁵²。**Pf.** にはどの動詞行為にも一定の後時的な視点が与えられていると考えられる。それは従来の **Bz** のはたらきの一部を映しているとは言えないだろうか。この形態的単位を用いれば、聞き手にはそこに前時性あるいは完了性が含意されていることが伝わるであろう。また後時的観点は、時間規定語が現在指示と未来指示のときにのみ **Bz** の役割を果たすことに鑑みれば、非過去性 (**Nichtvergangenheit**) という制約をもっていることになる⁵³。こうして **Pf.** の形式には、**Abgeschlossenheit** 「完了性」や **Vollzug** 「遂行」といった、客観的時間に左右されない意味単位すなわちアスペクトが付与され、文法書等では

と考えられるだろう。(11“) Er wird seinen Schlüssel verloren haben.

⁵² Flämig (1991: 392) が **Pf.** を「時間的中立的」(zeitindifferent) であるとみなし、Engel (1988: 450) が **Pf.** ではことながら「ある一定の時間に」(zu einer bestimmten Zeit) 位置されるとしているのは、まさにこれらの特徴に依拠しているのであろう。

⁵³ 文法書における非過去性についての指摘は、第 1 章 (8 ページ) を参照。あるいは時間規定語の共起性については第 2 章 (25 ページ以降) を参照。

それが Prät.との大きな相違点として指摘されることはまったく妥当であろう。ただし、このアスペクトの扱いについては多少注意が必要である。過去指示における Pf.と Prät.両時制の特徴について述べられた Duden の記述は矛盾を孕んでいる。

Präteritum und Perfekt sind zwar nicht funktionsgleich, aber doch funktionsähnlich: beide beziehen sich auf **ein vergangenes, abgeschlossenes Geschehen**. 確かに過去時制と現在完了時制は機能的に等しいとは言えないが、しかし機能的に類似していると言える。すなわち両時制とも過ぎ去った、完結した出来事に関係づけられるのである。(Duden (1994) 150 強調は筆者による)

Pf.に「過ぎ去った」(vergangen)、「完結した」(abgeschlossen)の2つの意味要素が付与される点についてはさしあたって問題がないと言えよう。しかしこれと同様に、Prät.が「完了性」を表わす手段をもっていると解釈されるこの記述はあきらかに事実とそぐわないであろう。完了性が現われないPrät.はまったくふつうであるからである(例: Es **schneite**, als er ins Freie trat)。このアスペクトが現われるのは、完了相動詞を用いたり、一定の副詞句を用いたばあい限定される(例: Endlich **fand** er sein Buch)。また、Prät.が「過ぎ去って」いると同時に「完結した」意味をになう時制であるというのであれば、過去完了時制との関係はどう解釈すれば良いのであろう。2つの時制形式はまったくおなじ意味機能をもっていることにもなりうる。この記述が説得力に欠けるのは、これら2つの特徴をどちらも絶対的時間である発話時(Sz)を基準時としてとらえている、あるいはそのように解釈されるよう書かれているためではないだろうか。このばあい当該の動詞行為が発話時以前に終了しているケースはすべて「完結した」と特徴づけなければならなくなってしまう。前者では時間的基準、後者ではアスペクト的あるいはアクツィオンスアールト的基準を用いて、ことなる分析レベルの意味要素であることを記す必要があるだろう⁵⁴。

しかしまた、Pf.に認められる「完了性」についても、さまざまな文を見てい

⁵⁴ とは言え、それらの峻別は容易でないかもしれない。Flämigが指摘するように、基準となる時間指示が明示されないときは一般に発話時(Sz)が基準時であると解釈されるため、出来事は必然的に過去に位置することになる。このばあいのアスペクト性 („abgeschlossen“)は時間性 („vergangen“)との境界を曖昧にしてしまう: Da ‚Vollzug‘ oder ‚Abschluß‘ eines Geschehens häufig – wenn keine anderen zeitlichen Hinweise vorliegen – vor dem Redemoment angesetzt werden kann, liegt es nahe, die zeitliche Einordnung solcher Sachverhalte aus der Sicht des Redemoments als ‚vergangen‘ zu verstehen (Gebrauchsnorm). (Flämig (1991) 392) 「ある出来事の「遂行」や「完結」とはしばしば、もしほかの時間的な指示がなければ、発話の瞬間の前になされうるので、そのようなことからの時間的秩序づけを発話の瞬間の観点から「過ぎ去った」と理解することは自然である(規範的用法)」。Engel (1988: 450f.)も参照。

くと、そう自明であるとは言えないばあいがあることに気付く。このアスペクトは動詞の意味やコンテキストによっては曖昧になったり、まったく現れなくなったりする。

(15) Wir **haben** uns (schon lange) auf deinen Besuch **gefremt**.

(Sommerfeldt/Starke (1998) 69)

(16) Es **hat** gestern fünf Stunden lang **geschneit**.

(Radtke (1998) 157)

例 (15) において、動詞行為 auf ... sich freuen 「心待ちにする」はたしかにすでに完結していると考えられよう。しかし Pf. という形式を用いることによって完了性が積極的に表示されていると言えるであろうか。話者は君にあたる人の来訪をいま現在うれしいと感じているにせよ、また何かの理由で喜びが不快な気持ちに転じているにせよ、その動詞行為には過去性しか現われていないように思われる。ただしもし schon 「かねてから」が共起していれば、動詞行為の継続性には現在時における終結が加えられることによって、完了性がやや明確になるだろう。例 (16) では副詞 (句) が 2 つ用いられているが、どちらも hat ... geschneit の時間的特徴を詳細化している。すなわち gestern は動詞行為を時間的に位置づけ、fünf Stunden lang は動詞行為の時間幅を規定している。とくに「5 時間雪が降り続いた」とは出来事の継続性が全体としてとらえられ、Pf. に想定される完了性はいとも簡単に失われてしまうことになる。また完了不定詞のばあいでも、さきに挙げた例 (13) Er soll noch im Institut gewesen sein のように、彼にあたる人が「研究所にまだいた」という事態が発話時より前にあったこと、つまり前時性が示されているに過ぎないといったケースも見られる。このように、使用動詞のアクツィオーンズアールトや時間規定語の影響によって、Pf. に想定される完了性が生じなかったり、あまり感じられなくなるばあいがある。

単位のコンテキストが共起する例を見てみたい。

(17) Als ich **gekommen bin**, **hat** er gerade **gegessen**. (Hentschel/Weydt (1994) 102)

(18) Heute morgen **hat** es noch **geschneit**, jetzt **ist** alles **geschmolzen**.

(Hentschel/Weydt ibid)

例 (17) では、als 文内の gekommen...bin 「来た」にはあきらかに完了性が読み取れる一方、上位文の hat ... gegessen にはそれはまったく現われず、「食べていた」というほどにしか訳せない。als 文では過去の一時点が規定され、これが本来的には Bz の役割を果たしうるのであるが、gerade 「ちょうどそのとき」によって表わされる同時点における継続性によって、その役割はアスペクト基準時

ではなく、たんなる時間指示を指示となっている。英語で言えば過去進行形のような意味となっている上位文では、完了性を構成するための基準時 **Bz** は明示される余地がないという言いかたもできる。例 (18) では、**ist ... geschmolzen** は「融けてしまっている」という事象終了後の現在の結果状態性を表わしている一方、**hat ... geschneit** では降雪が今朝ずっと続いていたことが述べられている。前半の **Pf.** を用いた文では、副詞句によって表示される過去の時間帯すべてにわたって動詞事象が継続的に生じていたことを意図しているので、やはり完了性は現われていない。ここでは事象が **heute morgen** と **jetzt** という時間的対比において対照的であることが重要なのであって、2 つの並列的な部分文はおのおの独立性がやや高いのであろう。ここに挙げた 2 例は、また使用動詞 **essen, schneien** が完了相動詞ではないし、他方で口語性が高い用例であると言わなければならないかもしれないが、いずれにしても **Pf.** に想定される「完了性」とはこのように文内、文外のコンテキスト要素が絡んでくることでほとんど認められなくなることがある。

文単位ではなく、形式の意味機能あるいはカテゴリーの意味を追究するばあい、どのような動詞意味であっても、どのようなコンテキスト条件下にあっても認められる、可能な限り広範囲に看取される文意味を出発点とする必要があろう。**Pf.** がアスペクト的にことなった意味構造で現われることを考慮に入れると、一般に認められている「完了性」では十分であるとは言えず、使用環境に左右されることのない意味単位が追求されるべきである。ここでは、つぎに引用するような **Engel** の考えかたを援用することで解決策の可能性が開けてくるように思われる。

Die Abgeschlossenheit zu einem bestimmten Zeitpunkt lenkt den Blick mittelbar auf einen zurückliegenden Vorgang. Diese Rückschau-Perspektive ist... ある一定の時間点における完了性は、まなざしを前に生じた出来事へ間接的に向ける。この回顧的視線は…。
(Engel (1988) 450)

これは「完了性」(**Abgeschlossenheit**) を説明したものであるが、そこで用いられた **Rückschau-Perspektive** 「回顧的視線」という表現は示唆に富んでいる⁵⁵。想定されているアスペクトは、動詞行為が完結したか否かという局相的意味ではなく、「ある一定の時間的パースペクティブ」(**eine bestimmte zeitliche Perspektive**) の提供という相対的な時間位置関係を示す意味単位である⁵⁶。**Pf.** のどの意味用法にも認められるとするこの視線は、後時的位置を基準にした、いわば外から

⁵⁵ **Erben** の術語 **retrospektiv(e) Darstellung** も同様の意味であると思われる (**Erben** (1972) 86)。

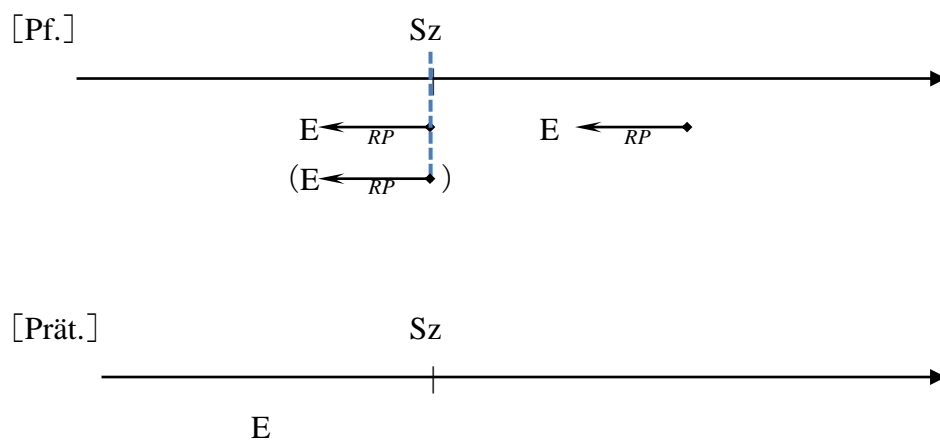
⁵⁶ **Engel** *ibid.*

の観点であると言える。本論では、これをその都度表わされる動詞行為とこれに視線を注ぐもとになる基点とに構成される関係 ($E < Bz$) であると考え、完了性や結果性といった動詞の局相的意味のみを表わす単位とはことなる広義のアスペクト表現として扱いたい。

これまで分析、考察してきたことを踏まえて整理するとつぎのようになる。Pf. という形式には、動詞行為を、視座となる後時的観点から眺める回顧的視線 (Rückschau-Perspektive : 以下 RP と略記) が備わっている。この意味単位は本来的に時間的中立なものであるが、コンテキストの影響によりその都度の時間的位置が決まる。その移動範囲は、後時的観点の移行可能な領域である非過去であるほか、時間を超越することもある。つまり未来時を視座とするばあい (例 (8)) もあれば、時間を超越した動詞行為 (例 (9) ~ (12)) に注がれる視線でもある。また視線が向けられる動詞行為のありかたは、その都度用いられる動詞意味の性質や添加される副詞類の意味によって長くなるばあい (例 (15) ~ (18))、短いばあい (例 (8)) があり、動詞行為終了後の結果的状态をも含むばあい (例 (2)、(3)) もあって多様である。

Pf. の形式に認める RP を一つの視線であると考えれば、同様に Prät. にも設定しうることになるかもしれない。しかし Prät. に現われる時間規定語が限られていることから、動詞行為の時間性について過去と言えるのみであり、Pf. とおなじような意味単位を抽出することは困難であろう。もし RP を Prät. に認めるならば、その時間的位置は過去の出来事と同時か、少なくとも過去領域内にあると考えられる。以下に Pf. と Prät. という両時制形式を用いて具体的に現われる意味用法の時間・アスペクト的構造を時間軸上で図式化した⁵⁷。

【図 1-2】 Pf. と Prät. の意味用法



⁵⁷ ただし Prät. の意味機能については一般論の枠内にとどまる。

図 1-2 の Pf.について、黒丸と矢印で区切られた線分が RP を表わし、矢印の先にある E が動詞行為である。また線分の起点となる黒丸が後時的観点であり従来の Bz である。Pf.のばあい、視座となるその基点は非過去であるため、発話時以降であればどこにでも位置されるが、丸括弧で示したように、時間を超越した位置づけもある。また動詞行為 E について、その時間的位置や時間幅、後時的観点との時間的距離もさまざまであるため、とくに問題とはせず、詳細な図示はなされない。一方 Prät.では、動詞行為、視座となる観点は少なくとも過去に位置すると考えられるが、その位置関係については考察対象としなかったため、はっきりしている部分だけを図示した。

本章後半では Bz を 2 つの機能に分割することを提案し、その一つ目を各々の動詞行為へ視線を注ぐ基点を構成する客観的な観点であると述べた。RP の基点を客観的であると考えた理由は、それが時制形式に内在する過去分詞のはたらしきを中心として、現在時や未来時という聞き手にも明確な基準時あるいは発話のコンテキスト理解を通じて得られるからである。すなわち Pf.を用いた文では出来事を眺める視座がどこにあるのかが話し手と聞き手のあいだで了解されるからである。具体的には 3 つの RP についてつぎのように説明される。

もっとも基本的な時間構成は図中の Sz を基点とした RP であるが、文単位の意味を考えるとここでは出来事の完了性や結果性だけでなく、それらとは反対の継続性、状態性を表わすこともある。このことは、Pf.が Prät.によって書き換えられることを意味する。すなわち RP の視座が現在時にあるとき、出来事 E には過去という時間性が大きくかかわってくる。一方で未来時を基準時とした RP には、出来事の過去性はかかわってこず、動詞のアクティオンズアールトにもとづいた動詞行為のアスペクト性が前面に現われると考えられる。未来性を指示する時間規定語などのコンテキストは過去性とは折り合わないからである。また、無時間的用法に生じる反復的な完了性（例：Ein Unglück ist schnell geschehen）や超時間的用法に見られる前時性あるいは完了性（例：Du hast es sicher schon erfahren）が表わされるばあいも、出来事の客観的時間性とは関係をもたない。そして出来事の時間的位置が重要でないこれらのばあい、Prät.にそのまま書き換えることは不可能である。すなわち、動詞行為により純粋にアスペクト性が表出されるケースである。どのばあいでも後時的観点を基点とした視線というアスペクト単位が備わっているが、動詞行為のアスペクト性にかんしては、完了性あるいはだけが前面に現われるばあいと、物理的時間という尺度に重なり合うために時間性（過去性）との境界が不明瞭になるばあいがあると考えられる。

Pf.の意味機能として一種のアスペクト単位を想定する試みにしたがって、例

(1) の過去の出来事を表わす 2 つの用例 (a) *Kathrin hat ein Klavier gekauft* / b) *Kathrin kaufte ein Klavier*) の意味の違いを改めて考えてみるとつぎのようになる。Pf. を用いた a) では、一般には現在時にあるとみなされる後時的観点と過去にある出来事とのあいだに視座と視点という関係 (RP) が結ばれる。これに対し b) では、もし RP を認めるならば、後時的観点も出来事も過去領域のどこかにあるという差異がある。Kathrin が「ピアノを買った」という出来事が現在時以前に起こったという情報にかんして両者は何らことなるところはない。Prät. の Pf. への書き換えがつねに可能であると言われるのは、とくに単文でのやり取りが多く、現在に視点が置かれた文体である口語表現において一層有効であると予想される。そして Pf. で後時的観点がどれだけ客観的に認識されるかによって、Prät. との意味上の差異がより明確になるのではないかと考えられる。

次章では、発話レベルのコンテキストが関係してくる主観的観点としての Bz について考察を進め、情報伝達的にも Prät. とはことなるはたらきをもっていることを示したい。

第 4 章 発話状況との関係

前章では、形態的ふるまいや意味用法とコンテキストとのあり方から、Pf. の意味機能を探ってきた。そのさい、従来の Bz が重要な役割を果たしていることに着目した。本章では、この Bz が他方で命題外の発話状況に存在する話者にも関係づけられるものであることを指摘したい。たとえば第 2 章の例 (2) *Peter ist (vor einigen Stunden) eingeschlafen* では「Peter が (数時間前に) 眠りに入った」という命題内の意味分析ではなく、動詞行為あるいは出来事が物理的時間とはことなる次元の話者の観点によって直接発話状況にあるいは現前の出来事に結びつけられるといった具合である。Pf. の意味用法をことなる角度から考察した記述から浮かび上がってくる「現在性」が本章の基本テーマとなる。ここでの分析は、発話状況というコンテキストを視野に入れた情報伝達レベルで構成される語用論的意味論であると言えるだろう。

まずは Sz の位置づけに目を向けたい。前章で、Sz には話者の積極的なはたらきが関与していないと述べたが、一方で Helbig/Buscha の引用にあったように、それは話者の存在に支えられた概念である⁵⁸。発話を行なうのはまさに話者であるためである。これまで Sz は、Bz や Ez (ないし E) との相対的な時間関係のなかで位置づけられたり客観的基準時として効果を発揮するものとして扱っ

⁵⁸ 第 3 章 28 ページおよび 30/31 ページ参照。

てきた。しかしここでは、言語表現の出発点、原点をなし、中心には出来事を眺める話者が存在すると想定できる Sz と考える。

Duden の記述をもとに考察を進める。

Das Perfekt wird vor allem dann verwendet, wenn das Ergebnis oder die Folge eines Geschehens *im Sprechzeitpunkt (noch) belangvoll* ist. So ruft jemand, der am Morgen aus dem Fenster schaut und frisch gefallenen Schnee sieht: *Es hat geschneit!* Oder man fragt, wenn man einen Schuldigen sucht: *Hat er es getan, oder hat er es nicht getan?* 現在完了はとりわけ、出来事の結果や結末が発話時点において (なおも) 重要であるときに用いられる。たとえば朝に窓の外を見やり、降ったばかりの雪を見て *Es hat geschneit!* 「雪が降ったよ。」と叫ぶのである。また何かをしでかした人を探するときにつきのように問う: *Hat er es getan, oder hat er nicht getan?* 「彼はそれをやったの、それともやっていないの。」

(Duden (1994) 149 強調は筆者による)

この説明は、過去指示の用法についてなされているものである。出来事⁵⁹が発話時において重要であればあい Pf. がとくに好んで用いられるとは、一見、Helbig/Buscha が指摘する動詞意味にもとづいた結果的状态を指すケースを表わしているようにも見える。しかし例示されている動詞のアクツィオーンスアールトは変容相動詞ではない (schneien, tun) ため、動詞行為の完結によって直接的に生じる現在の意味が問題となっているとは言えない⁶⁰。ここでいう発話時とは、時間軸上の位置づけ (「いま」) のみならず、場所性 (「ここ」) をも取り込んだ発話状況を指していると考えられる。なぜなら、出来事が重要であるとみなしている主体は話者 (「わたし」) であり、その判断はまさに発話状況においてなされるからである。話者は、雪が新しく降りつもっている状況を目の当たりにして、過去の出来事すなわち schneien が「いま」「ここ」において重要であると価値判断していることになる。反対に *Guck mal, es schneite などとは誰も言わないのである⁶¹。後半の例では、彼がそれをやったかどうかを知ってい

⁵⁹ 原文では「出来事」ではなく「出来事の結果や結末」(das Ergebnis oder die Folge eines Geschehens) となっているが、これは Pf. に完了性 (Abgeschlossenheit) を認める Duden の考えかたにもとづく説明である。ここでは第 3 章で見たようなさまざまな種類の出来事を包括して、出来事あるいは事象と考えることにする。

⁶⁰ 第 2 章 (23 ページ) で引用したように、Helbig/Buscha もまた結果的状态を説明するさい、「発話時にとって重要な状態」が含意されると述べている (Helbig/Buscha (1994) 151f.)。このアクツィオーンスアールトに依拠した見解は、Duden や Flämig らのばあいとは明らかにことなる。

⁶¹ Hentschel/Weydt (1994: 100) を参照。なお例文に付された印 * は、例 (7') や例 (8'') でも使用したように、当該の例文が文法的あるいは文体的に非文であることを示す記号であ

る人は答えなさいという、過去の事實的出来事についての釈明、説明がいま居合わせている人たちに求められているのである。

つぎに Flämig の指摘を引用するが、これにとどまらず他のいくつかの文法書でもほぼおなじ語用論的解釈がなされていると考えられる⁶²。

Besonders im Gespräch steht es zur Feststellung vollzogener Sachverhalte, von Ereignissen und Tatsachen, wenn nicht die Distanz, sondern *der Bezug zum Redemoment wesentlich ist*. とくに会話において、隔たりが重要なのではなく、発話の瞬間への関係づけが重要であるばあいに、実行されたことがら、出来事や事実を確認するために現在完了が用いられる。

(Flämig (1991) 393 強調は筆者による)

Duden の引用「発話時点において重要である」や Flämig の引用「発話の瞬間への関係づけが重要である」からは、過去の、完了的出来事が発話状況において話題化された対象とみなされていることがわかる。ここでは時間的現在と言うよりはむしろその都度の状況判断を行なう自分が中心の心理的現在に結びつけられることが示唆されている。Pf.を用いた文で当該の出来事は、話者の価値判断によって一定の観点で発話の場に提供されると考えられる。発話状況にどのように結びつけられるかについては、このあと具体例を用いて見ていきたい。Flämig のこの発言によれば、とくに会話で Pf.が頻用される理由はこのような情報伝達上の役割によることであるが、じじつ会話でのやり取りはまさに現在の状況を基軸にして展開していく。発話状況への関連付けというはたらきは、話し言葉における Pf.使用の優位性に結びつくとも考えても良いであろう。これらの記述からは、従来の Sz が、たんなる基準時を作る存在にとどまらず、過去の、完了的出来事が持ちこまれる場ともなっていることが読み取れるのであるが、他方でそれは従来の Bz のはたらきを表わしていることにもなる。つまり、発話時に Bz が位置し、ここから過去の、完了的出来事を観察するというアスペクト、すなわち第3章で見た RP の説明 (Ez < Sz, Bz) を内包しているように思われる。

さて、発話状況にはどのように過去の、完了的出来事が結びつけられるので

る。

⁶² Erben (1972) 95f., Engel (1988) 450. Erben はおおよそ Brinkmann の引用にもとづいた記述を行なっている (Brinkmann (1962: 333ff.)を参照) が、本文内のつぎの例 (20) のほかに、動詞のアクツィオーンスアールトのはたらきにもとづいた解釈を行なう例も挙げており、結果的意味を広義に想定していることが伺われる: Er ist gekommen (= nun anwesend). (Erben (1972) 96) また同様の指摘をすでに Wilmanns が行なっている (Wilmanns 1908: 189)。

あろうか。いくつかの文法書では起こりうるコンテキストを例示している⁶³。

(19) Ich **habe** es gestern **untersucht**, und kann die Ergebnisse jetzt vorlegen.

(Flämig *ibid*)

(20) Er **hat** uns **gerufen**, also wir müssen irgendwie reagieren. (Erben (1972) 96)

例(19)では、昨日自分は当該のことがらについて良く調べた、だからいまその結果を発表することができる、と述べられている。このばあいの発話状況とは、結果の発表が可能であるという事実であり、Pf.を用いて表わされた文内容(昨日の準備)はこの事態に理由づけのかたちで結びつけられている。例(20)では、彼がわれわれのことを呼んだので、何かを要求しているのだと話者である私には推測される。だからいま何らかの行為を起こさないといけないという必要に迫られている。この例では、Pf.を用いた文の「呼んだ」という行為は後半の「反応しなければならない」という行為の判断の根拠となっている。これらの例では、過去の、完了的出来事とこれに結びつけられる発話状況の別の事態とのあいだには因果関係ができあがっていることがわかる。あるいは出来事は、発話状況において話者が置かれている何らかの事態を説明するために必要な材料になっていると言えよう。

このように、具体的には、発話状況に結びつけられると言うより、発話状況で生じている別の事態に因果的に関係づけられると言ったほうが良いかもしれない⁶⁴。Pf.を用いた文で述べられる命題内容が「重要である」とは、「発話状況の何かに関係している」ことを意味し、それは話者の意図によって現前の話題へとテーマ化されることであると考えられる。すでに挙げた例で見ると、たとえば例(4) Sie **sind** neulich im Gebirge viel **gewandert** という発言は、今日の山歩きの最中にあなたという人物が疲れ知らずで歩き続けている現前の状況に対する説明づけとして述べられたものかもしれない。また例(6) Seine Tochter **hat** in den vergangenen Jahren in Dresden **gewohnt** では「彼の娘が Dresden に住んでいた」ことは、彼女は町についての知識や情報を多少とも心得ているはずだから彼女の出張先を Dresden にしようなど、発話状況と過去の出来事とのあいだには目の前の判断に必要な客観的根拠として扱われることがあろう。

Brinkmann はつぎのように述べている。

⁶³ 他の例としては : Er **hat** etwas **getan** und muss dafür bestraft werden. (Szczeplaniak (2009) 137).

⁶⁴ Duden にも同様な説明が見られるが、因果関係がおのずと現われる例ではなく、理由を表わす接続詞 weil が用いられたものとなっている : Da steht er nun, der kleine Hans, und weint, weil er vom Nikolaus nichts **bekommen hat**. (Duden (1994) 150)

Wo sich der Zusammenhang zwischen dem Vergangenen und dem Gegenwärtigen zu einem kausalen Verhältnis verdichtet, ist das Perfekt erforderlich. Es hat seine natürliche Rolle im Gespräch, in dem Klärung gesucht wird. 過去のことと現在のことのあいだの関連が強まって因果的な関係ができるところでは現在完了が必要になる。それは説明というものが求められる会話において自然な役割を果たす。
(Brinkmann (1962) 337)

会話で Pf.が優位に出現するという前述の Flämig の指摘は、ここでは因果関係性を生み出す Pf.のはたらきによるものとされている。現在性が基盤になって進められる会話では、話者が過去の、完了的出来事を持ちだすさい、関連付けられる発話状況と出来事のあいだには原因と結果という何らかの因果関係が多かれ少なかれ明らかにされなければならない。Prät.ではどうであろうか。そのばあい聞き手は、前後で出来事が現在時制で表わされるなら、ことなる時制形式による時間的差異から意図される関連性を読み取ることはできるであろう。ここで重要だと思われるのは、因果関係が他の文が共起して初めて看取されるというものではなく、Pf.を用いた文じたいが出来事と発話状況との因果関係性を生み出す力をもっていることが示唆されているという点である。つまりうえで指摘したように、Pf.を用いた文では、過去の、完了的出来事が「発話状況の何かに関係している」ことが意図され、話者はさまざまな現在の状況に応じてふさわしく Pf.を用いることができるのである。

対話文での例をもう少し見たい。Pf.を用いることによって間接的に現在の状況を伝えることも可能である。いま空腹かどうかという問いに、Ja/Nein の返答のあと現在時制を用いて Ich habe (keinen) Hunger と答える代わりに、過去の出来事を引き合いに出してつぎのように Pf.で答えるのである。これはいわゆる語用論的手段であり、ここで Prät.が用いられることはない。

(21) Hast du Hunger? – Danke, ich **habe** schon **gegessen**.

*Danke, ich *aß* schon.

(Szczepaniak (2009) 137)

問われた相手は質問内容に対し、自分はもう食事を済ませたという客観的事実だけを表現することで間接的に空腹ではないということを伝えている。この答えかたは Pf.を用いた文が内包するその都度の発話状況を利用した方法であると思われる。ここには「食べた」からには少なくともある程度は腹が満たされており「空腹ではない」ことが誰にでも推測される。つまり必然的に予想できる結果的状态が役割を果たしている。おなじように Wie geht es dir?という挨拶

の呼びかけに、自分があまり元気でないことを表わすさい、理由づけとなるような過去の事実だけを述べる語用論的手段を用いることがある。こうした婉曲的表現のばあい「よく眠れなかった」ことは決して *Ich schliefe heute Nacht nicht gut* などと *Prät.*を用いずに *Ich habe heute Nacht nicht gut geschlafen* と答える⁶⁵。*Pf.*を用いた文が現在時制を用いた文の代わりとして用いられうると言うことは、聞き手に理解できる発話状況の含意が生じているためと考えられる。このばあい現在性との適合性が示されていることになる。現前の発話状況が問題となるばあい、客観的な過去の出来事にしか結びつけられない *Prät.*はふさわしくないと考えられる。現前の発話状況が問題になっていることが相手によって提示されているにもかかわらず、*Prät.*のもつ機能ではその現在性に順応できず齟齬をきたすことになるのであろう。話者が *Pf.*を用いて関連する過去の出来事を発話状況にもちだして遠回しな答えとすることができるのは、*Pf.*を用いることによって、聞き手は含意される何らかの現在の結果的状态を予測することができるからと考えられる。*Pf.*を用いた文はすなわち、過去の、完了的出来事の表示だけでなく、それにかんする結果的状态⁶⁶としての発話状況への関係づけをも内包しているとも言えるのではないだろうか。

何らかの具体的な発話状況がまったく想定されず、いきなり単独で *Pf.*を用いた文が発せられるケースでこの語用論的効果を見ておきたい。このばあい、話者は過去の、完了的出来事を別の事態に結びつけて述べるのというのではなく、それじたいを重要な価値をもつ出来事であるとみなして発話状況にいる聞き手に伝えるのである。会話の冒頭で *Es hat geschneit!* と発せられたばあい、その発言はたとえばその過去の命題内容が聞き手にまだ知られていないとの判断のもとでなされる。「雪が降った」という事実を相手は知らないだろうとの話者の想定のほか、*Pf.*を用いることによって、情報伝達と同時に注意喚起を行なうのである。これを聞いて、聞き手には結果的に雪かきの必要性があるのではないか、あるいは今日はスキーに行けるかもしれないなどという積雪に関連した現実的行為が想起されるであろう。*Pf.*を用いた文のここでの機能とは、過去の、完了的出来事が、言語化されていない現在の状況にとって重要であると話者が判断していることを示すものである。すなわち、命題内容が聞き手にとって新情報 (*Rhema*) となるだけでなく、これに関連した対処行為をも聞き手に呼び起こす作用が現われていると考えられる。過去の、完了的出来事と結ばれるのはたんなる時間的現在とではなく、コンテクストを含む発話状況であるからであろう。一方で *Prät.*を用いた文にはそもそも現在性が含まれないので、発話の冒頭

⁶⁵ Engel (1988) 418.

⁶⁶ うえで述べたように、アクツィオンスアールトにもとづいたものではなく、発話状況 (の何か) と関係のなかで認められる結果性である。

で同様な効果は期待されないと説明されることになる。

Thieroff はおなじ例文で、発話状況の説明とともに少し長めのコンテクストを記した例を引用している。

(22) (Ein Hotelgast beim Frühstück zu seiner Frau)

Schau hinaus! Es **hat geschneit**!

(Ein anderer Gast zur selben Zeit zu seinem Tischnachbarn)

Wir *sind* gestern spät abends am Bahnhof *angekommen*. Es **hat geschneit**, und da war es besonders ärgerlich, daß wir kein Taxi mehr bekommen konnten.

(Thieroff (1992) 169 強調は筆者による)

この例 (22) では、2つの *Es hat geschneit* のうち最初のほうが *Prät.* と書き換えが不可能であると言う。結果的意味をもっているからであり、「雪が積もっているよ」とか「雪が積もったよ」などと訳されるであろう。また *jetzt* など現在指示の副詞を用いることが可能な用法であるとされる⁶⁷。街並みが雪化粧している事実に妻が気づいていないと判断した夫によってなされた発話である。妻の受け答えが描かれていないが、新しい情報を得た妻は外を見やり、その事実を多かれ少なかれ驚きをもって見ると同時に雪化粧した街並みに感動したり、また積雪に関係する何か別のことがらを思い起こすであろう。ここでは、現前の客観的状況を新情報として伝えるために *Pf.* が用いられている。一方雪が降ったという過去の事実を知っていた隣のテーブル客は、それが昨晚遅くに生じていたことを新情報として伝えたい。そこでは背景すなわち自分たちが昨晚遅く到着したことをも述べる必要があるため、冒頭ではやはり *Pf.* を用いて述べなければならない (*sind ... angekommen*)。状況が提示されたあとに続く *Es hat geschneit* では、「雪が降っていた」のかすでに「積もっていた」のかは定かではないが、その状態的あるいは結果的出来事には引き続き注意が向けられなければならない。あるいはこの2文の内容が全体で重要である、すなわち新情報であると判断して話者は述べているという説明することもできるであろう。ただしこの後者の例 *Es hat geschneit* の時制は *Prät.* と書き換え可能であるという。それは、ここでは一つ一つの過去の出来事が、過去の一連の出来事の流れのなかに組み込まれ、語りの文体 (*ankommen, schneien, ärgerlich sein*) のようになっているからであろう。このように考えれば冒頭の文でのみ *Pf.* が不可欠となる。

疑問詞を用いた問いに対する答えに現われる *Pf.* の例をもう一例見ておきたい。

⁶⁷ Thieroff *ibid.*

(23) i) Weshalb **hast** du dich soeben nicht **gemeldet**?

a. Na, klar, ich **schief**. b. Na, klar, ich **hab' geschlafen**.

ii) Weshalb **bist** du so früh wieder nach Hause **gekommen**?

a. Es **gefiel** mir da nicht. b. Es **hat** mir da nicht **gefallen**.

iii) Was **hast** du diesen Sommer **gemacht**?

a.*Ich **arbeitete**. b. Ich **habe gearbeitet**.

(A. P. ten Cate (1989) 143 強調は筆者による)

ten Cate が挙げる例 (23) のうち、疑問詞 *weshalb* を用いた疑問文 i), ii) では、その答えに Pf. も Prät. も使用可能であるが、*was* を用いたばあいの iii) では Pf. ししか使用できないという⁶⁸。例 i) ではたとえば教師が生徒にすぐに手を挙げなかった理由を訊いているのであるが、その回答である「寝ていた」という命題内容は新情報である。この意味では Pf. がふさわしいと考えられる。けれども教師は手を挙げなかったという過去の事実は知っているし、生徒を取り巻く状況についてもある程度わかったうえでの質問であっただろう。おなじように例 ii) において、生徒がとても早い時間に帰宅したという過去の事実にもとづいてその理由を問いただしている。質問内容はすでに話題となっている過去の出来事に関連したことがらである。つまり理由づけを問いただすという意味では Bz が発話時にあると考えられる一方 (Bz = Sz)、教師も生徒もその場に居合わせていたため Bz = Ez となっているとも考えられる。どちらの例も新情報を提示するための発言であるという点では Pf. がふさわしいが、その発言内容は、部分的にはあれ、前後の状況あるいは関連する出来事の実事既知であることがらであるため、Prät. を用いることが可能となると考えられる。

これに対し疑問詞 *was* を用いた例 iii) では、この夏に質問相手が何をしてきたかについて質問者は何も知らないという状況での問いとなっている。どこへも行かず「仕事をしていた」という返答の内容は、聞き手にとってまったくの新情報となる。すなわち質問者は出来事が生じた場に居合わせていたわけではないので Bz = Ez が成立する余地がないと考えられる。別の言いかたをすると、質問に答える人は、その命題内容を新情報として伝えなければならない。過去の、完了的出来事について話し手と聞き手のあいだに前提となる共通の理解が

⁶⁸ iii) で Prät. が不適切な理由は、時間構造 Ez < Sz, Bz をもった問いの文の答えには、Ez, Bz < Sz をもった過去の文 a が折り合わないためであるとみなされる。一方で i), ii) の疑問文は Ez, Bz < Sz であるとされる (ten Cate (1989) 143f.)。つまり Pf. は、Ez, Bz < Sz と Ez < Sz, Bz という 2 つの用法をもつ一方、Prät. のばあい後者の意味用法をもっていないとみなされている。

まったくないばあいには、Prät.は不適切であると考えられる。相手が知りたがっている新情報としての命題内容は、現前に視点をおいて少なくとも事実として伝えられなければならない。このように、過去の命題内容が聞き手にとって新情報であればあるほど、あるいは話者がこれを新情報と考えれば考えるほどPf.が好まれるのではないかと考えられる。

いずれにしても命題内容である過去の、完了的出来事は、話者の価値判断によって情報伝達的にふさわしく発話状況(の何か)に結びつけられるのである。発話状況は、Reichenbach流に考えるなら、話者が観察を行なうBzでもあるしまた時間的には現在時を表わすSzでもあるということにもなる。しかしここで言うBzやSzとは単なる客観的な時間としての現在ではなく、「ここ」(hier)、すなわち「わたし」(ich)が発話する場所をも含んだ「いま」(jetzt)である。ここで示してきたPf.の用法に内包される現在性とは、コンテクストにおいてその都度の場所性、人称性、時間性に制限される発話の原点であり、一種のダイクシス(Deixis)カテゴリー⁶⁹に属するものであると言って良いだろう。過去の命題内容は、主語の人称にかかわらずjetztという時間に、hierという場所で、ichという人称つまり話者によって構成される発話状況(の何か)に関係づけられるのである。別の言いかたをすれば、Pf.はその都度の情報伝達的あるいは語用論的要素に強く依存した時制形式であると言えないだろうか。

ただしここで見てきた現在性が、過去指示以外のたとえば未来用法や推量的用法に見られるのかどうか⁷⁰、あるいは過去指示のばあいに普遍性をもって確認できるのかという点については、あらためて調査、検証を行なわなければならないだろう。ここではさしあたってEngelの見解にしたがい、それがどの用法にも現われる意味機能であると考えておき、第2部以降の歴史的資料に現われる諸例を比較考量するさいのポイントとしたい。

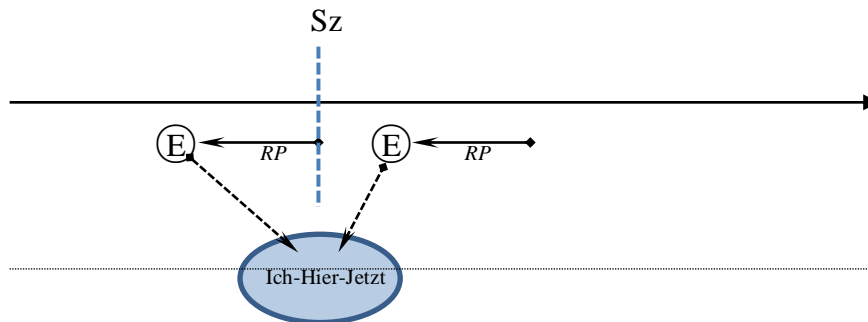
ここで見てきた語用論的意味を、第3章で形式的意味を図式化した図1-2に加えて図示すると以下のようなになる⁷¹。

⁶⁹ 時制とは「時間」直示カテゴリーとみなされるのが一般的であると第1章で述べた。しかしここでの直示とは、命題内の出来事(E)を時間的に位置づけるというだけではない。この語用論的意味はつぎの概念規定に簡潔に示されるものである：Eigenschaft bzw. Funktion sprachlicher Ausdrücke, die sich auf die Person-, Raum- und Zeitstruktur von Äußerungen in Abhängigkeit von der jeweiligen Äußerungssituation bezieht. (Bußmann (2002) 149f.) 「(直示とは) 発話の人称構造、場所構造、時間構造に、その都度の発話状況に依拠しつつ関係づけられる言語表現の性質ないし機能のことをいう。」

⁷⁰ Pf.の語用論的意味に言及する文法書ではふつう過去の出来事にしかこれを認めていないようである(Duden, Flämig usw.)。主要な文法書のうち、Pf.を過去を表わす時制とは認めていないEngelのみ、たとえば未来指示的用法にもこの語用論的意味が現われるとしている(Engel (1988) 450)。

⁷¹ ただし超時間的なRPは、図が煩雑になるのを避けるため、省略した。

【図 1-3】 Pf.を用いた文に見られる語用論的意味



まずこの図で、「私・ここ・いま」(Ich-Hier-Jetzt)を客観的時間軸とは別の軸に設けたのは、その都度の発話状況が時間的、場所的に広がりがあるというだけでなく、ich という心理的要素も含まれているためであり、物理的時間と同レベルで位置づけるのはふさわしくないと考えたからである。そして従来の Bz のもう一つの姿であるこの発話状況は、過去の、完了的出来事が結び付けられる到着点でもある。RP である実線の矢印は、前章で説明した通り、さまざまなありかたの動詞行為あるいは出来事を後時的観点から眺める視線である。観察の立脚点は、現在時か未来時か、あるいはまた物理的時間を超えた現在時であるが、聞き手と共有する現実世界にふさわしくより客観的に位置づけられる。一方、本章で見てきた語用論的あるいはテキストレベルの機能は発話状況に向かって伸びる破線で表わされることになる。一定のAspectで取り上げられる出来事は話者の主観的判断によって重要視され、発話状況と、あるいはそこで問題になっているほかの出来事と因果関係的に結びつけられたりするのであるが、そのさいしばしば新情報として聞き手に伝達されるのである。Prät.を用いた文にはEを出発点とした点線で示されるような発話状況への関係づけといったはたらきが現われるとは指摘できないであろう。

Bz についての2つ目の提案である、その都度の発話状況を取り込む命題外の原因を構成するより主観的な観点とは、以上のような話者の価値判断にもとづいた一定の態度を含むものと考えた。Bz を2つの概念に分割して得られた特徴をまとめると以下のようなになる。Pf.には命題内容にかんする客観的なAspect的単位(RP)が作られる一方、発話レベルでは命題内容に話者による主観的な観点が加わって発話状況(の何か)に結びつけられるという作用が現われると仮定できるように思われる。

Prät.はしばしば「語りの時制」(Erzähltempus)とか「語りの形式」(Erzählform)と呼ばれるように、一連の過去の出来事のなかで帯びる客観的な過去性に結び

つけられるのが基本である。話者の観点はつねに過去にあり、現在あるいは発話状況とは切り離された過去の世界における出来事を表わすのに適していると考えられる⁷²。この Pf.との違いがいわゆる枠物語（*Rahmenerzählung*⁷³）の冒頭部や終結部で効果を発揮していることをわれわれはしばしば小説などで目にするのである。Prät.を用いて始められる語りのテキストへの導入のさいに用いられる現在完了（*Eingangspferkt*）と、語りを終えることを示す役割をもになる現在完了（*Schlußpferkt*）である⁷⁴。後者の典型例として Goethe の『若きウェルテルの悩み』（*Die Leiden des jungen Werthers*）の結末部分を挙げておきたい。

(24) *Der Alte folgte der Leiche und die Söhne. Albert vermocht's nicht. Man fürchtete für Lottes Leben. Handwerker trugen ihn. Kein Geistlicher hat ihn begleitet.* 老人は遺体の後についていった、息子たちもその後につづいた。アルベルトはそれができなかった。ロッテの生命が気遣われたからである。職人達はウェルテルを運んだ。一人の牧師も彼につき添っていなかったのである。
(Weinrich (1994) 67 / ヴァインリヒ (1982) 88 ドイツ語の強調は筆者による)

Wilmanns は「ここでは先行する行為の結果ではなく、行為自体が問題なので」あって、「Werther の葬儀のさいの聖職者のふるまいが強い調子で強調されることが求められている」と述べている⁷⁵。しかしその強調とは、語られる過去と現在とを単に結びつけるはたらきというだけではなく、語り手（＝話者）が最後の文で語りの世界から現実の世界、つまり語り手と聞き手が居合わせる発話状況へと立ち戻らせるはたらきを作りだしていると考えることが可能となる。そこには、Weinrich も指摘するように、話者の主観的態度が顔をのぞかせているのである⁷⁶。

さて第 1 部の最後に、これまで検討してきた意味と Pf.を構成する個々の形態

⁷² Flämig は、Prät.は *in einem deutlichen zeitlichen Abstand zum Redezeitpunkt* 「発話時点に対して際立って時間的に隔たりのあるなかで」用いられるとしている（Flämig (1991) 391）。Erben は *distanzierende Situierung des verbalen Prozesses in einen kontextsignalisierten Zeitraum* 「コンテキストから信号化された時間に動詞プロセスを距離を置いて位置づけること」という機能を Prät.に見ている（Erben (1972) 86）。同様の記述はすでに Wilmanns (1906: 189) に見られる。

⁷³ 一つあるいは複数の物語がこれを包括する上位の散文形式のなかにとり込まれる物語の形式を指す（Schüler Duden (2000) 293）。Weinrich (ibid)は、Kafka の『訴訟』（*Der Prozeß*）でも同様の考察を行なっている。

⁷⁴ Erben (1972) 96.

⁷⁵ Wilmanns ibid.

⁷⁶ Weinrich (1994) 67. *Er nimmt Stellung zum Selbstmord und zur Stellungnahme des Geistlichen zum Selbstmord.* 「それ（＝最後の文）は自殺に対する態度表明を行なっているし、聖職者の自殺に対してとっている態度に対する態度表明にもなっている。」

的機能との関係を見ておきたい。第3章の後半では、Pf.の客観的なアスペクトとしては回顧的視線 (RP) を設定し、これを、過去分詞を中心とした時制形式の文法的機能と仮定した。動詞行為 E が過去のみならず現在や未来、無時間にまで幅広く生じうる点は、これに付随する RP の視座の位置つまり後時的観点が現在時制の時間指示領域に対応しているところに求めることができる。すなわち後時的観点の移動可能領域は、現在時制の時間指示機能に一致する。RP については、おもに過去分詞がになう広義の完了アスペクトに含意される後時的観点に帰せられると言って良いであろう⁷⁷。Prät.がになう意味との同義性は、動詞行為のみに注目してこれを時間的に位置づければしばしば一致するという点に帰せられる。そこではアスペクト性は時間性との境界が明確でなくなってしまふからであろう。しかし形態的に見ると、その過去性は、Prät.のばあい時制形態素が表わす唯一の時間指示機能であるのに対し、Pf.のばあい過去分詞の機能、すなわち完了性ないし前時性によって間接的に示されるという風にまったくことなる部位から、ことなる手続きで生じるものと考えられる。過去分詞の機能がより明確に発揮される Pf.はこうして、その完了アスペクトがより純粹なかたちで未来的用法や超時間的用法に現われるとあって良いであろう。

それではこの第4章で考察してきた語用論的機能、すなわちその都度の発話状況に依拠して現われる主観的意味にかんしては、時制形式のどのようなはたらきに帰せられるのであろうか。Engel は、現在形や過去形といった単一形態による時制の意味機能を、複合形式すなわち現在完了や過去完了のなかに認めている。そして Pf.に付与される語用論的意味は、形式の構成要素である *haben/sein* の現在時制のはたらきに帰せられている⁷⁸。現在時制に設定される語用論的意味については改めて問い直す必要があるが、もしこの見解に依拠すれば、Bz の検討を通じて明らかになった Pf.の意味用法に見られる、アスペクト性、後時的観点の移動可能性、そして語用論的意味のうち、後者2つについては現在時制の意味機能に帰すると考えることが可能となる。Pf.の用法に認められる過去性が、RP の構成における動詞行為が時間的に解釈されることによって生じると考えると、Pf.は本来的には Prät.と類似した時制であるというよりも、

⁷⁷ なお、過去分詞の意味機能は一般に完了性 (Abgeschlossenheit) とされる。Engel (1988: 434)、Hentschel/Weydt (1994: 130f.) などを参照。

⁷⁸ Engel (1988) 450, 414f. ただし語用論という術語は用いず、つぎのような補足説明がなされているにすぎない: ... das Merkmal ‚von Belang‘ weder in die Kategorie der Zeit noch in die der Realität einzuordnen ist. 「…「重要である」というしるしは時間のカテゴリーでも現実性のカテゴリーにも収められない」。Brinkmann もまたおおよそおなじ立場であろう: Infinit II liefert den geforderten Vollzug, das Präsens von *sein* oder *haben* verweist auf die Situation des Sprechers. 「過去分詞は必要とされる完遂を生み出し、*sein* や *haben* の現在形は話者の状況を指示する」。(Brinkmann (1962) 334)

むしろ現在時制性を基盤にした時制形式と考えるほうが良いということになるだろう。これは第1章の図1-1や1-2で見たような体系化と部分的に一致する。同時にまたPf.が、発話状況が基軸となって展開する日常会話の文体に適した時制形式であるという理由がよりよく見えてくるように思われる。

これらの時制性、アスペクト性が絡んだ意味機能、意味用法、あるいは語用論的用法は歴史的にはどのように説明できるのであろうか。第2部では、Pf.がたどってきた形態的、意味的プロセスを概観し、これについて他の動詞形態との関係やカテゴリーの変遷のなかで検討する。そしてPf.の現在時制的な意味機能、および語用論的意味についてはとくに第3部で一定の歴史的資料にもとづいた分析と考察を行なうことになる。

第2部 現在完了の通時的変遷

ここでの通時的考察は、現代語の Pf.が見せるふるまいがどのようなプロセスをたどって形成されたのか、あるいは個々の意味用法にどのような説明が可能となるのかを探るために行なわれる。Pf.の形態的、意味的変遷をその起源となる古高ドイツ語期から中高ドイツ語期にわたって比較、検討していくことが主眼である。また、とくに動詞にかんする文法カテゴリーやその表示手段の発達プロセスを動的にとらえる必要があるため、ドイツ語史以前のゲルマン語あるいは古い印欧語までさかのぼって言及する。

第1章 現在完了の起源と原初的状況

ドイツ語の歴史のなかで現在完了形や過去完了形がある一定の意味機能をもつ統語的単位として意識され始めるのは古高ドイツ語期である。本章後半や第3章で具体的に見ていくように、作品に現われる用例はけっして多いとは言えないが、この時代の中期までには形態的にも意味的にも一つのまとまりを形成していると感じられる例が増加するからである。しかし **haben/sein** の現在形や過去形が動詞の過去分詞と結びついた形式が登場する時期は、さらに古くゲルマン語の時代にまでさかのぼることができる。すなわちゴート語の聖書（4世紀）では **haben** ないし **sein** が過去分詞とともに用いられることがわずかにあった。それではもっと古い印欧語には助動詞を用いた完了形式が存在したのだろうか。この問いにはさしあたって **Nein** と答えなければならない。言うまでもなく、がんらい接辞添加や音形変換という手段を用いた総合的形式、つまり動詞一語の文法的屈折による現在完了形（や過去完了形）が存在していたからである。

まず **sein** 完了の起源について見ておく。ゲルマン語期の代表言語であるゴート語では、**haben** を用いた迂言形式はほとんど未発達であったと言ってよいが、**sein** と過去分詞との結びつきはすでに存在し、発達段階にあったとみなすことができる。しかしそれは完了ではなく別のカテゴリーを形成する形式、すなわち他動詞の過去分詞を用いる受動表現であった⁷⁹。この受動の迂言形式は、その後ドイツ語の歴史に入ると、**Isidor** や **Tatian** など初期の古高ドイツ語においてはすでに広く用いられるようになっていた。つまり分析的形式の成立過程と

⁷⁹ ゴート語のこの受動は、アスペクト的には、現代ドイツ語のように **sein** ではいわゆる状態受動的、**werden** では動作受動的であったと言えるが、時制にかんしては原典のギリシア語に対応しない箇所も散見される（嶋崎（2004）70f.）。

いう形式的観点のみで考えれば、sein はゲルマン語ではもう助動詞としての地位を獲得する渦中にあったと言える。受動カテゴリーの形成に貢献したこの形式が、しだいに完了的意味をも引き受けることになるというプロセスは、言語変化的にはさほど不自然な現象ではないと思われる。なぜなら、sein+過去分詞が形態的に何がしかの変革を被るわけではなく、使用動詞が従来とはことなる意味領域にまで広がるというだけでのことであるからである。過去分詞で受動的意味を得られない動詞にまで許容可能となったのは、sein のもつコプラ機能によると言えるだろう。

すなわち使用動詞の多様化が徐々に進んでいく過程で、受動の形成に本来的ではない kommen や werden など場所移動や状態変化を表わす一部の自動詞が入り込むようになっていったことは容易に想定できる。そのさい過去分詞は意味上の態の転換にはつながらず、結果的状态というアスペクト性のみを残した。過去分詞の意味論がそのまま形式の意味に反映されるのは、なんととっても sein の積極的意味が希薄であるからである。こうして構造的に同一のまま、sein+過去分詞は態のことなる「2 つの」分析的形式として歩み始めるのである。受動表現 Er ist geschlagen では過去分詞は名詞形容詞的な述補語としてはたらしき、本来的には Er ist ein Geschlagener であった。これと同様に完了表現 Er ist gekommen も Er ist ein Gekommener という構造であったと見なせば、両形式には過去分詞で表わされる補語の意味に動作主か被動作主かという違いが生じるのみで、結果状態を表わすおなじ表現であると言える⁸⁰。背景にはまた、次章で見るように、古高ドイツ語期は2語による迂言形式が急成長する発展段階であったという点も絡んでいるであろう。なお、一部の自動詞と sein を用いた形式は、古ザクセン語や古英語、古ノルド語にもしばしば現われる⁸¹。

つまり sein 完了の起源は、根本的に sein+過去分詞が受動から時制ないしアスペクトカテゴリーへと文法表示の機能領域を越境する力を最初から備えており、過去分詞がになう意味論と矛盾しない範囲で使用動詞を広げていった⁸²という自然な発展のなかで求められるべきであると思われる。そして、このあと確認するように、Isidor や Tatian に見られる用例の多くがラテン語の完了形に呼応する箇所でのものであり、そのさい過去分詞が屈折していないのがふつうであるという事実は、この形式が古高ドイツ語初期には（広義の）完了を表わ

⁸⁰ Kotin (1997: 489)は、statal「状態相」という用語を用いて、初期古高ドイツ語のこの2種類の sein+過去分詞をアスペクト意味論的に同一視している。Grønvik (1986: 29)や Kuroda (1997: 299f.)は、古高ドイツ語期全般にわたって、完結した行為から生じる結果的状态を表わすカテゴリーを作っているとする。

⁸¹ Grønvik (1986) 17.

⁸² ただし嶋崎 (2011: 7ff.)によれば、ゴート語の sein 受動は、結果性、継続性、完了性と多様なアスペクトを表わしえた。

す統語的単位とみなされていたと考えて良い証拠であると言えるだろう。

それでは **haben** + 過去分詞はどうであろうか。動詞 **haben** は、**sein** とはことなり、歴史的に古くも新しくも完了カテゴリー以外の領域で文法的地位を獲得することはなかった。西ゲルマン語と北ゲルマン語で突如現れたとも見なされる **haben** が、のちに所有という語彙的意味を失って助動詞化を引き起こすなんらかの契機をもっていたのであろうか。この結びつきを引き起こすもっとも重要な要因とみなされているのは、他言語からの影響、つまり俗ラテン語あるいはロマンス語の影響によるというものである⁸³。古典ラテン語には、ドイツ語の完了形ときわめてよく似た **habeo** + 過去分詞という形式が、より普及していた未来時制のもとになる **habeo** + 不定詞とともに、散見された⁸⁴。これは現代のロマンス諸語に見られる完了形の原型をなすものであるが、「とりわけガリアにおいて 6 世紀以降拡充して」⁸⁵ いった。そしてラテン語の総合的形式による完了形には本来の完了的意味と過去の一点を表わすアオリスト的意味という二義性のなかで揺れがあったのに対し、この形式は早い時期に完了的意味を得たと言われている⁸⁶。ゲルマン語では現在時制のほかに過去時制しか用意されなかったことに鑑みると、部分的にはラテン語からロマンス語への発展過程で見られたのとおなじような迂言形式の誕生プロセスが、数世紀遅れて古高ドイツ語期に生じたと言うこともできるであろう。

また、古高ドイツ語で共観福音書を書いた僧侶オトフリートがフルダの修道院でマインツ司教ラバヌス・マウルスのもとで遊学したという経験をもち、その修道院から『タツィアーン』(Tatian) が生まれたという史実がある。これに加え、中世ラテン語作家であったマウルスは自分の作品でこの迂言形式を用いていたという指摘がある⁸⁷。これらの事実がラテン語からの構造(統語)借用(Lehnkonstruktion/-syntax)があったに違いないという推論を想起させてくれる。しかし想定される 2 言語併用あるいは言語接触によって受けたラテン語からの影響について、その「事実関係はまだ十分には解明されていない」し、またそ

⁸³ Ebert (1978: 59). その記述は Meillet, Lockwood らの説にもとづくものである。他に Besch (2009: 152), 嶋崎 (1992: 32f.) を参照。

⁸⁴ 比較的最近の研究では、このラテン語の迂言形式の出自をさらに古典ギリシア語に求める主張もなされている。Drinka によれば、ヨーロッパにおける **haben** 完了の原初的寄与者 (the ultimate donor of European possessive perfects) は、紀元前 5 世紀の文献にその例が散見される古典ギリシア語であって、これがラテン語のモデルとなり、言語接触を繰り返してヨーロッパに波及していったとされる (Heine/Kuteva (2004) 153f.)。

⁸⁵ Sommer (1959) 72, Brinkmann (1965) 34. この時期にはすでにすべての他動詞で用いられ、また目的語をもたない例も見られたとされる。ヴァルトブルク (1976: 49) も参照。

⁸⁶ パトータ (2007: 58) によれば、最初に完了的意味をもつ例が現われた時期は紀元前 1 世紀とされる。

⁸⁷ Brinkmann (1965) 35.

もそもこれを「時代的に規定することは大きな困難」であるとされている⁸⁸。

しかし語源的観点から言うと、ゴート語の *haban* は、ラテン語の *capio* „ergreifen, fassen“ に一致することからこれが相続語 (Erbwort) とみなせるため、のちのラテン語の *habeo* „an sich haben, halten“ からの借用ではないと異論を唱える者もいる⁸⁹。Ebert は「ラテン語やロマンス語の影響を確実に受けなかったと言ってよい比較的古い古アイスランド語」が *haben* + 過去分詞にあたる迂言形式をすでに知っていたことを指摘している⁹⁰。ここで重要であるのは、英雄伝説や北欧神話など聖書文学でない作品にこの形式が現われるという点である。聖書関係の書物であれば、翻訳のさいの他言語からの借用が考えられるが、早い時期のゲルマン文学における出現であれば外部からの影響はほとんど排除できるからである。ゲルマン語発生説に有利な材料を提供しているのはこれだけではない。830 年ごろに書かれた *Heliand* のなかにもすでに多数の例が出現している。そしてこの古ザクセン語の文献では、与格をとまなう例や対格目的語がまったく現われない例などがきわめて多数現われ、この形式がある程度定着していたことを窺わせてくれるのである⁹¹。そのような出現例はドイツ語では 9 世紀後半の *Otfrid* を待たないと見られない。

そしてまた *haben* + 過去分詞の獲得がゲルマン語における自律的な展開であるとする Benveniste は、出現の契機を動詞体系内に求めている⁹²。印欧諸語においてひろく *sein* と *haben* を観察すると、*haben* のばあい主格主語と対格目的語のあいだに所有関係ができたが (A^{Nom.} hat B^{Akk.})、より古くから *sein* を用いることによってもおなじ関係が与格主語と主格補語のあいだに結ばれていた (B^{Nom.} ist A^{Dat.})。そしてまた両者ががらんらいは状態動詞であったという点が重視される⁹³。他動詞の *sein* 受動につづいて北・西ゲルマン語派に他動詞の *haben* 完了を発達させたゲルマン語では、*ist getan* (「なされてある」) も *hat getan* (「なされてもっている」) も補完的な関係にある一種の状態表現ということになる。他動

⁸⁸ 引用は順に Dal (1966: 122), Besch (ibid). 嶋崎 (2004: 104) やバンヴェニスト (2000: 195) も参照。

⁸⁹ Feist (1923) 168f.

⁹⁰ Ebert ibid. 古アイスランド語の文献は 9 世紀以降に現われる。Ebert が引用している Heusler の例はつぎのとおり: *hefe ek þik nu mintan*. „ich habe dich nun erinnert.“。他に森田 (1981: 168) を参照: *ek hefi taldar niu orrustur*. 「私は九つの戦を数えた」。また嶋崎 (2011: 4f.) には古英語の例も挙がっている。

⁹¹ Dal (1966) 122. 「古ザクセン語では *haben* 完了はずっと前からすべての動詞に広がっており人口に膾炙した表現手段となっていた」とみなされることもある (Grønvik (1986) 38)。

⁹² バンヴェニスト (2000) 190f., 195f. 嶋崎 (2003, 2004) はこの説を部分的には批判しながらも、ゴート語や古高ドイツ語に現われる受動の *sein* + 過去分詞のきわめて豊富な例を挙げることによって、*sein* 受動誘因説を唱えている。

⁹³ ただし前者では所有者と被所有物のあいだに内在的關係 (「～には～がある」) が、後者では外在的關係 (「～は～をもっている」) が結ばれ、両者はことなる関係となっている。

詞を用いた *sein* 受動の主格主語で表わされる被所有物は、*haben* 完了になると対格目的語で現われるのであるが、前者ではもとより所有者の表示は義務ではないため所有関係は見られないし、後者でもその表示はしだいに失われることになった。このように両迂言形式には本来的にアスペクト意味表示上の同一性や構造的に体系的な相補関係が認められることから、のちの *haben*+過去分詞の出現は自然に引き起こされたと考える余地が十分にあるという洞察である。「この二つの形は互いに支えあっている。一般に前者（筆者注：*sein* 受動）が後者（筆者注：*haben* 完了）を準備するのであるが、その道は、他の印欧諸語が新しい他動詞完了を構成するときに辿ったのと同じ道である」⁹⁴。

このように完了時制の出自にかんして、とりわけ *haben* のばあい明確ではない点が少なからず残っている研究状況にある。ここで言えることは、両形式がまったくことなる起源をもっており、最初から補完的な競合関係にあったわけではないということ、古高ドイツ語初期には *sein* 完了のほうがより早くその萌芽期を迎えていたという点のみである。急速な発展を遂げることになる古高ドイツ語中期以降の状況については第3章で扱うことにして、以下では、緩やかな結びつきでしかなかったゴート語の例とやや統語的まとまりが感じられるようになる古高ドイツ語初期の例を具体的に見ておきたい⁹⁵。ポイントはギリシア語やラテン語の聖書原典との形式的対応、そして過去分詞の形容詞的屈折についてである。しかしまた可能なかぎり意味についても言及したい。

(25) *ei habaina fahed meina usfullida in sis.* (Joh.17.13) [gr. *ἵνα ἐχωσι* τὴν χαρὰν τῆν ἐμὴν *πεπληρωμένην ἐν αὐτοῖς*] 彼らが私の喜びを彼らみずからのなかに満たされたものとしてもってもらうために。

(*habaina*: *haban* „haben“の希求法・現在・3人称・複数, *usfullida*: *usfulljan* „erfüllen“の過去分詞・女性・単数・対格; *ἐχωσι*: *ἐχω* „haben“の接続法・現在・3人称・複数, *πεπληρωμένην*: *πληρωω* „ausfüllen“の受動完了分詞・女性・単数・対格)

(26) *habai mik faurqipanana.* (Luk.14.18/19) [gr. *ἐχε με παρητημενον*] 私を許されたものとみなしてください。

(*habai*: *haban* „haben“の命令法・2人称・単数, *faurqipanana*: *faurqipan* „sich

⁹⁴ バンヴェニスト (2000) 197.

⁹⁵ 第2部のゲルマン語、古高ドイツ語の用例は、ドイツ語の完了形の意味の変化をきわめて豊富な資料を用いて論じた嶋崎 (2004) を参考にした。また第3部での資料調査において、古高ドイツ語作品 *Tatian, Otfrid* については全面的にこれに依拠して統計的処理を行なった。そこには従来の研究が見落としているあるいは見過ごされている例も少なからず挙がっている。ただし日本語訳は、原文で用いられた表現の意味をより明確にするために筆者があらためて試みた。そのためややぎこちない日本語となっているところもある。

entschuldigen“の過去分詞・男性・単数・対格; εχε: εχω „haben“の命令法・2人称・単数, παρητημενον: παραιτεομαι „inständig bitten“の(受動)完了分詞・男性・単数・対格)

例(25)ではどちらの言語においても、使用された2つの動詞の用法は意味的にも形態的にもまったくおなじである。所有の意味をもつ動詞は対格目的語に所有物(「私の喜び」: fahed meina 女性・単数・対格; την χαραν την εμην 男性・単数・対格)をとり、他方で過去分詞は同格として対格目的語と形態的一致を見せている。現代的に解釈すれば「私の喜びを満たされた状態でもっている」というSVOCを構成していると言える。例(26)のゴート語では、habanの対格目的語mik „mich“に合わせて格語尾をつけた過去分詞として現われている動詞faurqiban「許す」は自動詞である。一方ギリシア語原典では能動欠如動詞παραιτεομαι「懇願する」は、やはり所有を表わす動詞と形容詞的に格語尾をつけた過去分詞(=完了分詞)によって構成されている。イエスのたとえ話のなかで、許しを請うという表現で人々が宴会への招待を断る場面であるが、過去分詞形は結果的意味を含意して「許されたもの」と解釈されるところである⁹⁶。

(27) sa skatts þeins þanei **habaida galagidana** in fanin. (Luk.19.20) [gr. η μνα σου ην **ειχον αποκειμενην εν σουδαριω**] (私が)手拭いのなかに保管しておいた汝の宝物が…。

(habaida: haban „haben“の過去・1人称・単数, galagidana: galagjan „hinlegen“の過去分詞・男性・単数・対格; ειχον: εχω „haben“の未完了過去・1人称・単数, αποκειμενην: αποκειμαι „getrennt liegen“の(受動)現在分詞・女性・単数・対格)

例(27)のゴート語では、ギリシア語原典の現在分詞に対応するところで過去分詞が用いられている。それはギリシア語の αποκειμαι「よけておいてある」が状態を表わす自動詞であるのに対し、ゴート語では完了相の他動詞 galagjan「置く」であるためである。表現方法を変えざるを得ないばかりでも、原典の意味を吟味し、忠実にもとの意味を保とうとしている様子がうかがえる。どちらの分詞も対格の関係代名詞(þanei 男性・単数・対格; ην 女性・単数・対格)に合わせて屈折し、対格名詞が示す対象物の状態性(ゴート語:置かれた状態で私がもっていた汝の宝物、ギリシア語:私が分けて置いてもっていたミナ)を表わ

⁹⁶ ただしギリシア語の παραιτεομαι について、岩隈では「(招待に対し) [自分の] 免除を乞う、勘弁(免除)してもらおう」とあり、ラテン語法による特殊な表現であると見なしている(岩隈(1996) 358)。結果的意味が現われていると言えようか。

していると考えられる。

嶋崎 (2004) の挙げる 6 例のうち 4 例は、例 (25) (26) で見たように、形式が原典と完全に一致する⁹⁷。したがって、この形式は基本的には形式的模倣であったとみなすことができるであろう。また、過去分詞がすべて形容詞的屈折を行なっていることに鑑みると *haben* と過去分詞を別個の要素として認識されていたことがうかがわれる。

それでは *sein* についてはどうだろうか。ゴート語にはつぎの 2 例が現われる。

(28) jah so baurgs alla **garunnana was** at daura. (Mk.1.33) [gr. και η πολις ολη **επισυνηγμενη ην** προς την θυραν] そして町中の人々が門のところに走って集まってきていた。

(garunnana: garinnan „zusammenlaufen, -kommen“の過去分詞・女性・単数・主格, was: wisan „sein“の過去・3 人称・単数; επισυνηγμενη: επισυναγω „dazu zusammenführen, versammeln“の受動完了分詞・女性・単数・主格, ην: ειμι „sein“の未完了過去・3 人称・単数)

(29) silba **uswahsans ist**, ina fraihniþ. (Joh.9.21) [gr. αυτος **ηλικιαν εχει**, αυτον ερωτησατε „hat Erwachsenen“] 彼は大人になっている。彼に尋ねてください。

(uswahsans: uswahsjan „erwachsen“の過去分詞・男性・単数・主格, ist: wisan „sein“の 3 人称・単数・現在; ηλικιαν: ηλικια(f.) „Alter“ の単数・対格, εχει: εχω „haben“の 3 人称・単数・現在)

例 (28) では、用いられた動詞がギリシア語原典では他動詞 (επισυναγω 「一緒に集める」)、ゴート語では自動詞 (garinnan 「一緒にやってくる」) とことなっているため過去分詞の態も異なっている。しかし *sein* の過去形+過去分詞を用いることで過去における結果的状态が表われている点は共通している。現代風に言えば受動過去完了と過去完了の対応関係になるが、どちらも過去分詞には主格主語の性・数・格に合った語尾をつけているので、それは補語の役割をになっており、むしろ主格主語の状態を表わす SVC 構文であったことがうかがわれる。この点では例 (29) のゴート語の例もおなじであるが、ここでは原典のギリシア語とはさらに表現上の隔たりがある。息子の目が見えるようになった両親がその様子を見たパリサイ人に返答する場面である。ギリシア語では、ゴート語のように *sein*+格語尾つき過去分詞 (ist uswahsans 「成長した人である」) ではなく、*haben*+対格目的語 (ηλικιαν εχει 「適齢期をもっている」) となっ

⁹⁷ 形式が完全に一致する箇所は、例 (25)、(26) のほか Mark.3.1 と Mark.3.3 である。一致しない箇所は、例 (27) と Tim.I.4.2 であるが、後者は *haben* にあたる語が原典に現われない例である。

いる。ここでは表現形式、意味内容が多少異なっているが、主格主語に見られる結果的状态というアスペクトが保たれていると言えよう。

これらの例からは、基本的にはギリシア語の形式に縛られていたこと、また原典とはことなる表現とせざるを得ないばかりはあっても、原典の意味を十分に汲みつつ形式的に2語からなる表現法を保とうとしていた姿勢がうかがえる。ただし **haben**、**sein** どちらにしても統語単位としての過去分詞との結びつきは緩やかであり、過去分詞は形容詞としての価値をまだ強くもっている段階にあったと言える。一方意味にかんしては、**haben** のばかりは対格目的語を所有している状態、**sein** のばかりは主格主語の状態というアスペクトがつねに含意されていることは確かであろう。名詞形容詞的な性質を帯びた過去分詞が、定動詞の統語的、意味的はたらきに合わせてやや恣意的に用いられた迂言形式であったと考えられる。

ドイツ語の歴史に入ってからはそのような状況に変化が起きる。ここでは初期古高ドイツ語の例を見ておく。まずは **Exhortatio** (9世紀初頭、バイエルン方言) に1例のみ現われる **haben**+過去分詞の例を見ておく。

(30) **ir den christianiun namun **intfangan eigut** (Exh.4) [lat. qui christianum nomen **accepistis]** 汝らはキリストの名を受け入れた。**

(**intfangan**: **intfahan** „empfangen“の過去分詞, **eigut**: **eigan** „haben“の現在・2人称・複数; **accepistis**: **accipio** „in Empfang nehmen“の現在完了・2人称・複数)

このドイツ語最古の例が重要なのは、語尾が屈折していないという点と、対応するラテン語原典が屈折語尾によって作られる1語の現在完了形であるという2点である。すなわちこの例は、所有を表わす動詞 **eigan**⁹⁸にその所有性をもたせず、過去分詞もまた対格目的語との同格的関係を結ぶことなく主格主語との能動的かつ完了的意味を構成させているとみなすことができる。完了形という意識が芽生えていることを示しうる例である。**Grønvik**によれば、わずかのちに書かれた **Muspilli** の断片 (9世紀前半、バイエルン方言) にも同様の例が2例現われるとのことである⁹⁹: **Denne der paldet, der **gipuazzit hapet**. (Musp.99)**「そんなとき悔い改めをしたものは勇気が出るのである」。この例にはまったく主格主語の能動的行為しか認められない。なぜなら対格目的語がまったく現れてい

⁹⁸ この過去現在動詞は古高ドイツ語では過去分詞との結びつきを見せる。完了時制の歴史を考えると、**eigan**は意味論的に **habên**に一致するためふつう両者は同等に扱われるが、直説法・現在・複数形、接続法・現在でしか現われない欠如動詞 (**defektives Verb**) であった。のちの中高ドイツ語期には姿を見せなくなってしまう。なお現代語では **eigentlich** や **eigen** にこの語の名残りが見られる。

⁹⁹ **Grønvik** (1986) 36.

ないからである。

しかしまた、おなじ時期に行間逐語訳的な手法で著された共観福音書 Tatian (830 年ごろ、東フランク方言) には、形式の完全な模倣も少なからず見られるのである。

(31) phigboum **habeta** sum **giflanzotan** in sinemo uuingarten. (Tat.102.2/Luk.13.6)

[lat. arborem fici **habebat** quidam **plantatam** in vinea sua] 誰かが自分のぶどう畑にイチジクを植えておいた。

(habeta: haben „haben“の過去・3 人称・単数, giflanzotan: phlanzon „pflanzen“の過去分詞・男性・単数・対格; habebat: habeo „halten“の未完了過去・3 人称・単数, plantatam: planto „pflanzen“の過去分詞・男性・単数・対格)

(32) senu nu andero fimui ubar thaz **haben gistriunit**. (Tat.149.4/Mat.25.20) [lat. ecce

alia quinque **superlucratus sum**] 見よ、今や私はそのうえ別の5(タラント)を手に入れました。

(haben: haben „haben“の現在・1 人称・単数, gistriunit: gistriunen „gewinnen“の過去分詞; superlucratus sum: superlucror „darüber gewinnen“の(受動)現在完了)

Tatian における haben + 過去分詞の出現例は、定動詞が接続法や過去形である例を含めると全部で 8 例¹⁰⁰である。が、そのうち 6 例までがラテン語では habeo + 過去分詞となっている。もっとも有名な例の一つである例 (31) では、過去分詞が haben の所有の対象となる対格目的語 phigboum „Feigenbaum“の性・数・格に合わせた語尾をとっていることから、過去分詞で用いられた動詞が主格主語との能動的関係を結ぶ例ではない可能性が高い。そしてこのラテン語の迂言的表現はまたすべてギリシア語の同様の表現を模倣したものと考えられ、主格主語と過去分詞で用いられた動詞行為との関係は明確であるとは言えない。Tatian でイチジクの木を植えた行為者が主格主語の誰か (sum „jemand“) であるかは定かではない。その 6 例すべてに過去分詞が対格目的語と形態的一致を見せているという点に鑑みると、まさにラテン語の形式の模倣であり、また SVOC 構文を示していることになる。

しかし残りの 2 例¹⁰¹はどちらも原典では現在完了形をとっている。そのうちの 1 例であるうへの例 (32) ではラテン語で能動欠如動詞を用いているため、Exhortatio のように 1 語に対応しているわけではない。しかし古高ドイツ語の過去分詞が形容詞的語尾をとっていないところから見れば、完了アスペクトを表

¹⁰⁰ 28.1; 102.2; 105.2; 125.3; 125.4; 149.4; 151.7; 178.5.

¹⁰¹ 28.1; 149.4(= 例(32)).

わず動詞的単位という意識があったと想定できる。意味から考えても、「得られた状態でもっている」とするより「得た」と解釈するほうが自然であると思われる。ラテン語の（2語による）完了形に対応するもう1例ではただし過去分詞が屈折している。このように Tatian では形式の模倣であるばかりが多いので、基本的には結果所有構文であったと考えられる。すなわち初期古高ドイツ語においては、„ich habe das Buch als ein gefundenes“という原初的意味での *ich habe das Buch gefunden*¹⁰²がまだ支配的であったと言ってよさそうであるが、なかには統語単位に完了相的価値をも見出していた痕跡もわずかにうかがえるという状況である。

一方、受動ではない *sein*+過去分詞（自動詞）の最古の例は、Isidor（8世紀末、南ラインフランク方言）に3例現われる¹⁰³。ただしこの作品は卓越した表現力を備えた学者の手による著作であったにもかかわらず *haben* と過去分詞による迂言形式をまったく知らない¹⁰⁴。

- (33) *dhazs dher allero heilegono heilego druhtin nerrendeo christ iu ist langhe quhoman.* (Isd.456) [lat. *sanctus sanctorum dominus iesus christus olim uenisse*]
 すべての聖なる方々のなかの聖なるお方、主であり救済者であるキリストがすでにずっと前からやってくるということ。
 (ist: *sin* „*sein*“の現在・3人称・単数, *quhoman*: *quheman* „*kommen*“の過去分詞; *uenisse*: *venio* „*kommen*“の完了不定詞)

例(33)で注目される点は、過去分詞が屈折していない点とラテン語原典の1語による完了不定詞に対応しているという点である。すなわち古高ドイツ語で *dhazs*(„*dass*“)文に現われた *ist quhoman* („*ist gekommen*“)が、ラテン語の1語の不定詞 (*uenisse* „*gekommen sein*“)をもとに訳された表現であることは、*sein*+過去分詞が完了形と解釈されていた可能性を意味する。ゴート語とは異なり、Isidor ではこの迂言形式は残りの2例もまた過去分詞は無語尾となっており、それらはまた原典の（2語による）受動完了形に充てた表現なのである。

Tatian では、受動ではない *sein*+過去分詞の全出現例は16例現われ、出現の割合は *haben* による迂言形式の倍の値を示している¹⁰⁵。

- (34) *uuas tho giuuortan in then tagun, gieng in berg beton.* (Tat.70.1/Luk.6.12) [lat.

¹⁰² Paul (1958) 137.

¹⁰³ 100, 306, 456.

¹⁰⁴ Eroms (1997) 7

¹⁰⁵ 2.8; 7.1; 11.1; 13.1; 67.7; 68.1; 69.1; 70.1; 70.2; 92.2; 135.24, 148.5, 185.9; 196.8; 217.1; 244.2.

factum est autem in illis diebus, exiit in montem orare] そしてそのころつぎのことが生じていた。すなわち（キリストが）祈りをささげるために山に入っていた。

(uuas: sin „sein“の過去・3人称・単数, giuortan: uerdan „werden“の過去分詞; factum est: facio „tun“の受動・現在完了・3人称・単数)

(35) ih bim alt, inti mîn quena fram **ist giganan** in ira tagun (Tat.2.8/Luk.1.18) [lat. ego enim sum senex, et uxor mea **processit** in diebus suis] 私は年老いています。そして私の妻も年をとりすぎています。

(ist: „sein“の現在・3人称・単数, (fram-)giganan: (fram-)gangan „(weiter-)gehen“の過去分詞; processit: procedo „weitergehen“の現在完了・3人称・単数)

注目すべき点はまた、全 16 例のうち 14 例までがラテン語原典の現在完了に対応していることである¹⁰⁶。ただしラテン語で動詞 1 語の屈折語尾による現在完了となっている (**processit**) のはここに挙げた例 (35) のみである。例 (34) で **factum est** „**getan worden ist**“となっているように、ほかはすべて受動の完了という 2 語を用いなければならない分析的形式となっている。ここにはラテン語の完了という一つの文法的意味をドイツ語の迂言形式を用いて表わそうとする姿が想起される反面、形式的には原典の 2 語による表現方法に縛られていた状況が示されていると指摘することも可能であろう。また、過去分詞の語尾に主格主語に呼応した格変化が見られるのは 3 例のみである¹⁰⁷。したがって、性質・様態などを表わす **sein** 動詞+名詞形容詞ではなく、結果的状态を表わす一つのまとまりと認識していた可能性がいっそう高くなる¹⁰⁸。このころには **er ist gestorben** という形式が、主格補語を名詞形容詞的に用いた „**er ist ein Gestorbener**“を意味していた原初的状况¹⁰⁹から脱却していた度合いは、少なくとも **haben** のばあいより高いと考えられる。

このような状況から、古高ドイツ語に入るとその初期の段階で **haben, sein** の過去分詞との形式的な結びつきが、一定の統語単位とみなされ始めていたことがうかがえる。意味レベルでは、完了性をになう存在という意識も断片的にはあるが芽生えていたとも言えよう。助動詞の発達という言いかたをすれば、少なくともゲルマン語期よりは一歩すすんで助動詞化が始まりつつあったとい

¹⁰⁶ なお残りの 2 例は現在形に対応する箇所である：135.24; 148.5.

¹⁰⁷ 7.1; 11.1; 148.5.

¹⁰⁸ ただし古高ドイツ語では、**sein** 受動のばあい述補語として用いられる過去分詞は、述語形容詞とおなじように、そもそも屈折することがしばしばあった（志田（1994）を参照）。したがって助動詞化の度合いを決めるさいの判断基準として、過去分詞が屈折するか否かという特徴だけをとりあげてもさほど有意とは言えない。

¹⁰⁹ Behaghel (1924) 271.

うことになる。そして **haben, sein** 両者の分析的形式のうちどちらがより早い発達を遂げていたのかは、その意味的発達が受動の迂言形式とおなじように、過去分詞と定動詞の本来的機能がストレートに想定されうるとか、古高ドイツ語最古の出現例が少しばかり早かったという理由より、ラテン語原典が完了形であり、かつドイツ語で過去分詞が屈折を見せていない例がより多いという理由で **sein** 完了に軍配が上がるであろう。

しかし助動詞化の道を歩み、新しいカテゴリーを創出していく統語形式を分析対象とするばあい、その発達の萌芽的段階において一つの統合体としての機能化した姿を追い求めることは適切ではないだろう。そしてまた用例が少なく、結びつきの度合いも安定しているとは言えない古高ドイツ語初期では、個々の実例から何らかの価値づけを行なうには限界があるため、動詞の全般的な発達プロセスを踏まえながら、この後の発展段階の状況との関連のなかでとらえる必要がある。古高ドイツ語中期以降の状況については第3章、第4章での考察に譲ることにして、次章ではまず背景となる動詞カテゴリーにどのような潮流が見られたのかを見ておきたい。

第2章 動詞時制体系の変遷

本章では、ゲルマン語からドイツ語へ、そしてドイツ語に入ってから言語変遷のなかで文法表示手段にはどのような潮流があったのか、なかでも動詞時制体系がどのようなプロセスを経て発達してきたのかを形態と意味の両側面から概観する。歴史的背景を見ることによって Pf. の発展の歴史的な位置づけをより明確にしておきたい。

類型論的に見ると、ドイツ語は、現代におけるゲルマン諸語のなかでアイスランド語に続いて2番目に古い形態的特性を残している。しかしこれにとどまらず、最古のゲルマン諸語の言語的状況を見ても、古高ドイツ語は、ゴート語と古ノルド語に次いで2番目に保守的であると **Sonderegger** は述べている¹¹⁰。古来ドイツ語には、名詞類や動詞に見られる屈折語尾の機能が比較的強く保たれてきており、たとえばゲルマン語における動詞の組織的变化によって生じた強変化と弱変化の違いを今日にまで残している。カテゴリーという観点で見れば、名詞のばあい、おもな4つの格機能が3つの性と2つの数との結びつきのなかでいまなお形態的に示される。しかし、長い歴史のなかで諸形態における屈折語尾は徐々に弁別的機能を弱めていったため、単独の語だけで文法的差

¹¹⁰ **Sonderegger** (1979) 157f.

異を明示することはむずかしくなり、さまざまな形態上の変革や改新を被ることを余儀なくされた。

たとえば以下に挙げるように、強変化動詞第 4 類 *nehmen* と弱変化動詞第 2 類 *salben* の直説法現在の人称変化語尾を時代ごとに並べて各々を比べてみると、人称と数の違いを表わす語尾の機能が衰退していることがわかる。

[表 2-1] *nehmen* と *salben* の直説法現在人称変化¹¹¹

	Got.		Ahd.		Mhd.	
<i>Sg. I.</i>	<i>nima</i>	<i>salbô</i>	<i>nimu</i>	<i>salbôm</i>	<i>nime</i>	<i>salbe</i>
2.	<i>nimis</i>	<i>salbôs</i>	<i>nimis</i>	<i>salbôs</i>	<i>nimest</i>	<i>salbest</i>
3	<i>nimiþ</i>	<i>salbôþ</i>	<i>nimit</i>	<i>salbôt</i>	<i>nimet</i>	<i>salbet</i>
<i>Pl. I.</i>	<i>nimam</i>	<i>salbôm</i>	<i>nemumês</i>	<i>salbômês</i>	<i>nemen</i>	<i>salben</i>
2.	<i>nimiþ</i>	<i>salbôþ</i>	<i>nemet</i>	<i>salbôt</i>	<i>nemet</i>	<i>salbet</i>
3.	<i>nimand</i>	<i>salbônd</i>	<i>nemant</i>	<i>salbônt</i>	<i>nement</i>	<i>salbent</i>

(Braune/Ebbinghaus (1977: 69), Paul (2007: 241)より)

この表を見ると、ゴート語や古高ドイツ語の形態パラダイグマが現代語のそれとは大きくことなっているように見受けられる。しかし弁別的機能という観点で見れば、現代語は 4 種類の現在人称語尾をもっている (-e, -st, -t, -en) ことから、5 ないし 6 種類の人称語尾を備えていたどの古い時代の動詞語尾のはたらきともさほど大きな差異は認められない。したがって現代にいたるまで甚だしい機能的衰退が生じているという言いかたはできないだろう。しかし各時代を経て推移したプロセスを目で追っていくと、より古い時代には語末音節内の多様な完全母音が単独であるいは子音を支えつつ現われていたものが、中高ドイツ語に至るまでに完全に曖昧母音化 (-e-) を被ることとなったことが読み取れる。弁別的機能の衰退である。この流れが続けば、その後現代に至る 1000 年近い歴史のなかで子音も巻き込んで語尾の表示機能に衰退化が進み、その結果、現代英語のように人称・数表示がほとんど消失してしまってもおかしくはない。しかしドイツ語ではこの質的な衰退は形態の消失にまでは至らなかった。他方でこのカテゴリーは、一足先に主語代名詞を義務化することによって強化されていたからである。すなわち古高ドイツ語期に出現頻度が増していくことになる主語代名詞の登場により、過剰とも言える堅固な人称・数カテゴリー表示が

¹¹¹ Got.(Gotisch): ゴート語 (4 世紀ごろ)、Ahd.(Althochdeutsch): 古高ドイツ語 (750~1050 年ごろ)、Mhd.(Mittelhochdeutsch): 中高ドイツ語 (1050~1350 年ごろ)。なお Ahd.や Mhd. では代表形であっても異形が挙げられることがしばしばあるが、紙幅の関係上ここでは省かれることがある。

創りだされた。

名詞についても簡単に見ておきたい。つぎの i 語幹男性名詞 *Gast* の格変化表を見ても同様な現象が生じていることがわかる。

[表 2-2] *Gast* の格変化

	Got.		Ahd.		Mhd.	
<i>Nom.</i>	<i>gasts</i>	<i>gasteis</i>	<i>gast</i>	<i>gesti</i>	<i>gast</i>	<i>geste</i>
<i>Gen.</i>	<i>gastis</i>	<i>gastê</i>	<i>gastes</i>	<i>gesteo/-io/-o</i>	<i>gastes</i>	<i>geste</i>
<i>Dat.</i>	<i>gasta</i>	<i>gastim</i>	<i>gaste</i>	<i>gestim/-in/-en</i>	<i>gaste</i>	<i>gesten</i>
<i>Akk.</i>	<i>gast</i>	<i>gastins</i>	<i>gast</i>	<i>gesti</i>	<i>gast</i>	<i>geste</i>
<i>Vok.</i>	<i>gast</i>					
<i>Instr.</i>			<i>gastiu/gestiu/gastu</i>			

(Krahe¹ (1967: 25), Schmidt (2000: 225/276)より)

この推移をみれば、ここにおいても語末音節内母音が弱化することで格表示機能が大幅に衰退していく姿がはっきり見て取れる。この表で言うと、たとえば単数でも複数でも古高ドイツ語以降、主格と対格が同じ語形となっていく (*Sg. Nom./Akk.: gast*, *Pl. Nom./Akk.: gesti*) ことがわかる。このことにより母音幹と子音幹によるいくつかの名詞タイプは中高ドイツ語においてその類別が不可能となる。ところが、たとえば古高ドイツ語の翻訳作品では、冠詞を知らないラテン語原典の名詞が指示代名詞 (*der, daz, diu*) つきで翻訳される度合いが増していった。この代名詞の格語尾は名詞の4つの格機能を示す指標となるのである。この指示代名詞とともに、数詞 *ein* (*ahd.: einer, einaz, einiu*) が不定代名詞 („*irgendein, ein gewisser*“) の機能をもになうようになる。これらの語は自らに格表示の文法的機能を得ることで、定冠詞や不定冠詞として新たな道を歩み始めることになる。このように、格カテゴリーもまた他の品詞の助けを借りることで確固たる文法表示手段を手に入れ、その役割を現代にまで残し続けることになる。

このようにドイツ語が保守的な性格を残しているというのは、それぞれのカテゴリーあるいはその機能が保持、継承されていることによるものであって、個別に見ていくと形態手段としては歴史的変遷のなかで総合的形式から分析的形式へと改新を被っていることが少なくない。では、その機能性が維持されるために用いられることになった分析的形式はなぜ生じたのであろうか。さしあたってドイツ語の歴史を振り返ってみれば、いま見てきたように、それは語末音節内で生じた母音の弱化による影響が大きいと考えられる。

語が古い印欧語から分岐するさいに生じた言語的改新を 11 個挙げているが、アクセントが第一音節に固定されることがその第一項に掲げられている¹¹⁴。すなわち古い印欧語では、高低アクセントがその都度とる語形によって自由に位置を変えていた (lat. *ámo* – *amávi* – *amavísti*¹¹⁵) が、ゲルマン語に入ると強弱アクセントがつねに語頭 (あるいは語根) に位置するようになった。この改新により語末音節では母音だけでなく子音もまたすり減らされ (*abgeschliffen*) ていき、多様であった語末音の特徴は失なわれていく¹¹⁶。たとえば古い印欧語に想定される 8 つの名詞の格のうち、ゲルマン語では呼格 (*Vokativ*)、奪格 (*Ablativ*)、所格 (*Lokativ*) が失われて 5 つに減ったり、動詞の数カテゴリーのうち双数 (*Dualis*) が消失したのは、この音変遷の影響によるところが大きいとされる¹¹⁷。

いずれにしてもゲルマン語を視野に入れたドイツ語の歴史を見ると、語末音節の音衰退は、形態だけでなく文法カテゴリーにまで大きな影響を及ぼしてきたことがわかる。しかし、消失せずかたくなに保持、継承されてきている比較的多くの文法カテゴリーは、一括りにして総合的形式から分析的形式へという一本の流れのなかでとらえられるわけではない。それらは、総合的形式の衰退という流れと分析的形式の発展という流れという 2 つの大きな形態的潮流のなかで、その都度の (適切な) 取捨選択のプロセスを経て形作られていった姿なのである。そのプロセスをより詳しく見ていくため、またテーマを Pf. に絞っていくために、動詞の文法カテゴリーの形態的変遷についてあらためて考えてみたい。

うえで触れたように、ゲルマン語では、動詞カテゴリーとして人称は 3 つ、数は 2 つ保持された。また法は希求法が接続法に吸収されるにとどまり、やはり有標の命令法とともに無標の直説法に相對峙していた。態については、ゴート語にわずかに見られた中受動態¹¹⁸ (*Mediopassiv*) はほとんど放棄され、再帰表現や *sein/werden* と過去分詞による受動の分析的形式が能動カテゴリーに対応する形で定着していった。一方、時制については、つぎに述べるように、ゲルマン語では、強変化動詞の過去形や過去現在動詞が印欧語の完了を形態的に受け継いでいるとみなされる。しかしそれらは限られた動詞タイプにのみ残っ

¹¹⁴ Krahe (1966) 42f.

¹¹⁵ 順に、*amo* 「愛する」の現在・1 人称・単数／現在完了・1 人称・単数／現在完了・2 人称・単数。

¹¹⁶ Krahe (1966) 123.

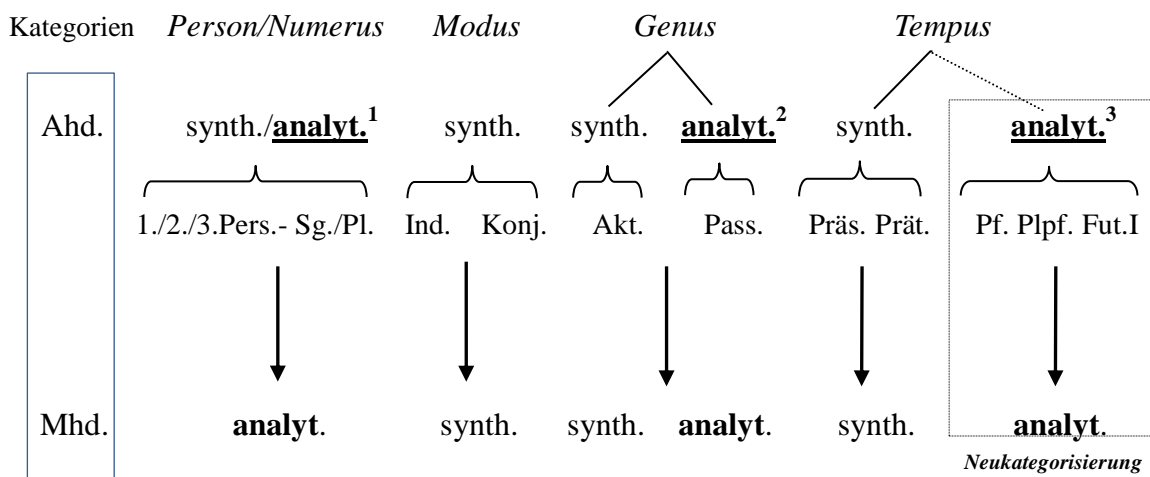
¹¹⁷ Dorđević (1994). ただし名詞の格については、部分的に所格が残っていたし、ゴート語には呼格の痕跡もわずかながら見られる (Krahe (1967) 7).

¹¹⁸ ギリシア語等の古い印欧語には、能動態と対をなすカテゴリーとして中動態 (*Medium*) が認められる。ゴート語にはこれを受け継ぐ中受動態が、直説法と希求法の現在形に残っている。しかしその意味機能については、本来中動態が持っていた用法は認められず、ほとんど受動の意味でしかなかった (Krahe² (1967) 119f./131)。Nishimoto (2004: 48) も参照。

た残存的形態であって、古い印欧語のように完了カテゴリーを形成することはなかった。新機軸としてゲルマン語で生み出された弱変化動詞もまた、いくつかの特別クラスの動詞とともに形態的な違いを見せるにすぎず、全体として現在と過去による 2 時制という極めて脆弱な時制体系に甘んじていた。

ドイツ語の歴史に入ると、動詞の本質的な 5 つの文法カテゴリーすなわち人称、数、法、態、時制はそのまま受け継がれる。しかし個別の下位カテゴリーを見ていくと、さきに部分的に見たように、その都度の文法表示手段は分析化を進めることが見て取れる。つぎの図 2-2 は、古高ドイツ語期から中高ドイツ語期にかけての各々のカテゴリー表示手段の変遷を、総合的形式 (synthetische Form = synth.) および分析的 forms (analytische Form = analyt.) に視点を置いて描いたものである。

[図 2-2] 動詞カテゴリー内における総合的形式から分析的 forms への変遷



古高ドイツ語で新しく生じる 3 つの分析的 forms のうち、人称と数については、主語代名詞という補助手段を得ることで、そのカテゴリーが統合されたまま残存する。つまり旧来のカテゴリーが、その弁別的機能が補強されるかたちで全面的に受け継がれる (**analyt**¹ を参照)。これは語末音節内の母音衰退化に大きく影響を受けていると考えられるのに対し、態と時制における分析的 forms の発生については同様な因果関係を求めることはそう簡単ではない (**analyt**², **analyt**³ を参照)。受動にかんしては、語のレベルに限って言えば、他動詞が過去分詞形を取ることで受動的意味を引き起こすという態の転換方法をゲルマン語はすでにもっていた。この過去分詞の意味論にほとんど干渉しないコプラ動詞 *sein* や *werden* は、みずからが機能化するといういわば「軽い」再分析 (Reanalyse) を経るだけで発達することができた。双方の要素は複合的形式として結びつきを

強めていき、アスペクトを決定づけながら（「～されてある」「～されるようになる」）古高ドイツ語期に入ってますます定着し、拡充化されていったと考えられる。すなわちこの受動の分析的形式は、ゲルマン語で失われかけていた形態、そしてカテゴリーを継承するかのようになられ、能動とのペア性を保つことに成功していた。

これに対し時制に目を向けると、ゲルマン語で根強く残ったカテゴリーは現在と過去の2つだけであった¹¹⁹。定動詞で拘束形態素を用いた他の時制形式がゲルマン語期に発達することはなかったため、完了形や未来形など他の時制がになうような意味が求められるときにはさまざまな手段を用いなければならなかった。完了形の形成のばあい、第1章で見たように *sein* が先行して場所移動や状態変化を表わす自動詞とともに完了性をになう機能を果たしていたが、他の自動詞や他動詞の過去分詞と結びついて完了的意味を産み出す手段となると、*sein*（や *werden*）はみずからが受け入れる守備範囲をもはや超えるものであった。他動詞の過去分詞と結びつくことで、受動カテゴリーを形成する中心的存在になっていたからである。のちの北・西ゲルマン語で採用されることになる *haben* は、それ自体の脱語彙化のみならず、結びつく過去分詞に態の転換を被らなければあらゆる他動詞の使用に耐えうるような形式には発達できなかった。このことから考えても、*sein* 形式のばあいより意味的、統語的に大きな負担を伴うプロセスを辿ったと言える。しかし間もなく再分析を経ると、それは時間・アスペクトを表示する迂言形式が競合するという大きな流れのなかで急速に発展を遂げるのである。このように時制のばあい、まったく失われていた総合的形式による下位カテゴリーがあらためて創出されるための手段として、分析的形式による表示手段が選ばれたのである。

一口に新しい分析的形式への発達と言っても、そのプロセスを個別にたどっていくと、人称・数、受動、時制と動詞カテゴリーの各部門で様相がことなっていることがわかる。すなわちそれらの改新は、生じた時期、表示方法やその内容、そして発生事情ないし因果関係にかんしては三者三様である。また2語によって文法表示を行なうという言語手段を獲得していくプロセスは、ドイツ語の歴史に入ってから顕著になる屈折語尾の機能衰退というだけでは説明しきれない、ゲルマン語期からの形態上の大きな駆流を示していると思なざるを得ないであろう¹²⁰。

¹¹⁹ 未来指示のための有標的形式はゲルマン語には発達せず、ふつう現在時制で済まされたが、古高ドイツ語期には分析的形式として *sollen* がしばしば用いられた。*werden* が不定詞と結びついた形式が本格的に現われるのは初期新高ドイツ語期に入ってからである。

¹²⁰ しかしまた、古高ドイツ語ではキリスト教文化の影響をも考慮しなければならない。第1章で見たように、この時代の聖書文学の基盤をつくっているのは権威言語であったラ

さて、ここではまた、古高ドイツ語期に急速に発展する分析的形式の発達のうち、時制領域で新しくカテゴリーを生み出す諸形式に焦点を絞って、その意味的ありようをさらに概観しておきたい。印欧語やゲルマン語が辿る歴史にはまた、時制とならんでアスペクト¹²¹という意味論的側面もつねにつきまってくるため、ここではアスペクトのカテゴリー表示のために用いられてきた諸形態手段の変遷についても視野に入れておかねばならない。

時代をさかのぼって古い印欧語の動詞の文法表示手段を垣間見ると、そこには現在語幹、アオリスト語幹、完了語幹という3つの語幹形式をもとにして、少なくとも現在、未完了過去、アオリスト¹²²、現在完了という4つの時制カテゴリーが構成されていたことがわかる。動詞語幹や時制形式の各クラスが形成される方法には、動詞語根を基盤にして接尾辞 (Suffix) や、畳音 (Reduplikation) や加音 (Augment) といった接頭辞 (Präfix) が添加されたり、母音交替 (Ablaut) を用いたりなどさまざまな形態手段があった。たとえばギリシア語の語幹形成では、現在形 - アオリスト形 (例: παιδεύω / παιδεύσα „lehren“)、現在形 - 完了形 (例: λείπω / λείποινα „lassen“)、またラテン語では、現在形 - 完了形 (例: scribō / scrīpsī „schreiben“、parcō / pepercī „sparen“) などとなる。これらの語幹形が意味していたものはしかし、時制的対立というよりもアスペクト対立の構成であった。印欧祖語の動詞体系の根幹には、現在語幹は未完了相を、アオリスト語幹は完了相を、そして完了語幹は一種の結果相を表わすといった動詞のアスペクトが文法カテゴリーとして構成されていたとみなされている¹²³。

動詞体系に大幅な変革を起こし、2つの時制に激減したゲルマン語では、基本的な形態的手段は受け継がれるのであるが、種々のカテゴリーを形成する語幹形に直接関与するものはわずかであった。古い印欧語の完了形を構成するさいに用いられていた手段のうち母音交替だけが、強変化動詞で2つの過去形(単数・複数)と過去分詞形を形成するさいにもっともよく残るのである(例: got. greipan – graip – gripum – gripans „greifen“; biudan – bauþ – budum – budans „bieten“)。しかし意味の面から言うと、母音交替による強変化動詞の過去形は、

テン語であり、その人為的な影響抜きで考えることもできない。文字を操る聖職者たちの頭のなかには、体系的に組織化されていたラテン語の時制形態を前にして、自国語での表現の可能性を探りつつ文体上、文法上の創意工夫を行なっていたに違いない。

¹²¹ アスペクトとは、一般に、動詞の形態手段によって出来事のありかたが対立的に捉えられるばあいの文法的カテゴリーを指す(例 英: walk : be walking)。しかしドイツ語には英語やロシア語のように明確なアスペクトがないため、さしあたってつぎのように考える。術語としてアクツィオーンスアールト、アスペクト(性)を用い、そのいずれも出来事の時間的ありかたを指すが、前者は動詞の語彙レベル、後者は動詞表現が表わす語句レベルや命題レベルである。

¹²² 過去の一回限りの出来事を表わす時制形式。

¹²³ Meier-Brügger (2002) 166; 256f.

とくに完了アスペクトを明示するというわけではなく、接尾辞を用いた後進の弱変化動詞の過去形とは意味の差異は認められない。このほかの形態では、たとえば強変化動詞の第7類にのみ現われる畳音は動詞クラスのわずか一部を構成しているに過ぎなかった(例: got. *lêtan* / *laflôt* „lassen“, *haitan* / *haihait* „heißen“)し、ゲルマン語で新しく構築される弱変化動詞の4種類の接尾辞は派生レベルでの標識であるため、動詞語幹の文法機能に直接関与することはなかった(-jan, -ôn, -an(ahd.-ên), -nan)。このほか、同じく「過去現在動詞」(Präterito-Präsentia)は、結果的意味をもった古い完了形にルーツがある過去時制の形態パラダイグマが現在時制と解釈されることでできたものであるが、その痕跡を残す動詞クラスは7系列だけであって、統一的なカテゴリー表示には寄与することはなかった(例: got. *wait*, *waist*, *wait...* „ich weiß, du weißt, er weiß...“他に *kann* „kann“, *skal* „soll“ usw.¹²⁴)。

このように、ゲルマン語に用意されていた形態的手段は、時制カテゴリーを形成する根幹部には部分的にしか寄与しなかった。このことはまた同時に、古い印欧語とはことなって、アスペクトが文法的に体系化されなかったことをも意味する。しかしながら、ゲルマン語でアスペクト表示が放棄されたわけではない。たとえば、生産性を失った強変化動詞の代わりに組織化された弱変化動詞は、4種類のクラスを構成する派生接尾辞が同時にアスペクト性の違いをも示す機能を内包していた。第3類では動詞派生のばあいには継続相(got. *þahan* / ahd. *dagên* „schweigen“)、名詞・形容詞派生のばあいには起動相(ahd. *fûlên* „faul werden“)、また第4類では(自動詞でかつ)起動相(got. *fullnan* „voll werden“)といった意味を伴うのである¹²⁵。一方で接頭辞の添加がアスペクト表示に重要な役割を果たすことになる。そもそもゲルマン語は、基礎動詞の意味に何らかの変容を加える手段として接頭辞を発達させており、そのさいアスペクト性が前面に表われたり、積極的に明示化することにも寄与していた¹²⁶。このあと

¹²⁴ 過去現在動詞では、本来の過去形が現在時制化したのであるから、過去時制を新たにつくらねばならなかった。それは過去複数形の語幹母音と歯音を用いた弱変化動詞の過去形の接尾辞を手本にして作られた。たとえばゴート語の *wait* の過去形は *wissa* (< **witta*)であった(Krahe¹ (1967) 132f., Krahe² (1967) 69/145, Schmidt (2000) 221)。

¹²⁵ ゲルマン語弱変化動詞の接尾辞の種類とそのおもな機能は以下のとおりである: 1. **-jan Kausativa, Faktitiva**: got. *satjan* / ahd. *setzian* „setzen“; got. *lagjan* / ahd. *legen* „legen“; got. *hailjan* / ahd. *heilen* „heilen“ 2. **-ôn Deverbativa (meist Intensiva)**, Denominativa: ahd. *sprangôn* „springen“; got. ahd. *salbôn* „salben“ 3. **-an Deverbativa (Durativa)**, Denominativa (**Inchoativa**): got. *þahan* / ahd. *dagên* „schweigen“; ahd. *fûlên* „faul werden“ 4. **-nan Intransitive Inchoativa**: got. *fullnan* „voll werden“; got. (ga)*daupnan* „sterben“ (Krahe¹ (1967) 115f., Đorđević (1994) 297f.)。

¹²⁶ ゴート語では、基礎語-*leiþan* から *bi-leiþan* „verlassen“, *af-leiþan* „weggehen“, *hindar-leiþan* „hinzukommen“, *ga-leiþan* „kommen“, *inn-galeiþan* „hineingehen“, *þairh-leiþan* „hindurchgehen“, *ufar-leiþan* „auf die andere Seite gehen“, *us-leiþan* „weggehen“といった多様な語が派生される

見るように、なかでも空間的意味 („zusammen“; lat. con-) から発達したと想定される接頭辞 **ga-**が、一定の動詞に添加され、単一動詞との間に完了相対未完相というアスペク的な対立を結ぶ機能を発揮していた¹²⁷。

こうして見てくると、ゲルマン語では文法カテゴリー内ではなく、おもに派生という造語手段によってアスペクト性が表示されていたことがわかる。それはむしろアクセシブリティレベルのものであり、定動詞で人称や法といった他の文法カテゴリーと同時に表われなければならない文法的義務性に直接関与することのない、動詞の形態・意味論的、あるいは語彙論的な表出であると言えよう。定動詞の文法機能には、古い印欧語からゲルマン語にかけて、アスペクト表示からの脱却という変革があったと考えることができるのである。

古高ドイツ語の時代に入ると動詞組織はさらに変化を被り、アスペクトの表示は接頭辞に譲られることになる。まずは弱変化動詞において、第4類の接尾辞 **-nan** が第3類 **-ên** に統合されることで古高ドイツ語では3種類となる (**-en**, **-ôn**, **-ên**)。しかしまた、語形態全般に亘って影響がおよんだ語末音衰退化によって接尾辞の形態的衰退はさらに加速し、中高ドイツ語では弱変化動詞の系列は、**-en** に一本化されるに至る。このことによって弱変化動詞の語幹形成接尾辞に見られたアスペクトの違いは中高ドイツ語期までにはほとんど消失してしまうのである (例: ahd. **leiden** „leid machen“, **leidôn** „anklagen“, **leidên** „leid sein“ > mhd. **leiden** „verhasst sein/werden, leid tun/werden, unangenehm sein usw.“)¹²⁸。

しかし一方ゲルマン語でかなりの程度に発達していた接頭辞もまた古高ドイツ語ではその機能を多様化していくことになる。とりわけ完了相化に貢献していた接頭辞 **ge-**は、つぎに見るように、この時期にはアスペク的な機能のある程度しか果たさなくなっていた。同時にまた、単一動詞の過去分詞形成のさいの単なる指標マーカ―へと発展していったり、一部は語のなかに形骸化 (例: nhd. **gebären**, **gedeihen**, **gehören**, **gewinnen**; **glauben** usw.) していき、アスペクト表示は他の接頭辞 **fir-** や **ir-** などの手段に席を譲るようになった (例: ahd. **firbrinnan** „verbrennen“, **firrinna** „verrinnen“; **irtrinken** „ertrinken“, **irslahan** „erschlagen“)。

ここで、ゲルマン語で完了相化の接頭辞として主導的役割を果たしていたとみられる **ge-** (got. **ga-** / ahd. **gi-**) が過去時制で果たす機能について具体例を少し見ておきたい。それは **Pf.** の発達とある程度まで競合関係にあったとみなすことができるからである。ゴート語では、つぎの例 (36) ~ (39) の動詞 **sitan** や

(Die Gotische Bibel (Zweiter Teil) (1971) 83). Gerdes/Spellerberg (1983: 99f.) も参照。

¹²⁷ Streitberg (1920) 194ff.; Dordević (1994) 299f.

¹²⁸ しかし一方で動詞派生接尾辞 **-arôn/-irôn** (> nhd. **-ern**) や **-alôn/-ilôn** (> nhd. **-eln**) は、反復相 (多く縮小的意味 (Diminutivum) を伴う) を生みだす機能を現代語にまで残している (例: ahd. **flogarôn**, **flockorôn** „flattern“, **mundalôn** „gern sprechen“; mhd. **slummern** „schlummern“, **grübeln** „grübeln“, nhd. **hüsteln**, **gackern**.)。Krahe/Meid (1969) 263f. を参照。

bahan が示しているように、単一動詞と ga-付きの動詞でアスペクト上の対立が見られる。Streitberg はこの完了相化 (Perfektivierung) の手段として、saíhvan („sehen“)と gasaíhvan、standan („stehen“)と gastandan、slepan („schlafen“)と gaslepan など多くの例を挙げている。その接頭辞 ga-の機能は、かつての現在完了に見られるような結果性を伴う意味ではなく、行為の完結性 (Vollendung der Handlung) の明示というアクツィオーンズアールトレベルのアスペクト性が想定されている¹²⁹。このことは、ゴート語の ga-動詞の過去形がギリシア語のアオリストに対応することが多かったと考えられることとは矛盾しない¹³⁰。

sitan vs gasitan („sitzen“ vs „sich setzen“)

(36) Paitrus uta *sat* (Mat.26.69) ペトルスは外で座っていた。

[gr. εκαθητο] (καθημαι „sitzen“の3人称・単数・未完了過去)

(37) Jah faifalþ þos bokos jah usgibands andbahta *gasat* (Luk.4.20) そしてそのお方は本をたたんで、また (これを) 使いの者に渡して座られた。

[gr. εκαθισεν] (καθισω „sich setzen“の3人称・単数・アオリスト)

bahan vs gabahan („schweigen“ vs „verstummen“)

(38) eis *bahaidedun* jah mann ni gataihun (Luk.9.36) 彼らは黙ったままでいて、誰にも告げなかった。

[gr. εσιγησαν] (σιγαω „schweigen“の3人称・複数・アオリスト)

(39) jah sildaleikjandans andawaurdi is *gabahaidedun* (Luk.20.26) そして彼らはそのお方の答えに驚いて黙った。

[gr. εσιγησαν] (σιγαω „schweigen“の3人称・複数・アオリスト)

ドイツ語史に入ると、単純動詞と gi-付き動詞とのアスペクトのペア性はしだいに明瞭ではなくなつてゆく。ただし古高ドイツ語では、その接頭辞の完了相化のはたらきは知覚動詞 (Wahrnehmungsverben) にその違いが比較的良く残っていたとされる。たとえば、つぎの古高ドイツ語の例 (40) における gisah (gi + „sah“) は、動詞 gifehan „sich freuen“の喜びの対象となる thaz 文中で用いられ

¹²⁹ Streitberg (1920) 195ff.

¹³⁰ 新約聖書に現われる ga-付き動詞の過去形について、gasah (ga + „sah“), gahausida (ga + „hörte“)をサンプルとして、原典であるギリシア語の時制との対応を塩見 (1993) にもとづいて調べてみた。その結果、gasah では 45 例中 31 例が、gahausida では 14 例中 11 例がアオリストに対応していた。この結果から分かるように、ga-付き動詞がいつも過去の一回限りの出来事を表わす意味に対応しているわけではない。もちろん、例 (38) のように、単一動詞の過去形でアオリストに対応することもある。

ている。アブラハムが喜んだとされる時点ではまだ「私の日」を見ていないので、時間的には過去から見た未来、アスペクティック的には起動相的意味であるところである。他方、実際にキリストによって神との契約が成就したことを見て、喜んだというつぎの表現では接頭辞 *gi-*なしの過去形 *sah* が用いられている。ところで Schrodtt は、古高ドイツ語の *hören* の意味について、これが „die Fähigkeit des Hörens anwenden“ を表わすのに対し、 „vernehmen“ を表わす *gihören* とある程度のペア性を作っていたと述べている¹³¹。これにしたがえば、つぎの例 (42) での *gihorta*, *gihortun* はよりふさわしい使用であろう。そこでは接続詞 *so* や *soso* が „als, nachdem“ の役割を果たし、主文の出来事に対する相対的な前時性の表示には動詞行為の完了性が適合するからである (「～し終えたあと～した」)。そのほかの例として *sizzen* を挙げたが、例 (44) に示されるような接頭辞 *gi-*付きのばあいではなく、単純形であっても「腰を下ろす」という完了相的意味をもつことがあった¹³²。

sehan vs *gisehan*

(40) Abraham iuar fater gifah thaz her *gisah* minan tag, inti her *sah* inti gifah (Tat.131.24/Joh.8.56) そなたらの父であるアブラハムは、私の日を見ることになると喜ばれました。そしてそのお方はその日を見られ喜ばれたのです。

[lat. videret / vidit] (video „sehen“ の 3 人称・単数・未完了過去 (・接続法) / 3 人称・単数・現在完了)

hören vs *gihören*

(41) ni *hortun* sie thiu scaf. (Tat.133.9/Joh.10.8) けっして羊は彼らの言うことを聞かなかつた。

[lat. audierunt] (audio „hören“ の 3 人称・複数・現在完了)

(42) So thaz tho *gihorta* ther heilant, fuor thanan in skeffe in vvuosta stat suntiringun.

¹³¹ Schrodtt (2004) 106. なお、ラテン語の現在完了は古いアオリスト形を吸収したので、本来の完了的意味のほかに、一回限りの過去の出来事を表わす意味をもっている。したがって聖書作品で古高ドイツ語とラテン語原典とを比較するとき、とくに過去領域のアスペクトを探るさいにラテン語の形態はある程度の手掛かりにしかない。ここに挙げた *gi-*付き動詞の 3 例はどれも接続法となっており、アスペクトの違いはやや不明瞭である。

¹³² たとえば Otf.III.1.23.: Theih hiar in libe irwizze, / zi thinemo disge ouh *sizze*... 「私がこの人生において分別を手に入れ、またあなたの食卓に座ることができるように…。」 第 3 章の終わりで触れるように、中高ドイツ語の *sitzen* も座る行為 „sich setzen“ を表わすことがあった。

Soso thaz tho *gihortun* thio menigi, folgetun imo fuozfendon fon den burgin.
(Tat.79.13/Mat.14.13) その救世主がそれを聞き届けられたとき、そのお方はそこから船に乗っておひとりで寂寥としたところへと歩いて行かれた。人々がそれを聞いたとき、彼らは町々から歩いてそのお方についていった。
[lat. audisset / audissent] (audio „hören“の3人称・単数・過去完了 (・接続法) / 3人称・複数・過去完了 (・接続法))

sizzen vs *gisizzen* („sitzen“ vs „sich setzen“)

(43) inti uzgamenti fon demo huse, *saz* nah demo seuue (Tat.70.2/Mat.13.1) そして家の中から出て、そのお方は湖畔に座っておられた。

[lat. sedebat] (sedeo „sitzen“の3人称・単数・未完了過去)

(44) mit thiu her *gisaz*, giholota thie zi imo thie her uuolta (Tat.22.5/Mat.5.1)

そのお方がお座りになったとき、お望みになられた人々を自分のところへ呼びよせた。

[lat. sedisset] (sedeo „sitzen“の3人称・単数・過去完了 (・接続法))

継続相動詞とのアスペクトペアを形成する手段であったと見なされるこの接頭辞 *ge-*の添加手段は、全体としては古高ドイツ語期にはその機能を失い始めていた。そして中高ドイツ語以降、一定の副文内の定動詞や話法の助動詞と共に起する不定詞、命令や願望文の定動詞に現われるといった、積極的な意味づけが難しいばあいに制限されていく¹³³。一方で中高ドイツ語期に入るまでに過去分詞を形成するさいの形態手段としての機能を定着させ、現代にまで残すことになる。こうしてその自由な用いかたは失われていき、初期新高ドイツ語ではほとんど見られなくなるのである。大局的に見れば、広義の完了アスペクトを積極的に行なうことのできた接頭辞 *ge-*付きの過去形と *haben/sein* による完了形は古高ドイツ語期にはまだ競合関係にあったが、*ge-*に生じる意味機能上の漸次的衰退は、他方で迂言形式である *Pf.*の拡充化を促進するはたらきをもんでいたと考えられるであろう¹³⁴。

このように、アスペクト表示にかんして時制領域で機能化の道をすすむかに

¹³³ この「*ge-*複合形はすでに13世紀にはとりわけ」、*dô/ê* („als/bevor“)を用いた副文内や副詞 *ie/nie* („einmal/niemals“)と共に起するばあいなど「特別な統語環境に制限されていた」(Ebert (1978) 60) ことから、中高ドイツ語ではもはやほんのわずかにしか生産性をもっていないことがわかる (Eroms (1997) 29)。しかし清水 (1980) は、衰退期にあったこの接頭辞の自由な用いかたを、その出現箇所の分布をきわめて詳細に特定することによって「事象の実現の強調」とより自由な「文体的効果」とに積極的に分類する試みを行なっている。

¹³⁴ Ebert (1978: 59f.)、吉田 (1978: 101)、荻野 (2003: 63) を参照。

見えたゲルマン語の接尾辞や接頭辞の機能は、古高ドイツ語において分散化あるいは個別化していった。すなわち接辞手段によってアスペクトを文法的に表示する傾向は中高ドイツ語期には廃れてしまう。しかし、古高ドイツ語期中期までにはまた、動詞単体とアスペクト的なペアを結ぶための別の形態手段が発達する新たな兆候が表われていた。補助語を用いた分析的形式である。ただしその有標的文法表示手段は、すでに見てきたように、受動カテゴリー形成のためにもっと早い時代、すなわちゴート語期にその発達が始まっていた。古高ドイツ語期に入ると、過去分詞や不定詞を用いることで、時制とやらんでアスペクト表示が見られるようになっていた。そのおもな形式をおもな意味とともに以下に挙げておく。

[表 2-3] 古高ドイツ語に見られたおもな動詞迂言形式

態

werdan („werden“)+過去分詞 (他動詞)	---- 受動 (動作)
wesan („sein“)+過去分詞 (他動詞)	---- 受動 (状態)

アスペクト・時制¹³⁵

sculan („sollen“)/ wellan („wollen“)+不定詞	---- 未来
biginnan („beginnen“)+不定詞	---- 起動相
wesan+現在分詞	---- 継続相
werdan+現在分詞	---- 起動相
habên+過去分詞 (他動詞)	---- 完了
wesan+過去分詞 (自動詞)	---- 完了

迂言形式によるアスペクト・時制の表示傾向がこのように顕著に現われる理由には、早い時代に生じていた受動カテゴリーでの *sein* や *werden* の助動詞化とそこに内在するアスペクト表示の寄与が考えられるであろう。そして一足先に拡充化に入っていた *sein* 完了のもとになる迂言形式は、おなじアスペクトを構成する他動詞や別の自動詞にも通用する形式を生み出す契機を作ったと考えられる。一種の類推作用が連鎖的に生じることにより、古い印欧語にあった時制・アスペクト機能はほとんどその積極的な表示が可能となる¹³⁶。

¹³⁵ このほか *ward* („wurde“)+過去分詞 (自動詞) が *Isidor* にのみ比較的頻繁に現われ、完了(変容相)を表わしていた。古高ドイツ語でのまれな出現に対し、古ザクセン語や古英語には数多く見られたという。Eroms (1997: 7f.)を参照。

¹³⁶ ただしこのあと見るように、このうち *haben* や *sein* による迂言形式は必ずしも「完了」を表わしていたわけではなかった。あらゆる過去の出来事を表わしえた *Prät.*の機能的負担

この表からは、たとえば未来はいわゆる話法の助動詞と不定詞を用いて、継続的出来事を表わす未完了過去は *wesan* + 現在分詞を過去時制で用いることで明示的に表わすことができるようになったことがわかる。しかしその機能化は、コプラ動詞のみで形成しえた受動とはことなり、問題なく進んだわけではない。たとえば、この時期には *sculan* は義務性、*wellan* は意志性といったがんらいの話法的意味を、単独でも不定詞つきでも表わしていた。ゴート語ではこれをギリシア語の未来時制に対応させた箇所がほとんどなかった¹³⁷のに対し、ここでは未来性を明示する手段として発達し、ある程度定着していたのである。話法性から時間性への転用であると言えるが、純粹に未来性だけが表わされた箇所を特定することは決して容易ではない。

- (45) *Mih scal man ... gifahan, ufan kruzi hahan, / bispian joh bifiltan joh heistigo biscoltan. (Otf.III.13.5f.)* ひとを私を捕まえるであろう…唾を吐きかけられ、痛めつけられ、激しくののしられる私を十字架につるすであろう。
- (46) *ih scal thir ouh nu rachon, / ni drenk ih thes gimachon. (Otf.II.8.52)* 私はいまお前に言おう。このようなものを私は飲んだことがない。
- (47) *ni tharft es ... lougnen, / thin sprach scal thih ougen. (Otf.IV.18.27)* そのことを否認しなくてもよい。お前の言葉でお前のことがわかるのだ。

うへの例 (45) では未来性が比較的強い表現となっているように思われるが、例 (46) になると未来と言うより、主格主語の意志となっている。また例 (47) では動詞行為 *ougen* „vor Augen bringen“はたしかに未来時になされるが、現在時制のままで意味的にはほとんど問題ないように思われる。

一方、コプラ動詞 *sein* や *werden* を用いた形式では、語に備わったがんらいのアクティオンスアールト的意味すなわち継続相（あるいは状態相）と起動相を残していたと考えられる。これらの動詞は、態の転換をけっして被らない現在分詞形と結びつき、受動のばあいとおなじように、迂言形式どうしでアスペクト対立を結んでいたと考えて良いであろう（「～しつつある」vs「～するようになる」）。にもかかわらず、*wesan* + 現在分詞では、過去形で単なる一回限りの過去の出来事を表わす例も少なからず見られた。

を軽減したとは言え、とくにアオリストと完了的意味との区別はつけにくい。

¹³⁷「このような *skulan* の用法（訳者注：*sollen* や *wollen* を用いた形式を原典の未来形に対応させること）はしかしゴート語ではなじみがない。」（*Diese Verwendung von skulan ist aber im Gotischen ungeläufig.* (Saltveit (1962) 20)）また「未来にかんする行為は基本的にそもそもまったく特別には表現されない。」（*Die zukünftige Handlung wird in der Regel überhaupt nicht besonders ausgedrückt.* (Streitberg (1920) 201)）

(48) sie *uuarun uuartenti* / *uvara man nan legiti* (Otf.IV.35.24) 彼女たちは、ひとびとがそのお方をどこに埋めるのかをじっと見つめていた。

(49) *Thes opheres ziti* / *uuarun entonti* (Otf.I.4.81) 供物の時間が終わった。

たとえば例(48)は、「見る」という行為の継続的意味が強調されていると言えるが、例(49)ではそもそも「終わる」という完了的行為にはまったく継続性が見られない。後者の例では、意味的に迂言形式を用いる必要はないため、脚韻を踏ませるための文体的技法であった可能性もある。

このように、アスペクト・時制で新しい形式が生みだされ始めた時期にはその意味機能はけっして安定しておらず、文法カテゴリーのなかでくぐることはやはりできないであろう。韻文作品では押韻やリズムを整えるためにとられる書き換えという形式的、文体的手段にもなりえた。とは言え、古高ドイツ語期には、迂言形式による有標形を創りだし、時制やアスペクトを明示しようとするという内なるうねりがあったことは確かである。

アスペクトについても一言付け加えておく。ゲルマン語期から用いられてきたアスペクト表示手段を見渡してみると、Streitberg が指摘するように、起動相や完了相といった広義の完了性が作られやすい傾向にあったことがわかる。それは、たとえばゴート語に見られる単一動詞が *finþan* „finden“ や *bringan* „bringen“ などほんの一部の動詞を除いて大部分が継続相動詞であったことに根拠を求めることができるだろう¹³⁸。こうして、現代語の *finden* と *suchen* に代表されるような動詞単体どうしのあいだの完了性 vs 非完了性だけではなく、*sizzen* と *gesizzen* („sitzen“ vs „sich setzen“) のような文法手段を用いた形態上のアスペクトペアが作られていった。完了相動詞はしかしまた、現在時制でとりわけ未来性を明示するのにもふさわしかった。未来時制がカテゴリー化されなかったゲルマン語では、たとえばギリシア語の未来形はふつうゴート語で現在形のままで表現されていたが、現代語とおなじように、とくに完了相動詞のばあい未来指示の副詞等がなくても未来を表示することができた(例: *Ich treffe dich an der Kirche* / *Ich komme bestimmt*)¹³⁹。したがってゲルマン語が完了相化の *ge-* の添加手段を機能化させたということは、また同時に未来指示手段をも手に入れたことになる。ただし本来的に言うと、完了アスペクトは、過去の時間表示に必要とされる度合いが高い素性であると考えて良いだろう。

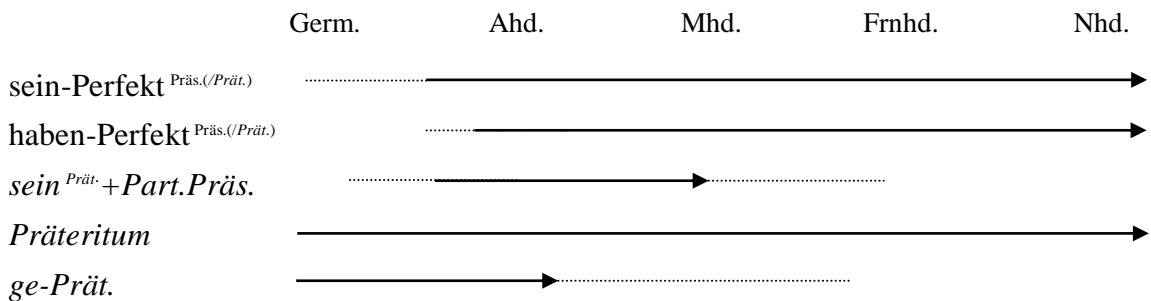
¹³⁸ „... ist eine starke Neigung zur Perfektivierung ... vorhanden.“ (Streitberg (1920) 194) 「…完了相化への強い傾向が存在する…。」 „Die überwiegende Mehrzahl aller einfachen gotischen Verba ist durativ.“ (Streitberg *ibid*) 「ゴート語のすべての単純動詞のうち大多数は継続相である。」

¹³⁹ Dal (1966) 133f. また古くから *werden* は *sein* のアスペクト対とみなされ、現在形でいつも *sein* の未来時制の役割をになっていた。

さて、動詞文法カテゴリーの歩みは、ゲルマン語ではアスペクトから時制へとシフトしていくと指摘されることがある。しかしいま見てきたようにドイツ語の歴史に入ってからまだ、アスペクト表示のために、接頭辞のはたらきが部分的に残されていたり、迂言形式を形成する比較的強い志向性が見られたりした。したがってこの指摘に同調するにしても、時制体系への移行プロセスは緩やかであり、みずからに求心力をもって進行していたとは言えないだろう。古高ドイツ語では、むしろ総合的形式である2つの時制カテゴリーを中心にして、もとからある言語資材を巧みに用いたアスペクト表現が周辺に共存していたと見るのが適切であるように思われる。

それでは Pf.の意味用法を時間的観点から見ると何が問題となるのであろうか。一般的にはそれは表示される出来事の過去性であると言えるだろう。ここでは、古高ドイツ語期から中高ドイツ語期にかけて競合していた、過去の出来事を表わす文法的手段を概観しておきたい。積極的に過去領域を表わしえた言語手段は、「過去形」「sein 完了形」「haben 完了形」「ge-つき過去形」「sein (過去形) + 現在分詞」となる。これらの通時的発展についての概略図を、前後の時代を含めて描いてみると下図のようになる。

[図 2-3] 過去の出来事を表示する文法的手段の歴史的変遷¹⁴⁰



これらの表現形式のうち、接頭辞 ge-つき過去時制 (ge-Prät.) の機能は、うえで言及したように、古高ドイツ語から中高ドイツ語にかけて衰退の一途と辿っていたと言って良い。他方で、純粋に総合的形態である過去時制 (Präteritum) は、強変化動詞にせよ弱変化動詞にせよ、中高ドイツ語期にいたるまで動詞の動作様態や時間副詞との相互作用で過去のあらゆる意味を表わし得た中心的存

¹⁴⁰ 点線部は、当該形態が出現しその出現頻度が増してしだいに機能化し始める時期と、出現頻度が減りしだいに機能衰退が生じやがて消失するまでのおおよその時期を指している。なお起動相の ward+現在分詞については、was+現在分詞に比べて出現頻度がきわめて少ないため、この図からは除外した (Saltveit (1962: 179f.) が行なった古高ドイツ語全般にわたっての調査では9例のみとなっている)。

在であった¹⁴¹。したがって、過去領域において *haben/sein* を用いた Pf. は、出来事の過去性を表示するという点では、最初から単純過去時制が競合相手であったとすることができる¹⁴²。

本章の最後に、形態面に目を向けて方法論にも言及しておきたい。競合する2つの時制が文法機能を発揮するところは、純粹に理論的に言えば、過去時制の形態素（語幹に添加される *te* あるいは母音交替した音形）とこれに対応する *hab/sei* + 過去分詞となる。しかし Pf. の意味を考えるばあい、2つの構成要素に還元される形態素だけではなく、定動詞がになう現在時制性をも積極的に視野に入れるアプローチも許されるのではないかと考える。人称と数などとともに1語で拘束的に表示される時制形態素と、1つのカテゴリーを2語で用いて表示するそれとは、実現のしかたがことなるため、同一のレベルで議論されなければならない理由はない。後者のばあい、コンテキストを視野に入れた文意味を構成するまでの段階に定動詞の機能を考慮する余地があると思われる。もし過去完了時制の意味を分析しようとするれば、過去時制性を基盤にして議論を進めるのがふつうではなかろうか。古高ドイツ語期ではまだこの迂言形式に用いられた定動詞に時制機能が残っていたとの指摘が Eroms や Oubouzar に見られる¹⁴³。

本論文では両者の形式上の決定的な違いは、定動詞の時制つまり現在形と過去形にあるとし、一方の Prät. の意味機能には、Pf. の構造の一部である現在時制の意味論が比較の対象となりうると考えて通時的考察を進めたい。このように考えれば、この形式が生み出す過去性の所在は、残りの要素すなわち過去分詞の意味に求められることになる。しかし過去分詞の機能はあくまでも相対的な意味であって、定動詞で表わされる現在の意味を基準時にした前時性あるいは完了アスペクトを生み出す存在と考えなければならない。つまり、Pf. は出来事が生じた時間が過去にあるという点で同義であり、歴史的に Prät. と競合関係にあったとうえで述べたが、Pf. の過去性は一義的な過去指示ではない。たとえば

¹⁴¹ 古高ドイツ語や中高ドイツ語の文法書ではつぎのように記されている：Das einfache Präteritum hat das Merkmal „vergangen“. Es bezeichnet alle Arten von Zuständen und Vorgängen. (Schrodt (2004) 128) 「単純形をとる過去時制は「過ぎ去った」という特徴をもつ。それはあらゆる種類の状態や事象を表わす。」 Das Prät. kann im Mhd. jeden in der Vergangenheit liegenden Vorgang bezeichnen. (Paul (2007) 289) 「過去時制は中高ドイツ語では過去におけるどんな事象をも表わしうる。」

¹⁴² *sein* (過去形) + 現在分詞は継続相のアスペクトを構成するため、競合相手とはみなされない。

¹⁴³ Eroms (1997) 31: „Aber beide Konstruktion sind zunächst Konstruktionen im Rahmen des Präsens, wie die Plusquamperfektformen solche im Rahmen des Präteritums sind.“ 「しかしどちらの構造（訳者注：*haben/sein* を用いた構造）もさしあたって、過去完了形式が過去時制の枠内にある構造であるように、現在時制の枠内にある構造である」。他に Oubouzar (1974: 14)。

現代語で言うと **Kathrin hat ein Klavier gekauft** では、**hat** が現在時制をにない、過去分詞はこれを基準時とした前時性あるいは完了性を表示し、両者の機能が複合的に働いて文意味の時間構造が決まると考えることができる。すなわち後時的観点が現在時に位置するもっとも基本パターンで、表示される前時的、完了的出来事に時間的解釈が加わることによって浮かび上がってくる過去性に過ぎない。

つぎの第3章および第4章では、この考えかたの妥当性を歴史時代に現われる諸例の追跡によって検討したい。拡充期における、すなわち古高ドイツ語中期以降から中高ドイツ語盛期における **Pf.** の意味機能あるいは意味用法に焦点を絞り、アスペクト性とならんで、現在時制性という観点から行なう具体的分析のなかでなされる。

第3章 現在完了の形態的・意味的発達

2つの **Pf.** のうち、**haben** による形式は、ドイツ語の歴史にその姿を現わしてから一世紀も経たないうちにその構造を変えてしまう。まずはこれについて見ておきたい。第1章で見た古高ドイツ語の **Exhortatio** の例 (**ir den christianium namun intfangan eigut** : 例(30)) は、出現時期が早いにもかかわらず原初的用法から一歩進んだ用法であった。すなわち、**eigan** (= **habên**) が対格目的語と所有関係を結ぶ所有結果構文という解釈がほとんどできず、ラテン語の現在完了に対応する箇所において主格主語が本動詞と能動的関係を結ぶ例である。こうした例がとりわけ9世紀中期以降増加するのである。この時期に生じた意味関係の変容を **Paul** の例を用いて図示するとつぎのようになる。

[図 2-4] **haben** + 過去分詞に生じた再分析



ここに生じた再分析 (**Reanalyse, Umdeutung**) と呼ばれる現象¹⁴⁴では、2つの

¹⁴⁴ **Reanalyse** とはもともと生成文法の枠組みで用いられる術語であったようであるが、文法化研究においても重要な概念となっている。たとえば **back of the barn** 「納屋の背」における名詞 **back** が前置詞のはたらきを得て、「納屋の後ろに」となるばあい再分析が生じたとみなされる。しばしば [a, b] c] > [a [b, c]] で示されるような構造的変化のことを言う。宮下 (2006: 33)、荻野 (2003: 62f.)、ホッパー・トラウゴット (2003: 53f.) などを参照。Umdeutung

部位に重大な意味機能上の変化を被り、これに伴って構造的転換が起きている。そのうちの一つは **haben** が所有の意味を失ったことである。この脱語彙化によって対格目的語は **haben** とは統語的關係を結ばなくなり、代わりに過去分詞に用いられた動詞に必要とされる存在となる。こうして対格目的語の種類が主格主語の所有物という束縛から解放されることになる。そして使用される動詞の用法に沿ってしだいに対格目的語がまったく現れない例も見られるようになり、のちにはついに本動詞として自動詞が用いられるようになる。二つ目は過去分詞の機能が部分的に損なわれるという点である。古高ドイツ語後期に至るまで他動詞に限られていた過去分詞は、対格目的語の補語としてはたらし、そこには受動的關係が結ばれていた。その証拠とみなされるのが、第1章で見たような、過去分詞が対格目的語の性、数、格に合わせた屈折を見せる例である。一方使用される動詞のアクツィオーンズアールトにかんしては完了相が中心であったため、原初期の段階では対格目的語とのあいだに結ばれるアスペクトは動詞行為終了後の結果性であった。これが再分析を経ることで、過去分詞は対格目的語との關係を結ばなくなるのである。つまり、態の転換が生じることでがんらいの受動的意味はまったく消失してしまい、動詞行為には主格主語との能動的關係が結ばれるようになる。結果相アスペクトにかんしてもしだいに失われていき、このあと具体例を見ることになるが、広義の完了あるいは単なる過去としか言えないような意味をになうようになる。

このような重大な変化がなぜ生じたかについて、何も明らかにはなっていない¹⁴⁵。再分析を経たあと、**haben** が本動詞として用いられる例は急速に失われていく。たとえばこの時期としては大規模な著作である、学僧 **Otfrid** による共観福音書 **Evangelienbuch** (9世紀後半) では、**haben/eigan** を用いた迂言形式は、定動詞が過去形や接続法となっているものも含めた全用例で 54 例見られるが、そのうち過去分詞が屈折している例は 3 例のみである¹⁴⁶。意味的、統語的側面を見ていくとそれらは原初的狀況から脱却した構造をもっていることがはっきりわかる。たとえばつぎの例 (50) では、**eigan** の目的語は指示代名詞・中性・対格の **iz** となっているが、われわれ人間 (**wir**) はもうここで意味される理想郷にはいないわけであるから、所有物と考えることは不可能である¹⁴⁷。また

は **Dal** の用語である (**Dal** (1966) 122)。

¹⁴⁵ **Dal** (ibid).

¹⁴⁶ 嶋崎 (2004) 57f. 過去分詞が屈折している箇所はつぎのとおり : I.4.53, IV.15.55, V.7.29.

¹⁴⁷ 一方で **Kuroda** は、古高ドイツ語では再分析を経たあともがんらいの所有の意味が間接的に残存し、過去分詞の結果相アスペクトと相俟って、そこに一種の所有性が認められることがあるとする。その見解によれば、主格主語には過去分詞で表わされる状態に対格目的語が与えられる (彼の表現では「手元にある」, „vorhandensein“) とされる。したがって対格目的語は主語の所有物でなくても良いことになる。たとえば例 (50) は、「主語 **wir** と『天

firlâzan „verlassen“が受動の意味をになって対格目的語の補語となっていると解釈することもできないであろう。例 (51) ではそれどころか動詞 (gimeinen „bestimmen“, bikleiben „beschliessen“) の目的語が thaz „dass“文となっている。

(50) Thar ist lib ana tod, liocht ana finstri, / engilichaz kunni joh ewinigo wunni. / Wir **eigun iz firlazan.** (Otf.I.18.11) そこには死のない命があり、闇のない光があり、天使の一族がおり、永遠の喜びがあるのです。われわれはそこを立ち去ったのです。[対格目的語に iz をとるほかの例 : I.1.23, I.18.28]

(51) Mih io gomman nihein in min muat ni birein. / **Haben ih gimeinit,** in muate **bicleibit,** / thaz ih einluzzo mina worolt nuzzo. (Otf.I.5.39) これまでどんな男の人も決して私の心の中に入ってきたことはありません。私は、ひとりで自分の人生を送ることを決心したのです、心に決めたのです。[daz 文を用いた目的語文をとるほかの例 : I.5.57, V.7.60]

つぎの例 (52) では対格目的語がまったく用いられていない。動詞 gisprechan „sprechen“は絶対的用法で現われているため、原初的解釈は不可能である。また例 (53) のように、wio „wie“による副文のみならず与格目的語 uns を用いている例や、例 (54) のように、再帰代名詞 sih と属格目的語 Kristes todes を用いた例がある。

(52) Laz iz sus thurh gan, so wir **eigun nu gisprochan;** / uns limphit wir mit willen guatalih irfullen. (Otf.I.25.11) われわれがいま話したようになるようにしてください。われわれが進んで正しいことを実行するということはわれわれにふさわしいのです。[対格目的語が現われないほかの例 : III.18.36]

(53) Thoh **habet er uns gizeigot,** joh ouh mit bilide gibot, / wio wir thoh duan scoltin, oba wir iz woltin. (Otf.III.3.3) しかしそのお方はわれわれがそれを望むときに、どのようにふるまえばよいのかということ^をわれわれに教えてくださったのだ、例をもって示してくださったのだ。[目的語として与格と対格を用いたほかの例 : II.7.27, II.7.55]

(54) Nu thie ewarton bi noti machont thaz girati, / joh *Kristes todes* thuruh not ther liut **sih habet gieinot.** (Otf.IV.1.2) いま司祭たちは熱心にその計画を進めている。

国』との関係ではなく、主語 wir がそこにはいないという状態に屈していることが表現されている」(So wird ... nicht das Verhältnis zwischen *wir* und ‘Himmelreich’ ausgedrückt, sondern daß das Subjekt *wir* dem Zustand unterliegt, daß wir nicht dort sind.) と解釈される。動詞 haben の意味論にもとづいた、主格主語に与えられるこの意味役割は「受益」(Benefaktiv) と呼ばれる (Kuroda (1997) 290ff.)。Kuroda (1999) 55f. も参照。

そして人々は必然的にキリストを死に至らしめることに意見が一致したのである。

このように使用動詞に必要とされる目的語のさまざまな現われかたを見ても、過去分詞が単なる述補語としてのはたらきをになっていたと考えることはほとんどできないことが分かる。つまり、この時期には *haben* がすでに助動詞化を進めていたことをはっきりとわれわれに想起させてくれる¹⁴⁸。この段階では明らかに、過去分詞が受動の意味を失うと同時に *haben* が所有の意味を失い、主格主語の能動的動作が表わされていたのである。そして一世紀と少し後に成立する Notker (1000 年頃) では、つぎの段階に入ることが確認される。すなわち Otfrid では過去分詞に使用される動詞は他動詞に限られていたのが、ここではそれを自動詞にまで広げるのである：**habo ih keweinot so filo daz iz truobe ist** (II.15.30)「私はそれ(=眼)がかすむほどたくさん泣いた」、**uuanda ih dir gesundot habo** (II.151.4)「なぜなら私はそなたに罪を犯したのですから」。550 箇所以上も *haben* による迂言形式を用いた Notker によって、この形式は安定化への大きな跳躍を遂げることになる¹⁴⁹。

それではこの形式はどのような意味論的価値をもっていたのであろうか。ここでは注目すべきと思われる二つのアプローチを踏まえて、その意味機能について考察してみたい。まず競合する他の迂言形式との関係をアスペクトという観点で体系化するという Eroms に代表されるアプローチが挙げられる。焦点となるのは過去分詞の意味論と助動詞化を進める *sein*, *werden*、そして *haben* の意味機能である。受動の迂言形式には *sein* とならんで *werden* もまた態の形成に寄与していたが、古高ドイツ語期にはそこに「状態相 対 変容相 (*statal/stativ vs mutativ*)」というアスペクト対立があったとみなされる¹⁵⁰。迂言形式のアスペクト性は、助動詞ががらんらいもつ意味論に、そこから逸脱しない過去分詞の意

¹⁴⁸ ただし過去分詞が屈折を見せる 3 例のうち 2 例は、Piper (1887: 177) や Kelle (1963: 257) の辞書ではどちらも助動詞 (*Hilfsverbum*) としての分類ではなく、対格目的語の補語として過去分詞が現われる例として挙げられている。しかし、意味的観点から言うと、そこに分類された例 (例 (56) : IV.15.55) もまた主格主語で表わされる人 (及びことがら) の能動的行為が表わされていると解釈して良いと思われる。とは言えまたこの 3 例は詩行末で用いられているため、迂言形式に屈折を見せる理由はたんに脚韻を踏ませるための方策であったと見なすことも可能である。第 1 章で見た行間逐語訳作品 *Tatian* では押韻技法は存在しないため、過去分詞が屈折しているばあい、ラテン語原典との対応を度外視しても、原初的な *SVOC* 構文であった可能性のほうが高い。

¹⁴⁹ Grønvik (1986) 37. 詩編のみを扱った Oubouzar (1974: 10) の調査では 79 例となっている。

¹⁵⁰ Kuroda (1999) 130. Kuroda (1997) 303f. Kotin (1997) 492ff. Eroms (1997: 21ff.) の術語では *durativ vs transformativ* となる。ただし Kotin は *werden* が後期古高ドイツ語期には状態相へと移行し、そこに *sein* とのアスペクト対立が崩れていくことを見ている (脱アスペクト化)。

味論が加わって生じるとされる。「古高ドイツ語ではまさに受動においてもっとも厳格にペア性が認められるのである。というのはすでに助動詞 *werdan* と *wesan* (訳者注: „*werden*“と„*sein*“) がパートナーと理解できるからである」¹⁵¹。他方で *haben* による迂言形式は、結果相 (*resultativ*) を表わす形式であると見なされる¹⁵²。それは *haben* が脱語彙化した後も状態性を残し、完了相の過去分詞によって表わされる行為の結果的状态と相俟って生み出されるという考えかたにもとづくものであろう。体系としてはしかし「先行する出来事によって到達するみずからの結果、つまり結果的状态」を表わす迂言形式にはペアを結ぶ相手がおらず、他の二つの対立関係のなかに組み入れることは容易でない。これらの意味関係を図式化するとつぎのようになる。

[図 2-5] 古高ドイツ語の *werden* / *sein* / *haben* 形式のアスペクト関係

【 <i>werden</i> 形式】	vs	【 <i>sein</i> 形式】	
„ <i>mutativ</i> “		„ <i>statal</i> “	
			? 【 <i>haben</i> 形式】
			„ <i>resultativ</i> “

(Kuroda (1997/1999), Kotin (1997)にもとづき作成)

古高ドイツ語中期以降に本格的な広がりを見せる *haben*+過去分詞の体系的な位置づけは容易ではないが、形式としては結果相をになうものとみなされている。ここで行なわれている、再分析が生じた後においても結果相表示機能がまだ残っているとの想定は、容認できるものであろうか。たとえば Kuroda ではさきに挙げた例 (50) (52) のほかつぎの例 (55) が挙げられる。

(55) Nu bigin uns redinon, wemo thih wolles ebonon, / wenan thih zelles ana wan, nu gene al **eigun** sus **gidan**? (Otf.III.18.36) お前が自分を誰と比較しようとしているのか、本当に自分のことを誰だと思っているのか、われわれに言いなさい。いまや誰もが皆そのようになった(=死んでしまった)というのに。

例 (50) やこの例 (55) では、結果性を読み取ることができる。この例はユダ

¹⁵¹ Im Althochdeutschen gilt gerade beim Passiv am striktesten Paarigkeit, denn bereits die Auxiliare *werdan* und *wesan* lassen sich als Partner auffassen (Eroms (1997) 24). Kuroda (1997: 295)も参照。

¹⁵² Kotin (1997) 491/495f., Kuroda (1997) 293f. つぎの引用は Kuroda (ibid) による: das durch ein vorhergegangenes Ereignis erreichte Ergebnis an sich, also den resultativen Zustand.

ヤ人たちがキリストを罵る場面であるが、アブラハムも預言者たちも死んでしまつて今 (nu „nun“) はもういないという現在の結果的状态が強調されているところであろう。しかしさきに挙げた例 (52) (wir **eigun nu gisprochan**) では結果性が明確に現われていると言えるであろうか。確かに副詞 **nu** が用いられているが、これは動詞行為じたいに焦点が当てられている可能性もあり(「今しがた」)、行為終了後の状況を示すと断言できるとは言えない。「話した」という表現でテーマ化されるのは、行為じたいなのか行為終了後であるのかは不明確である。

(56) In tho druhtin zelita, want er se selbo welita, / manota sie thes nahtes managfaltas rehtes. / Er **habet** in thar **gizaltan** drost managfaltan / fon sin selbes guati, so sliumo so er irstuanti. (Otf.IV.15.55) 彼ら (=使徒) にそのとき主はお教えになられた。なぜならそのお方みずからが彼らをお選びになったから。彼らにその夜、多くの義務を行なうよう促しになられた。そのお方はそこで彼らに、その方がすぐに復活なさるときのためにご自身のやさしい御心から生じるさまざまな慰めのことばを語られたのである。

(57) ni bithurfun wir in wara nu urkundono mera. / Waz er selbo hiar nu quit, thaz **eigut ir gihorit**; (Otf.IV.19.67) われわれはもうこれ以上の証人たちをまことに全く必要としない。今ここでこのひと自身が何を述べているのか、あなたがたは聞いたのですから。

Otfrid には、うへの例 (56) の (gi-)zellen 「語って聞かせる」のような、比較的明瞭に認められる継続相動詞が 4 種類見られる¹⁵³。このばあい動詞行為には、結果的状态ではなく、過去における継続性が表わされている可能性がある。またつぎの例 (57) の (gi-)hören の例のように、単に「聞いた」という一回的出来事を言っているのか、「聞いていた」という継続を表わしているのか、また「聞いたから知っている」という結果的意味をもたせようとしているのかそのアスペクト性が明確ではない例が見られる¹⁵⁴。このほか一義的に継続相動詞とは認められない例 (53) の **zeigôn** „zeigen“ や例 (54) の **gieinôn** „sich einigen“ とい

¹⁵³ Kelle (1963) 241. (gi-)zellen の 4 番目の意味は **anführen, aufzählen, berichten** などとなっている。Kuroda は、継続相動詞として、zellen (1 例), horen (1 例) のほかに **meinen** (4 例), **sprehhan** (1 例) を挙げている (Kuroda (1999) 29)。

¹⁵⁴ この箇所はマタイ書 (Mat.26.65) を忠実に再現しているところであるため、他の著作や古典語との比較が可能である。たとえば Tatian では **gihören** の過去形 **gihortut** となっている (Tat.191.2)。ラテン語では現在完了 (audistis)、ギリシア語ではアオリスト (ἠκούσατε) となっている。したがって「聞いた」という一回的出来事を表わす意味が想定されていた可能性が高いと思われる。なお、例 (53)、(54) は新約聖書に直接対応する箇所ではない。

た例も同様である。

これらの例からは、**haben** に所有の意味が消失したことは自明であるが、他方で結果状態を積極的に表示する機能をもっていたとは決して言えないことが認められよう。結果状態性は、明確な完了相動詞 (*firlâzan*, *findan* など) が過去分詞形をとるときに限って現われるのであり、継続相動詞のばあいはもとよりアクツィオンスアールトが不明確な動詞のばあいの意味機能は明確ではない。過去分詞の機能の一部すなわちアスペクト性が、再分析を経た後も迂言形式の一機能として残存するという見解はさほど自明とも言えないのではなかろうか。古高ドイツ語後期の Notker では、**haben** を用いた迂言形式に *danchôn* „lohnen“, *weinôn* „weinen“, *sundôn* „sünden“, *haltan* „halten“などの継続相動詞が多数用いられるようになる¹⁵⁵。さらに、結果相とは初期の例では過去分詞と対格目的語との関係で現われていた意味を指していたのであり、再分析のあと結ばれるようになる過去分詞と主格主語との能動的関係のなかにそれが残存するという理論的根拠もまたどこにも見出せない。この形式が被った改新によって **haben** の所有性が失われたあと、本来的ではないアクツィオンスアールトをもった動詞を徐々に受け入れていくことによって、**haben** の状態性が失われていっただけではなく、過去分詞のアスペクト性もしだいに曖昧化していったと考えるのが妥当ではなかろうか¹⁵⁶。

もう一つのアプローチは、動詞複合形式の通時的変遷を包括的に、また歴史資料にもとづいて実証的に記述した Oubouzar の見解である。彼女は、時間性とアスペクト性を織り交ぜたカテゴリーの体系化を目指している。形態的には迂言形式どうしのなかにではなく、まずは現在形と過去形という一語で成り立つ単純時制とのあいだに対立を見ている。たとえば、現在形と現在完了形 (*tut : hat getan*)、過去形と過去完了形 (*tat : hatte getan*) には階層の対立 (Phasenopposition) が見られ、両者には「完結 対 非完結」という意味があてがわれるというもの

¹⁵⁵ Grønvik (1986) 51. 他に嶋崎 (2004: 108)。しかし Kuroda は、継続相動詞が用いられていても結果相が現われているとする。過去分詞に見られる *gi-*を語形形成のための手段としてではなく、完了相化のためにあらかじめ付されたものとみなしているからである。つまり *gi-*のついた過去分詞はすべて完了相化された動詞であると想定しており、**haben**+過去分詞に結果相を求める一つの根拠としているのである。ただしこの *gi-*についての問題は明らかになっていない (Kuroda (1997) 298f.)。たとえば例 (53) に現われる過去分詞 *gizeigot* は、Kelle の辞書では弱変化動詞 *zeigon* の用例として挙げられているのに対し、Piper のばあ *gizeigon* のもとで扱われている (Kelle (1963) 722f., Piper (1887) 630f.)。

¹⁵⁶ Paul (1958: 137) は、過去分詞が屈折を行なわない例が一般化されるにつれて次第にがんなりの構造が曖昧になっていき、これに伴ない、*sein* 形式と同様に、結果相表示がしだいに過去の出来事を提示するようになると述べている。Dal (1966: 121/123) もまた、再分析のさいにこれらの形式の過去分詞が結果相ではなく過去の動詞行為じたいを表わすようになったことを指摘している。

である¹⁵⁷。また有標形であるすべての完了形には後時段階 (Nachphase) という概念が付随する:「ことなる動詞形の用法は、その時間線がどの立場から観察されるかに依拠する。…その立場は…*hat getan – hatte getan – wird getan haben* という形態のばあい後時段階にある」¹⁵⁸。

ただしこの対立は中高ドイツ語期におきた転換の結果であって、古高ドイツ語期には「継続相 対 結果相」(*kursiv vs resultativ*) が結ばれていたとする¹⁵⁹。再分析を被った後も含めて *haben* + 過去分詞が現在的な「状態」(*präsentischer Zustand*) を表わすというのは、うえて指摘したように、そのまま容認することはできない。その都度使用される動詞が過去分詞形をとることによって、完結しているか、結果的意味をもっているか、あるいは継続的であるかさまざまに示されるが、共通して言えることは動詞行為が後時的観点から眺められるという点であると考えられる。中高ドイツ語期に想定される「後時段階」とあわせて考察に値する指摘と思われるのは、第2章でも言及した「この動詞形で重要なのは現在時制である」¹⁶⁰という記述である。古高ドイツ語期の *haben* による形式の意味は「全般的に有効なあるいは発話行為時間に有効な一つの事態を表わす」¹⁶¹とされる。言い換えれば、なされたあるいはなされる動詞行為が普遍的にあるいは発話時においても通用する、意味をもっているということである。

「事態が発話時に有効である」例として、たとえばうへの例 (57) (*thaz eigut ir gihorit*) で考えてみたい。ここはマタイ 26.65 に相当する箇所であるが、周囲を取り巻く群衆がイエスの言葉を「聞いた」こと (= 事態) は、イエスが神を冒瀆し罪に値するという司祭の判断に有効性をもつと考えられる。発話時において終了している過去の行為ではなく、その事実性が重要なのである。そのまへの例 (55) (*nu gene al eigun sus gidan*) は、ユダヤ人たちがみずからの発言の正当性を過去の事実を引き合いに出して主張しているところである。預言者たちが死んだことはみずからの主張の判断材料としている。なされた動詞行為の時間的位置づけは重要ではない。立脚点あるいは基準時となる発話時に過去の出来事が必要とされるのである。

また事態が「全般的に有効である」とされる例は、古高ドイツ語初期の *Tatian* に1例、また *Otfrid* にも3例見られる。

¹⁵⁷ 同様のアプローチは現代語にも見られる。第1部第1章の表1-1で見た *Verlauf* と *Vollzug* の対立を参照。

¹⁵⁸ Die Verwendung der verschiedenen Verbformen hängt davon ab, von welchem Standort aus diese Zeitlinie betrachtet wird ... findet sich der Standort ... bei den Formen *hat getan – hatte getan – wird getan haben* in der Nachphase. (Oubouzar (1974) 8)

¹⁵⁹ Oubouzar (1974) 78.

¹⁶⁰ Daß es sich bei dieser Verbform um ein Präsens handelt... (Oubouzar (1974) 14.)

¹⁶¹ ... drücken einen allgemeinen oder zur Zeit des Sprechaktes gültigen Tatbestand aus. (Oubouzar *ibid.*)

- (58) Ja farent wankonti in anderen bi noti / thisu kuningrichi joh iro guallich; / Thoh **habet** therer thuruh not, so druhtin selbo gibot, / thaz fiant uns ni gaginit, thiz fasto **binagilit**; / Simbolon **bisperrit**, uns widarwert ni merrit... (Otf.Ad Ludowicum 71f.) まことに別の民族ではその王国やその栄光が必然的に揺らぐことがあるが、しかし主みずからがお命じになった通り、敵がわれわれを襲わないように熱心にそのお方（＝ルートヴィヒ王）はそれ（＝王の国）を堅固に防御し、つねに封鎖するので、どんな敵対者もわれわれを傷つけることはないのです…。
- (59) Ih quidu iu, thaz iogiuuelih thie thar gisihit uuib sie zi geronne, iu **habet** sia **forlegana** in sinemo herzen (Tat.28.1/Mat.5.28) [lat. Ego autem dico vobis: omnis, qui viderit mulierem ad concupiscendum eam, iam **moechatus est** eam in corde suo] 私は汝らに言う、その人を欲しようと女性を見るものは誰でもその女性をすでに心の中で姦淫したことになるのだ。

例（58）では、他の王国の脆さと比較してルートヴィヒの王国がいかに強大かを強調し賛美している場面である。動詞 *binagilen* „verschließen“, *bisperren* „versperren“を用いた迂言形式によって、動詞行為は特定の時間には結びつけられていない。反復を表わす副詞 *simbolon* „stets, immer“が用いられていることから、ルートヴィヒの国がその都度守られるという事実が普遍妥当的に認められると解釈することが可能である。また例（59）では、関係代名詞 *thie*¹⁶²は不定代名詞 *iogiuuelih* „jeder“を先行詞とし、これが *iu* 以下に続く上位文の主語となっているが、完了的行為も繰り返し生じる可能性を想定して述べられている。Otf.の残りの1例¹⁶³ (I.1,76: *eigun ubarwunnan* „haben überwunden“)と同様に、一回的行為が時間的に位置づけられているわけではない。言いかたを変えれば、なされる動詞行為の妥当性がどの発話時間にもつねに有効であることになる。ラテン語原典を見ると、異態動詞 *moechor* „Ehebruch treiben“の現在完了形が用いられているが、その格言的アオリスト (gnomischer Aorist) としての用法は意味的にも対応しているとみなすことができる。なお、このような反復を含む例では、時間性よりもアスペクト性 (完了性) が前面に現われていると考えられる。

彼女が行なった古高ドイツ語での用例調査は *Notker* に限られていたが、その

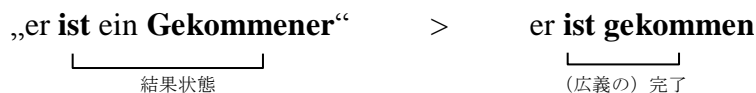
¹⁶² この関係代名詞は *Tatian* にだけしばしば現われる男性・単数・主格を表す傍形である。(Braune/Mitzka (1963) 245)

¹⁶³ 本動詞の用例数で数えたため、例文 (58) のように一つの主語と一つの定動詞であっても2例と考えた (*binagilen, bisperrôn*)。したがってこの例を含めると3例全てとなる。

考察にしたがって諸例を吟味してみると、2 つの特徴が浮かび上がってくる。一つには、過去分詞形をとることで動詞行為には後時的観点（後段階：Nachphase）が与えられる。そしてもう一点は、その観点の時間性が、現在時に有効性をもつというだけでなく、普遍妥当的にも当てはまるという点である。これは普遍妥当性をもった出来事を表わすさいにも用いられる現在時制の時間表示領域と一致する。このように見てくると、このアプローチは、第 1 部第 3 章で考察した後時的観点、およびその移動可能性という、われわれが現代語の Pf. に対してとった態度と軌を一にする考えかたとなっていることがわかる。古高ドイツ語の再分析を被ったあとの **haben** による迂言形式は、表示される動詞行為に後時的観点がともなっており、またその観点が現在時制とおなじ範囲で移動可能であるという点で、現在時制性をもっているというのが筆者の考えである。

さてそれでは、受動ではない **sein** の迂言形式は古高ドイツ語中期以降どのような状況にあったのだろうか。**haben** より早い時期に生じたと見られる構造の変容を図示してみるとつぎのようになる。

[図 2-5] **sein**+過去分詞に生じた再分析



sein+過去分詞に生じた再分析は、**haben** のばあいと大きくことなる。原初的構造では、過去分詞は主格補語として主格主語と能動的関係を結んでいたと考えられる。この関係を結ぶのはコプラ動詞 **sein** である。主格補語に用いられる動詞は変容相動詞であるので、過去分詞形をとることによって結果的意味をもつ（「来ている（ひと）」<「来た」）。その変容は、**haben** のばあいとおなじ 2 つの部位で意味機能上の変化を被ることで生じるのであるが、前段階の構造が根本的に変貌を遂げるわけではない。一つには **sein** の意味変化が挙げられるが、もともと **A = B** の関係を成立させる繫辞の役割をになっていたに過ぎないので、語彙的意味を失うことが大きな構造的変化を引き起こすことにつながるわけではない。つまり **sein** は助動詞化するという機能化を遂げたのであって、述補語という一つの項としてではなく、動詞構造の一部へと組み込まれて機能するようになった。他方の過去分詞は、受動の意味を作りえない変容相の意味をもつ自動詞によって作られるが、アスペクト的に見ると動詞行為の結果性を表わしているという点で何も変わってはいない。名詞形容詞的特徴が失われ、動詞複合体の部分的寄与へと機能的転換することが、過去分詞の意味論に大きな影響

を及ぼすことはなかったと考えることができる。

このように見てくると、sein+過去分詞における再分析は haben のばあいほど大きな構造的転換を被ったという言いかたはできず、改新のさいの負担が少なかつたいわば「軽い」再分析であったと言って良いであろう。Otf rid にはたとえばつぎのような例が見られる。

(60) er wihtes ungidan ni liaz, soso er selbo gehiaz; / er ist fon hellu irwuntan joh uf fon tode irstantan... (Otf.V.4.47) そのお方はみずからがお命じになられた通り、何も成就されないままにはさせなかった。そのお方は黄泉の国から戻ってこられたのです。死から蘇られたのです。

(61) thi u salida ist uns wortan, thaz wir nan eigun funtan: / fon Nazaret then gotes sun, nu ist er queman herasun. (Otf.II.7.44/45) われわれには至福が分け与えられているのです。われわれがそのお方、ナザレから神の子を見出したという至福が。今やそのお方はこちらへやってこられたのです。

例(60)では、天の御使いが、キリストが復活したことをマグダラのマリアたちに伝える場面であるが、キリストが戻ってきた、蘇ったという出来事だけでなく今この世にいることを含意している。同じように、ピリポらがイエスに会ったことをナタナエルに伝える場面である例(61)では、彼らがいま至福に満たされていること、イエスがいまガリラヤに来ていることが述べられている。そしてこの例では、現在指示を行なう副詞 nu によって現在時がテーマ化されていることがいっそう明らかである。

これらの例では、動詞行為の完了に伴う現在の結果的状态が前面に表われていると考えられる。Otf.に現われるこの迂言形式は全部で27例であり、なかには過去分詞が主格主語の性・数に合わせて屈折している例もまた3例残っているが、haben を用いたばあいよりも結果性を帯びていることが明確に分かる例がはるかに多い。それは何よりも用いられる動詞のアクツィオンスアールトによると考えて良いであろう。完了相の動詞は、いま見たように、自動詞のうち変容相動詞(irwintan „umkehren“, irstantan „auferstehen“, werdán)と往来・発着を表わす動詞(queman „kommen“)である¹⁶⁴。そしてほかのゲルマン語にもしばしば現われるこの結びつきは、古高ドイツ語では数百もの例が見いだされる¹⁶⁵。過去分詞の意味機能から考えれば、このように閉じた意味体系の動詞

¹⁶⁴ 現代語の bleiben にあたる biliban が sein と結びつく例が3例現われるが、いずれも„ist verstorben, tot“という意味である。このような用法は、古高ドイツ語のほか古英語にも現われると言われている(Grønvik(1986)42)。

¹⁶⁵ Grønvik(1986)17. Oubouzar(1974:10)によれば、Notkerの詩編に限った用例調査だけで

からしか作られない sein による迂言形式の意味論的価値は、少なくとも初期の段階では Kuroda らが sein 受動とともに想定した状態相 (statal) あるいはその上位概念である結果相 (Resultativ) であったと判断せざるを得ない¹⁶⁶。この形式は、「動詞形によって、先行する事象の結果である主語の状態が表わされる」¹⁶⁷アスペクト機能を発揮していたと考えられる。

それでは haben 形式の分析のさいに見た、現在時制性についてはどうであろうか。結果状態が認められるのは現在時であることから、動詞行為に視線を与える後時的観点もまた現在時にあると考えられる。しかし Otfrid に 1 例、そして数十年さかのぼる Tatian にも 1 例、未来完了的な用法が出現する。

(62) Thanne woroltkuninga sterbent bi iro thegena, / in wige iogilicho dowent theganlich: / so sint se alle girrit, thes wiges gimerrit, / ther in thera noti thar imo folgeti... Sie **sint** in alathrati fluhtig thera dati, / **irqueman** thero werko fluhtigero githanko. (Otf.III.26.45f.) 世俗の王たちが家来のために死に、戦いのさなか同じく立派に死んでしまうとしたり、危険ななかで王にしたがった家来たちは皆、動揺させられ、戦いで何もできなくなるでしょう…。彼らはすぐにその出来事を前にして逃げてしまおうし、逃亡の考えをもってその出来事にうろたえてしまおうでしょう。

(63) Thio tumbun then spahon quadun: gebet uns fon iuuuere mo ole, bithiu uuanta unseru lihtfaz **sint erlosganu**. (Tat.148.5/Mat.25.8) [Fatue autem sapientibus dixerunt: date nobis de oleo vestro, quia lampades nostre **extinguntur**.] その愚かな娘たちは賢明な娘たちに次のように言った。私たちに汝らの油の少しをください、なぜなら私たちの明かりは消えてしまおうからです。

例 (62) では、接続詞 thanne „wenn“による条件文の内容が相関語 so で受けられて帰結文が続いているが、そのなかに迂言形式が見られる。自動詞 irqueman „bestürzt sein“の過去分詞と sint との結びつきにおいて、動詞行為は一定の条件下で未来に生じることが読み取れる。例 (63) では、sint erlosganu „sind erlöschen“という形式を用いることで「私たちの明かり」(unseru lihtfaz „unsere

も 73 例現われる。

¹⁶⁶ Kuroda (1997/1999)は、durativ/stativ (本文では Kotin (1997)の用語にならって statal とした)の上位概念に Resultativ を設定している。反対に Kotin は、statal の下位概念に durativ-statal, resultativ-statal を見ている。しかし注 156 にも挙げたように、Paul や Dal は古高ドイツ語期に、sein 形式でもまた結果性ではなく動詞行為じたいを表わす例が出現すると指摘している。

¹⁶⁷ Durch die Verbform wird ein Zustand des Subjekts ausgedrückt, der das Ergebnis eines vorausgegangenen Vorgangs ist. (Oubouzar (1974) 12f.)

Lampen“)は現状のままであればのちに消えてしまうと言っている。先行する命令文とのつながりからは「もし油をいただけないと」という否定の条件的内容を帯びていることが読み取れ、帰結文における未来完了的な用例であると言えよう。ちなみにラテン語原典では、ex(s)tinguô „löschen“の受動・現在となっているが、それは中動相的用法であって自動詞 *erlöschen* の現在形のような表現である。

これらの例は、haben+過去分詞で見た普遍妥当性を表わす例とはことなり、未来完了の意味に近い。しかし明示的であれ含意的であれ、基準時となる後時的観点が未来に移動しうるという点に注目すれば、それは現在時制がになう時間指示領域内であることを示し、ここには現在時制性が潜んでいると考えても良いのではないと思われる。現在時制は、現代語と同じく、古高ドイツ語期から未来指示を行なうことがまったくふつうにあったからである。一方、「うろたえる」(*irqueman*)とか「消えてなくなってしまう」(*irlosgan*)という動詞行為は、後時的観点の前で完了していることが示されるだけであり、ここには出来事の時間軸上での積極的指示機能はないと考えられる。古高ドイツ語で *haben* よりも早く統語単位をなしていたと考えられるこの形式は、動詞のアクツィオースアールトの影響で動詞行為の結果的意味がほとんどつねに前面に現われるという点で *haben* のばあいとはことなるが、後時的観点が現在時以降にも移動しうるという点で、これと同じように現在時制性を残していたと考えたい。

以上ここまで両形式に再分析が生じた古高ドイツ語中期ごろの状況を見てきた。アスペクトについて言うと、*sein* では完了性あるいは結果性が保たれる一方、*haben* では使用動詞を広げていくことでアスペクト表示も多様化していったが、時間性については両形式とも現在時制性を残していたと考えられる。そして中高ドイツ語に入ると両形式はさらに拡充化を進めることになる。たとえばつぎの中高ドイツ語の例にあるように完了不定詞形で現われたり、受動の完了形が初めて現われる。

(64) *dâ tet iuwer bruoder die aller grœzisten nôt, / diu immer in den stürmen kunde sîn gescehen.* (Nib.232.1) そのようではあるが、そなたの兄上はこれまで幾多の戦いのなかで生じたであろうなかでもっともひどい苦境を(敵に)もたらしたのである。

(65) *Sus wânden si die süezen / hân gewieget anderstunt: / dô was ir wille in unkunt.* (a.H.555) こうして彼らはその優しい少女を再び黙らせることができたと思った。そのとき彼らは彼女の気持ちを分かっていた。いかなかった。

(66) *nu wasez ouch über des jâres zil, / daz Gahamuret geprîset vil / was worden dâ ze Zazamanc.* (Parz.57.30) ガハムレットがツァツァマンクで大きな賞賛を得

てから今やもう一年以上も経っていた。

例(64)では、現代語とは用法がことなるが、**können** (の接続法過去形)に相当する動詞 **kunde** とともに **sein** による迂言形式が用いられている。例(65)では、**wænen**「思う」(の過去形)の目的語としての不定詞 **hân geswieget** を伴った例である。これらのいわゆる完了不定詞は、中高ドイツ語期に入って頻繁に見られるようになる形態である¹⁶⁸。このほか、**werden** を用いた受動態が現在完了形をとるはじめての例が **Parzival** に現われる。例(66)は、現代語流に言えば **wird+geprüfet**「賞賛される」という **werden** 受動が、**sein** による現在完了時制で現われている最古の例であるということになる¹⁶⁹。中高ドイツ語では、**haben, sein** どちらも過去分詞と結びついて一定の統語単位を作っていたことが形態面からはっきり読み取れる。

中高ドイツ語期では使用動詞がますます拡大していくが、他方でいわゆる **sein** 支配か **haben** 支配かという点で境界線が曖昧になる動詞があっただけでなく、また部分的とは言え一つの動詞でも意味の違いにより截然と区別がなされるばあいもあった。たとえば現代語の状態を表わす動詞 **liegen, sitzen, stehen** は、中高ドイツ語では „zum Liegen kommen, sich legen“, „sich setzen“, „zum Stehen kommen, treten“ という完了相的意味をもつことがあった。たとえば、例(67)では「腰を下ろす」という自動詞の完了相的意味が現われているために助動詞に **sein** が採択される一方、例(68)では「座っている」という状態性しか表わされていないために **haben** となっていると解釈できる。助動詞の選択はアスペクトの違いが基準になっていると考えられる¹⁷⁰。

(67) und dô er was gesezzen, / sî sprach „welt ir iht ezzen?“ (Iw.1217) そして彼が

¹⁶⁸ Grønvik(1986: 47)によれば、後期古高ドイツ語の Notker にすでに完了不定詞を用いる例が見られた： **uuanda er mahti iz fermitten haben** „denn er hätte es vermeiden können“(Not. I.328.8)。Dal (1966: 123)はこの語形の出現がこの形式が流布していたことを示すものであると指摘している。

¹⁶⁹ ただし Oubouzar(1978: 5)によれば、このような受動+完了の形式は中高ドイツ語では一般的ではなく、16世紀初頭のルターのドイツ語でさえまだ稀にしか用いられないとされる。

¹⁷⁰ ただし過去分詞形の **gesezzen** や **gelegen** はほとんど分詞形容詞として解釈されていた可能性もある。そのばあい **sein** との結びつきは、完了相を表わす完了形ではなく、状態を表わす述語的用法であることになる： **Ez was ein küneginne gesezzen über sê** (Nib.326.1)「海の向こうに一人の女王が君臨していた」、**ouch was gelegen dâ bî der zuhtlôse Keif** (Iw.89)「そしてまたその傍らでは礼儀をわきまえないケイイが横になっていた」(Wilmanns (1906) 155)。この語法は現代語の **angesessen**「定住している」、**eingegessen**「(何代も前から)住み着いている」、**gelegen**「～にある」などに残っている。なおこの3つの動詞が南ドイツでは現在も助動詞に **sein** をとるのは、この地域で完了相的意味が比較的強くのちにまで残ったからと考えられている (Dal (1966) 124f.)。

腰を下ろしたとき、彼女は言った「何かお召し上がりになられますか」。

- (68) der krâmer sprach „ich **hân** für wâr / hie **gesezen** manec jâr, / daz nie man getorste schouwen / (niht wan werde frouwen) / waz in mîme krâme ligt.“ (Parz.563.20) その商人はつぎのように言った「まことに私はここで長い間座っているが、私の店に置いてあるものを、(高貴なご婦人方以外は)誰も見ようとはしなかった」。

しかしつぎの *varn* („fahren“)の例に見られるように、*sein* が期待される箇所であっても *haben* が用いられることがあった。例 (70) は、プリュンヒルトの城に到着したジーフリトラ勇壮な異人たちについて女王が問いただしている場面である。彼らすなわち見知らぬ勇士たちがすでに城内でもてなしを受けている状況から判断すれば、動詞行為(*her*) *varn* は、例 (69) で(*hin*) *varn* が「去ってしまってここにはもういない」となるのとおなじように、「ここへやってきている」と結果的意味をもっていることが分かる。ここでは、動詞のアクツィオーンズアールトあるいはアスペクト性の点ではどちらもおなじ完了相であるのに、ことなる助動詞を用いているのである。このように *gân* („gehen“), *rîten* („reiten“), *volgen* („folgen“)など動きを表わす動詞ではとくに助動詞の選択には揺れがあった¹⁷¹。

- (69) heten wir einen houbetman, / wir solden vînde wênic sparn, / sît Vridebrant **ist hin gevarn**. (Parz.25.2) もしわれわれに指揮者さえいたなら、われわれは敵どもへの攻撃を差し控えることはしなかったであろう。なぜならフリデブランドが去ってしまったのであるから。

- (70) Ir sult mich lâzen hoeren ... wer die unkunden recken mugen sîn, / die in mîner bürge sô hêrlîche stân, / unt durch wes liebe die helde her **gevarn hân**. (Nib.410.4) 私の城でかくも立派ないでたちをしているあの見知らぬ勇士たちが誰なのか、また誰に会うためにここへやって来たのかを私に教えてもらいたい。

しかしまた、つぎの *troumen* („träumen“)の例に見られるように、現代語の感覚では意味的に *sein* がまったく用いられる余地のないばあいでも、それが受動で

¹⁷¹ ほかに Nib.103.4 と Nib.2092.4 など。ただし Dal (1966: 125f.)や Wilmanns (1906: 148f.)が指摘するように、動きを表わす動詞 (Verba der Bewegung) は2つのアクツィオーンズアールトをもっており、基本的には完了相のばあい *sein*、未完了相のばあい *haben* という選択上の基準となっていたと現代語風に考えることもできるだろう。つぎの例を参照: wir **haben** stundenlang **getanzt**; sie **sind** aus dem Haus **getanzt**.

はなく完了の助動詞として現われることもあった。

(71) **mir ist getroumet hînte von angestlîcher nôt, / wie allez daz gefügele in disem lande wære tât.** (Nib.1509.3) 私は昨晚、この国のすべての鳥が死んでしまったという危険で恐ろしい夢を見たのです。

(72) **mir hât getroumet michel tugent: / ich hete geburt unde jugent,** (Iw.3517) 私は素晴らしい夢を見たのです：私は高貴な生まれでまだ若かったのです…。

このように、一つの動詞であってもアクツィオンスアールトがことなることで **sein, haben** 選択の機能的分担を見せることがあった一方で、動詞の意味体系に依存しない、恣意的な選択に見えるばあいさえあった。これらのことは、両形式が同一のカテゴリーに属するとみなされていたというイメージを想起させてくれる。言語使用者の立場に立って考えると、中高ドイツ語におけるこの2つの迂言形式は、別個のアスペクト形式というよりもはや一つの完了時制のなかで相対峙する存在と意識されていたと考えることができるであろう¹⁷²。この見解にもとづいて、中高ドイツ語における意味分析では、基本的に **haben** 形式と **sein** 形式を完了迂言形式としてまとめて扱うこととする。

形式の拡充という点で見ると、このあとにつづく初期新高ドイツ語期に入って、継続相しか表わさない **haben** や話法の助動詞を用いた文の完了形が出現し、一般化していくことで最後の大きな飛躍を遂げる。こうしてほとんどあらゆる動詞を用いて完了形の構成が可能になる 16 世紀初めをもって完全に文法化された形式とみなされることになる¹⁷³。

第4章 中高ドイツ語における現在完了の意味用法

それでは統語単位として一定の自律性をもつに至った中高ドイツ語で、Pf.の意味用法はどのような様相を呈していたのだろうか。ここではまずは Paul (2007) の中高ドイツ語の文法書の記述¹⁷⁴からその概観をつかんでおきたい。また豊富

¹⁷² Dal は、古高ドイツ語期にすでに、**haben, sein** 両形式が「意味的には同一であるが形式的にはことなるタイプの複合動詞形」(zwei bedeutungsidentische aber äußerlich verschiedene Typen von zusammengesetzten Verbalformen) であったとみなしている (Dal (1966) 123)。

¹⁷³ Grønvik (1986) 46, Oubouzar (1978) 78f. なお受動の完了の出現によって Pf. の文法化を 13 世紀に認める見解 (Besch 2009: 153) もあるが、中高ドイツ語期にはまだ Prät. の使用が優位を占めている状況に鑑みれば、Pf. の形態パラダイグマの拡張を部分的にしかとらえていないその判断は不十分であると思われる。

¹⁷⁴ ここでは最新版を用いるが、現在完了の記述内容については 1969 年に Schröbler が

な例証がなされている嶋崎（2004）の研究をおもに考慮に入れつつ、これまで見てきた「時間性」（現在時制性）と「アスペクト性」に焦点を当てて考察を進める。Paul によれば中高ドイツ語の Pf. の意味はつぎのように分類される¹⁷⁵。

1. 完了的意味（die perfektive Bedeutung）
2. 未来完了という意味での未来表現（Zukunfts aussage im Sinne eines Futur II）
3. 持続する時間（„durchstehende Zeit“）

このうち 1 の用法があくまでも原則（das Reguläre）であって、2、3 は出現の可能性として説明されるにすぎない。現われる頻度がより少ない 3 に至っては注釈で補足として挙げられているにとどまる。したがって分類という表現はふさわしくないかもしれない。それぞれにはたとえばつぎの例が挙げられている。

(73) ‚wie stêtz iu umben grâl? / **habt ir geprüevet** noch sîn art?‘ / ... er sprach: ‚dâ **hân** ich freude vil **verlor**n‘ (Parz.440.30 - 441. 4) 「聖杯はどうなっているでしょうか。聖杯のことが何かお分かりになりましたか。」…彼（パルツィヴァル）はつぎのように答えた。「いいえ私はまったく喜びを失ってしまいました」。

(74) er muoz iu widere / iuwer süne gesunde gebn, / ode er nimt ouch mir daz lebn: / und sweder der sol geschehn, / daz **hât** man schiere **gesehn** (Iw.4988) その男がそなたの子息らを生きて返すことになるかあるいはまた私の命を奪うかなのです。これらのうちのどちらが起きるのかはすぐに分かることになる。

(75) ich **hân erkant** von kinde die edelen küneginne hêr (Nib.1147.4) 私はあの非常に高貴な王妃のことを幼少期のころから知っている。

例 (73) では、動詞 *prüeven* は BMZ の辞書で 2 番目の分類に当てはまる意味「見る、じっくり耳を傾ける、知るようになる」で用いられていると考えられる¹⁷⁶。森のなかで偶然に出会ったジグーネがいとこのパルツィヴァルに辛辣な皮肉を言う場面であるが、彼女は彼が聖杯を獲得できていないことを知ったうえで、彼が聖杯の本質がいまもうわかっているのかどうかを問うている。ここでは動詞行為が問題なのではなく、これが完結したあとの結果的現在がテーマとなっ

Syntax の部を書き換えて以来基本的に変わっていない。

¹⁷⁵ Paul (2007) 292f.

¹⁷⁶ 辞書表記 *sehe, höre genau zu; lerne kennen* の和訳である (BMZ II/1 538 a51f.)。ただしこの箇所が挙げられているわけではない。なお BMZ とは *Mittelhochdeutsches Wörterbuch* (Benecke, G.F. / Müller, W. / Zarncke, F.) の略称である。

ているのである。また2つ目に用いられた動詞 *verliesen* は現代語の *verlieren* とほとんど同じ意味「失う」で用いられているため、完結したあとの結果状態を含意していることは明らかである。例(74)は、城主の息子たちを助けるために巨人と戦おうとしているイーヴァインが城主に向かって述べる場面である。副詞 *schiere* 「間もなく」が共起している点からも、*sehen* 「見える、見る」という動詞行為が完結した結果「分かる」ことになる事態を未来時に想定した内容となっていることは疑う余地がない。また例(75)は、エツェル王の後添い選びにクリエムヒルトの名が挙がり、辺境伯リュエデゲールが彼女のことを幼いころから知っているとして述べるくだりである。中高ドイツ語の *erkennen* は現代語とはことなり、単なる *kennen* と解されることもある。この例には、*„ich kenne seit ihrer Kindheit“* という訳が添えられているが、*Brackert* や *Grosse* による現代語訳でもおなじく現在形となっている¹⁷⁷。過去もそうであったしいまもなお同様であるということを表わすさいに用いられると解釈できる。

さてこの記述はアスペクトの観点で見るとどう理解されるであろうか。*Paul* は *perfektisch* をつぎのような説明のなかで用いている。*Pf.*は「それがある出来事の過去性を現在に関係づける(たとえば結果的意味で)あるいは過去の出来事が主観的に観察されることで完了的意味(*perfektische Bedeutung*)に近づく」¹⁷⁸。しかしこの記述は、*Pf.*がになう意味機能を指摘しているというのではなく、生じる可能性が高い意味について述べるにとどまる。この説明はもともと *Prät.*の項に記された *Prät.*の意味記述のうちの一つであって、これとまったく同じ内容を *Pf.*の意味用法として援用している。つまり *Pf.*の項には *Prät.*の説明を参照する指示がなされているのみである。また、過去の出来事が現在に結びつけられるという機能が、どのような条件のもとで、どのように生み出されるのかについては何も記されていないし、「主観的に観察される」(*subjektiv betrachtet wird*)という点についても明らかではない。つまり拠り所となる判断基準がまったく与えられないので、われわれが原文にあたって意味用法をつきとめるには、コンテキストを読み込み注意深くその都度の意味内容を解釈しなければならない。*Paul* が挙げるもう一例を見ておく。

(76) *ir wæret andeswâ baz. / iuch hât rehte gotes haz / dâ her gesendet beide / z' allem iwerme leide. / ir sît uns unwillekommen. (Iw.6105)* そなたらは別のところに

¹⁷⁷ *Brackert* (1994) 7, *Grosse* (1997) 349. なおどちらも *Paul* の文法書とおなじ *Bartsch* による B 写本を用いているはずであるが、目的語が *küeginne* ではなく *künege* „Könige“となっている。

¹⁷⁸ ...kann sich der perfektischen Bedeutung nähern, indem es die Vergangenheit eines Geschehens auf die Gegenwart bezieht (etwa im resultativen Sinne), oder indem das vergangene Geschehen subjektiv betrachtet wird. (*Paul* (2007) 290).

行かれた方がよかったであろう。まさに神の怒りがそなたら二人を苦しませるためにここに遣わしたのだ。そなたらはわれわれには歓迎されていないのだ。

これはイーヴァインと使者が宿を求めた城下町で彼らが民衆から浴びせられた悪態である。ここには対話がなされている場に二人が居合わせているために、遣わした (*hât gesendet*) という動詞行為には結果的な意味が含意されていると解釈することができる。ところでもしこの場面に居合わせていない人物すなわち3人称が目的語となるばあい、あるいは発話の場をもとりこむ *dâ her* (「ここへと」) がないばあい、完了的意味が成立していると言えるであろうか。人称や場所の規定語がことなると、単なる過去の一回的出来事だけが意図されていることも大いにありうると思われる。つまりここに感じられるアスペクト性すなわち完了性あるいは結果性は、動詞が過去の形態をとることによって必然的に現われる意味であるとは言えない。この例(76)のばあい、例(73) (*habt geprüevet*) とはことなり、完了的行為によって状態の変化を被るのは文中の主格主語ではなく、発話状況における誰かあるいは何らかの事態である。使用動詞 *prüeven* („sehen, genau zuhören“) ではどのようなコンテキストであっても主格主語に「分かっている」という結果的意味が見込まれる。また *verliesen* が過去の形態をとれば、主格主語が何かを失うことで何らかの特別な事態に陥ることは、どんなシーンからも看取できる。例(73)と例(76)とでは、完了的・結果的意味が現われるメカニズムはことなっていると考えられる。

このように、**Paul** の指摘する完了的意味には、動詞のアクツィオーンスアールトが重要な役割を果たすばあいとそうでないばあいとその現われかたに違いがあると考えることができる。明らかな完了相動詞でないとき、用法1の意味が現われているかどうか判断することはそう明確ではない。「完了後の結果状態の存続」を表わすとする嶋崎(2004)¹⁷⁹に挙げられた例でも同様なことが言えるように思われる。

(77) *Sô wol mich dirre mære ... nu hân ich wol erfunden diu degenlîchen werc, / daz ir von wâren schulden muget landes herre wesen. (Nib.500.2)* これはなんとうれしいことか…いま私は勇士にふさわしい業をしかと見届けました。あなたはまことにこの国の領主であるのにふさわしい。

(78) *nû habet ir mir wîc vür geleit, / dar zuo bin ich noch unbereit (Trist.6405)* いまそなたらは私がまだ準備ができていない戦いを私に申し出た。

¹⁷⁹ 嶋崎(2004) 141.

例 (77) で用いられている *ervinden* は「知覚する」という意味である。ここではジーフリトが獐猛なアルブリーヒを打ちのめす一部始終を目の当たりにした小人の発言であり、「分かっている」という結果状態が含意されていることが感じられる。先の *prüeven* と同様にとりわけ知覚・認識動詞が過去の形態をとるばあいには結果的意味が含意されるのであろう。一方、*legen* が *vür* を伴ない「申し述べる」というほどの意味となっている例 (78) はどうであろうか。貴族の子弟をアイルランドへ送るという貢ぎの義務を余儀なく負わされていたコーンウォールの宮中の人々の屈辱を晴らそうと戦いを申し出たトリスタンに対して大公モーロルトが返答するところであるが、ここでは相手の発言内容を事実として述べているに過ぎないとも言えるのではないだろうか。この対話の場面では、動詞行為が直前になされたというだけであって、決して結果的意味が現われているとは断言できないように思われる。少なくとも(*vür*)*legen* が完了相動詞であるとは言えないため、アクツィオーンスアールトの影響は見られない。どちらの例にも用いられている *nu* „nun, gerade“は、行為を眺める観点が現在時にあることを含意している可能性があるが、結果的意味を示す直接的な指標になっていないと考えられる(「たったいま見届けた」「ついでしたがた申し出た」)。出来事が直前になされたことを表明するこの箇所には、アクツィオーンスアールトは関与していないし、結果状態もあまり感じられないように思われる。

一方で用法 2 はアスペクトの点でより明瞭である。それは未来完了 (*Futur II*) の意味であると明記されている。例示されている残りの 2 例には *vinden*「見出す」、*entswellen*「気持ちが収まる (<腫れが引く)>」が用いられ、アクツィオーンスアールトのうえで完了的意味が明瞭である。同様の例をつぎに挙げておく。例 (79) (80) では順に *zergân*, *winnen* が完了相動詞、例 (81) では文脈から *rîten* が完了相的用法となっていることがわかる。

(79) *sol allez bî den vînden diu liebe tochter mîn / in fremeden landen sitzen alsô dort
gevangen, / ich armiu küniginne, sô ist mir mîn freude gar zergangen.*

(Kud.941,4) 私のいとしい娘が敵どもの見知らぬ国で引き続きずっと囚われの身のままでいることになるのであれば、この哀れな王妃、すなわち私の喜びはすっかり消えうせてしまうことになりましょう。

(80) *diu nie gegruoste recken, diu sol in grüezen pflegen, / dâ mit wir haben
gewunnen den vil zierlichen degen. (Nib.289.4)* 戦士に決して挨拶をしたことがなかったそのお方が彼に挨拶するようにさせましょう。そのことで私たちは非常に立派な勇士を自分たちのものとできるのです。

(81) *nu wol ûf [...], alle mîne man, / wan ich den grimmen gesten der êre niht engan, /*

daz si ze mîner bürge **geriten sint** sô nâhen... (Kud.1375.3) さあ身を起こすの
だ [...] わが家来ども皆の衆、あの怒り狂っている客人どもに私の城のき
わめて近くにまで馬を走らせてしまうなどという名誉を許すわけにはいか
ないのだから…。

この用法での一般的な例としては、嶋崎が指摘するように、条件文や条件を受
けた帰結文のなかに現われるパターンである¹⁸⁰。例 (79) では、sol で始まる条
件文で未来指示がなされ、Pf.を用いた帰結文でこれを基準とした完了的意味が
表わされている。しかし例 (80) のように、並列接続において何らかの未来指
示を含意した文が先行することもある。また、例 (81) のように、まったく未
来時を表わす言語的指標がないケースでは、われわれは文脈から未来性を判断
せざるを得ない。いずれにしてもこれらの用例は、基準時だけでなく動詞行為
じたいも未来に位置づけられるというものである。ここで必要とされる未来の
基準時、すなわち後時的観点はコンテキスト要素を介して理解されるものであ
る。したがって、未来完了的意味とは、過去分詞の意味論を中心とした動詞表
現のアスペクト性と、ベースとなる文単位の時間的意味から複合的に構成され
るものと考えられる。このばあい、動詞行為が過去領域に位置するさいに過去
性と完了性の境界線が見えにくくなるパターンとはことなり、完了性が前面に
現われているように思われる。すなわち、古高ドイツ語のばあいと同様に、後
時的観点が現在時にはないときは完了アスペクトが優位に立って機能すると思
われる。筆者の調査では、この未来完了的用法は *Nibelungen* で 14 例、*Kudrun*
で 2 例、*der arme Heinrich* で 2 例現われていることが確認された¹⁸¹。

アスペクト的に最も明確であるのは用法 3 であろう。しかしそれは古典語に
見られた未完了過去のような古来のアスペクトではなく、過去から始まって現
在も続いている継続的行為を表わす用法である。これは古高ドイツ語にも見ら
れなかったし、また現代語にも存在しない用法であると言って良いであろう。
たとえばさきに挙げた例 (68) における動詞 *sizzen* („sitzen“) の Pf. は行為開始後
の状態が続いているというだけであって、ここには行為の完了性や結果性はま

¹⁸⁰ 嶋崎 (2004) 153.

¹⁸¹ 出現例はつぎのとおり : a.H.762, 1103; Kud.941.4, 1375.3; Nib. 289.4, 547.2, 612.4, 704.1, 1151.4, 1205.4, 1450.2, 1452.2, 1458.4, 1707.3, 1753.4, 1917.2, 2154.2, 2372.1. 金子 (2009: 114) を参照。このほか古高ドイツ語で普遍妥当的とみなした例 (例 (58) (59)) は、今回の調査対象に限って言えば、中高ドイツ語では *der arme Heinrich* に 1 例見られるのみであった : *swen nû der blic verleitet, / der ist zer helle geborn / und enhât niht verlor / wan beidiu sêle unde lîp.* (a.H.734)「さてその輝きに誘惑されるひとは誰でも、地獄へと定められているのであり、魂と身体を失ってしまう (<魂と身体以外には何も失わない) のです。」この *swen* 文は条件的内容を含んでいるので、現在完了形の意味は未来完了的であるとも言える。

まったく見られない。嶋崎や Kuroda の挙げる例文には、(be-)halten, bestân, dienen, wesen など継続相あるいは状態相動詞が用いられるというだけでなく、とくにアクティオーンズアールトにかんして中立的な動詞 *sehen, pflegen, tragen, zalen* などが継続的あるいは反復的行為と解釈されうるばあいも含まれている¹⁸²。

(82) *die ich von herzen minne und lange hân getân, / diu ist mir noch vil vremde.*
(Nib.136.3) 私が心から愛しており、もう長い間想いつづけているそのお方は私には今もなおまったく見知らぬ人なのだ。

このクリエムヒルトへの想いを述べるジーフリトのセリフでは、*tuon* は直前の動詞 *minnen*「愛する」を受けて代動詞的に用いられている。例(75)では *von kinde* がそうであったように、副詞 *lange* が過去始まる動詞行為の長期にわたる継続性を明示している。継続的状态は現在時においても続いており、完了性やましてや結果性はまったく現われていない¹⁸³。古高ドイツ語では、(*haben* のばあいに)再分析がなされたあと継続相動詞が徐々に用いられはじめたことはすでに見たとおりであるが、中高ドイツ語に入ってその幅をさらに広げ、現在時を含む継続性や反復性をも許容するようになったとすることができるであろう。なお嶋崎(2004)は、このような継続的用法が Pf. の使用動詞の拡張を促進させたとし、それが現代英語と同様な意味機能をもつ独自の発展段階を形成していたことの表われであると特徴づけることによって、中高ドイツ語の状況が現代語に至る単なる通過点を表わすものではないと主張する¹⁸⁴。

以上のように考察してみると、各々の用法の時間構成上の特徴もまた同時に説明されることになるであろう。用法 1 では、完結的・結果的意味が表出されるのであれそうでないものであれ、動詞行為じたいはかならず過去に位置づけられ、これに対する後時的観点は現在時にあると考えられる。用法 2 では、動詞行為だけでなく、完了的意味を構成する基点となる後時的観点もまた未来時にある。現代語においてまったく一般的ではない用法 3 については、時間的構成にかんして用法 1 とおなじであるとは言えないだろうか。過去に始まる出来事はあくまでも現在時から眺められるのであって、その継続性が現在時にもなお

¹⁸² 嶋崎(2004: 141f.)、Kuroda(1999: 65f.)。

¹⁸³ Kuroda でも指摘される継続性とは、継続相動詞の過去分詞によって現われる動詞行為のアスペクト性が強調される例を指しており、発話時にもまだ継続していることを示す例は挙がっていないようである(Kuroda 65f./97f.)。動詞行為の継続相にのみ重点が置かれているため、中高ドイツ語期のこうした用例の増加傾向を「結果相表示の更なる崩壊」(*der weitere Abbau der Resultativität der Konstruktion*)としながらも、全体としては結果相という根本的な意味表示が保たれているとみなしている。

¹⁸⁴ 嶋崎(2004) 129ff., 140ff.

認められるというだけである。このように考えると、1~3の用法に共通して見られる、出来事を眺める視座となる基準時は、現在時と未来時に位置していることが分かる。Pf.に構成される時間的關係をライヒェンバッハ風に記すと、そこには出来事にかんしては後時的観点より前時すなわち $Ez < Bz$ 、後時的観点にかんしては非過去すなわち $Sz < Bz$ という二つが成り立っていることになる。このように、Pf.の意味分析には出来事と後時的観点の時間的關係および後時的観点の時間移動性が重要であると思われる¹⁸⁵。

さて嶋崎(2004)では、中高ドイツ語のPf.の用法が7つに分類されている¹⁸⁶。いま見てきた Paul の指摘と一致する3つの用法以外はつぎのようになっている：(i) 経験を表わす現在完了形、(ii) 基準時との間接的な関連を表わす現在完了形、(iii) 現在形と対比的に用いられる現在完了形、(iv) 過去形と並置される現在完了形。しかしこのうち (iii) (iv) は他の用法と同列に扱うことができない。(iii) は過去形と現在形が並置されるのが一般的であった表現技法が、次第に過去形に代わって現在時との関連を表わす Pf.が用いられるようになったことを示す例である。また (iv) では、過去形が非常に近い位置で Pf.の動詞行為とまったくおなじかこれに関連する意味で現われているというパターンが指摘される。これは、完了的意味でも用いられていた過去形が Pf.の発達によって「侵食」される例証としての記述である。この2つの分類は通時的考察のために挙げられたものであり、他の5つのように中高ドイツ語のPf.の意味機能あるいは意味用法を共時的に記したものではない。

このほか (i) の「経験」を表わす用法では、基本的に *selten* や *nie* を伴う否定の意味をもった例が多数挙げられている。いわゆる曲言法 (Litotes) としての *selten* は否定表現であるが、語彙的意味「めったに~ない」の反意語は *dicke* 「しばしば」である。また *nie* のばあいもその反意語は *ie* 「これまでずっと」であることから、これらの副詞を用いた例は、継続的・反復の意味をもつ肯定文の裏返しであると分析される。

(83) *ich hân iu selten iht verseit.* (Nib.2151.4) 私はそなたの願いを拒んだことは一度もありませぬ。

(84) *im hât der künic Etsel nie sô liebes niht vernomen* (Nib.1713.4) エツェル王はかくも喜ばしいことを聞いたことがないのです。

¹⁸⁵ Paul (2007: 292)や嶋崎 (2004: 154) は、Pf.が未来完了的用法をもつ理由に限って *haben* や *sein* の定動詞としてのはたらき、つまり現在時制性に求めている。しかしこのことが Pf.のほかの用法に該当しない理由はない。

¹⁸⁶ 嶋崎 (2004) 144ff.

これらの例を肯定文に書き換えるなら、例(83)の *versagen* では「ずっと拒んできた」、例(84)の *vernemen* では「何度も聞いてきた」となる。否定的意味を伴わないものも含めて、ここに分類されるケースが継続的・反復の意味に当てはまるのであれば、うえで考察した時間性、アスペクト性について特別な用法であると指摘する必要がない。もしこれらを「経験」を表わす例とみなすにしても、その判断者である話者は現在時に立ち、過去の出来事はそこから眺められているという構図はできていると思われる。一方(ii)は、出来事と基準時との関連が曖昧なケースであると説明される。このばあい「過去における事態が焦点化されやすい」ため、「時間表現としてほとんど単に過去を表わす」例であると指摘される。

- (85) *sol Artûs dâ von prîs nu tragn, / daz Kai durch zorn hât geslagen / ein edele fürstinne. (Parz.221.20)* アルトゥース王殿が、ケイエが怒りのために一人の気高い領主婦人をぶったことで、いまや賞賛を得ているなどということがあるだろうか。
- (86) *ein wîp deich ê genennet hân, / hie kom ein ir kappelân. (Parz.76.1)* 私が先ほど挙げたご婦人、その人の司祭がここにやって来た。

例(85)では、*slahen* „*schlagen*“という動詞行為から生じる直接的な結果状態は感じられない。また例(86)では、動詞行為 *nennen* の結果状態は物理的に目に見えるのではなく抽象的であると説明される。しかしこれらの例では、従属接続における補文のなかで当該の迂言形式が用いられるために基準時との関連が曖昧になっているように見受けられるだけであって、ここでも後時的観点は現在時にあると考えられるのではないか。

以上のように(i)(ii)で挙げられる例もまた、基準時は現在時であり、動詞行為はその後時的観点から眺められているという時間的・アスペクト的構成となっていると考えられうる。ここに挙げられている例はどれも基点となる基準時を与えるコンテキストが現在時であると見なせるからである。このように、嶋崎(2004)の挙げる分類もまたポイントを2つに絞れば、各々の意味用法はより制限され、結局 Paul の挙げる3つの用法に還元されうると思われる。

さて、動詞行為と後時的観点との関係に鑑みると、動詞行為は過去のであるが事実的描写ではないケースに言及しておかなければならない。現代語で言うと、Pf.が未来完了時制の推量的用法とおなじ価値をもつようなばあいに相当する (*Vermutlich hat er seine Dissertation abgeschlossen*)¹⁸⁷。動詞行為は話者の推

¹⁸⁷ 第1部第3章33ページ参照。

量の対象となっているため、現在に位置づけられる後時的観点とおなじレベルで扱うことはできない。未来完了時制のような形式じたいに話法性が含まれるケースでは、その話法的観点から一つの意味用法が分類されるのであるが、Pf.では、義務的ではない推量の副詞等が加わったときに作られる意味は、現代語ではふつう一用法には数え入れられない。脳裡に浮かぶ動詞行為を、基準時としての現在時から推量するという意味では、推量の副詞を用いた現在時制と意味的構成が一致する (*Vermutlich ist er zu Hause*)。両者には動詞行為が、視座となる観点に対して同時か前時かという点しか差がないため、Pf.が許容する意味的領域あるいは Pf.に想定される現在時制性を探るうえでは指摘するに値する用例であると思われる。こうした例が中高ドイツ語の Pf.に見られることがある。

- (87) *der küenec oder Kriemhilt, ir einez daz ist tât / von den küenen gessen durch ir nît gelegen.* (Nib.2237.3) 王かクリエムヒルト、彼らのうちのどちらかが、彼らに対する敵対心のために勇敢な客人たちによって殺害されて横たわっていることと思われます。
- (88) *guldîniu bilde müget ir kiesen dran. / den hât mîn swiger gesendet über ünde.* (Kud.1372.3) 金の紋章をあなたもそこに認めることができるでしょう。その旗を、私の姑(となる)ヒルデが海を越えて送ったのでしょ。う。
- (89) *wer hiez iuch bêde gên ze kemenâten? / swer iu daz gefuogte, der hât iuch entriuwen gar verrâten.* (Kud.412.4) 誰があなた方二人にケメナーテに入ることを命じたのですか。誰かがこのことをあなた方に促したのならその人はまことにあなた方に間違った助言をしたことになります。

Nib.の例(87)は、宮中に響きわたる嘆声からエッツェル王かクリエムヒルトが殺害されたことを推測した家臣がディエトリヒ王に注進する場面であるが、Grosseの現代語訳には、原文にはない推量の副詞 *bestimmt* が補われている¹⁸⁸。Kud.の例(88)は、城を攻囲しつつあったヘゲリングン勢のなかに金の紋章を描いた軍旗を見つけ、それはヒルデが送らせたものだとしてルードヴィヒ王に伝える場面であるが、いずれにしても過去に起きたと考えられる出来事に対する推量表現となっているところで Pf. (*ist gelegen, hât gesendet*) が用いられている。推量的意味は、言語手段によって具体的に表わされるのではないケースである。また例(89)において、Pf.によって表される動詞行為 (*hât verrâten*) は、swervenの条件的内容に対する当然の帰結が述べられた箇所となっている。これらの

¹⁸⁸ Grosse (1997) 673. „Der König oder Kriemhild, einer von beiden ist bestimmt von den tapferen Gästen wegen ihrer Feindschaft tödlich getroffen worden.“

ばあいの後時的観点は現在時に位置することになるが、いずれにしても動詞行為と同様に事実ではないと考えることができる。そしてこれらのケースでは完了性ないし結果性が前面に現われていると考えられる。こうした、何の言語手段を伴うことなく現在の推量の対象としての動詞行為が現われている例は Nib. で 4 例、Kud. で 6 例見られた¹⁸⁹。

一方、wænen „meinen, glauben“が 1 人称・単数・現在形で用いられた表現において、推量された完了性を伴う動詞行為に Pf. が現われるばあいも見られた。現代語なら ich glaube, dass につづいて用いられるような Pf. の例である。

- (90) oder wer tet iu daz? / ich wæne ir mit den gesten zem hûse **habt gestriten**. (Nib.2310.3) 誰がそなたにそれをおこなった (= 生き血で濡らした) のですか。そなたは宮殿で客人たちと戦いを交えたのかと思われませんが。
- (91) wâfen, herre, wâfen! / Ir küenen von Ormanîe, jâ wæne ich ir ze lange **habet geslâfen**. (Kud.1360.4) 武器、武器をとれ、オルマニーエの勇敢なものどもよ。まことに汝らはあまりにも長く寝過ごしてしまったと思われるぞ。
- (92) Sît willekomen, Sîfrit! ir sult mich wizzen lân, / wâ ir mînen bruoder den künic **habt verlân**. / diu Prünhilde sterke in wæn' uns **hât benomen**. (Nib.544.3) そなたは私に、どこにそなたが私の兄である王を残してきたのか、ということを知らせていただきたい。猛きプリュンヒルトがわれわれから彼を奪ったのではないかと思われるのですが。

例 (90) は、ハゲネから痛手を負ったヒルデブラントに対して、事情を知らないディエトリヒが事の由を推し測って述べた場面である。例 (91) も同様に、wænen の補文内での Pf. が表わす完了的な動詞行為は、事実ではなく話者の推量の対象となっている。こうした例は Nib. では 7 例、Kud. では 2 例見られる¹⁹⁰。また、例 (92) に見られるように、wæn' が主語 ich を伴わずに „wohl, etwa“ といった副詞的役割を果たしている例も見られる。ただし推量の対象としての補文内容に前時性あるいは過去性をになわせるとき、次例に示されるように中高ドイツ語ではまだ Prät. (tâten, gepflac) がふつうであったと考えられる。

- (93) ich wæn sî rehte tâten. (Iw.2400) 私は彼らが正しい行ないをしたと思う。
- (94) ich wæn, ie ingesinde sô grôzer milte gepflac. (Nib.41.4) 私が思うに、どんな

¹⁸⁹ 出現例はつぎのとおり : Nib.1713.4, 2131.4, 2319.3, 2237.2/3; Kud.242.3, 412.4, 543.4, 562.2, 1192.1, 1372.3. 金子 (2009: 116) を参照。

¹⁹⁰ 出現例はつぎのとおり : Nib.544.3, 552.3, 1465.4, 1567.4, 1988.4, 2310.3, 2236.4; Kud.1097.4, 1360.4. 金子 (2009: 117) を参照。

宮廷の者たちでもこれほど気前よいふるまいに与かったことはなかった。

しかし現在時における推量を表わす表現に Pf.が用いられるのは、形式に付随する後時的観点が現在時であるために、推量を行なう基点となる現在時と一致するからという理由も考えられるのではなかろうか。また、それらの例には結果性というアスペクトがより強く現われているように感じられる。

事實的過去を表すのではない例という意味では、例 (95) ~ (97) に見られるような条件文内で過去の出来事を命題化してこれを事実として仮定するばあいがある。

(95) und **hât** si daz **geseit**, / ê daz ich erwinde, ez sol ir werden leit [...] (Nib.858.1)

もし彼女がそのようなことを言ったのであれば、私が事態を収めるまえに、彼女を痛い目にあわせなければならぬ [...]。

(96) Ich solz in gerne büezen, swie si dunket guot, / **hât** iemen in **beswæret** daz herze

und ouch den muot. (Nib.1862.2) 私は、もし誰かが彼らの心や考えを痛めつけたのであれば、彼らによいと思われるほどに、そのことに償いをするつもりです。

(97) ich wil dich lenger niht sehen alsô riezen. / **hât** si dir iht **gedienet**, des muoz si in

disem lande geniezen. (Kud.1583.4) 私は、そなたがそのように泣くのをもうこれ以上見たくはありません。彼女がそなたに良くしてくれたというのなら、彼女はこの国でそのことに報いてもらわないといけない。

Nib.の例 (95) は、クリエムヒルトが夫自慢をしたことを知らないジーフリトが彼女の発言についての潔白をグンテル王に告げる場面であるが、**hât geseit** „hat gesagt“は仮定された事実として用いられている。例 (96) は、教会詣での朝に武装しているブルゴントの客人たちを目にしたエツツェル王が、自国側の誰かが彼らに不義をはたらいたのではないかと推測して述べている場面である。例 (97) の Kud.の例でも同じように、これらの例には「私にははっきりしないが、もしその内容が事実なら」という意味構成が読み取れる。帰結文に当たる主文は、(わずかな例を除いて) 現在時に視点が置かれた表現となっていることから、他者から聞き知った過去の出来事の真偽について話者は判断留保するものの、現時点では事実と仮定しているばあいの例であると言える。後時的観点について言えば、仮想上の現在時を出発点としていることから、それは超時間的な位置をとっていることになる。このような例は Nib.で 13 例、Kud.では 5

例で見られた¹⁹¹。

こうした例を見てくると、Pf.で表わされる動詞行為（E）は——Pf.ではこの時間的位置づけはあまり重要ではないと指摘したもの——客観的な過去性を超えたばあいにも用いられることが分かる。さきに後時的観点は現在か未来であることを見てきたが、その基準時から眺められる動詞行為は、時間的に前時の位置をとるというだけで事実でなくても良いということから考えれば、これに付随する観点もまた必然的に事実的な現在だけでなく仮想上の現在に位置づけられることになる。すなわち後時的観点は非過去の領域に位置するというだけでなく、超時間的あるいは普遍的となることもあると考えて良いであろう。

さて第2部では、Pf.の出自や古高ドイツ語から中高ドイツ語にかけての発達状況を見てきた。古高ドイツ語初期では、haben/sein と過去分詞とのある程度の結びつきを見せていた一方、意味的には決して安定していたとは言えない状況にあった。けれどもこの時期の中期ごろまでには再分析という——とくに haben 構造にとって大幅な——変革を被り、2つの形式は助動詞化を急速に進めていった。つまり2つの要素の結びつきは、さまざまな分析的形式が競うようにして発展するなか、確かなものになっていった。しかしアスペクト性、時間性の分析を通して見えてくるのは、古高ドイツ語期からは使用動詞の広がりによる形式の拡充を見て取ることができるにとどまり、各構成要素がになう本来の意味領域を超えた時間的、アスペクトの意味機能を獲得するには至っていないのではないかという点である。

すなわち、一方では sein/haben はみずからの語彙的意味を失いつつも現在時制的機能を残し、他方では過去分詞がアクツィオーンスアールトの許容範囲を広げることで結果相にとどまらないアスペクト性を生み出しつつ発展していたと考えられる。現在時制がになう現在や未来といった意味機能は、さまざまなアスペクト性をもつ動詞行為に付随する後時的観点の時間的許容性に対応していると言えるだろう。このように考えると、迂言形式として安定期に入る中高ドイツ語期の Pf.は、後時的観点については非過去の位置をとる一方、動詞行為については前時性あるいは広義の完了性を示しているとまとめることができるのではないだろうか。また、後時的観点が現在時に位置するときはアスペクト（完了性、結果性）と時間（過去性）の表示が明瞭ではないが、それが現在以外に位置するときアスペクトがより明確に現われる傾向にあるように思われる¹⁹²。これは現代語に想定した特徴づけに一致することになる。

¹⁹¹ 出現例はつぎのとおり：Nib.83.3, 416.2, 845.4, 855.2, 858.1, 883.4, 893.4, 1119.2, 1178.4, 1861.4, 1862.2, 2144.2, 2319.2; Kud.458.2/3, 614.2, 1180.1, 1583.3, 1441.1. 金子（2009: 118）を参照。

¹⁹² 後者のケースでは、動詞のアクツィオーンスアールトが完了相であったり、動詞表現

これらの形式に想定される現在性が歴史的にも認められるという点については、つぎの第3部におけるコンテキストの意味分析からも裏付けたい。さらにまた後時的観点を伴う動詞行為には、発話状況からなる現在時との関係が結ばれるだけでなく、現代語の Pf. の文に想定した話者の主観的態度が加わる傾向が古い時代に始まっており、その語用論的效果は、歴史的に見てもこれを欠く Prät. とは全くことなる側面であったという主張が第3部の主眼である。

第2部の最後に、もう一度通時的観点に立って、Pf. を、これを取り巻く動詞形態の発展状況との関係で振り返っておきたい。ゴート語では古い印欧語の完了幹に由来する強変化動詞、そして新機軸として生産的であった弱変化動詞の2系列が動詞形態の大部分を占めていたが、すでにその機能上の差異を失っていた。このことは、ゲルマン語でアスペクトや時間上の差異を動詞語幹で表わすことができなかつたことを意味する。アスペクトは他の手段で実現されるようになった。たとえば弱変化動詞が形成されるさいにいくつかの表示機能を伴っていた。しかし派生レベルのそれよりさらに重要な役割を果たしていたのが、完了相を明示化した接頭辞 *ge-* の添加手段であった。この接頭辞が積極的に発揮するはたらきにより、時間的、アスペクト的な差異を表わし、部分的な体系化が可能となるのである。一方でゴート語に現われる *haben/sein* による迂言形式はギリシア語の形式的模倣あるいはこれに近いものであり、原典で表わされる意味内容を汲んでアドホックに作られた表現法に過ぎなかつたと考えられる。

けれどもドイツ語の歴史に入ると、弱変化動詞はその弁別機能を衰退させていくだけでなく、接頭辞 *ge-* もまたほかの接頭辞とともに役割を徐々に個別化、断片化させ、かつてのアスペクト表示機能はしだいに失われることになった。こうして古典語に見られるようなアオリスト、未完了過去、現在完了、過去完了といった過去における動詞行為のあれこれを派生的あるいは文法的に表示するには限界が生じてきた。観点を変えて言うと、*sein* や *haben* による迂言形式がその用法を発達させるようになるまでは、あらゆる過去の意味を一手に引き受けていた根幹的形態、つまり Prät. をより繊細な時間的あり方の違いを表わすことができたラテン語の表現に対応させるだけでは物足りなくなっていたであろうことは想像に難くない。完了的アスペクトを定動詞以外の部位すなわち過去分詞によって表示する後進の迂言形式は、——その出自にかんして不明な点が多いが——古高ドイツ語中期以降、とりわけ完了相明示手段の衰退による機能的損失を補う文法的手段として重要な存在となっていたと考えられる。

一方でしかし *haben/sein* と過去分詞を複合的に用いるという形成方法につい

が完了性あるいは結果性を伴う例が圧倒的に多い。

て考えてみると、印欧語の古い時代に存在した結果的「完了 (Perfektum)」¹⁹³のばあいとは事情がまったくことになっていたことを無視することはできない。これらの迂言形式は、動詞語幹における一つの文法表示とはことなり、過去分詞がその都度の動詞のアクツィオーンズアールトに応じて文法的意味を生み出すことができたので、アスペクト表示形式としては安定した機能をになわせることができるように見える。しかし定動詞に位置する *haben/sein* は他方で、文構造の中心的役割を果たしていた可能性があり、その語彙的意味もまた少なくとも初期の段階では本来のはたらきををになっていたはずである。その複合的意味による機能化を進める道は容易ではなかった。古高ドイツ語初期の作品では、*sein* による迂言形式は、*sein* に備わる意味論ゆえに過去分詞の機能が直接表出され、より容易にアスペクトが表示されえた。他方で *haben* によるそのばあい、各要素とも意味論上の転換を待たなければならなかったもので、一つの構造として習慣化し、ドイツ語の形態体系に一定の位置を占めるようになるまでには少なからぬエネルギーを要したであろう。このころの用例の多くはラテン語の完全な模倣や、2 語による表現法に合わせた形式化であったが、意味の面から見れば完了相あるいは結果相を表示する統合体とみなす意識の芽生えがある程度うかがわれるという状況であった。

原初的状況からの脱却を意味する再分析を経たあと、両形式が結びつきを一層強くした一つの統語単位としての地位を得ていたことは、主格主語の行為を表わす用例に限定されていく点や過去分詞が格語尾をつけなくなった点、また *haben* では対格目的語の種類やその有無からはっきり知り得る。2つの形態材料を重ね合わせて作られた迂言形式が、長い間失われていた完了カテゴリーを引き継ぐものであったとする見解¹⁹⁴は、ラテン語の総合的形態である Pf. に対応して用いられた箇所が散見される事実によってその証左となりうる。このばあひむしろ、徐々に失われつつあった接辞による完了アスペクト表示手段に代わる有標形と考えるほうがより適切であるように思われる。

形態から見て、比較的安定した意味機能を認めても良いのは、より早く発達段階に入ったとみなせる *sein* による迂言形式であろう。このあと中高ドイツ語期に至るまで過去分詞に使用される動詞は、とくに *haben* のばあい多様化していく。文法化を進めるその姿に映しだされる意味は、現在時制性と完了的アス

¹⁹³ 古い印欧語においてはギリシア語に一番よく残っているが、先行する動詞行為の主語にとっての結果状態を表わすため、そもそも現在時制に近いと考えられている。Krahe (1972: 128/119), Streitberg (1910: 201)などを参照。

¹⁹⁴ たとえば Paul は、*haben/sein* による迂言形式をゲルマン語が失った印欧祖語の完了形を部分的に受け継ぐものと考えている (Paul (1958) 136)。ただし、過去分詞の屈折を失なっていくにつれて、がんらいの結果的意味もまたしだいに曖昧化していったと指摘している (注 156 を参照)。

ペクトであるという、各要素ががんらいもっていた機能の部分的残存であるとみなした。これに対し、定動詞形に添加されることができた接頭辞 *ge-* は、本来的には一つの派生形態素であって、アスペクト性を動詞意味に直接的に付与することができたという点で、古い印欧語の語幹による表示方法により近いレベルで扱うことができる。つまり、ある程度競合関係にあったとみなせる *haben/sein* による迂言形式とは意味表出方法の点でまったくことになっていた。しかしこのゲルマン語由来の接頭辞添加手段は、一方の分析的形式に席を譲るようなかたちで中高ドイツ語期にはそのアスペクト表示機能をほとんど失ってしまう。しかしだからと言って、時制的、アスペクト的表現としての *Pf.* の地位が飛躍的に向上することにはならず、すでに触れたとおり、中高ドイツ語で過去領域の表示手段としては依然として単純な *Prät.* が優位にあった。

完了迂言形式の時制性、アスペクト性を通時的に問題にすると、むしろ各要素の意味論にも注意を払わなければならないのであるが、本章や前章で見てきたように、文意味のアスペクト性を抽出することは決して容易でないばかりか、もとより歴史時代における動詞個体のアクツィオーンズアールトを認定することは至難の業であるように思われる。*Pf.* の各時代の共時的意味あるいは通時的意味に迫るために可能であることのの一つは、文単位でその都度言い表されている内容を可能な限り正確に把握し、その意味構成を浮かび上がらせることであると考えられる。また、当該文がコンテキストとどのような意味関係を結んでいるかについての分析も必要になってくる。第2部では定動詞すなわち現在時制の時間意味論と過去分詞のアスペクト性が古い時代から *Pf.* に残っていると結論付けたが、つぎの第3部では、とくに前者の点についての裏付けを行なうため、そしてまたこのことと関連して別のレベルでの意味付けを探りたいため、分析対象をコンテキストの時間性にまで広げる。

第3部 時間性、人称性、話法性

第2部での考察から導き出された、再分析のあと Pf.を用いた文に構成されていたと想定される意味は、Reichenbach 風を示すとつぎのようになる。(1) $E < Bz$ 過去の、完了的出来事には後時的観点が備わっている。(2) $Sz = Bz; Sz < Bz$ 後時的観点は現在時に位置するかこれより以降あるいは時間を超えた位置をとることもある。これは第1部第3章で見たように、現代語と同様の時間関係を構成していることになる。Pf.の形式の意味機能に還元するならば、つぎのように説明されるだろう。すなわち、時代とともに Pf.に使用される動詞の種類が増えていくにつれ、形式に許容されるアスペクト性もその幅を広げていくことになるが、これには過去分詞のはたらきによって後時的観点がつねに含意される。他方で、形式が再分析を被るさいに原義を失い、助動詞として機能化をすすめることになる haben/sein は、古高ドイツ語期以降少なくとも中高ドイツ語期に至るまで現在時制性を残し続けるが、まさにその時制機能がになう時間指示領域が後時的観点の移動可能性の幅を決定づけている。

第3部の主眼は、コンテクストレベルでの意味分析を取り入れることによって、まずは Pf.を用いた文（以下 Pf.文と略記）に想定されるその現在時制性を歴史的に裏付ける。これとならんで、第1部第4章で議論した Pf.文に想定される語用論的機能がおなじように歴史的に跡付けられるのか、それが可能ならどのような現われかたをしてきたのかを明らかにしたい。第3部では、特定の歴史資料を用いての用例収集を行ない、各資料から割り出される統計的数値にもとづいて用例を実証的に比較考量し、出現傾向を浮かび上がらせる。

調査対象となる歴史資料はつぎのとおりである。古高ドイツ語では2つの共観福音書、すなわち脚韻詩、„Otfrids Evangelienbuch“（870年頃、南ラインフランク方言）と行間逐語訳的散文、„Tatian“（830年頃、東フランク方言）であり、中高ドイツ語では2つの英雄叙事詩、すなわち、„Nibelungenlied“（1200年頃、バイエルン方言）および、„Kudrun“（1240年頃、バイエルン方言）、また Hartmann von Aue の叙事詩、„Der arme Heinrich“（1190年頃、アレマン方言）である。文学ジャンルとしては、古高ドイツ語期では聖書文学作品2編、中高ドイツ語期では中世盛期詩人語による英雄叙事詩2編と宗教叙事詩1編であるが、どれをとっても時代を代表する文献の一つである。二つの時代に限定する大きな理由はつぎのとおりである。つまり、最初は散見されるに過ぎなかった Pf.が徐々に発達していき、やがては形態体系に組み込まれることになるというその興隆期における発達プロセスを調査分析すれば、原動力となる本質的なしるしをうかがい知

ることができると考えた¹⁹⁵。しかしまた、この時期の Pf.の意味分析にはとりわけコンテキスト要素を積極的に取り入れた実証的研究が乏しいからである。また、扱った作品は各時代における代表的な作品に数え入れられるものであるとは言え、言語資料としては量的にも質的にも十分であるとは言えない。ここでの調査目的は、Pf.が用いられた環境の意味関係をさぐることによって、当該文に構成されている意味の主要な特徴を浮き彫りにし、その使用傾向を示すことにあるため、資料間の結果的数値に大きなばらつきがないかぎりこれに甘んじるほかない。

調査対象は haben/sein の直説法・現在形と過去分詞が結びついた形式である¹⁹⁶。しかし、繰り返しになるが、ここでは haben/sein や過去分詞といった各構成成分の意味論あるいはそれらを足してできる迂言形式という単位の意味論から Pf.の本質に迫るというアプローチではなく、コンテキストを視野に入れた文単位での意味分析を行なう。ポイントは (1) コンテキストの時間性、(2) Pf.文に使用される人称、(3) コンテキストに見られる話法性という3点である。コンテキストについてはつぎのように考える。それは Pf.の文意味に直接かかわってくる文であり、時間性、発話状況、話法性、話者の存在について議論するさいに重要となる何らかの指標を含んでいると考える。

具体的に見ておくと、並列接続 (Parataxe) では当該文の直前にある先行文を指し、従属接続 (Hypotaxe) では当該文が補文のとき上位文を指すが、当該文が上位文のときは従属文を対象とせず、従属関係をもたずに先行する文となる。たとえば並列接続の例であるつぎの例 (98) では、Pf. (hân erbeten) を用いた文に先行する、riuwet を定動詞とする文がコンテキストとなる。この文における定動詞の時制あるいは話法性などが問題となる。従属接続の例としては例 (99)

¹⁹⁵ 聖書文学が中心であった古高ドイツ語の文学にはラテン語の影響 (Latinität) が見られたのに対し、中高ドイツ語はその担い手が聖職者から騎士へと転換する時期である。

Admoni (1990: 86) が指摘するように、中高ドイツ語は「ドイツ語の統語形成における形態体系の生成においてもっとも重要な言語段階のうちの一つ」(zu einer der wichtigsten Etappen im Werden des Gestaltungssystems des deutschen syntaktischen Baus...)である。すなわち中高ドイツ語の文学作品に見られる言語現象からは、古高ドイツ語におけるそれとの比較を通じて、文法的形態の自律的展開を良くうかがい知ることができると考えられる。

¹⁹⁶ 接続法を用いた例も散見されるが、コンテキスト分析では話法性が問題となるので、調査対象から外した。また、sein 形式においては他動詞の過去分詞を用いた受動の完了とみなされる例も見られるが、単なる sein 受動との判別が容易ではないため、そのような例を除外し、いわゆる sein 支配の動詞の用例に絞った。ちなみに第2章で見たように、中高ドイツ語の例には、現代語では haben 支配の動詞であっても sein と結びついて完了形となることがある (第2部第3章の例 (71) (troumen) を参照。他に bekommen „kommen“: Kud.315,1, Nib.107,4; ligen „fallen“: Kud.1450,2, Nib.1055,4; scheiden „sich trennen“: Kud.146.2...)。なお、第2部第1章で言及したように古高ドイツ語の例では、eigan を habên と同レベルで扱う。

や例(100)が挙げられる。前者のばあい Pf.を用いた *daz* („*dass*“) 文は *wunder* の内容文となっているが、これを目的語とした *hæret* („*hört*“) を含む命令文がコンテキスト、後者のばあい Pf.を用いた *sît* („*weil*“) 文に対する上位文となっている *müezen* を含んだ文がコンテキストである。また例(101)では Pf.を用いた *sô* による帰結文が上位文であり、これに対して *geriuwetz* による条件文が補文として現われているが、このばあいコンテキストはさらにその前の *sich* („*sieh*“) による命令文となる¹⁹⁷。

(98) *jâ riuwet mich vil sêre dîn grôzer ungemach. / ich hân die tievelinne erbeten, daz du niht eine / waschest ûf dem grieze. (Kud.1066.3)* まことにあなた(=クードルーン)の大きな苦しみは、私の心を大きく痛めます。私はあの悪魔女(=ゲールリント)に、海辺であなたがおひとりで洗濯することのないように頼みました。

(99) *Nu hæret michel wunder, daz hie ist geschehen. (Kud.1339.1)* さあ、ここで起こった大きな驚くべきことをお聞きください。

(100) *sît du mînes mannes für eigen hâst verjehen, / nu müezen hiute kiesen der beider künige man, / ob ich vor küniges wîbe zem münster türre gegân. (Nib.827.2)* そなたは私の夫を臣下のものとみなしたのですから、今日これから、私が王の妃よりも前に大聖堂に入るかどうか、双方の王の家臣たちは一目瞭然のこととなるでしょう。

(101) *sich, wiez dînem lîbe tuo: / geriuwetz dich eins hâres breit, / sô hân ich mîn arbeit / unde dû den lîp verlorn. (a.H.1103)* それがそなたの身体にどのようなことをなすのか、考えても御覧なさい。ほんの僅かでもそのことがそなたを後悔させるのなら、私は自分の労苦が台無しになるし、そなたは身体を失うことになるのです。

第1章 コンテキストの時間性

ここではコンテキストに現われる定動詞の時制を調査した¹⁹⁸。以下の表に示

¹⁹⁷ また、従属接続で複数の上位文が重なっているばあい、最上位の文をコンテキストとみなす。たとえばつぎの例では、Pf.文の直接の上位文は *wie...sint* であるが、この文を目的文とする *gedenke* で始まる命令文をコンテキストとした：*gedenke, tohter, liebez kint, / wie grôz die arbeite sint, / die ich durch dich erliten hân (a.H.633)* 「娘よ、かわいい子よ、私がお前のために耐えてきた労苦がいかに大きいか考えてみておくれ」。

¹⁹⁸ 一つの助動詞がことなる複数の過去分詞を伴う例、また Pf.を用いた文が連続して現われる例を一括りとし、一つのコンテキストと見なした。このため、この表 3-1 のコンテ

したように、コンテクストの時制は共時的にも通時的にもおおよそ「現在時制的」であった¹⁹⁹。

[表 3-1] Pf.文のコンテクストの時制

	Ahd.		Mhd.		
	Tat. (um 830)	Otf. (um 870)	a.H. (um 1190)	Nib. (um 1200)	Kud. (um 1240)
現在時制的	100% (7/7)	86% (31/36)	92% (33/36)	81% (248/306)	87% (110/127)

現在時制的とはむしろコンテクストが現在時制であることを指す²⁰⁰。百分率で表わされる数値のあとのカッコ内の数字は、出現例の総数とコンテクストが現在時制となっている例の出現数である。たとえば、古高ドイツ語の *Otfrid* では 36 例中 31 例が現在時制を用いたコンテクストで Pf. が現われることを示す。ただし現在時制には、命令文や、上位文が定動詞のない間投詞による表現となっている例を含めた。コンテクストが命令文となっている箇所はこのあと第 3 章で言及するように少なくない。古高ドイツ語、中高ドイツ語を通じて、さしあたって Pf. は現在時制的コンテクストで用いられるのが一般的であることがうかがわれる。

古高ドイツ語の例 (102) では、haben+過去分詞が用いられた *thaz* 文は、命令形をとる *gizellen* („erzählen“) の目的文となっている。第 2 部で挙げた例で言うと、Otf. では例 (52) の *laz* (... *eigun gisprochan*)、例 (55) の *bigin* (... *eigun gidan*)、Tat. では例 (32) の *senu* (... *haben gistriunit*)、例 (63) の *gebet* (... *sint erlosganu*) がそれぞれ上位文での命令形となっている。中高ドイツ語で見ると、つぎの例 (103) では *lâ geschehen* („lass geschehen“) の目的語として *daz allez* が現われているが、その内容を表わす文のなかに haben+過去分詞が用いられている。例 (104) では上位文の *fraget* („fragt“) が、例 (105) では上位文の *lât wizzen* („lasst wissen“) が命令文のコンテクストになっている (他に例 (99) の *hœret*、例 (101) の *sich*)。また、間投詞として *wol* „wohl“ を用いた文——たとえば例 (106)

クスト総数を表わす数値は、表 3-3 や表 3-4 の Pf. の形式じたいが出現する実例総数より少ない。

¹⁹⁹ もちろん、Pf. を用いた文が現在性をもっていることを示すもっとも明確な指標は *jetzt* や *nun* など現在時を示す副詞 (句) であろう。しかしそのような例は少ない。古高ドイツ語では第 2 部第 3 章の例 (52) の Otf. の例に見られる *nu*、中高ドイツ語ではつぎのとおり：
Nu hât sich versûmet mines herzen sin. (Kud.1462. 1)「いまや私の心中の考えは遅きに失した」。

²⁰⁰ つぎに指摘する命令文や接続法を含む文、また次章で指摘する話法の助動詞などを含んだコンテクストは、動詞行為が生じる時間を基準にすれば、現在性と直接的に結びつくわけではなく、むしろ未来性を示すことになる。しかしここでは、それらの文がになう「要求」や「意志」などの話法性は話者が現在時にとっている態度や立場を示すものであると考え、現在の環境を含意しているコンテクストであると判断する。

や (107) を参照——では、定動詞を用いることなく話者の感嘆の念が表わされている²⁰¹。こうした例に含意されている時間的意味は、それが発話状況の只中における話者の態度や心情の表われであるという点で現在のであって、Pf.文で表わされる過去のあるいは完了的出来事はまさにこの時間性に結びつけられていると言って良いであろう。

(102) *Gizeli worton thinen then bruadoron minen, / thaz habes thu irfuntan theih bin fon tode irstantan;* (Otf.V.7.60) 汝のことばで、私が死から甦っていることを汝が目にしたということを、私の兄弟たちに言いなさい。

(103) *swaz dir got hât beschert, / daz lâ allez geschehen. / ich enwil des Kindes tât niht sehen.* (a.H.1254) 神がお前にお与えになったことは全てなるに任せなさい。私はこの娘の死を決して見たくないのだ。

(104) *Nu fraget Herwîgen, der hât si ouch gesehen, / und alsô daz uns kunde leider niht geschehen.* (Kud.1341.1) ヘルヴィーク殿に尋ねてください。あのお方は彼女に会ったのですから、つまりは事態がわれわれにはよりひどくはならなかったのです。

(105) *lât wîzen mîne bruoder, wie wir geworben hân.* (Nib.537.3) 私の兄弟には、私たちがどのように成功を収めたのかを知らせてやって欲しい。

(106) *Sô wol mich ... daz ich gelebet hân, / daz Kriemhilt diu vil schœne sol hie gekrœnet gân.* (Nib.704.1) 私がここであのいとも美しきクリエムヒルト殿が戴冠することを目の当たりにできたとはなんと喜ばしいことか。

(107) „*Wol mich ... daz ich gelebet hân, / daz du bî Hartmuote wilt ... hie bestân.*“ (Kud.1310.1) あなた様がハルトムオト殿のお側に…居る心積もりがあることを聞き知って嬉しい。

しかし他方で、このデータにはコンテクストが具体的に認められないケースは考慮に入っていない。それはせりふが始まる冒頭や挿入文で Pf. が用いられるばあいである。つぎの例 (108) ~ (111) は作中人物の発言の冒頭部であるが、その発言内容はまずもって発話状況に居合わせる聞き手の認識のなかに直接入っていかなければならない。たとえば中高ドイツ語の Nib. の例 (110) は、ハゲネの奸計による狩りが行なわれている場面であり、ジーフリトには食事のための狩りの終了が伝えられるのであるが、当該表現には集合の合図に気付いたことを、狩りを続ける聞き手ジーフリトに直接的に認識してもらうという意図がある。会話の最初に過去の、完了的出来事を聞き手に述べ伝えるとき、その意

²⁰¹ ただし今回の調査ではこのような例は Nib. と Kud. にしか見られなかった。

図が達成されるためには言語化されていない現前の現在の状況に結び付けられる必要がある。Pf.文だけで過去の、完了的出来事がテーマ化されることがはっきりしているケースであると言える。したがって、そのような用例箇所にはあらかじめ現在性が備わっており、コンテキストは現在の環境であると言える。このような箇所での用例は、Tat.で0例、Otf.で5例²⁰²、a.H.で3例、Nib.で49例、Kud.で33例見られた。

- (108) In thir **haben** ih mir **funtan** thegan einfaltan, / ther ouh unkusti ni habet in theru brusti. (Otf.II.7.55) お前の中に、胸のうちにごまかしの気持ちを決して持たない純真な勇士を私は見た。
- (109) Ich **hân** den schemelîchen spot / vil wol **gedienet** umbe got. (a.H.384) 私は神の報いによって屈辱的な辱しめをしかと受けているのです。
- (110) herre, ich **hân vernomen** / von eines hornes duzze, daz wir nû suln komen / zuo den herbergen. (Nib.945.1) 殿、私は角笛の音から、われわれが宿営地に戻らねばならないことがわかりました。
- (111) ich **hân** nâch dir **gesant**. / boten ich bedörfte in des wilden Hagenen lant. (Kud.239.1) 私はそなたを迎えにやってよこした。私には剛勇のハゲネの国へ送る使いの者が必要なのです。

挿入文となっているつぎの例(112)～(115)は、上位文の時制とは関係のないつねに現在性をもつ文形式であると言える。挿入文とは、それが地の文あるいはせりふ文であってもつねに現在時に居合わせる話者の立場から補足、追加がなされる部分文である。そしてこれが欠けても上位文の意味構成にまったく影響を与えない独立性の高い文であると考えられる²⁰³。たとえば中高ドイツ語のNib.の例(114)では、先行する第4詩節でブルゴントの国のグンテル王ら3人についてすでに言及したことを確認、補足的に述べている箇所でPf.が用いられている。が、そこに含まれる過去の出来事 *gesaget hân* („gesagt habe“) は上位文における *wâren* の時間性 („waren“: Prät.) とは関係をもたない。発話状況

²⁰² ただし Otf. では、せりふ部冒頭ではなく章の冒頭で用いられる2例をここに含めた。このばあいも現在性を含むと考えて良いであろう：Thes **habet** er ubar woroltring **gimeinit** einaz dagathing, / thing filu hebigaz, zi sorganne eigun wir bi thaz. (Otf.V.19.1) 「それゆえそのお方はこの地球全体に対しての審判をお下しになったのです。非常に重要な審判を。われわれはそのことを恐れなければならないのです。」もう一例は Otf.V. 25.2/3。

²⁰³ したがって、たとえば例(113)とおなじ *als* 文であってもつぎの例は上位文に必要とされる様態文であって挿入文であるとは言えない：du enmaht sî niht bringen / als dû uns hie **hâst verjehen** (a.H.577) 「お前がここでわれわれに言ったようにはお前にはそのことを実現させることはできない。」

にいる聞き手に直接的に向けられる挿入文は、つねに現在性を含意したテキスト位置をとると考えることができる。als („wie“) 文のほか、関係代名詞を用いたタイプがあるが、例 (112) のように古高ドイツ語の Otf. では何の言語的指標もないばあいも見られた²⁰⁴。挿入文での用例は、Tat. で 0 例、Otf. で 3 例、a.H. で 3 例、Nib. で 8 例、Kud. で 13 例見られた。

(112) Hiar mugun wir instantan (thaz **eigun** wir ouh **funtan**), / thaz quement ummahti fon suntono suhti. (Otf.III.5.1) われわれはここで、からだの病気は罪のわざわいから生じるものであるということが分かるのです。このことをわれわれはまた認識して知っているのですが。

(113) ...daz diu üppige krône / wertlîcher süeze / vellet under vüeze / ab ir besten werdekeit, / als uns diu schrift **hât geseit**. (a.H.90) その書物がわれわれに伝えているとおり、この世の喜びのはかない冠はその最高の栄光から足の下へと落ちてしまうということが…。

(114) Die drîe kûnege wâren, als ich **gesaget hân**, / von vil hôhem ellen. (Nib.8.1) その 3 人の王は、私が述べたとおり、非常に剛腕な力を備えていた。

(115) Die vil stolzen Mære, als ich **hân vernomen**, / die wâren von ir schiffen zuo ir vînden komen. (Kud.874.1) その非常に誇り高いモール人たちは、私が聞いたところによると、自分たちの船から出てきて敵勢に立ち向かった。

また、コンテキストが過去時制であっても接続法をとることによって実際には過去性が前面に現われず、現在性の表出を認めても良いと考えられるばあいも見られた。つぎの 3 例はいずれも、Pf. 文に先行してコンテキストが並列的に現われるタイプである。そこでは接続法・過去形 (wære „wäre“, hôrte „hörte“²⁰⁵) を用いた文は条件文あるいは条件的内容を受けた帰結文となっている。たとえば中高ドイツ語の a.H. の例 (116) では、少女がハインリヒの病気治癒のために身を捧げることを両親に説得する場面で、現世でののはかない人生を甘受し無駄な死を遂げるのであれば生を授からなかったほうが良いと訴える。wære が用いられた非現実的条件文に対しての帰結文では、話者の現在の心情が現われているだけであって、過去性はほとんど感じられないと言える。このようにコンテキストが接続法・過去で現在性を含むと考えられる用例は、古高ドイツ語の Tat. と Otf. では見られなかったが、中高ドイツ語の a.H. で 2 例、Nib. で 21 例、Kud.

²⁰⁴ 例示したように、Otf. の校訂本には挿入文に丸括弧が付されていることがある。

²⁰⁵ 弱変化動詞の過去形は、中高ドイツ語でもそれが直説法か接続法かふつつ見分けがつかないが、この hôrte は Bartsch の注釈にあるように接続法・過去形とみなすべきである (Bartsch (1965) 237)。

で 10 例見られた。

(116) *ist im diu sêle danne verlorn, / sô wære er bezzer ungeboren. / Ez ist mir komen ûf das zil, / des ich got iemer loben wil, / daz ich den jungen lîp mac geben / umbe daz êwige leben. (a.H.607)* そのときになってもし、そのひとの魂が失われてしまうのであれば、そのひとは生まれなかったほうがましなのです。私はこのことに対して神を称えたいのですが、永遠の命と引き換えにこの若い身体を与えることができるという風にまで私の心は至っているのです。

(117) *kundestu noch geswîgen, daz wære dir guot. / du hâst geschendet selbe den dînen schœnen lîp. (Nib.839.3)* そなたは黙っていられるのであれば、そのほうがそなたには良かったでしょう。そなたはお美しいご自身を辱められたのです。

(118) *sô hôrte ich gerne, hâst du daz vernomen, / sol von Tenemarke Hôrant her komen / mit den sînen helden, die mich in sorgen liezen? (Kud.1180.1)* それなら (=そなたがそれを望むのであれば)、もしそなたがつぎのことを聞き知ったと言うのであれば、私はぜひ聞きたいものです。テネマルクのホーラントは私を不安なまま放っておいた勇士たちとともにこちらへやってくるのでしょうか。

こうした 3 つのケースは現在性を含む環境であると考えられる²⁰⁶。セリフ冒頭部、挿入文で Pf. が出現する箇所を加え、コンテキストが接続法・過去となっている例を現在の環境として換算しなおし、あらためて Pf. 文が現われる環境の分布を数値化したものが以下の表である²⁰⁷。

[表 3-2] Pf. 文が現われる環境

	Ahd.		Mhd.		
	Tat.	Otf.	a.H.	Nib.	Kud.
現在の環境	100% (7/7)	89% (39/44)	98% (41/42)	90% (326/363)	96% (166/173)

表 3-1 と比較してみると用例数の母数が増加しているところに認められる数値の

²⁰⁶ このほか、第 2 部第 4 章で指摘したような、Pf. が未来完了的に用いられるばあいでもコンテキストはふつう現在の環境である。未来的であっても、このあと第 3 章で言及するように、それは意志未来的、推量的である。たとえばうに挙げた例 (101) では、動詞行為 *hân verlorn* は未来完了的であるが、そのコンテキストは命令形 *sich* である。

²⁰⁷ なお、これまで、コンテキストや挿入文の認定について多少明確ではなかった部分があったり、用例の語形判断上の誤りが数例あったため、表 3-2 以降のデータ数値は金子 (2008, 2011) のそれと部分的にことなる結果となっている箇所がある。

差は、用例箇所として付け加えたせりふ冒頭部、挿入文での Pf. の出現数を表わす。このばあいのコンテキストはすべて現在の環境であるため、分子の数値も同数の増加となっている。分子の数値でその増加数よりさらに多くなっているところがコンテキストに現在性をもつ接続法・過去形が現われる用例数である。たとえば Kud. ではせりふ冒頭部、挿入文での出現総数が 46 例であるため総用例数が 127 例から 173 例となるので、現在の環境で現われる用例数も 110 例から 46 例分増えている。しかし 166 例となっているのは、さきの表 3-1 の段階では「現在時制的」とはみなされなかった、コンテキストが接続法・過去形である 10 例を、ここでは「現在の環境」であるとして計上したためである。反対に言えば、この作品では単純な過去形をコンテキストとする例は 7 例のみである。

このきわめて高い結果の数値からは、Pf. 文は古高ドイツ語でも中高ドイツ語でも現在の環境に現われるのが最も一般的であると判断して良いであろう²⁰⁸。現在時を基盤とした時間の流れのなかで、完了的あるいは過去の出来事がとくに取り上げられるという構図が想起される。ただし同様のコンテキストで Prät. が用いられるばあいにも同じ構図ができていけると言えるだろう。すなわちもし Prät. が現在の環境に置かれるケースでも、過去の出来事と現在時とのあいだに結びつきが生まれることになる。Prät. が優位であった時代では、多くのばあいこの超文レベルあるいはテキストレベルで作られる時間的差異づけに甘んじなければならなかったであろう。ここで問題としているのは、Pf. 文に含意されると想定する現在性すなわち定動詞 *haben/sein* がになう現在時制の意味論であつて、それがコンテキストにおける現在性ときわめて高い適合性を示しているということである。

このコンテキスト調査から割り出された結果は、統語単位として認められる Pf. の意味構造に想定できる後時的観点の特徴を示唆する値であると言えるだけではない。Pf. が発話状況あるいは話者中心とした文に好まれるという第 1 部第 4 章で見てきた現代語の特徴が歴史的にも認められるという主張の根幹となるデータにもなる。次章では人称性の調査によってこの点について考察を進めたい。

²⁰⁸ さらに付け加えるなら、過去形が用いられていても、文脈から現在性が現われていると考えられる箇所も数例見られた。つぎの例ではコンテキストは過去形 *enbôt* となるが、Bartsch の注にあるように、その前詩節の *suln sagen* を補わなければならない (Bartsch (1988) 127) : *Unt ouch, waz vrou Uote, iuwer muoter, her enbôt. / Gîselher der junge unt ouch der Gêrnôt / unt iuwer besten mâge die habent uns her gesant.* (Nib. 747.3) 「そしてあなた方の母君であるウオテ妃が、ここへ何を言付けになられたのか (をお伝えしなければなりません)。若きギーゼルヘル殿、またゲールノート殿、もっとも親しい身内の者たちがわれわれをここに使いに出されたのです」。また Kud. 1128.2 では、*sîn komen* のコンテキストは次行の過去形 *hôrte* となるが、文脈から *ich will* を補わないといけない (Bartsch (1965: 226) を参照)。

第2章 現在完了文に使用される人称

さてここでは Pf.文に使用される人称を問題とする。人称に注目した理由は、3つの人称代名詞のうちとくに 1/2 人称が共起する例が目立つことに気づかされたというだけでなく、その特徴がこれまで述べてきた現在の環境というコンテキストのありかたに適しており、まずは「現在性」の意味をさらに追及できるのではないかと考えたからである。コミュニケーションの場に居合わせる人間は話し手 (Sprechender) と聞き手 (Angesprochener) という2つの役割を果たし、それが2つの人称という分類によって言語化される²⁰⁹。これらの会話の参与者 (Teilnehmender) の役割が繰り返されることによって言語的コミュニケーションが生み出され、展開していくのに対し、3人称で表わされる人間は必ずしも会話の場に居合わせる必要がない会話の非参与者 (Nicht-Teilnehmender) のままである²¹⁰。客観的な指示機能をもったこの人称は、外界だけでなく、テキスト内のさまざまな関係づけを生むはたらきをもつが、他方でコミュニケーションが成立するための根幹をなす役割を果たしているのが1/2人称であろう。役割区分の観点にしたがえば、人称代名詞は直示的代名詞 (deiktisches Pronomen) と代理的代名詞 (Stellvertreter-Pronomen) に分類される²¹¹。1/2人称表現は文やテキストにおける照応関係は明快であり、刻々と変化していく発話状況における話し手や聞き手を直接的に指示するのである。

人称の役割を時間的視点からとらえてみるとどうなるであろうか。文中に1/2人称代名詞が用いられているばあい、そこには現在の時間が含意されていることになる。しかしその時間とは誰もが認識できる客観的な現在時ではなく、発話状況に依存した現在時が指示されていると考えることができる。これらの代名詞が直示機能をもっているからである。たとえば ich と表現されるばあい聞き手の意識はたちまち発話状況へと向けられるし、du を耳にすると聞き手は発話状況の中心人物である話し手からの働きかけを意識せざるを得ず、何らかの反応を余儀なくされるであろう。1/2人称代名詞が用いられた文では、当の話し手だけでなく聞き手の意識も発話状況に向かうことを考えれば、そこには発話状況によって作られた現在性が内包されているとみなすことができる。コミュ

²⁰⁹ 本章では、1人称のにない手として「話者」と「話し手」という表現が使い分けられるが、話し手とはより具体的に発話の場面に居合わせている人物を指す。話者のばあい、より抽象的であり言語化を行なう主体という意味も含まれることがある。

²¹⁰ Hentschel/Weydt (1994: 84)を参照。

²¹¹ Hentschel/Weydt (1994: 216), Grundzüge (1981: 644)を参照。

ニケーションの観点で見えていくと、これらの人称代名詞はあらゆる文であらゆる時制形式で現われると言えるものの、現在性をにう現在時制とともに用いられるのがまずは最も無理のない現われかたであるということになる。それでは Pf. ではどうであろうか。第 1 章で見えてきたように、古高ドイツ語や中高ドイツ語では、Pf. 文のコンテストは圧倒的に現在性をもっている。この調査結果をもとにして考えると、当該文に 1/2 人称表現が用いられていれば、そこにはテキスト構成のうえできわめて自然な時間の流れが形作られていることを示すことになる。すなわち Pf. 文には現在性が備わっていると考えることが許される裏付けとなる。

調査対象となるのは、主語代名詞として 1/2 人称が用いられる例だけでなく、与格や対格、また所有冠詞として現われるばあいも含めた²¹²。結果はつぎのとおりである。Pf. に 1/2 人称が現われる文の出現率は古高ドイツ語から中高ドイツ語にかけて明らかに増大している。

[表 3-3] Pf. 文に現われる人称

	Ahd.		Mhd.		
	Tat.	Otf.	a.H.	Nib.	Kud.
1/2 人称代名詞	57%(4/7)	47%(27/58)	82%(40/49)	79%(315/398)	82%(150/184)

第 1 章に挙げた例で見ておくと、古高ドイツ語ではたとえば例 (102) の **habes thu irfuntan** („du“)、例 (108) の **In thir haben ih mir funtan** („dir“ „ich“ „mir“) などである。中高ドイツ語では、例 (116) の **Ez ist mir komen**、例 (117) の **du hâst geschendet selbe den dînen schœnen lîp**、例 (118) の **hâst du daz vernomen** などという具合である。つぎに再掲する古高ドイツ語の例 (102) は、自分が復活したことをイエスが弟子たちに伝えるようマグダラのマリアに告げる場面であるが、Pf. が用いられた当該文が現在性を帯びていると考えられる理由は、2 人称主語を用いているというだけでなく、上位文である命令文が現在性をもっているからである。コンテストの現在性が Pf. 文にまで持続し、そのなかで過去の、完了的出来事が現われているという構図となる。また、並列接続の例である中高ドイツ語の例 (117) は、大聖堂の前で再び始まる激しい口論の口火を切ったプリュンヒルトにクリエムヒルトが応戦する場面であるが、Pf. 文の前で、プリュンヒルトに口を慎むことが望ましかったと強い調子で告げられるところ

²¹² ただし、主語代名詞に 1/2 人称が用いられたばあい、動詞との直接的な関係を結ぶため、表わされる出来事が現在性を帯びる割合はもっとも高いと考えられる。主語代名詞以外では、名詞との関係しか結ばない 1/2 人称の所有冠詞のばあい、含意される現在性の割合がもっとも希薄であることになる。

である。従属関係におけるばあいよりはその度合いは低いかもしれないが、先行文に現われている現在性は *dû* や *dînen* を用いた当該文に受け継がれていることがうかがわれる。

(102) *Gizeli worton thinen then bruadoron minen, / thaz habes thu irfuntan theih bin fon tode irstantan;* (Otf.V.7.60) 汝のことばで、私が死から甦っていることを汝が目にしたということを、私の兄弟たちに言いなさい。

(117) *kundestu noch geswîgen, daz wære dir guot. / du hâst geschendet selbe den dînen schœnen lîp.* (Nib.839.3) そなたは黙っていられるのでしたら、そのほうがそなたには良かったでしょう。そなたはお美しいご自身を辱められたのです。

しかしまた、Pf.文に 1/2 人称代名詞が現われていないばあいでも文脈から考えて 1/2 人称性が含意されていることがある。

(119) *ez ist sô geschehen, / daz wir unser schenken selten haben gesehen / noch unser truhsaezen, die uns solten tragen spîse.* (Kud.81.1) 献酌侍従にも、また私たちに食事を運んでくださるような内膳頭にも私たちは決して会ったことのないという状況なのです。

(87) *der küene oder Kriemhilt, ir einez daz ist tôt / von den küenen gesten durch ir nît gelegen.* (Nib.2237.3) 王かクリエムヒルト、彼らのうちのどちらかが、彼らに対する敵対心のために勇敢な客人たちによって殺害されて横たわっていることと思われます。

例 (119) は、グリフィンの幼鳥によって運ばれてきた王子ハゲネが、ある洞穴で空腹のあまり 3 人の王女に食べ物を求めたときになされた返答である。自分たちが置かれた境遇を表わす文の冒頭で Pf. が用いられているが、そこには 1 人称が用いられていない。しかし Bartsch が *es ist uns so geschehen* あるいは *es verhält sich so mit uns* と注釈をつけているように²¹³、この文には 1 人称性が含意されていると言える。また、再掲した例 (87) は、第 2 部第 3 章で見たように、当該文が推量の意味をもった例である。ディエトリーヒの家来が、宮殿や塔のいたるところで聞こえてくる悲痛の叫びから、エッツェルかクリエムヒルトが殺害されたのではないかと憶測する。この文脈から考えればこの文は話者の推量内容 (*ich finde, dass...*) であると考えることができる。Grosse の現代語訳に

²¹³ Bartsch (1965) 21.

推量の副詞 *bestimmt* が添えられている²¹⁴ように、ここにもまた話法性をもった 1 人称性が内在していると読み取れるのである。

こうした、言語表現として現われてこない例の出現数にかんして、これを分類に含め、数値化することは容易ではないためデータには出てこない。それでも、少なくとも中高ドイツ語ではこの二つの人称に比較的強い指向性をもっていることが分かる。Pf.文では、現在時とは隔たりがある過去の、完了的出来事が、話し手と聞き手によってコミュニケーションが行なわれている場、すなわち発話状況のなかで取り上げられ、何らかの関係づけがなされていると考えることができる。なお、古高ドイツ語の *Otfrid* や *Tatian* で半数程度であった数値が中高ドイツ語の作品では 80%程度に増加している点についてはのちに言及することにした。

中高ドイツ語でとりわけこの 2 つの人称が好まれる傾向は、つぎの表 3-4 に示したように、会話文において Pf.が頻用されるという指向性と関連があるのかもしれない²¹⁵。

[表 3-4] 会話文で Pf.が使用される割合

	Ahd.		Mhd.		
	Tat.	Otf.	a.H.	Nib.	Kud.
会話文内の例	100%(7/7)	50%(29/58)	90%(44/49)	98%(390/398)	94%(173/184)

テキストにおけるせりふの部分とは、それが小説や物語などの創作作品であっても、実際の会話を再現しているばあいと同様のコミュニケーションが成立しているのとらえることができる。作中では、会話は話し手と聞き手の役割の交替によって内容が刻々と展開していく。他方で、地の文においては作中世界について語られる。たとえば再掲したつぎの 2 例に見られるように、読者への語りかけがあっても、読者がこれに反応し、話者となって語り手へ直接的に返答することはできないため、両者のあいだに対話が成立し、その内容が展開していくなどということはいえない。

(112) *Hiar mugun wir instantan (thaz **eigun** wir ouh **funtan**), / thaz quement ummahti fon suntono suhti. (Otf.III.5.1)* われわれはここで、からだの病気は罪深き墮

²¹⁴ Grosse (1997) 673.

²¹⁵ なお、古英語における *haben* (現在形) + 過去分詞が、「もっぱら直説法で」(*in der direkten Rede*) すなわちせりふ部において現われること、そして「ほとんど例外なく主語や目的語の機能で 1 人称あるいは 2 人称代名詞形で現われる」(*fast ausnahmslos in der Funktion des Subjekts oder des Objekts die Formen des Pronomens der ersten oder der zweiten Person ... auftreten*) ことが明らかにされている (Zadorožny (1974) 383)。

落から生じるものであるということが理解できるのです。このことをわれわれは実際に認識したのですが。

(114) Die drie künene wâren, als ich gesaget hân, / von vil hôhem ellen. (Nib.8.1) その3人の王は、私が述べたとおり、非常に剛腕な力を備えていた。

したがって双方向のコミュニケーションは成り立たないと言える。表わされる出来事に注目すると、せりふ部では、話が展開していくなかで話し手や聞き手はさまざまな現前の事態に直接的、間接的に関わってくるのに対し、地の文では読者は出来事に対して追体験をしたり、また同調や批判をすることはできるが、これに干渉することはできない。すなわち地の文では読者と作中世界の事態には越えられない壁があるのに対し、せりふ部は現前の話し手と聞き手との双方向の関係によって成立するものであるから、1/2 人称表現として言語化される可能性が高いと考えられる。なおこの調査結果は、少なくとも中高ドイツ語において、Pf.が現代語とおなじように会話において好まれていた形式であると判断できる材料を提供しているとも言えよう²¹⁶。

ここで、人称を役割表示であるとする一般的な規定をさらに掘り下げて解釈を加えた鈴木(1968)の見解を見ておきたい。彼は人称の概念をつぎのように考えている。「私の考えでは、話し手が自分のことをたとえば”I”と称することは、自分が対話という言語行為における能動的主体であることを、意図的に宣言することであり、対話の相手を指して、”you”と称することは、お前を相手、つまり対話という言語行為の受動的主体と認めるぞという、話者の積極的な意図の宣言と解すべきである」²¹⁷。前提となっているのは、すべての人称の割り振りを行なっているのは話者であるということである。話者は、受動的であれ能動的であれ 1/2 人称を用いることで、話し手と聞き手が対話の主体であると認めることになる。そして3人称は、主体として周りの世界から抜き出された人物以外のすべてであると規定される。「対象を三人称で把握するということは、その対象に主体性を認めず、非人格的事物的な扱いをすることだと言うことが出来よう。いわゆる三人称は、その構造上から言えば語源的な意味での *impersonal* であることが特徴である」²¹⁸。

このようにして、人称は言語行為の過程で割り振られるさい、1/2 人称で表現

²¹⁶ 重藤(1985: 367)では *der arme Heinrich* に現われるすべての定動詞形が調査対象となっているが、Pf.の出現分布から「すでに中高ドイツ語においても、現在完了は話し言葉において優先的に用いられる時制、と言えるようだ」と述べている。

²¹⁷ 鈴木(1968) 347.

²¹⁸ 鈴木(1968) 349. バンヴェニストでもまた同様に、人称にあてがわれるのは、1人称では主体的人称、2人称では非主体的人称であって、これらがまとまりとして構成されることで非人称としての3人称と対立すると捉えられている(バンヴェニスト(2000⁶) 212)。

される人物は話者の「主観の力」によって積極的に対話の主体であると宣言されるのに対し、3人称表現では主体化を伴うラベル付けにはならない。両者は主体化されるか、されないかという点でことなるレベルの概念であることになる。そして1/2人称表現によって当事者が主体化される場所は、その都度の発話状況を伴う「ここ」という舞台である。つまりこれらの人称が用いられる文は、主体となる人物だけでなく、同時にまた刻々と変わりゆく発話状況もクローズアップされることになる。

この考えかたに依拠して、1/2人称代名詞が用いられたばあいのPf.文に表わされる出来事の構成を整理しておきたい。Pf.文で表わされる動詞行為は、現在あるいは現前の出来事ではなく、過去の、完了的なことがらである。他方でまたこの表現では、主体化された会話の参加者が居合わせる発話状況も前面に現われている。しかもっと根底にはPf.文が現われるのは現在の環境であるという前提があった。そのような環境では、「私」あるいは「あなた」という会話の参加者に何らかの関係をもつ過去の、完了的な出来事は、たんなる過去の叙述となるのではなく、発話状況において現実的な価値をもたせて扱われる必要があるだろう。すなわち1/2人称表現をとるPf.文は、円滑なコミュニケーションがなされるとき²¹⁹、現前に居合わせる（あるいは居合わせると想定される）相手に対して、発話状況あるいは発話状況で問題になっている出来事との密接な関係のなかで用いられなければならないという責任を負った文であると考えることができないだろうか。

一方では現在性、他方では過去性、完了性を併せもつPf.文では、出来事が話し手と聞き手が居合わせる発話状況に結びつけられるケースが基本である、あるいは中高ドイツ語でそのような傾向が強まるのではないかと推論したい。出来事が価値づけされるさいにはまた、話者の何らかの態度が顔をのぞかせているのではないか。このような想定のもとで、次章では再びコンテキスト調査を行ないたい。

第3章 コンテキストに見られる話法性

本章での考察対象はコンテキストに現われる話法性である²²⁰。Pf.文に帯びて

²¹⁹ 会話の公理 (Konversationsmaxime: 量 *Quantität*, 質 *Qualität*, 関係 *Beziehung*, マナー *Art und Weise*) や会話の協調の原理 (*Kooperationsprinzip*) に反しない、合理的要請にしたがったコミュニケーションのこと。『ドイツ言語学辞典』(1994: 507f./509) を参照。

²²⁰ 話法性とは、Bußmann (2002: 439) の言う「命題が表わすことがらの価値づけのために話者がとる態度表明を表わす意味論的カテゴリー」(*Semantische Kategorie, die die Stellungnahme des Sprechers zur Geltung des Sachverhalt, auf den sich die Aussage bezieht,*

いると推測される話者の態度は、当該文の意味分析から割り出すことは不可能であると考えたためである²²¹。コンテキストで何らかの話法性が現われているのであれば、これと直接的なつながりをもつ当該文において話者の態度がある程度は残り、過去の、完了的出来事は、一定のパースペクティブによって取り上げられるイメージを読み取ることが可能であろう。

具体的に認められるコンテキストが調査対象となるので、せりふ部冒頭や挿入文での用例はさしあたって省かれる。したがって、用例総数は第1章で挙げた表3-1とおなじ値となる。つぎの表3-5は、Pf.のコンテキストに現われる話法性をもつ話法的指標の割合を数値化したものである。また表3-5'では実際にどのような話法表現が用いられているのかの内訳が示されている。話法的指標を話法の助動詞、命令法、接続法、否定、その他と分類したのは、調査の段階でそれがとりわけ中高ドイツ語の資料でしばしば現われるコンテキストの代表的なパターンであると見なしたためである。このうち「否定」を指標の一つとしたのは、Admoni のつぎの見解による：「否定語を用いて発話の内容（発話内容の現実性）に対する話者の態度が表わされる」²²²。また「話法の助動詞」には、可能や義務の表示といったいわゆる客観的用法だけでなく、話者の推量等を含む主観的用法のような用例も入る。つまり話者は現実のことがらをそのまま言語化するのではなく、何らかの観点のもとで述べるという点で話法性が現われていると考えたい。

[表 3-5] Pf.文のコンテキストの話法性

	Ahd.		Mhd.		
	Tat.	Otf.	a.H.	Nib.	Kud.
話法的環境	71% (5/7)	61% (22/36)	89% (32/36)	87% (266/306)	87% (111/127)

ausdrückt) ないし、Hentschel/Weydt (1994: 106)の言う「話者が、表わされたことがらの現実性あるいは実現の可能性の判断を表明したりすること」(die sprechende Person ihre Einschätzung der Realität oder der Realisierungsmöglichkeit des bezeichneten Sachverhalts ausdrücken kann) など広義にとらえることとする。

²²¹ 現代語の完了不定詞のような、Pf.が話法の助動詞と共起していたり、Pf.じたいが接続法で現われる用例は調査対象外である。しかし当該文に推量の副詞が用いられた例がわずかに見られた：*gemahel, ja enist der tôt / jedoch niht ein senftiu nôt, / als dû dir lîhte hâst gedâht* (a.H.933)「奥方よ、まことに死というものはいはしかし、恐らくはそなたがご自分で考えていたような生易しい苦しみなどではありますまい」。中高ドイツ語の *lîhte* には、*leicht* の意味もあるが、現代語訳で、*„vielleicht“* (Grosse (1993) 57) とか、*„möglicherweise“* (Saran (1975) 62) となっている通りここは推量の副詞と捉えるべきである。

²²² ...daß vermittels der Negation die Einstellung des Sprechenden zu dem Inhalt seiner Rede (in betreff der Realität dieses Inhalts) zum Ausdruck kommt. (Admoni (1970) 154).

[表 3-5²²³] コンテキストに現れる話法的指標²²³

<u>Ahd.</u>	<u>Tat.</u>	71%	<u>Otf.</u>	61%
	話法の助動詞	0 例	話法の助動詞	2 例
	命令法	3 例	命令法	5 例
	接続法	0 例	接続法	2 例
	否定	0 例	否定	11 例
	その他	2 例	その他	2 例
	計	5/7 例	計	22/36 例
<u>Mhd.</u>	<u>a.H.</u>	89%	<u>Nib.</u>	87%
	話法の助動詞	10 例	話法の助動詞	103 例
	命令法	6 例	命令法	24 例
	接続法	5 例	接続法	25 例 (+10)
	否定	4 例 (+4)	否定	24 例 (+18)
	その他	7 例 (+3)	その他	90 例 (+26)
	計	32/36 例 (+7)	計	266/306 例 (+54)
	<u>Kud.</u>	87%		
	話法の助動詞	40 例		
	命令法	14 例		
	接続法	11 例 (+2)		
	否定	11 例 (+11)		
	その他	35 例 (+11)		
	計	111/127 例 (+24)		

具体的分析に入るまえに、話法的コンテキストの認定について問題点を挙げておかなければならない。それは話法的指標が現われていないばあいでも、文

²²³ 表内に見られる括弧内のプラス記号付きの数字は、当該の指標が別の指標と共に現われる用例数である。たとえば Nib.の「否定」24 例 (+18) とは、否定の指標が延べ 42 例現われるが、うち 18 例は他の指標とともに現われることを指す。つぎの例で言うと、コンテキストに話法の助動詞 *wellen* が用いられているが、他方で否定文でもある。このばあいのコンテキストはより一般的な指標「話法の助動詞」に換算される一方で、「否定」の指標としては括弧内の数字に入れられる：*die von Hegelingen wellent si niht lâzen. / si hânt si sô besetzen, daz sie nindert mügen zuo den strâzen. (Kud.734.4)* 「ヘゲリゲン勢は彼ら(=モーラント勢)を退却させようとしな。彼らは彼らをけっして海路へもどることができないように包圍しているのです。」

意から考えればそこには話法性が読み取れるという用例である²²⁴。

(120) **hât** er sichs **gerüemet**, *ez gêt an Sifrides lîp*. (Nib.845.4) もしジーフリトがそのことを吹聴したのであれば、それは彼の命にかかわることだ。

(121) *ich kum es an ein ende*, wer mir ez **hât genomen**. (Nib.848.3) 誰がそれを私から奪ったのか、それを私は暴いて見せるわ。

(122) *Sît hie lît versigelet unser frouwen her / und wir sîn komen sô verre ûf daz vinsten mer: / ich hôrte ie sagen von kinde für ein wazzermære...* (Kud.1128.2) われわれの王妃の軍勢が海路で迷ってしまい、われわれも遠く暗黒の海へと漂流してしまっているのであるが、私は幼少の時から海物語として聞いてきたつぎのことを語って聞かせよう…。

たとえば Nib. の例 (120) では、Pf. を用いた条件文のコンテキストは *ez gêt* で始まる帰結文となっているが、このばあい話法的指標が現われないため表面的には話法性を含んだコンテキストとはみなされない。しかしプリュンヒルトとの初夜のことをジーフリトが触れ回っているのであれば彼はそのことに命でもって償わなければならないという意味内容から考えれば、Brackert が現代語訳で *dann soll er dafür mit seinem Leben büßen* としている²²⁵ように、ここには話法性が含まれているとも考えられる。一方で、Pf. を用いた文に先行する文がコンテキストとなっている例 (121) では、やはり話法性を示す指標が具体的には現われていない。しかし、指輪を盗んだ犯人を暴いて見せるというプリュンヒルト (*mir*) の発言内容は、Piper がその 1 人称・現在形 *kum* „komme“ は未来時制的であると指摘しているように、意志未来を表わす文と考えることが比較的容易に可能となる²²⁶。このように文意から考えて話法性の所在を判断しなければならないところがある。ここでは前者を「話者の主張」、後者を「意志未来」を表わす文として「その他」に分類した。

また Kud. の例 (122) では、Pf. 文のコンテキストは話法性を含む文には分類されなかった。ここでは *sît* で始まる Pf. を用いた補文は事実認容的とみなせようが、コンテキストである上位文との関係は緩やかである。しかし問題となるのは、定動詞の時制が過去 (*hôrte*) となっているにもかかわらず、話者の意志を表わす文を行間に読まなければならないからである。Bartsch の注では *so will*

²²⁴ 以下、各例文で斜字体になっているところが話法性を含んだコンテキストである。日本語訳には破線による下線を付した。

²²⁵ Brackert (1993) 189.

²²⁶ Piper の注では *ich will es schon herausbekommen*、Brackert の現代語訳では *Ich werde noch herausbringen* となっている (Piper (1889) 186 / Brackert *ibid*)。

ich euch zum Trost mitteilen, was ich sagen hörte、Piper の注では *so will ich euch eine Geschichte erzählen* となっている²²⁷ように、文字通り「言われるのを聞いた」のではなく、「聞いたことを語らせてほしい」と話法の助動詞を伴う文を補わなければならないような不完全な文接続になっている。このようにコンテキストに話法性が含まれるかどうかの判別が難しいばあいに直面することがある²²⁸。分析では4つの明確な言語的指標のほか「その他」としたところでは、表現上の特徴を基本とすることに加えて可能な限り文意を汲んで話法性の有無を見極めるという方法をとった。したがって表で示した数値以外にも話法性を帯びたコンテキストが現われる可能性がある。

もう一点、コンテキストじたいをどうとらえるかというレベルでの問題点を指摘しておかなければならない。

(123) *frouwe hêre, jâ müget ir uns sanfte gerîchen. / Des wir dâ hân geroubet, des bringen wir sô vil: (Kud.1567.1)* 高貴なる王妃様、まことにあなた様は私どもを豊かにしてくださる必要がありません。私どもがそこで奪い取ったものの非常に多くをもってきておりますから。

(124) *Unde ob mich mîne mâge nâch tôde wellen klagen, / den nâhsten unt den besten den sult ir von mir sagen, / daz si nâch mir niht weinen; daz ist âne nôt. / vor eines kûneges handen lige ich hie hêrlîchen tôt. / Ich hân ouch sô vergolten hier inne mînen lîp, / daz ez wol mugen beweinen der guoten ritter wîp. (Nib.2303.1)* もし私の一族のものが私のことを嘆くようであれば、もっとも頼りになる親族の者たちに、私のことで泣かないようにと私からの言葉を伝えてほしい。それはいわれのないことであると。私はある王の手にかかってここで名譽の死を遂げているのですから。 私はまたこの広間で私の命と引き換えにひどい復讐を行ないましたので、立派な騎士たちのご婦人たちもまたさぞ嘆き悲しむであろう。

Kud.の例(123)は、クードルーンが救出され、ハルトムオト王と王女オルトルーンが捕らえられたという吉報を伝えた使者たちに褒美として黄金が与えられ

²²⁷ Bartsch (1965) 226 / Piper (1895) 287.

²²⁸ 各話法的指標はあくまでも話法性のありかを知る手がかりとなる言語的特徴であり、なかにはことなる指標が内容的に一致することがある。たとえば、つぎの例のコンテキストは「話法の助動詞」が用いられていても実際には「命令」的要求であると解釈されるであろう：*Nu sult ir mich der mære mære wîzen lân! / hort der Nibelunge, war habt ir den getân?* (Nib. 1741.2) 「私にそのことをもっとよく教えていただきたい。ニーベルンゲンの宝、それをそなたはどこへやってしまったのか」。Brackert (1994: 131)や Grosse (1997: 525)の現代語訳を参照：*Nun sagt mir mehr darüber! / Laßt mich mehr darüber wissen.*

ることになるが、使者たち (wir) は有り余るほどの戦利品をすでに手に入れているためこれを固辞する場面である。関係文となっている Pf.文のコンテクストは動詞 **bringen** を用いた上位文となるが、テキストのつながりを良く考えていくと、この2つの部分文はひとまとまりとして先行文の内容に対する理由の意味をもった単位となっていることが見えてくる。「褒美の黄金を固辞する」ことの原因が「過剰なほどの戦利品を所持している」からであるという具合に続く文のつながりからすれば、Pf.文の最上位に位置するコンテクストは **frouwe** で始まる文と考えられ、そこには語法の助動詞 (**müget**) という語法的指標が浮かんでくるのである。

また Nib.の例 (124) は、エッツェル王の宮殿での壮絶な戦いのなかで一騎打ちとなったギーゼルヘルとヴォルフハルトは相討ちとなったのであるが、瀕死のヴォルフハルト (**ich, mînen lîp**) が叔父ヒルデブラントと最期の言葉を交わす場面である。この Pf.文のコンテクストは直前の **vor** で始まる文であり、語法性は何ら含まれていない。しかしながらこの文は、Pf.文 (**hân vergolten**) に直接関係してくる文というより、2文先の **sult** を含む文と関係をもっている。つまり、ヴォルフハルトの言伝の内容は実際には「泣いてもらいたくないこと」だけでなく「泣かれるのはいわれのないこと」も含んでおり、その理由づけとして「自分の死が名誉であること」が述べられるという構成になっている。したがって **daz ist** 文も **vor eines** で始まる文も、**den næhsten** で始まる文の理由文になっていると考えられる。内容面からすると、Pf.文のコンテクストは語法の助動詞を用いた要求文 (**sul ... sagen**) となる。一方でまたこの Pf.文は、つぎの **daz** を用いた補文と **sô ... daz** の結びつきを作っているため、そこにもまた因果関係が出来上がっている。つまりテキストの意味関係から考えれば、Pf.文が理由文を作り、より密接に関係しているのは結果性をになう **daz** 文と考えることができる。このばあい、コンテクストは語法の助動詞 **mügen** を用いた推量文とみなされることになる。

これら2例は本来的には語法性を含むケースとみなされなければならないのであるが、結局そのようにはならなかった。見極めが難しいばあいにも有効となるコンテクスト内容を重視した判断基準を一律に設けるのが困難であるため、本論文では並列接続のばあい直前の文、従属接続のばあい上位文をコンテクストとするという方針で通したからである。

以下、データ結果に沿ってその現われかたを分析していきたい。まずは古高ドイツ語の例から見てゆく。Tat.では、Pf.が再分析を起こす前のがんらいの姿が頻繁に見られたり、絶対的な用例数が少ないため、結果的数値から積極的に何らかの指摘を行なうことはできないが、Otf.にも共通する特徴として命令法のコンテクストが比較的に目立っていると言って良いかもしれない。つぎの例

(125) では、3つの命令形のあとで Pf.が用いられているが、Pf.を用いた「死んだ」という過去の、完了的出来事は3つの要求行為の理由づけとして現われている。まったく同じパターンが Tat.148.5 (gebet / bithiu uuanta ... **sint erlosganu** : 例 (63)) にも見られた。

これらは理由の接続詞 uuanta („weil“)を用いた例であるが、つぎの Otf.の例のように接続詞なしでもそのような因果関係が感じられる箇所がある。例 (126) は、正しき人々 (ir) のように神を信じもろもろの正しい行為を行なうべきであると諭すために語ったイエスのたとえ話の一場面であるが、命令文に引き続いて並列的に現われる Pf.文は、要求内容の理由づけとなっていることがわかる。同様の例は Otf.にも見られる。これまでに挙げた例では、Tat.で例 (32) (senu / **haben gistriunit**)、Otf.で例 (52) (laz / **eigun gisprochan**)、例 (55) (bigin redinon / **eigun sus gidan**) や例 (102) (gizeli / **habes irfuntan**) があるが、どのケースにおいても Pf.文で表わされる過去の、完了的出来事は、命令文で話者によって要求されている内容と密接なかかわりをもっていることがうかがわれる。

(125) *arstant inti nim then kneht inti sina muoter inti far in erda Israhel, uuanta arstorbana sint thie thar suohtun thes knehtes sela.* (Tat.11.1) 立ってその幼子と母親を連れてイスラエルの国に戻りなさい。 なぜならその幼子の魂を探していた人々は死んだのですから。

(126) *Intfahet, thaz er worahta, richi, thaz er garota / er anagengi worolti, er iuih thara holoti! / Ir eigut iz gisculdit, willon min irfullit;* (Otf.V.20.71) そのお方がそこへとあなたたちを呼んでくださるように、そのお方が用意なさったところ、その世界の始まりからお作りになったその王国を引き継ぎなさい。 あなたたちはそれ (=永遠の命) を受けるのにふさわしいし、私の望みを満たしているのですから。

また Otf.で比較的良く見られた否定文のばあいを見ておく。つぎの例 (127) は、ルートヴィヒドイツ王が統治するフランク王国を作者 Otfrid が称える箇所であるが、外敵がもし戦いに挑んでも彼らは撃退されこの王国はつねに無敵であることを、まずは否定文で述べてから Pf.文による肯定的内容で続けている。Pf.文で表わされたこれまでの反復的出来事は、前文の否定的内容の理由づけになっている。例 (128) では、裏切り者ペテロに悪魔を見たイエス (mir) が、イエスの言葉や神への無理解を罵る箇所です否定語が用いられている。ここでは因果関係的な関係ではなく、つづく Pf.の文で「～であるというのに」で訳されるような現実認容のようなつながりとなっている箇所であると言えよう。これまでの例で言うと、例 (51) (nihein / ni / **haben gimeinit**)、(57) (ni / **eigut ir gihorit**)、

(60) (wiht- / ni / **ist irwuntan**) が否定文につづく例となっているが、過去の、完了的出来事は、たんなる並列接続ではなく、話者の価値判断による否定的内容と何らかのコントラストをなす関係をもって、発話状況に結びつけられていると考えられる。

(127) Sie sint filu redie sih fianton zirretinne; / ni gidurrun sies biginnan, sie **eigun se ubarwunnan**. (Otf.I.1.76) 彼ら (=フランク族) は、敵から身を守る用意がしっかりできているのです。彼ら (=敵) はあえてそれ (=戦い) をしようとしない。(戦いを挑んでも) 彼らは彼らを撃退してしまうのです。

(128) Far after mir thanne, thu satanas zi manne! / *Thu thes girates wiht ni weist thaz selbo druhtin wilit meist.* / **Habet er gimeinit**, mit mir thia worolt heilit... (Otf.III.13.23) 私の後ろに引き下がれ、人の姿をしたサタンよ。主みずからがとりわけお望みになるどんな決定もお前は分かっているのだ。その方 (=神) が私と一緒にこの世を救うことをお決めになられたのです…。

もう一点、「その他」と分類した用例を2例見ておく。ここでは話法性を示す一定の言語的指標が現われるパターンだけでなく、文意から考えて何らかの話法性を含意しているとみなされるケースが分類される。イエスが金持ちのたとえ話をするつぎの Tat. の例 (129) では、Pf. 文の前文は、話者 (金持ち) である自分の魂に対して独白する (quidu „(ich) sage“) 導入部分となっている²²⁹。現代語では Pf. 文は直接話法で引用符つきで記されるところであろうが、話者の意志を表わしている箇所とみなして良いと考えた。このルカ 12.19 のルター訳は Vnd wil sagen zu meiner Seelen と話法の助動詞 wollen を用いた表現となっている。Otf. の例 (130) は、磔刑人の一人 (ih) が自らの心情を吐露している場面であるが、Pf. 文のコンテクストでは自分の悪行の罪深さを強く嘆いている。つづく Pf. 文はその理由づけの関係をなしており、過去の、完了的出来事は話者の主観的態度に結びつけられているとみなすことができる。

(129) *Inti quidu mineru selu: sela, habes managiu guot gisaztiu in managiu iar.* (Tat.105.2) 私は私の魂に言おう。魂よ、お前はこれからの長い間多くの財産を所有している。

(130) *Ih bin, druhtin, ana wan filu harto firdan; / ih haben inan gjaforot joh suntono ubarkoborot.* (Otf.IV.31.30) 私は、主よ、疑いもなくまことにひどく罪深いです。私はその人 (=キリストとともに磔刑に処された人のうちの一人)

²²⁹ 定動詞 habes は 2 人称・単数形であり、現代語で言えば „hast du“ となる。

とおなじことを繰り返したのです、罪にかんしては彼を越してしまっているのです。

古高ドイツ語では、コンテキストにおける話法性との適合性は全体としてある程度にしか認められない。これに対して、中高ドイツ語の調査結果からは、Pf.文が話法性をもったコンテキストとの指向性をかなり明確に示していると思える。まずは3作品を通じてコンテキストに現われる出現頻度が3割以上を占める話法の助動詞から見ていきたい。

- (131) als ich mit iu **gedinget hân**, / *daz silber daz wil ich iu geben.* (a.H.1278) そなたにお約束しておりましたとおり私はそなたに銀貨をお支払いいたします。
- (132) ob ichz gedienen kan, / swaz iu mîn muoter Gêrlint ze leide **hât getân**, / *des wil ich iuch ergetzen nâch unser beider êre.* (Kud.1028.2) 私の母ゲールリントがそなたに苦痛を与えたことは何でも、私がもし奉仕によって償えるのであれば、私はわれわれ2人の名誉のためにそなたに償いをするつもりです。
- (133) ich wil iu z'andern zîten disiu mære sagen, / war umb ich mîne swester Sîfride **hân gegeben.** (Nib.621.3) 私は、なぜ私が妹をジーフリトの嫁にやったかを別の機会にそなたに教えてやろう。
- (134) Ir boten, ich sol iu lônén daz ir mir **habt geseit** / *dâ von mir ist entwichen mîn ungefüegez leit.* (Kud.1566.1) 使者たちよ、そなたらが私に伝えてくれたことに対して私は報いたい。そのことによって私のとてつもなくひどい苦しみは消え去りましたから。
- (135) wir suln in langer dienen, den wir alher **gevolget hân.** (Nib.699.4) われわれはこれまでしたがってきたお方にこれからもご奉仕いたします。

Pf.のコンテキストにもっとも良く現われる話法の助動詞は、うへの例(131)～(135)に挙げたような、1人称主語を用いて意志を表わす *wellen* „wollen“および *suln* „sollen“である。ここに挙げた例はすべて従属接続となっているが、例(131)が様態文となっているほかは皆、上位文中に用いられた動詞の目的語を説明する関係文か動詞の目的語文となっている。たとえば a.H.の例(131)は、少女への手術を取りやめさせたハインリヒ (ich) が医者 (iu) に約束の銀貨を支払う場面であるが、Pf.を用いた als 文は現代語の wie 文のような様態の意味を上位文の内容に加えている。過去の、完了的意味をもった動詞行為 *dingen* „versprechen“は、geben を用いた上位文の話者の意志に結びつけられている。Kud.の例(132)では、Pf.が用いられた swaz 文は、wollen を用いた上位文中の des で ergetzen „entschädigen“の目的語として受けられている。自分の母 (mîn

muoter Gêrlint) がクードルーン (iu) に行なったひどい仕打ちの償いをする意志を見せることでクードルーンの心を開かせ、彼女への求婚を受け入れてもらうようハルトムオトが説得する場面である。「苦痛を与えた」(ze leide **hât getân**) という過去の、完了的出来事は「償い」の対象として話者ハルトムオトの意志に関係している。

(136) wilû uns, tohter, wesen guot, / *sô soltû rede und den muot / durch unsers herren hulde lân, / diu ich von dir **vernomen hân***. (a.H. 662d) 娘よ、もしお前が私たちにやさしくしようと望むのであれば、私たちの主の恩寵を得るために私がお前から聞いた話とその気持ちをやめにしておくれ。

(137) *ir sult uns hœren lân / die wîse, die ich hînte von iu **vernomen hân***. (Kud.376.2) 今宵私がそなたから聞いたあの歌を私たちに聞かせていただきたい。

(138) *Jane solt du mirz, Kriemhilt, ze arge niht verstân, / wand' ich âne schulde die rede niht **hân getân***. (Nib.820.2) クリエムヒルト殿、どうか私のことを悪くとらないでいただきたい。と言うのは私は訳もなくそのような話をしたわけではないのですから。

(139) *die suln hie bestân. / si **hânt** mir hie zen Hiunen sô rehte leide **getân***. (Nib.1994.3) 彼ら (=敵勢) はここにとどまらせよ。彼らはここフンの国で私にきわめてひどい目に合わせたのであるから。

(140) *den spot müget ir wol lân, / wan wir nâch ir **gesinnet** nu lange zîte **hân**, / wie wir si wider bræhten von Ludewîges lande*. (Kud.1340.2) 冗談はやめにしていただきたい。われわれは長いあいだ彼女のことを探し求めてきたのであるし、またどのようにして彼女をルデヴィークの国から連れ戻そうかと思案してきたのであるから。

(141) *Jâ sul wir daz behüeten ... daz er iht beswære den helden hie ir lîp. / ich **hân** des hœren jehen, daz er an iuwer schranken / kum also mit helden, daz ims iuwer tohter müeze danken*. (Kud.637.3) まことにわれわれは、彼 (=ヘルヴィーク) がここで勇士たちの命を脅かすことのないように守りましょう。私は、彼があなたの城の防護壁へと勇士たちとともに攻めたててくると言うのを聞いたのです。その結果あなたの娘がそのことで礼を言う羽目になるでしょう。

(142) und **hât** er sichs **gerüemet**, *daz sol er hœren lân, / oder sîn muoz lougen der helt ûz Niderlant*. (Nib.855.2) 彼 (=ジーフリト) がもしそのようなことを吹聴したのであれば、そのことを彼に聞かせてもらおう。あるいはニーデルラントの勇士には彼が自慢したのではないことをはっきり言ってもらわなければならない。

また、つぎにしばしば現われるのが、うへの最初の 5 例 (136) ~ (140) に示されるような、要求を表わす話法の助動詞である。多くのばあい前 3 者のように *suln* を 2 人称で用いて直接相手に行為を要求するパターンであるが、例 (139) のように 3 人称表現もある。この例はうえで見たばあいとはことなり、コンテクストの文と Pf.文は形式上は並列的關係にある。この Nib.の例は、ダンクヴァルトの家来らを殺されたグンテル (*mir*) はフンの一族を大広間に残して戦いを続けさせることをディエトリーヒに進言する場面であるが、内容的つながりから考えて *getân haben* で表わされる過去の、完了的出来事は、*suln bestân* „sollen übrig bleiben“を用いた要求文の理由づけとなって結び付けられている。また、ほとんど同じ意味で *mügen* „mögen“が用いられる例 (140) のような用例も見られた。ほかに、残りの例 (141) や (142) に見られるように、上位文で用いられた話法の助動詞 *suln* が一種の要求文である勧誘法的 (*adhortativ*) な用法となっているケースもある²³⁰。

- (143) *du muost beginnen, ob ich daz leben hân, / daz ander küniginne selten hânt getân.* (Kud.998.2) 私が生きている限り、ほかの王女がやったことのないようなことをやってもらわなければなりません。
- (144) *mir hât der tôt an einem sô rehte leit getân, / des ich unz an mîn ende muoz unvrœliche stân.* (Nib.1238.3) ある人の死が私に非常にひどい苦しみを与えたので、そのことによって私は最期まで喜びもなく生きていかねばならないのです。
- (145) *welt ir mir geben widere, daz ir mir habt genomen, sô / muget ir noch wol lebende heim zen Burgonden komen.* (Nib.2367.3) そなたが私から奪ったものを私に返してくれる心づもりがおありならば、そなたはなおも生きて無事にブルゴントの国に帰ることができるのです。
- (146) *si sulen sîn vil vremde, ine hab' si schiere bekant.* (Nib.1178.4) もし私が彼らをすぐに見分けられないのであれば、彼らは全く異国のものたちなのでしょう。
- (147) *sol ich gesunt belîben und Botelunges kint, / ez mag iu komen ze liebe, daz ir mich habt gesehen.* (Nib.1314.3) 私とボテルンク殿のご子息 (=エツェル王) が生きながらえますならば、私と対面なされたことはあなた様の有益となりましょう。

²³⁰ 例 (141) の *sul* については Piper (1895: 170)、例 (142) の *sol* については Piper (1889: 187) を参照。

(148) *nu wil si des wænen, daz wir der herverte haben vergezzen.* (Kud.1097.4) 彼女 (=ヒルデ) は、いまやわれわれが軍を率いるのを忘れてしまったのではないかと考えているように思われます。

(149) *si mac sîn gerne lougen, des Prünhilt verjehen hât.* (Nib.831.4) プリュンヒルトには自分が主張したことを却下する理由が十分にあるのです。

このほか、うえに挙げた例 (143)、(144) のように *müezen* „müssen“ を用いた義務の意味や、例 (145) のように *mügen* „mögen“ を用いた可能の意味がコンテキストに現われるばあいもあった。後者の Nib. の例は、復讐の念に燃え上がるクリエムヒルト (*mir*) がハゲネ (*ir*) に対してニーベルンゲンの財宝のことを詰問する場面であるが、「奪い取った」という過去の、完了的出来事は、2 つ目の上位文で表わされる「生きて帰ることができる」という帰結的内容とは離れている。しかしここでは Pf. を用いた出来事の過去性は問題となっていないことは確かである。Pf. 文の過去の事実的出来事がまず現在性を帯びた条件文内の動詞行為 *widere geben* の目的語となり、その条件下での帰結的内容の可能性を述べていることから、それは間接的に話法性と関係していると考えることができる。さらに中高ドイツ語の話法の助動詞はこれにとどまらず実にさまざまなニュアンスで用いられる。たとえば例 (146) ~ (148) では *mügen*, *suln* や *wellen* を用いて、現代語で主観的用法と呼ばれるような話者の推量が現われている²³¹ し、例 (149) のように *mügen* が *gerne* と結びれて根拠づけ („Grund haben“) となっているばあいも見られた。

(150) *swaz dir got hât beschert, / daz lâ allez geschehen.* (a.H. 1254) 神がお前にお与えになったことは全てなるに任せなさい。

(151) *Ir boten, saget dem künige, daz ih vil eine bin. / ez ist mir komen übele.* (Kud.807.2) 使者たちよ、私がまったく一人取り残されていることを王に伝えておくれ。私はまったく不幸な状況に陥っているのです。

(152) *ergetzet si der leide, und ir ir habt getân.* (Nib.1208.3) そなたが彼女に与えた苦しみの償いをなされよ。

(153) *nu sît uns willekomen. / ich und der künic mîn herre hân daz wol vernomen, / ir sît vermüete helde von urliuqe sêre.* (Kud.335.2) ようこそわれわれの国へ。私と私の夫である王は、そなたら勇士は戦いでひどく疲労していることをしかと聞き届けておる。

²³¹ 例 (148) では *wollen* が用いられているが、Bartsch (1965: 221) の注や Piper (1985: 280) の注ではつぎのように「~のように思われる」という現代語訳がつけられている: *sie scheint zu glauben / sie möchte wohl glauben.*

(154) *nu sît mir willekomen. / ich hân von iuvern sculden vil grôzen scaden genomen, / der wirt mir nu vergolten, ob ich gelücke hân. (Nib.249.2)* ようこそ私の国へ。
私はそなたのせいできわめて大きな損害を被ったが、もし私に幸運が残されていたらそのことはいまや報われるというものだ。

中高ドイツ語の用例では Pf.のコンテクストに命令法や接続法が現われる割合はほかの指標に比べてとくに多いというわけではない。まずは命令法を見ておく。命令法で表わされる意味は目の前にいる話し相手に対する直接的要求である。ただしうへの例 (153) (154) のような歓迎の意味を表わす常套句となっているばあいも見られた²³²。Nib.の例 (154) は、ジーフリトに打ち負かされ、捕虜となってブルグントの国へ連れてこられたリウデガストにグンテル (ich) が挨拶をする場面であるが、歓迎の言葉の後に Pf.文がつづくという文接続となっている。このばあい過去の、完了的出来事が命令的行為に結びつけられるというより、現前の発話状況あるいは話者の喜ばしい気持ちに直接結びつけられてテーマ化されている。せりふ冒頭で Pf.が用いられるパターンと似ていると言えるかもしれない。コンテクストが命令法となっている例はこのほか例 (99) (hœret / **ist geschehen**)、(101) (sich / **hân verlor**)、(103) (**hât beschert** / lâ) などに見られる。なお、古高ドイツ語の例で見たような Pf.文が因由的關係を結んでいるケースは、ここでは例 (151) だけであるが、たとえば例 (104) (fraget / **hât gesehen**) などに示される²³³。

(155) *Du bist mir komen rehte, daz sî dir geseit. / mir hânt dîne friunde getân sô manigiu leit / ze Garadîe dem lande, daz lît in gar ze nâhen. (Kud.130.2)* そなたは私には好都合だ、このようにそなたに言いたい。そなたの身内の者は私に、彼らの国のとても近くにあるガラディーの国で、多くのひどい苦しみを与えたのであるから。

(156) *nu rechez, swer der welle, ez sî wîp oder man. / ich enwolde danne liegen, ich hân iu leides vil getân. (Nib.1791.4)* 女でも男でも復讐を望むものは復讐されよ。私が嘘をつきたくないので断言するが、私がそなたに多くのひどい苦しみを与えたのだ。

(157) *got lône iu, lieber herre, / daz ir mir alsô verre / hât die wârheit gesaget.*

²³² この常套句はまた、つぎに挙げるように *suln* を用いたばあいも見られた：*Ir sult uns wesen willekomen ... mit iuvern hergesellen, die mit iu komen sint. (Nib.126.2)* 「そなたはそなたのご家来の者たちともどもようこそわれわれの国においでなされた。」

²³³ ただし例 (104) では、命令文に続く文に現われる *der* が定冠詞か指示代名詞かは確定できるわけではない。Grosse (1995: 235)の現代語訳を挙げておく：*So fragt doch Herwig; er hat sie auch gesehen...*

(a.H.1114) 敬愛すべきお医者様、あなた様がかくもまことに私に真実を述べて下さったことに対して、神があなた様に報いますように。

(158) *Nu lôn'iu got, her Sîvrit ... daz ir daz **habt verdienet**, daz iu die recken sint / sô holt mit rechten triuwen, als ich si hœere jehen.* (Nib.303.2) ジーフリト殿、彼らが言うのを聞いている通り、あの勇士たちがそなたに誠実な心でまことにやさしく尽くしたことに対してそなたが報いたことに神が報いてくださいますように。

(159) *getörste ich dar gân! / ich **hân** ab leider verre wider mînen vater **getân**, / daz ich mînen besten friunt niht getar enphâhen.* (Kud.534.2) できることなら私はそちら(=父のところ)へ行かせていただきたいのですが。しかし私は父に対してとてもひどいことを行ないましたので、私は自分の肉親の者たちに挨拶をしようなどとは思いません。

(160) *dâ frumte manegen tôten des küenen Hagenen hant, / des vil ze sagene wære her ze Burgonden lant. / Sindolt und Hûnolt, die Gêrnôtes man, / und Rûmolt der küene, die **hânt** sô vil **getân**, / daz ez Liudegêre mag immer wesen leit, / daz er den dînen mâgen ze Rîne hete widerseit.* (Nib.235.2) そこでは勇猛なハゲネは多くのものを亡き者にしたのであるが、そのことの多くがブルゴントの国で語られなければならないでしょう。ゲールノートの家来であるシンドルトとフーノルト、勇敢なルーモルトが非常に立派に戦ったので、リウデゲールにとって、ライン河畔のあなた様の一族のものに戦いを挑んだことが末永く悔やまれることでしょう。

コンテキストに接続法が用いられる例には要求や願望がしばしば見られる。うへの例(155)では *hânt getân* のコンテキストとして接続法・現在形 *sî „sei“* を用いた要求文が現われている。つぎの Nib. の例(156)では、ハゲネ (*ich*) がクリエムヒルト (*iu*) に自らの言葉ではじめてジーフリト殺しを白状する場面である。*nu rechez „nun räche es ...“* で始まるコンテキストと Pf. 文は離れているが、「ひどい苦しみを与えた」という過去の、完了的出来事は要求行為の理由づけとなっているところは例(155)と同様である。また例(157)、(158)は願望を表わす例としておなじ表現構成 (*got lône iu*) となっているが、報いの対象として *lônen „lohn“* の目的語文のなかに Pf. が用いられており、出来事は同時にまた願望内容の根拠づけにもなっている。また例(159)、例(160)のように、接続法・過去形を用いて控えめな主張が表わされることもある。なお例(159)では、Pf. 文はコンテキストに対して *ab „aber“* を用いた反意をもった文となっている。

- (161) *tæt' ez ander iemen, daz sold' iu wesen leit. / umbe welche schulde **habt** ir dem priester **widerseit**?* (Nib.1577.4) もしほかの誰かがそんなことをやったらそれはそなたにとって心痛いことになっていただろう。いったいどういう罪でそなたはあの司祭にたてついたのか。
- (162) *an dem uns unser mâge **erworben habent** hulde, / Hetele der rîche, der vergæbe uns nimmer unser schulde.* (Kud.434.3) われわれの親族が和解を得たところの強きヘテレだったら、私たちが贈り物を受け取るという罪を決して許してくれないであろう。
- (163) *Nu hæren wir ein mære, des **habe** wir niht **vernomen**:* (Kud.1335.1) われわれがまだ聞いていないことをさあ聞きましょう。
- (164) *sô helfe mir got, sî **hânt gelogen.*** (a.H.1317) 絶対に間違いなく彼ら(=世の人々)は嘘をついたのですわ。

接続法・過去の用例はすでに第1章の例(117)～(119)でも挙げたが、そのうちの例(117) (*wære / **hâst geschendet***)と(118) (*hôrte / **hâst vernomen***)は仮定的条件文に対する帰結文内に現われる接続法であった。うえに挙げたNib.の例(161)は、水の精の前触れを思い出したハゲネ(ir)が司祭を船から突き落としたのを見てギーゼルヘルがかけた言葉であるところであるが、同様の構成となっている。また、仮定部が主格主語(*Hetele der rîche, der*)で表わされる例(162)も仮定的推量文であって語法性を認めても良いであろう。このKud.の例では、アイルランドからヒルデ王女を連れ去る策略のなか最後にハゲネ王に謁見する場面であるが、老将ヴァテは勧められた餞別の品を断るさいに、もしその財貨を受け取ったならヘテレ王に許してはもらえまいという表現で返答する。ほかに、勧誘法的な用法の例(163)²³⁴やほとんど常套句として用いられる例(164)が見られた。

- (165) *sît ez alsus umbe iuch stât, / daz man iu gehelfen mac, / **ichn gesûme iuch niemer tac.** / herre, ir **hât** uns doch **gesaget**, / ob ir hetet eine maget, / diu gerne den tôt durch iuch lite, / dâ soldet ir genesen mite.* (a.H.921) ひとがあなた様をお助けすることができるという状況にあるわけですから、私はあなた様を1日たりともお待たせするわけにはいきません。お殿様、もしあなた様のためにすすんで死のうという乙女がいれば、あなた様はそのことによってご病気が治るとわれわれにおっしゃったではありませんか。
- (166) *dich truog ouch ander niemen, ez (en)wære küniges künne. / nu **hân** ich nâch*

²³⁴ Piperの注を参照(Piper(1895)336)。

manigen leide **gesehen** mîne freude und mîne wünne. (Kud.1250.4) 王家の一族以外の誰もそなたを産むことができなかつたのです。いまや私は多くの苦しみの後で喜びや楽しみとなることを見ることができました。

(167) *ine gesach sô gerne nie / boten in langen zîten denne ich iuch **hân gesehen**.* (Nib.1456.3) これまで長いあいだ、私がお前と会った以上に喜ばしく使者と会ったことはない。

(168) *Ez ist et unerwendet ... daz wir vernomen **hân**.* (Nib.1731.2) われわれが耳にしたことは、しかしまったく避けられないことである。

(169) *mîn sorge ist nu ringe, sît ich **gesehen hân** / wol siben palas rîche und einen sal vil wîten.* (Kud.1145.2) 私の心配はいまや消えうせた。というのも私はおよそ7つの立派な宮殿と極めて広い大広間を見つけたのであるからには。

(170) *diu wunde frumt iuch kleine, die ich von im **empfangen hân**.* (Nib.2056.4) 私
が彼から受けた傷などそなたらにはまったく無益なことだ。

例 (165) ~ (170) はコンテクストが否定文になっている例である。ここには例 (168) に見られるように述語形容詞的に用いられた過去分詞に否定辞 *un-* が付加されて文全体が否定となっている例や、例 (169) や (170) のような曲言法 (Litotes) を用いた例を含めた。後者の修辞法の効果は、Nib.の例 (170) ではつぎのように現われる。イーリンクの一撃によって受けた傷について、話者であるハゲネ (*ich*) は、目の前にいるクリエムヒルト側の者たちにはその負傷が文字通りあまり益がない (*kleine frumen „wenig nützen“*) と言っているのではなく、まったく意味がないと主張している²³⁵。これらの用例のうち接続詞を用いずに Pf.文が理由を表わすという構成になっているのは例 (165) である。また、例 (166)、(167) ではコンテクストが直説法・過去形であることから、一見ここには現在性が含まれないように見えるが、本章冒頭で見たように否定文には発話内容に対する話者の態度が認められると考えられるため、現在性を帯びたコンテクストであるとも言える²³⁶。

(171) *sît irz der recke der nâch uns **hât gesant** / und jehet ze einer muoter der edelen küniginne?* (Kud.152.2) そなたが、われわれのところに使いをやり、高貴な王妃を母親だと言っている勇士なのだな。

²³⁵ Brackert (1994: 197)の現代語訳ではつぎのようにになっている: Die Wunde, die ich durch ihn erhalten habe, nützt Euch überhaupt nichts.

²³⁶ 第1章の調査では、Pf.のコンテクストが直説法・過去で否定であるばあいも現在性を欠くコンテクストであるとしたが、現在の環境の一つとみなさなければならないことになる。直説法・過去で否定の指標が見られるのは Otf.で3例、Kud.で2例、Nib.で11例であった。

- (172) *wan sagt ir mir, Hagene, war ist der verge komen?* (Nib.1567.3) ハゲネ殿、渡し守はいったいどこへ行ってしまったのか、なぜ私に言ってくれぬのか。
- (173) *waz hilfet dîn übermüeten, daz du mit rede hâst getân?* (Nib.2030.4) お前が口先だけで示した思い上がりなどは何の役に立とうぞ。
- (174) *sô ist geschehen, des ir dâ gert, / und wænet mir sî wol geschehen. / anders hât mir mîn muot verjehen.* (a.H.764) そうすればあなたが望むことが実現したことになりますし、私にはことがうまく運ぶとお考えになられるでしょう。しかし私の気持ちは自分に別な風に告げたのです。
- (175) *von Prünhilde krefte den wæn' wir hân verlorn.* (Nib.552.3) プリュンヒルトの膂力によってわれわれは彼を失ってしまったのではないかと恐れているのでございます。
- (176) *sît daz ich fiende hân / verdienet ûf der strâze, wir werden sicherlîch bestân.* (Nib.1591.4) 私はこの旅路で敵を作ってしまったので、われわれはきっと襲撃を受けることになるう。
- (177) *jâ ist dirre werlte leben / niuwan der sêle verlust. / ouch hât mich werltlich gelust / unz her noch niht berüeret, / der hin zer helle vüeret.* (a.H.691) まことにこの世の人生とは魂の喪失に他ならないのです。また今日まで、地獄へと導く世俗の欲は私に触れたことはまだ一度もありません。
- (178) *jâ muoz ich mînen lîp / verliesen von den wunden, die ich empfangen hân.* (Nib.2067.3) まことに私は自分が受けた傷で命を失う羽目になるのですから。
- (179) *des dû mich gevraget hâst, / daz sage ich dir vil gerne.* (a.H.434) あなたが私にお尋ねしたことを、私はあなたに喜んでお答え致します。
- (180) *swaz ich gewürken künne den Hartmuotes man / und Gêrlinde wîben, sît mîn hât got vergezzen, / daz lîde ich allez gerne, ich bin mit manigem kumber besezzen.* (Kud.1036.3) 私がハルトムオト殿の家来やゲールリント様の侍女のために働くことができることは何でも私はすべて耐え忍ぶ所存でございます。神が私をお忘れになったわけですから。私は多くの心痛で苦しめられているのです。
- (181) *Ir wizzet wol, her Hartmuot, swie iuwer wille stât, / daz man mich bevestent einem künige hât / mit vil stæten eiden zeinem êlîchen wîbe.* (Kud. 1043.2) ハルトムオト殿、あなたのご意志がどのようなものであらうと、私がひとりの王様と固い契りを交わして婚約したことをあなたは良くご存知でしょう。
- (182) *Genâde sîner dienste, die er mir enboten hât, / und mîner swester, sît ez alsô stât, / daz si lebet mit freuden, der künec und sîne man, / wand' ich doch der mære gefraget sorgende hân.* (Nib.1443.1/4) エッツェル王殿とご家来の方々が楽

しく過ごしておられるという状況をうかがっておりますからには、王殿と私の妹が私に使者をよこして下さった挨拶に心から感謝申し上げたい。皆の様子を心配してお尋ね申したものですから。

(183) *ôwê, herre Rüedegêr, wie hân ich wider dich getân!* (Nib.1633.4) おおリュエデゲールよ、私はそなたになんとひどいことをしてしまったのだろうか。

最後に、用例延べ総数が Nib.、Kud. では 4 割を超え、a.H. でも 3 割程度で現われる「その他」としたコンテキストの特徴を確認しておく。まずはある程度の言語的指標が認められるばあいを挙げておいた。最初の例 (171) ~ (173) はコンテキストが疑問文となっているケースである。例 (171) は直接疑問文 („seid ihr ...?“)、例 (172) は疑問詞を用いた直接疑問文 („warum ... nicht?“) であるのに対し、例 (173) は修辞疑問文となっている。前二者は、自分が不明な点について相手に確認したり、その内容を聞き出すという行為は一種の要求行為であると言えよう。これに対し、Nib. の例 (173) は、エツェルの城内での両軍入り乱れる死闘のなかイーリンクがハゲネに一騎打ちを挑む場面で、お前などものの相手ではないとその挑戦に応じたハゲネ (du) の高飛車な返答が無意味であると突っぱねているところであるが、修辞法を用いることで話者イーリンクの断言に強調の効果がもたらされている。

例 (174) ~ (176) のように、コンテキストが推量文であるばあいしばしば見られる。前二者は、主格主語や接続詞なしで上位文の定動詞の役割を果たす動詞 *wænen* (順に „ihr glaubt dass“, „ich glaube dass“) である²³⁷ のに対し、後者には確信を表わす副詞 *sicherlîch* が用いられている。a.H. の例 (174) は、少女がハインリヒのために身を捧げることを両親に延々と説き伏せる場面の一部であるが、自分が金持ちで立派な男性の家に収まることができれば、自分が世俗的な幸福を手に入れたことになることになると両親が考えているだろうと述べる。Pf. 文では自分に (*mir*) 告げられた心の言葉はまったく別であると、推量の内容とは反対に関係づけられている。また例 (177) や (178) に見られるように、*jâ* を用いた強調文が見られたり、1 人称主語で *gerne* を用いた話者の意志を表わす文のほか、例 (181) のように *wol* „wohl, gewiss“ や *entriuwen, zeware* „wahrlich“ などの副詞によって推量、断定や断言が強められた文が見られた。Kud. の例 (180) で *daz lîde ich allez gerne* は Sowinski の現代語訳では „das will ich gern erleiden“ となっているし、例 (181) の *ir wizzet wol* は „Ihr wißt doch recht gut“ となっている²³⁸。例 (182)、(183) は、例 (106)、(107) (いずれも *wol / gelebet hân*) の *wol* で見たような動詞なしで話者の感嘆を表わす例である。

²³⁷ 第 2 部第 4 章の例 (90)、(91)、(92) も参照のこと。

²³⁸ Sowinski (1995) 182/184.

- (184) *dû bist vil alwære, / daz dû dich sô manige swære / von selher klage **hât an genomen** / der nieman mac zeim ende komen. (a.H.547)* 誰も解決できない苦しみから多くの重荷を自分に引きうけるとは、お前は本当におばかさんだよ。
- (185) *Nu ist iu doch gewizzen, waz wir **haben getân**. (Nib.1459.1)* われわれが何をしたのかをそなたはしかしまったくご承知のはずである。
- (186) *Mich nimt des michel wunder ... wie **habt** ir sô **verkêret** die vrœlîchen sit, / der ir mit uns nu lange **habt alher gepflegen**? (Nib.154.2/3)* 私には不可解です。どうしてこれまでそなたらがわれわれとこれまで長い間付き合ってきた楽しいやり方を変えてしまわれたのですか。
- (187) *Jârâjâ ... waz **haben** wir **getân**! (Nib.477.3)* 何たることだ。われわれはえらいことをしてしまったぞ。
- (188) *nu ist doch unser eigen Sîfrit ir man: / er **hât** uns nu vil lange lützel dienste **getân**. (Nib.724.4)* だって彼女の夫ジーフリトはわれわれの家臣ではないか。あのものはこれまでずっと何も家臣の務めを行なってこなかったではないか。

コンテキストに一定の明示的な言語的指標があるわけではないが、表現内容から考えるとそこに広義の話法性が現われていると判断した箇所を例(184)～(188)に挙げた。そしてこの5例は順に、断言、主張、怪訝、遺憾、非難など、一般的な話法性だけでなく、話者の感情表現を伴っている箇所も出来事に関係してくるとみなしてここに分類した。a.H.の例(184)は、ハインリヒの病気治癒のために自分の身体を捧げようと決心したが誰も許してくれないであろうと泣く娘の姿を見て両親がかけた言葉の一部であるが、彼女が毎晩泣き崩れることは何の足しにもならないと諭すだけでなく自分たちを静かに寝かせてほしいという気持ちを込めて、やや強い調子で呆れた様子を表わしている。Pf.を用いた出来事は聞き手に対する断言的態度に結びつけられている。Nib.の例(188)は、臣下ジーフリトの妃クリエムヒルトの堂々とした(hôch)態度の理由を知りたいと思う王妃プレンヒルトが独白する場面であり、この心の叫びは全体としてクリエムヒルトを非難する根拠を述べている。コンテキストは、夫ジーフリトは自分の臣下であるならそれなりの務めを当然行なわなければならないという義務の意味を含意している。にもかかわらずその務めを果たしていないというPf.文は反意を表わす文であると言える。なお、例(187)は文形式上はうゑに挙げた定動詞を用いない感嘆文となろうが、感情表現のヴァリエーションという意味でここに挙げた。この意味では例(183)(genâde / **enboten hât**)

も同様に遺憾の意を表していると言える。

このように、Pf.文は、その過去の、完了的出来事が、コンテキストの語法性、すなわち話者の何らかの主観的態度を帯びた事態に直接的、間接的に結び付けられるかたちで現われている。つまり過去の、完了的出来事は、過去に起きたほかの出来事と「語り」のなかで関係を結ぶのではなく、話し手と聞き手が居合わせる現前の状況（の何か）に関連性をもつのである。こうしたパターンで現われる Pf.が中高ドイツ語の3作品では85%を超えるという高い出現率となっている。

第4章 文接続における意味関係

それでは現前の発話状況やそこで生じている事態に対し、Pf.文で表わされる出来事は、どのような関係を結んでいたのであろうか。うえに挙げてきた例でもある程度意味関係を見てきたが、本章では、より対等な文接続を構成するばあい²³⁹に注目してさらに考察をすすめる。用例を整理していくと、Pf.文が典型的にはつぎのような接続関係をもっていることがわかる。それは何と云っても現在の状況を表わす先行文や上位文に対して因果関係を表わすケースである。まずは *sît*, *wande* などの理由を表わす接続詞を用いた例 (100) (*müezen / sît ... hâst verjehen*)、(138) (*solt / wand' ... hân getân*)、(140) (*müget / wan ... gesinnet hân*)、(169) (*ist / sît ... gesehen hân*)、(176) (*sît daz ... hân verdienet / werden*)、(180) (*sît ... hât vergezzen / lîde*) などが挙げられる。しかしより重要なのは、たとえば例 (117) (*wære / hâst vernomen*)、(124) (*lige / hân vergolten*)、(139) (*suln / hânt getan*)、(151) (*saget / ist komen*)、(155) (*sî / bist komen*)、(156) (*rechez / hân getân*) などのように接続詞をまったく用いないばあいであろう。

(138) *Jane solt du mirz, Kriemhilt, ze arge niht verstân, / wand' ich âne schulde die rede niht hân getân.* (Nib.820.2) クリエムヒルト殿、どうか私のことを悪くとらないでいただきたい。 と言うのは私は訳もなくそのような話をしたわけではないのですから。

(139) *die suln hie bestân. / si hânt mir hie zen Hiunen sô rehte leide getân.* (Nib.1994.3) 彼ら (=敵勢) はここにとどまらせよ。 彼らはここフンの国で私にきわめてひどい目に合わせたのであるから。

²³⁹ 本来の並列接続だけでなく、理由を表わす *sît* や *wan(de)*、条件を表わす *obe* といった接続詞を用いた文など、上位文とより対等なレベルにある従属接続を含める。したがって、動詞の目的語文や関係文などに見られる用例は、基本的にはここに含まれない。

再掲したこの2つの例を見ると、これらの箇所には、話法性を含んだ先行文あるいは上位文の事態が、客観的事実として過去の、完了的出来事を必要としているという構成ができていることがわかる。あるいは、ある事柄に対してとっている話者の主観的態度の根拠づけ行なう箇所で Pf.が用いられていると言えるであろう。例(138)は、クリエムヒルトとプリュンヒルトとでなされる夫自慢が火種となって口論が熱を帯びてくる場面であるが、プリュンヒルト(ich)が直前になされた自分の発言の正当性を根拠づけるところで Pf.が用いられている。とくに何の接続詞も用いない例(139)のようなパターンで Pf.が現われるばあいでも、Pf.文それじたいで出来事が現前の発話状況(の何か)に関係づけられていることを明確に読み取ることができる。

しかしこのような因果関係は、例(120)(**hât gerüemet / gêt**)、(142)(**hât gerüemet / sol**)、(146)(**suln / hab' bekant**)あるいは第2部で言えば、例(95)(**hât geseit / sol**)、例(96)(**solz / hât beswæret**)、例(97)(**hât gedienet / muoz**)などのように、条件文内に Pf.が用いられるばあいにも含意されると考えられる。

(142) und **hât** er sichs **gerüemet**, *daz sol er hæren lân, / oder sîn muoz lougen der helt ûz Niderlant.* (Nib.855.2) 彼(=ジーフリト)がもしそのようなことを吹聴したのであれば、そのことを彼に聞かせてもらおう。あるいはニーデルラントの勇士には彼が自慢したのではないことをはっきり言ってもらわなければならない。

たとえば再掲した Nib.の例(142)では、Pf.文は条件文であるとともにその内容は理由をともなって、帰結文に結びつけられている。グンテルとプリュンヒルトとの初夜のさいにジーフリトが身代わりになったことをジーフリト自身が触れ回ったという噂が真実であれば、まさにその事実性を理由に話者であるグンテルは彼から事情を聞きださなければならないし、潔白を誓ってもらわなければならない。このパターンの接続では「～が真実であればまさにその事実性が理由で、～すべきだ、～してもらいたい、～しよう…」という訳語となる場所である。条件・帰結関係のなかにこのような意味関係が構成され、その条件文内で Pf.が用いられる例を4例挙げておく。

(189) ... **hâst** du daz magedîn / **bî** den mînen friunden **gesehen** in disen rîchen, / *sô wil ich dir lônem dirre mære lobelîchen.* (Kud.458.3) …もしお前がその国で私の身内とともにその乙女を見たというのであれば、私はお前にこの知らせのことでたっぷり報酬を与えよう。

- (190) **hât** si dir iht **gedienet**, *des muoz si in disem lande geniezen.* (Kud.1583.3) 彼女がそなたに良くしてくれたというのであれば、この国で彼女は利益を得てもらわなければならない。
- (191) und **hât** si daz **geseit**, / ê daz ich erwinde, *ez sol ir werden leit...* (Nib.858.1) もし彼女がそのようなことを言ったのであれば、私が事態を収める前に、彼女を痛い目にあわせなければならない…。
- (192) daz hilf' ich immer rechen, **hât** im iemen iht **getân**. (Nib.883.4) もし誰かが苦しみを与えたのであれば、私はどんなことがあってもそのことの復讐をする手助けをいたします。

しかしまた、例 (106) (wol ... **gelebet hân**)、(107) (wol ... **gelebet hân**)、(134) (sol lônén ... **habt geseit**)、(157) (lône ... **hât gesaget**)、(158) (lôn' ... **habt verdienet**) など上位文の一要素を説明する補文内で Pf.が用いられるばあいにも、因果関係が絡んでくることがある。繰り返し指摘してきたように、上位文に話者の主観的態度が現われている。再掲した Nib.の例 (106) では、Pf.文の動詞行為 **gelebet hân** „erlebt habe“は、話者すなわちジーフリト (ich) の喜びの対象となると解せられるが、内容的にはまさにクリエムヒルトと面会することができたという喜びの理由にもなっている。また a.H.の例 (157) は、手術をやめるように少女に説得する医者に彼女が返答する場面であり、**daz** 文の内容は少女が請い願う神の思し召しの対象になっているが、医者 (ir) が説得のためにあれこれ誠意をもって話したその内容は他方でまた少女 (mir) が神に対して祈る理由にもなっている。ここに挙げた例は、発話状況で話者がとる主観的態度の根拠を過去の出来事から引いてくるという構成になっていると言えよう。完了的、過去の出来事は相対的な扱いを受けていると言っても良い。

- (106) *Sô wol mich ... daz ich gelebet hân*, / daz Kriemhilt diu vil schoene sol hie gekrœnet gân. (Nib.704.1) 私がここであのいとも美しきクリエムヒルト殿が戴冠することを目の当たりにできたとはなんと喜ばしいことか。
- (157) *got lône iu, lieber herre*, / daz ir mir alsô verre / **hât die wârheit gesaget**. (a.H.1114) 敬愛すべきお医者様、あなた様がかくもまことに私に真実を述べて下さったことに対して、神があなた様に報いますように。

このほか、話法性のありかを探るコンテクスト調査では対象外となったせりふ冒頭部や挿入文で Pf.が用いられるばあいを見ておきたい。コンテクストが具体的な言語表現というかたちでは認められないケースである。第 1 章でこれら 2 つのケースを現代的環境であると見なしたのであるが、ここには一種の話者

の態度が現われていると考えられる。挿入文を含む文構成では、これを取り除いても上位文のみで文は成立するが、そのときもともと上位文であった文のテキストにおける価値も変わらない。挿入文の役割は上位文の内容に対して、話者の立場から補足的、追加的に修飾することにある。

そこにはどのような話者の主観的態度が見られるのであろうか。したに再掲した Kud.の例 (115) で見ておくと、ここはヴェルペンザントで自分の娘を誘拐したノルマンディーの軍勢に追いついたヘゲリングン勢側はモール人の援助にも預かると語られる箇所である。このことを話者である作者 (ich) も聞き知ったのです (*hân vernomen*)、とコメントが加えられているのであるが、語りの内容から外れることによって聞き手の意識はいったん話者に向けられることになる。挿入句による切り替えがなされることで、話者は話の内容に対して相槌を求め、注意して聞いてほしいという要求を込めているであろう。また例(193)では、ヘゲリングン軍によってノルマンディーのハルトムオトの城がついに攻め落とされるところの具体的描写がこの前の箇所で述べられている。落城したことについてはさきに述べた (*hân geseit*) とおりですよ、と話者 (ich) が聞き手 (iu) に念を押して語りかけている。ここに見られるような挿入文には、聞き手に対する注意喚起という意味で話者の態度が現われていると考えられる。

(115) Die vil stolzen Mœre, als ich **hân vernomen**, / die wâren von ir schiffen zuo ir vînden komen. (Kud.874.1) その非常に誇り高いモール人たちは、私が聞いたところによると、自分たちの船から出てきて敵勢に立ち向かった。

(193) Diu burg was gewonnen, als ich iu **hân geseit**. (Kud.1498.1) みなさんに私が述べたとおり、城は攻め滅ぼされておりました。

また、せりふ冒頭部における Pf.文の使用については、具体的には対話相手の発言に対する応答と、ある程度地の文で語りがつづいた後に現われるタイプに分けられる²⁴⁰。最初の例として2例挙げておく。

(194) „Nu sît uns grôze willekomen, ir zwêne degene, / Volkêr der vil küene und ouch

²⁴⁰ ただしこのほか、ある人物の発言が一旦途切れ、そこに語りの声が入った後、ふたたび発言が(並列的に)続けられるさいに Pf.が現われるパターンが Nib.に3例、Kud.に1例見られた。同一人物の発言の連続体での Pf.の使用であるため、せりふの冒頭での用例とはみなされない。が、どの例も後続文はある程度改まった内容となっているため、冒頭部での使用と判断した。次例を参照: „Die rede lât belîben“, sprach si, „frouwe mîn. / Ez **ist an manegen wîben vil dicke worden scîn**, / wie liebe mit leide ze jungest lônem kan.“ (Nib.17.2) 『そんなお話はおやめになってください』彼女は言った『お母様、喜びがついには苦しみでもって報われるということが多くのご婦人たちにきわめてしばしば示されてきました。』

Hagene, / mir und mîner vrouwen her in ditze lant. / sie hât iu boten manige hin ze Rîne gesant.“ / Dô sprach von Tronege Hagene: „des **hân** ich vil **vernomen**.“ (Nib.1811.1) 「勇士のお二方、非常に勇敢なフォルケール殿、またハゲネ殿、本当によろこそ私と私の王妃のいるこの国へ参った。王妃がそなたらに多くの使者をラインの国へ送ったのだ。」そのときトロネゲのハゲネは答えた。「そのことはしかと聞き及んでおります」。

(195) „war sint die eide komen? / ich hân an iuwer reise michel arbeit genomen.“ / Dô sprach der künic zem gaste: „ir **habet** mich reht‘ **ermant**.“ (Nib.609.1) 「あの誓約はどこへやってしまったのですか。私はこの遠征で少なからぬの骨折りをしてまいったのです。」すると王(=グンテル)はこの客人に対して答えた。「そなたが私を咎めるのはもっともである」。

Nib.の例(194)は、エッツェル王が自分の妻の故郷からやって来た彼女の一族や家臣らを歓迎している場面であり、王の挨拶に対してハゲネが答えている。歓迎の挨拶のなかで述べられた、王妃クリエムヒルトが使者たちを送らせたという発言に対して、話し手となるハゲネ(ich)は現在の状況を交えた何らかの応答を行なわなければならないところであろう。王妃が使者を送ったという過去の出来事についての発言内容を受け、これに配慮した発言をしているのであるが、Pf.を用いた過去の、完了的行為(hân vernomen)は、weiz („weiß“)で置き換えられるようなむしろ現在における結果的意味をもっている。

また例(195)はコンテキストの疑問文を受けて答えるさいに Pf.が現われる例である。プレンヒルトをグンテルの王妃として迎え入れることに成功すれば彼の妹クリエムヒルトを自分の妻としてもらえるという約束がグンテルとジーフリトとの間でなされたが、その誓約が果たされていないことを責めるという疑問文とその返答の場面である。話者グンテル(mich)は果たされていない誓約にかんして何らかの事情をこの場で呈示しなければならない。過去の出来事についての説明が求められる箇所である。ただしここでは要求された質問内容に直接的返答は避けられ、自分に対する咎めだてをした相手の発言行為の妥当性を認める答えとなっている。これらのせりふ冒頭部は、話し相手とのコミュニケーションのなかで話者に求められる何らかの対応を行なうかあるいは説明責任を果たさなければならない箇所である。

(III') Si giengen beide sitzen und ander niemen mêt. / der künic der was rîche; Wate der was hêt / und ouch übermüete ze allen sînen dingen. / Hetele hête gedanke, wie er in ze Irlande solte bringen. / Dô sprach der junge recke: „ich **hân** nâch dir **gesant**. / boten ich bedörfte in des wilden Hagenen lant.“ (Kud.239.1) 彼らは二

人腰を下ろしたが、ほかの誰もそこにはいなかった。王（＝ヘテレ）は高貴であったが、ヴァテもまた堂々としていたし、何ごとに対しても自信に満ち溢れていた。ヘテレはヴァテをどうやってアイルランドへ行かせようかと思案していた。そこでこの若い勇士は言った。「私はそなたを迎えにや
ってよこした。私には剛勇のハゲネの国へ送る使いの者が必要なのです」。

これに対し、Kud.の例（111'）のようなより本来的なせりふ冒頭部はふつう現在の出来事が予想されるところである。地の文で話の内容が語られているにしても、せりふ部が無理なく再開されるには、聞き手の理解のために発話状況が整えられなければならないからである。まずは Dô sprach der junge recke で作中世界へ入ることが予示され、このあとすぐに話し手はヘテレ王、聞き手はヴァテへと切り替わる。発話状況が作中世界に切り替わるというだけでなく、いきなり過去の、完了的出来事が述べられる場面である。ここは現実世界の聞き手だけでなく、作中人物ヴァテ（dir）に対する注意喚起の役割が果たされなければならない箇所ではないだろうか。これらのばあい、Pf.文じたいが注意喚起の役割を果たす挿入文とはことなり、注意喚起を必要とする場面での Pf.の使用である。

挿入文やせりふ冒頭部に現われる Pf.は、Otf.で 8 例、a.H.で 6 例、Nib.で 57 例、Kud.で 46 例見られた。このように、より並列的な接続のばあいや挿入文、せりふ冒頭部での Pf.の使用面に鑑みると、過去の、完了的出来事は、発話状況（の何か）に対しての理由づけとなっている、あるいは発話状況に居合わせる聞き手に対する注意喚起の対象というかたちで現われる傾向がある程度認められると指摘できよう²⁴¹。ただし、上位文の一要素を説明する補文内で因果関係ができていけるケースでも Pf.が現われる例が見られた。

本章での調査は Pf.文が好まれるコンテキストの特定であった。話法的環境に比較的高い頻度で現われるという結果は、Pf.文の意味ではなく、Pf.あるいは Pf.文が影響を受けうるコンテキストの意味についてである。したがってそれがどの程度の影響を及ぼしているのかは接続のしかたによってその都度こととなる。また、因果関係が必要とされたり注意喚起がなされる文で Pf.が現われるという一定の指向性とは、コンテキストとの関係で見えてきた Pf.文のテキスト内の価値についてのものである。中高ドイツ語では、Pf.は、その都度の発話

²⁴¹ このほか例（159）（getörste / **hân getân**）、（188）（ist / **hât getân**）のように、Pf.文がコンテキストに対して反意の関係を結ぶ例も見られた。しかし詳しく見れば、例（159）の Pf.文は先行文の発言に対する補足説明的な内容となっているし、例（188）のそれは話者がとっている非難の態度に対する理由づけと考えられる。このように考えればどちらも話者の主観的態度が現われている箇所であると解釈できる。

状況に応じて過去の、完了的出来事を発話状況（の何か）に結びつけるという話者の介入を伴う使用環境が好まれるようになっていたと仮定しても良いのではないかと考える。

さて、ここでもし現代語で考察した語用論的意味との比較が許されるなら、またつぎのように仮定することも可能であろう。現代語でしばしば見られる語用論的意味が少なくとも中高ドイツ語期に慣習化されつつあったと。第1部第4章ではたとえば、Duden や Flämig らの指摘に示唆されるような、発話状況にとって重要な過去の出来事を表わすばあい、また Brinkmann が指摘するように過去と現在のあいだに因果関係ができるところで Pf.が必要とされることなどを見てきた。そして、Engel に至っては、Pf.が表わす出来事が過去のでないばあいにもその語用論的意味 („für die Gesprächsbeteiligten von Belang“)を認めていることを同章で言及した²⁴²。中高ドイツ語では Pf.の未来完了的用法は決して多くはないが、たとえば以下のような例が見られる。

(196) *Unde sult durch mînen willen si ze hove tragen, / swenne ir wider wendet, daz man mir müge sagen, / wie ir mir **habt gedienet** dâ zer hôhgezît. (Nib.1707.3)*
そしてそなたは私のためにそれを宮廷で身につけてください。ご帰国なさるさいに、その饗宴でそなたが私に奉仕して下さったことを人が私に言ってくださいますように。

(197) ***hât** iu in den landen iemen iht **getân**, / daz hilfet er iu rechen, gewâhset im sîn lîp. (Nib.1917.2)* いつかもしそなたの国で誰かが何か悪いことをしたなら、彼が成長していたら、彼はそなたの敵討ちの手助けをしてくれるであろう。

この2例はどちらも Pf.に未来完了的な解釈が可能な例であるが、上位文にはどちらも話法性が現われている²⁴³。たとえば例(196)は、辺境伯リュエデゲールの国に寄ったブルゴント勢一行がしばらくの滞在のあと別れを告げる場面であり、フォルケールがヴァイオリンを演奏し、自作の歌を披露した礼にとゴテリント王妃から12個の腕輪をもらうさいにかけられた言葉である。あなた(ir)が私(mir)に奉仕する(dienen)とは目的地エッツェルの城での饗宴のさいに彼女の腕輪を身に着けることであることから分かるように、未来における行

²⁴² このほか現代語では新情報としての価値が高ければ高いほど Prät.ではなく Pf.が用いられやすいのではないかと述べた。これは中高ドイツ語では注意喚起がなされる場面ではしばしば見られた Pf.の使用傾向と符号すると言えるかもしれないが、この点については、同じ環境での Prät.の用例調査が必要である。

²⁴³ 例(197)のコンテクストでは現在形(hilfet)が用いられているが、内容的には推量的未来である。Brackert (1994: 167)も Grosse (1997: 577)も未来時制を用いている: wird er es Euch ... rächen helfen / so wird er euch helfen, das zu sühnen ...

為である。

さて、Pf.の歴史的記述のなかには語用論的な観点が認められるものがわずかながら認められる。古高ドイツ語では、Otfredの福音書に現われるPf.の意味についてコンテキストを十分に汲んで文献学的分析を行なったBrinkmannの見解がある。彼はテキストを地の文とせりふ部とに分け、前者のばあい理由づけや強調（個別化、包括化）、後者では理由づけ、強調、確認などを認めている²⁴⁴。これらはより厳密には、テキスト機能的意味、文体的意味を指摘したものであると言えよう。しかし、現在の環境では現在との関係を生み出し、何らかの際立ちを与える一方、過去の環境では過去の意味が強調により際立たせられるなど各々の意味が現われるコンテキスト条件をより詳細に規定している。彼の時制論へのアプローチには特徴的なところがあり、印欧語が持っていた豊富な時制形式がゲルマン語で削減、分散を被った結果残った2つの時制形式すなわち現在時制と過去時制の意味体系にそもそも時間やアスペクトレベルの意味論を想定していない。そこに「意識の上で近くにあること」対「意識の上で遠くにあること」(Bewusstseinsnähe vs Bewusstseinsferne)という意味的対立が対応しているとする立場をとっている。それは時間的な差異でもなく、アスペクト的差異でもなく、話者の出来事に対する態度が重要であると述べている²⁴⁵。Pf.の意味記述を追っていくと、この形式をあくまでも現在時制に属するものとみなし、そこには出来事に対する話者の「意識的近さ」が備わっていると考えることが分かる。本論でのコンテキスト調査結果はこの説をある程度裏書きしていると言えるかもしれない。コンテキストに話者の主観的態度が現われる頻度は、今回の用例調査から、中高ドイツ語期にかけて急増することが見て取れたため、この時期の用法を重点的に分析、考察した。

Paulの中高ドイツ語の共時的文法書でPf.の意味用法がどのように記述されているかについては第2部第4章でやや詳しく見た。そこには、話者の態度を想起させるようなくだりがある。Pf.には過去の出来事が現在へ関係づけられることとならんで、過去の出来事が主観的に観察されるばあいがあると指摘されている(das vergangene Geschehen subjektiv betrachtet wird)²⁴⁶。ただしこれも述

²⁴⁴ Brinkmann (1965) 36ff. 説明のなかで例示されているもののうち、本論文で挙げた例はつぎのとおりである。地の文：理由づけ(例(130)(**haben giaforot, ubarkoborot**))、強調(個別化(例(58)(**habet binagilit, bisperrit**))、包括化(例(56)(**habet gizaltan**)))、せりふ部：理由づけ(例(55)(**eigun gidan**))、強調(例(51)(**haben gimeinit, bicleibit**))、確認(例(61)(**ist queman**))。とくにせりふ部では感情の表出がより強く現われる箇所を用いられ、たとえば例(51)などでは(登場人物の)個人的性格付けがなされると述べている。

²⁴⁵ Brinkmann (1965) 14.

²⁴⁶ 第2部第4章を参照。ただし新版での表現 *subejktiv* は、改訂前では *in irgendeinem Sinne mit subjektiver Stellungnahme* となっていた。改版のさいに何らかの意図で「主観的」とい

べたことであるが、それは **Prät.**の意味用法のうちの一つと同一であるし、その「主観的」な意味がいったい何であり、例文として挙げられているもののうちどれに当てはまるのかは明記されていない。一方、**Pf.**の通時的研究を行なった Grønvik は、**Pf.**と **Prät.**の意味的な差異を議論するところでつぎのように述べている。

Vielleicht darf man die Hypothese wagen, daß der ursprüngliche, objektiv bestimmbare **Gegenwartsbezug** der zusammengesetzten Form durch Zeitbestimmungen wie *gestern, dann, als*, usw. aufgehoben und **durch einen subjektiven Gegenwartsbezug ersetzt wird**: Die haben/sein-Fügung tritt ein, wenn der Redende **an den Geschehnissen der Vergangenheit gefühlsmäßig beteiligt ist** oder **ihnen eine gewisse Aktualität beimißt**, während das Präteritum eine gewisse nüchterne Distanz anzeigt. おそらくつぎのような仮説を立てても良いであろう。すなわちがんらいの客観的に規定できるこの複合形式の現在指示は *gestern, dann, als* などの時間規定語によって失われ、主観的現在指示にとって代わる。**haben/sein** を用いた形式は、話者が過去の出来事に感情を用いてかかわるかあるいは過去の出来事に一定の事実性をになわせるさいに現われる一方、過去時制は冷静な態度である一定の距離を保つことを示している。

(Grønvik (1986) 56 原文太字の強調は筆者による)

ここで述べられているのは彼の用例調査の結果やその考察にもとづいた見解ではないが、見逃すことができない指摘が含まれる。過去の一時点を表わす時間規定語によって、客観的に規定されるがんらいの現在指示が失われ、主観的現在指示に入れ替わるという部分は、歴史的記述としてはやや不明瞭である。がんらいの客観的現在指示とは再分析が生じる前の古高ドイツ語初期のことを指しているのに対し、過去の一時点を表わす副詞類が共起する例が増大するのはずっとのちの初期新高ドイツ語期に入ってからであるためである²⁴⁷。しかし、歴史的潮流という大きな流れのなかでとらえてみるならば、**Pf.**の意味を説明したこの指摘は、中高ドイツ語期に 1/2 人称表現と共起する **Pf.**の用例が急増した、また主観的態度を帯びたコンテクストでの用例が増大したという本章での調査結果と軌を一にしているのではないか。この記述のあと、Lindgren の用語を引用して **Pf.**はある種の「【私】関与性」(Ich-Bezogenheit) を示していると述べて

う意味がやや強められている。

²⁴⁷ 嶋崎 (2004) 163f. ただし中高ドイツ語では近接する特定の時点を表わす副詞 *hiute* „heute“, *hînte* „heute Nacht“などはしばしば用いられる。

いる。つまり Pf.の使用には話者が深くかかわっていることを認めている²⁴⁸。Brinkmann の言語資料にもとづいた共時的記述を除けば、Pf.が辿った歴史的発展のなかにコンテクストを重視した時間的意味、語用論的意味を見出す通時的研究はこれまで注目を浴びてこなかったのではないかと思われる。

最後にもう一点付け加えておかなければならない点がある。それは今回使用した文献が古高ドイツ語の Tatian を除いてどれも押韻文学であるという点である。Otfrid の聖書文学はまとまった規模の作品において脚韻を取り入れたドイツ語初のものであったし、Nibelungenlied、Kudrun、der arme Heinrich は中高ドイツ語盛期に詩人たちのあいだである程度共通語となっていた、いわゆる詩人語 (Dichtersprache) による韻文作品であった。それらの言語芸術は、つまり押韻やリズム調整という表現技法を駆使しなければ成立しない。たとえば武市 (2006) によればつぎの例のうち最初の Pf.は押韻のために用いられたとされる²⁴⁹。

(198) er sprach zem künige tougen: „ir **habt** iu selben **widerseit**. / Nu ist iu doch gewizzen, waz wir **haben** **getân**. (Nib.1458.4/1459.1) 彼は王に密かに言った。
「あなたはご自身に宣戦布告することになります。われわれが彼に何をしたか、あなたもよくご存知ではありませんか。」

フンの国からの招待を受けたグンテル王に対し、賛同する他の家臣らとはことなりただ一人ハゲネがこれをやめさせようと小声で王 (ir, iu) に進言する場面である。せりふ冒頭で用いられた Pf.の過去分詞 *widerseit* „abgesagt“は、前詩行末の *leit* „leid“と脚韻を踏んでいる。他方でこの文の意味を考えると、注釈や現代語訳からも「もし招待に応じるようなことをすれば、自分自身に宣戦布告するようなものです」という意味で用いられていることが分かる。ここには過去や完了のことがらが表わされているのではないことから Pf.の使用は押韻の方便とみなされる。このような押韻技法のため、リズムを整えるために Pf.が用いられた箇所が存在することについて反論する余地は寸分もない。

ここでの調査・分析は、Pf.が用いられるコンテクストの特徴づけあるいは指向性であった。調査対象は、名詞的迂言法 (z.B. er > sîn lîp) ではなく動詞的迂言法 (z.B. vernim > hân vernomen) である。後者のばあい、文構成の中心的存在であるため、文内や文外のコンテクストで絡んでくる他の要素との意味関係はより多岐にわたっている。使用環境の面からのアプローチから導き出された結

²⁴⁸ Grønvik ibid. „Das Perfekt bekundet also eine gewisse «Ich-Bezogenheit» ...“ しかし Grønvik の研究では語用論的意味あるいは話法性についての考察はなされていない。

²⁴⁹ 武市 (2006) 121f.

果は、当該の用例が形式の体裁を整えるためだけの存在とみなされるばあいであっても、そこにはまた過去性や話法性をもつコンテキストとの非適合性や適合性を読み取ることができるのではなかろうか。すなわち当該表現が単なる書き換え (Umschreibung) であることが比較的明確であるばあいも、何らかの意味的制約が潜んでいるのではないかと考えることができる。たとえば過去の叙述が続くコンテキストや話法性とまったく関係づけられないかたちでそのような技巧はとられにくいのではないかと推測される。韻文作品を資料に用いてある言語形式の意味用法や意味機能を問うばあい、避けて通ることのできない押韻、リズムの技巧の問題とどのように折り合いをつけていくべきかは、解決されなければならない重要な課題である。

第3部では、古高ドイツ語、中高ドイツ語に現われる Pf. 文のコンテキスト分析を行ない、そこに見いだされる意味構成から時間および語用論的意味を探ってきた。すなわち共起する 1/2 人称性、また現在の環境、話法的環境での Pf. の使用について比較的強い指向性を示していることを見てきたが、それはこの形式が「過去」という客観的時間の流れのなかでは現われにくいことを意味する。通時的に見て Pf. の形式には現在時制性が残存しているのではないかという第2部で立てた仮定は、とくに中高ドイツ語で現在性をもったコンテキストが増加するという結果にふさわしいのではないかと考える。現在時に立脚した時間の流れのなかで必要とされる過去の、完了的出来事は、「語り」のなかで現われるような客観的な出来事ではなく、多かれ少なかれ話者の何らかの判断によって価値づけられることがらであろう。とは言え、このような環境であっても当時はまだ Prät. を用いなければならなかった。

しかしまた現代語で設定された Pf. の語用論的意味もまた歴史的に増加傾向にあったことが明らかにされた。すなわち再分析を経たあと中高ドイツ語期に至って、話者の主観的態度が現われるコンテキストで Pf. が用いられるケースが増大した。アスペクト単位を作る過去の、完了的出来事はテーマ化され、発話状況やそこで問題になっている他の現前的出来事と主観的に結び付けられるというイメージである。このことを多かれ少なかれ裏書きしているのは、Pf. 文では発話の現場に居合わせる話し手と聞き手すなわち 1/2 人称が表示されるケースが頻出する傾向にあったという調査結果であろう。ここにも発話状況とその都度の出来事との「近さ」が感じられる。

こうして Pf. の拡充期には、一方では、過去の、完了的な動詞行為を指示する過去分詞と、非過去の位置をとる基準時 (後時的観点) を供給する、機能化した haben/sein の姿を読み取ることができる。他方で、出来事を主観的にとらえるさいに用いられるという語用論的用法を新たに獲得しつつあったプロセスが浮かび上がってくる。とくに注目した語用論レベルで現われる主観的意味を

Pf.文に帯びやすい広義の話法性と捉えることが許されるなら、これとならんでアスペクト (RP) や時間性という 3 つの観点からの意味分析が通時的にも可能となる道が開かれるのではなかろうか。

結 論

本論文では、まず現代ドイツ語の時制論における Pf. の位置づけについて検討し、とくにこの時制形式の意味を問うさいにしばしば援用される観察時点 (Bz) に焦点を当て、これを議論の出発点とした。そしてこの操作概念を 2 つの役割に分割することを提案した。それは、a) 過去の、完了的出来事を眺める後時的観点、b) 出来事を発話状況、あるいは発話状況で問題となっているほかの出来事と何らかのかたちで結びつける話者の視座である。過去分詞によって生み出されると考えられる a) は、回顧的視線 (Rückschau-Perspektive : RP) の基点であり、現在だけでなく未来や無時間的位置もとる。その移動可能性を Pf. に内在する現在時制性に根拠を求めて良いのではないかと指摘した。話者の視座とした b) は、客観的な現在時というより心理的現在であるが、重要なのはむしろ、ここを原点とした主観的なはたらきである。また、当該の過去の、完了的出来事が発話状況 (の何か) に結びつけられるさい、ことなる局面にある 2 つの事象には因果関係ができていたり、出来事が注意喚起的に伝えられる場面で用いられることがある。この考えかたのベースとなったのは文法書などで指摘される Pf. の語用論的意味である。こうして現代語の Pf. は、形式としてより客観的なアспектをもっている一方、用法の上ではより主観的な話者の態度が現われると暫定的に結論付けた。

3 つの時間点を用いた Reichenbach の記述法は、時間の論理的関係を明確に示してくれるというだけでなく、時制意味論の体系化にも寄与しうる有効な手段である。とくに Bz の導入によって 3 種の完了時制の意味の明確化が図られる。しかし一見時間的關係が言い表わされているように見える 3 点の位置からは、むしろまず形式に潜むアспект的關係が映しだされていることがうかがわれる。概念規定について統一の見解が得られていないこの Bz は、本論文での議論から、ドイツ語の Pf. に想定されることなるレベルの意味機能を体系化するための有効な手掛かりになりうるものとして上記の 2 つのはたらきに分割した。こうして、これまで包括的に扱うのが容易ではなかった動詞行為のアспект性、時間性、語用論レベルの (広義の) 話法性が視野に入れられることになる。アспект単位として設定した RP について、その後時的観点が現在時に位置するのがもっとも基本であるが、このばあい動詞行為の時間性とアспект性の境界はあまり明確でないことがしばしばである一方、それが現在時以外に位置するとき、完了性、結果性がより明確に現われると想定される。そのさい動詞のアクティオーンズアールトや用いられる副詞類も意味用法の成立にかかわってくることは言うまでもない。語用論レベルで言うと、過去の、完了的出来事は発話状況のなかで重要な情報として伝達されるのである。話者は Pf. を用い

てこれらの機能を巧みに利用していると想定することが可能である。

Pf.を発達面から見ていくと、古高ドイツ語期以降本格的に歴史の舞台に姿を現わすようになる *sein*, *haben* による両形式は、その成立状況や発達プロセスは少なからずことになっていた。形態的には、*sein* 完了は *haben* 完了より自然に成立したであろうし、成立時期もより早かった。それは、すでに古い時代に定着していた *sein* 受動の発達の延長線上で捉えることができ、態の形式と同様に使用動詞のアクツィオーンズアールトに応じたアスペクト表示にも容易に寄与しえたからである。結果性を帯びた所有構文に始まる *haben* 完了は、*sein* 完了にも影響を受けて歩みを促進させたと考えられるが、その途上で SVOC から SVO への構造的改新という大きなハードルを超えねばならなかった。*sein* 完了はこのあと使用動詞の拡大があまり進まずに用法を定着させるが、*haben* 完了では使用動詞のアクツィオーンズアールトの制限を徐々に解除してゆくことで、アスペクト表示の多様性が増していき、16 世紀には話法の助動詞や状態相動詞 *haben* を受け入れることで文法化が終了したとみなされる。

このプロセスをより良く理解するためには背景となる時制、アスペクトの発達史を視野に入れなければならない。2 時制体系であったゲルマン語では、一方で強変化動詞の過去形が古い印欧語の現在完了を受け継いだし²⁵⁰、過去現在動詞は部分的に結果的意味を残す古い形態を現在形としてもっているものの、それらは、新機軸の弱変化動詞や一部の特殊クラスの動詞と文法機能上の差を生むという風には発達しなかった。この点で現在完了、アオリスト、未完了過去を動詞語幹で区別した古典語とはまったくことなる。また造語論にまで視野を広げると、弱変化動詞をつくるさい接尾辞にある程度のアスペクト的差異を伴っており、一部のクラスは完了性の表示に貢献したものの、ドイツ語史に入るとやがて形態じたいの差異を失ってしまう。もっとも積極的な完了アスペクト表示手段は、ゴート語でアスペクトペアを作っていたとみなされる接頭辞 *ge-*であった。しかしそれは中心的機能を徐々に過去分詞の形態指標へと移していき、がんらいの意味機能は中高ドイツ語期までにほとんど弱まってしまう。こうして、完了的、結果的な動詞行為を明示するには、古高ドイツ語期以降、文法的手段ではなく、語彙的手段による個別的表現に席を譲るかに見えた。

しかし、古高ドイツ語期にはとくにアスペクト性や時間性を明示する文法的手段として、さまざまな迂言形式が登場する。複数の語を用いた表現は、全般的に言えば、語末母音が曖昧化するのに伴ない文法弁別機能が徐々に低下したことを受けて、これを補うかたちで現われはじめた有標形であるという風に説

²⁵⁰ しかし機能的には完了アスペクトだけでなく、実際にはアオリストや未完了過去の意味をも受け継ぐものであった (Krahe¹(1967) 94)。

明されるだろう。しかしそれらは、たとえば受動態のように、総合的形式による文法カテゴリーを継承したことが明らかに見て取れるケースとはことなり、ゲルマン語では存在しなかった文法カテゴリーの明示的表現である。つまりこの時期に衰退、消失しつつあったのは、接辞を用いての文法的表示であって、拘束形態素によるそれではない。それは根幹となる文法カテゴリーから外れたところでのアスペクト表示の継承であった。ここに見て取れることは、完了アスペクトを安定して供給する形態手段を必要とするドイツ語の指向性あるいは内的要求であろう。過去に起こった動詞行為にかんする完了アスペクトがどのような言語手段によって表示されてきたかについて記した概略図を以下に挙げておく。

【図 4-1】 過去領域における完了アスペクト表示手段の変遷

<古い印欧語> [現在完了]	<ゲルマン語> [過去形] 強変化動詞 接頭辞 <i>ge-</i> 弱変化動詞接尾辞 (過去現在動詞)	<古高・中高ドイツ語> [過去形] <i>haben/sein</i> 完了形
-------------------	---	---

古い印欧語では、たとえばギリシア語やラテン語等に *Pf.* が文法カテゴリーとして存在した (図中の [現在完了])。しかしゲルマン語以降、過去領域を表わす総合的手段としては *Prät.* しか発達しなかった (図中の [過去形])。ゲルマン語では、積極的であれ、消極的であれ、完了性、結果性を表示する手段 (図中の 3, 4 つの形態) は存在しても、そうした文法的形態は機能的に損失や漸次的衰退を被った。ここで見逃してはならないのは、完了アスペクトが実現されるばあいに用いられる時制形はすべて *Prät.* であったという点である。一方で、単一の語形だけで完了アスペクトを表示する手段が失われたり、衰退しつつあったことを受けるようにして出現し、発展を遂げる *haben/sein* 完了形のほうは、2語を用いての表現法であるという点とならんで、定動詞には現在形が用いられるという点が問題となる。

動詞形態を 2 つ用いて表現する迂言形式とは、意味の追加、変容をもたらす機能がより直接的に定動詞にかかわる接辞の添加とはことなる。動詞行為を表わす本動詞は不定詞、現在分詞、過去分詞に姿を変える一方、助動詞もまた定動詞としての役割をにないつつ機能的に作用していると考えられる。*Pf.* の意味分析には、アスペクト機能を分担する過去分詞の意味論が重要であると言って

良いであろうが、他方で構造の一部である助動詞の意味論を積極的に視野に入れる必要があると見なした。迂言形式を個々の形態の機能に還元してとらえるアプローチは、迂言形式の拡充期という発達段階を考察対象とするさい、一方では機能化が進むが、他方でがんらいの機能を残している可能性が低くないと考えられるため、より有効であると思われる²⁵¹。こうして過去分詞を中心としたアスペクト性、助動詞に発達する *haben/sein* の現在時制性の意味論が中心テーマとなった。

現代語での議論から導かれた形式としての意味を探るため、古高ドイツ語、中高ドイツ語の用法を、文法書および研究書の記述を用いて比較、検討した結果、再分析を被ったあとは、つぎのように、現代語と同様の意味的構成が読み取れると判断した。すなわち、2つの迂言形式は、現在時から見た過去の、完了的出来事を表わすという完了アスペクト表示機能を基本としてもっているが、なかには後時的観点が未来や無時間にも位置することがあった。ただし一般的な記述では、そこから読み取れる現在時制性についてあまり重視されていない。また、例文をいくつか分析してみると、動詞行為の完了性や結果性は、アクティオンスアールトが極めて明確なばあいや、後時的観点が現在時以外に位置するときとくに顔を出しやすいが、これが現在時に位置するときには過去性(つまり時間性)との境界は明確ではないことがうかがわれた。歴史時代における Pf.の形式に現在時制性が残存していることを認めるにはコンテキストとの意味関係からのアプローチが不可欠であると考えて、そしてまた従来の研究で重視されているとは言えないアスペクトや語用論的観点からの意味分析を行なうため、一定の言語資料を用いてコンテキスト分析を中心とした用例調査を行なった。

調査結果から、この形式の出現後少なくとも中高ドイツ語期に至るまで Pf.のコンテキストは圧倒的に現在の環境であった。つぎにこの時期に 1/2 人称代名詞が共起する Pf.文の用例が急増することが見て取れた。しかし話法性をもつコンテキストでの Pf.の使用にかんしてもまたその出現度が増加するのである。こうして過去の、完了的出来事が何らかの話者の何らかの態度によって発話状況あるいは発話状況で起きている別の出来事と結び付けられるという用例が中高ドイツ語期に増大したことが示された。出来事と発話状況とのあいだには、因果的關係がしばしば見られるほか、注意喚起が必要な時に用いられるという

²⁵¹ ただまた、迂言形式に想定される統一の意味の追求には限界があるという消極的理由もある。これまで「過去の、完了的出来事」あるいは「完了性あるいは結果性」などと表現してきたように、とくに歴史的資料に現われる動詞表現のアスペクト性を峻別することは非常に難しい。コンテキスト要素などを手掛かりにその都度の用例に比較的明確に認められる意味要素から推論される意味分析である。

ある程度の傾向も見られた。一方では形式として、非過去の位置をとる後時的観点を基点とした過去の、完了的出来事の表示というアスペクト的な機能を備え、他方では語用論的に話者の主観的な態度によって出来事が発話状況（の何か）に結びつけられる、という現代語で想定した意味構成を歴史的な姿のなかにある程度浮かび上がらせることができたと思われる。とは言え、中高ドイツ語期にはまだ、過去のあらゆる出来事を表わす主たる時制形式はなんといっても **Prät.** であった。**Prät.** が選ばれても **Pf.** が選ばれても、動詞行為じたいの時間性を問題にするならば、ふつう「過去性」が導かれるが、機能的側面やコンテキスト状況を視野に入れると、歴史的な **Pf.** にはさらに「非過去性」と「現在性」が潜んでいたと考えざるを得ないと思われる。

通時的様相を踏まえたうえでこの時制形式を体系化しようとした試みを整理してみると、それは動詞行為に着目してのものであった。すなわち、時間的には「現在完了形 vs 過去形」、アスペクト的には「現在完了形 vs **ge-**付き過去形」である。あるいはまた **werden** と **sein** を用いた古来の迂言形式のペア性をもとにして、これに介在してくる新たなアスペクト関係を創り出す姿を想定することができるかもしれない。しかし **Pf.** に想定される機能やその使用環境を踏まえてより包括的にとらえようとするならば、これが拡充期に見せていた根本的な意味的構成は、2つの主要時制との関係のなかでつぎのように特徴づけられるであろう。

【図 4-2】主時制の通・共時的意味²⁵²

	時間指示	後時的観点	語用論
現在完了時制	おもに過去	おもに現在	発話状況中心傾向
現在時制	非過去	(非過去)	発話状況中心
過去時制	過去	(過去)	過去

「時間指示」とは動詞行為が指示される時間的領域を意味するが、ここにはしばしば言われる **Pf.** と **Prät.** の同義性あるいは類似性を見て取ることができる。しかし **Pf.** の意味構造でより重要な位置を占めるのは「後時的観点」である。これは3つの完了時制にのみ必要となるアスペクト単位の一部であり、回顧的視線 (**Rückschau-Perspektive**) の視座となる基点を指す。現在時制や過去時制にはさしあたって認められないとしたが、もしこれを想定するなら **Reichenbach** の **Bz** のように動詞行為の時間指示時と一致することになる。 **Pf.** のばあい、現在時

²⁵² 通時的とあるが、初期新高ドイツ語は視野に入っていない。また **Pf.** にかんしては、古高ドイツ語期の再分析を被った後の意味用法を対象とする。

だけでなく、未来時や無時間にも当てはまるという点で現在時制の時間指示機能と一致する。出来事の過去性は、この観点との関係で生じてくるものであるため、相対的過去と言って良い。動詞行為のアスペクト表示としては、完了性、結果性が想定されるが、文単位では、過去性との境界が明確でないことがしばしばあり、優位にあった Prät.との相違を表わす指標として重視しなかった。ここまでは Pf.という迂言形式あるいはこれを用いた文単位で認められる意味である。最後に挙げた「語用論」レベルでは話者の主観的態度が見られる一種の話法的意味が現われるとしたが、Pf.はここでふたたび現在時制と類似性をもつのである²⁵³。過去の、完了的出来事はまさに心理的距離、場所的距離、時間的距離をもたない、いわばゼロ位置の発話状況で扱われる²⁵⁴。

北、西ゲルマン語に発達した革新的な Pf.は、その形態面からは動詞行為の完了アスペクトを安定して供給する形式であるように見えるが、ドイツ語では、過去性と差異をいつも生み出すという風には発展しなかった。しかしまた過去性をもった形式であるとも言えず、むしろ出来事には現在性との関係が結ばれることのほうがふつうである。拡充期にあった姿にも、また現代語での姿にも認められるこうした Pf.の特徴は、この分析的形式が Prät.や他のアスペクト表示形式とは一線を画す独自の存在であることとしるしづけとなっているとは言えないだろうか。また、今回新たに設定した分析手法によって、共時のみならず通時的にもことなる意味特徴を取り入れた Pf.の意味機能の体系的記述への道が開かれるように思われる。そのさい異質な基準は、動詞行為単位だけでなく、文単位、そして超文単位で導入されるべきであろう。

本研究では、現代語の Pf.については文法書や研究書の記述にもとづいた意味分析を行ない、暫定的な理論づけを行なった。とりわけ語用論的意味については実証的な共時の研究が進められる必要があるだろう。古い言語資料を用いての用例調査では、対象となる語形は直説法に限られていたし、量的にも十分であるとは言えない。指摘したことを詳細化したり、その有効性を説得力をもって示すには、Prät.の用例調査を取り入れること、資料を増やすことが必要になってくる。さらに、Prät.の機能をになうようになるという「過去化」が起きる

²⁵³ ただし現在時制が発話状況中心であるからといって、Pf.と同様にこの時制が主観的であるとか話法性に関係するというわけではない。Pf.のばあい、過去の、完了的出来事を後時的観点から眺めるその視線が重要であり、ここに話法性が入り込んでくるのではないかと考える。

²⁵⁴ 他方で Prät.の意味について、たとえば Brinkmann (1965: 14 / 1962: 328ff.) は、通時的記述では「意識的遠さ」(Bewusstseinsferne)、現代語の記述では「想起」(Erinnerung)を表わす時制であるとみなしている。このばあい話者が意識を移した過去領域に出来事を眺める基準点があると考えられよう。この点で語りの時制である Prät.が、発話状況に居合わせる人物である 1/2 人称ではなく 3 人称と親和性をもっていることを示した Weinrich (1994: 223) の指摘にも頷くことができる。

初期新高ドイツ語期の散文作品を調査することでようやく Pf.が辿ってきた一本の道が浮かび上がってくることになろう²⁵⁵。全体としてはさまざまな課題が山積しているが、さしあたって、動詞行為にかかわってくる 1/2 人称性と話法性の出現パターンがどのようなコンビネーションを結んでいるかを調査し、それらの関係を明らかにすることが今後の課題となろう。

本論文は、おもに英語学あるいは言語学で盛んに議論される文法化研究のなかでとくに主観化現象を扱った研究の成果に関連性あるいは共通点を見出すことができる。最後に今後の展望をも含めてこの点について触れておきたい。「文法化」は 1980 年頃からとくに盛んになった研究であり、現在では類型論研究や認知言語学の史的研究への応用などで注目される分野である。具体的にはがんらい語彙的だった要素が、通時的な過程を経て次第に文法的な要素へと発展していく現象のことを一般に言う²⁵⁶。当初は音韻論や形態統語論的アプローチが主流であったが、90 年代に入ると意味論、語用論にその中心が移っていった。前者の例としては、フランス語の chanterons „wir werden singen“が、俗ラテン語でしばしば見られた所有の動詞 habeo + 不定詞という迂言形式 (cantare habemus „singen + wir haben“)が文法化を経ることでできたというプロセスが挙げられる²⁵⁷。このばあい助動詞化を遂げた元の habeo はもはや接尾辞へと姿を変えてしまっている。後者の例にはたとえば英語の助動詞 must の意味的変遷が挙げられるであろう。この動詞は、単に義務しか表さなかった状況から、語用論的推論が働くことで話者の主観性を伴う推量、つまり認識論的意味が加わるというプロセスを辿る。

意味論、語用論を扱った文法化研究のなかで主観性を積極的に扱ったのが Traugott である²⁵⁸。彼女が提案したテーゼのうち代表的なものはつぎの発言のなかに見いだされる。「最初はおもに具体的、語彙的、客観的意味を表わしていた形式や構造が、局所的な統語コンテクストにおいて繰り返し用いられることによって、ますます抽象的、語用論的、対人的、話者にもとづく機能を得るようになる」²⁵⁹。すなわち歴史的プロセスのなかで、ある文法化現象が進むにつれてその形式がもっていた客観的意味がしだいに主観的意味へと変貌を遂げる

²⁵⁵ 嶋崎 (2004) では、初期新高ドイツ語期の Pf.の意味記述は、その過去化に焦点が当たっており、語用論的意味については扱われていない。また Kuroda (1999) の研究は、使用動詞のアクツィオンスアールト性を調査したものであり、総じてアスペクト性が主要テーマとなっている。

²⁵⁶ 宮下 (2006: 20f.)、深田・仲本 (2008: 194) などを参照。

²⁵⁷ 宮下 (2006: 25)、荻野 (2003: 62f.)

²⁵⁸ 主観性を唱えるもう一人の代表者として Langecker が挙げられるが、彼は認知文法の枠内で、それを概念主体の認知プロセスと考えている。

²⁵⁹ Traugott (1995) 32.

という意味変化、すなわち主観化 (subjectification, Subjektivierung) を起こすという見解である²⁶⁰。それは特定のコンテキストのなかで、語用論的推論によって生じるものであるとされる。このテーゼにしたがって、英語方面では *be going to* の運動の意味から未来の意志、推論の意味への発達、談話標識 (*well, in fact*) の発達などさまざまなケーススタディがなされ、議論を引き起こしてきた²⁶¹。

この一連の主観化研究のなかに Carey (1995) の英語の現在完了を扱ったものがある。英語の現在完了は、その通時的意味変遷を辿ると中英語までに *resultative > perfect* のシフトがあったことが示されるのである。現在完了の発達に認められる意味変化の方向性はつぎの2点に集約され、その要因は、特殊コンテキストにおける含意の習慣化 (*conventionalisation of implicatures*) に求められる：(i) 結果の観念がますます話者の態度の表現、話者の判断の表現となっていく、(ii) 重要性の位置が主語 (= 言語を用いてコード化された、客観的に解釈できる存在) から、言語的にはコード化されずそれゆえ主観的に解釈される発話状況「ここと今」 (= 基盤) へとシフトする²⁶²。

英語を対象としたこの論文と本論文とは、その分析手法もアプローチもことなるものであるが、大局的に見れば結論には共通点が見いだされる。英語の Pf. とドイツ語のそれは、用法の上でも、意味論、形態統語論的にもことなる変遷を遂げており、時制体系における位置づけも別個のものと考えなければならない。しかし文法化あるいは主観化という観点からすれば、完了形の語用論的意味がある一定の方向性をもって普遍的に発展することを示していると言えるのかもしれない。方法論を確立することによって、今回の研究が、何らかのかたちで文法化や類型論研究に寄与しうることを願って本論文を締めくくりたい。

²⁶⁰ この推移には段階づけがなされる。初期の最もシンプルなものはつぎのように示される： *propositional > textual > expressive* (命題的 > テクスト的 > 感情表出的)。宮下 (2006: 30)、荻野 (2003: 59)、深田・仲本 (2008: 199f.) などを参照。

²⁶¹ 秋元 (2011: 96)

²⁶² Carey (1995) 101

文献一覧

[テキスト]

- Hartmann von Aue: *Der arme Heinrich*. Übersetzt von S. Grosse. Herausgegeben von Ursula Rautenberg. Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2001. (Universal-Bibliothek Nr. 456)
- Die Gotische Bibel*. Herausgegeben von W. Streitberg. 6., unveränderte Aufl. Carl Winter, Heidelberg, 1971.
- Iwein*. Urtext und Übersetzung. Übersetzung und Anmerkungen von Th. Cramer. Zweite, durchgesehene und ergänzende Auflage. Walter de Gruyter, Berlin / New York, 1974.
- Kudrun*. Herausgegeben von K. Bartsch. 5. Auflage, überarbeitet und neu eingeleitet von Karl Stackmann. F.A.Brockhaus, Wiesbaden, 1965.
- Kudrun*. Bearbeitet von Prof. Dr. P. Piper. Union Deutsche Verlagsgesellschaft, Stuttgart, 1895.
- Kudrun*. Aus dem Mittelhochdeutschen übersetzt und kommentiert von B. Sowinski. Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1995. (Universal-Bibliothek Nr. 466)
- Die Nibelungen*. Bearbeitet von Prof. Dr. P. Piper. Union Deutsche Verlagsgesellschaft, Leipzig, 1889.
- Das Nibelungenlied*. Nach der Ausgabe von K. Bartsch, herausgegeben von Helmut de Boor. 22.Auflage. F.A.Brockhaus, Mannheim, 1988.
- Das Nibelungenlied*. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. Herausgegeben, übersetzt und mit einem Anhang versehen von H. Brackert. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main, 1993/1994. (1./2. Teil; Fischer Taschenbuch, Nr. 6038/6039)
- Das Nibelungenlied*. Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch. Nach dem Text von Karl Bartsch und Helmut de Boor ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1997. (Universal-Bibliothek Nr.644)
- Otfrid von Weißenburg: *Otfrids Evangelienbuch*. Herausgegeben von O. Erdmann. 6. Auflage, besorgt von L. Wolff. Max Niemeyer, Tübingen, 1973.
- Parzival und Titarel*. Herausgegeben von K. Bartsch. F. A. Brockhaus, Leipzig, 1870.
- Wolfram von Eschenbach: *Parzival I*: Übertragen von Dieter Kühn. Deutscher Klassiker Verlag, Band 7, Frankfurt am Main, 1994.
- Tatian*. Lateinisch und altdeutsch mit ausführlichem Glossar. Herausgegeben von E. Sievers. 2., neubearbeitete Ausgabe. Ferdinand Schöningh, Paderborn.

[参考文献]

- Admoni, W. (1970): *Der deutsche Sprachbau*. Dritte, durchgesehene und erweiterte Auflage. C.H.Beck, München.
- Admoni, W (1990): *Historische Syntax des Deutschen*. Max Niemeyer Verlag, Tübingen.

- Behaghel, O. (1924): *Deutsche Syntax*. Eine geschichtliche Darstellung. Bd.II. Carl Winter, Heidelberg.
- Benecke, G. F. / Müller, M. / Zarncke, F. (1990): *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*. S. Hirzel, Stuttgart. Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-1866.
- Besch, W. / Wolf, N. R. (2009): *Geschichte der deutschen Sprache. Längsschnitte – Zeitstufen – Linguistische Studien*. Erich Schmidt Verlag, Berlin.
- Blatz, F. (1896): *Neuhochdeutsche Grammatik mit Berücksichtigung der historischen Entwicklung der deutschen Sprache*. Dritte völlig neubearbeitete Auflage. J. Lang, Karlsruhe.
- Braune, W./ Eggers, H. (1987): *Althochdeutsche Grammatik*. Max Niemeyer, Tübingen.
- Brinkmann, H. (1965): Sprachwandel und Sprachbewegungen in althochdeutscher Zeit. In: *Studien zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*, Schwann, Düsseldorf.
- Brinkmann, H. (1962): *Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung*. Pädagogischer Verlag Schwann, Düsseldorf.
- Brugmann, K. (1904): *Kurze vergleichende Grammatik*. Karl J. Trübner, Strassburg.
- Buscha, J. (1995): *Lexikon deutscher Konjunktionen*. Langenscheidt, Leipzig, Berlin, München, Wien, Zürich, New York.
- Bußmann, H. (2002): *Lexikon der Sprachwissenschaft*. 3. Auflage. Kröner, Stuttgart.
- ten Cate, Abraham P. (1989): Präsentische und präteritale Tempora im deutsch-niederländischen Sprachvergleich. In: *Tempus-Aspekt-Modus. Die lexikalischen und grammatischen Formen in den germanischen Sprachen*. Max Niemeyer Verlag, Tübingen. (Linguistische Arbeiten 237) S.133-154.
- Comrie, B. (1985): *Tense*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Dal, I. (1966): *Kurze deutsche Syntax*. 3. Aufl. Niemeyer, Tübingen.
- Đorđević, M. (1994): Vom Aspekt zum Tempus im Deutschen. In: *Deutsche Sprache*. 4/94. S.289-309.
- Duden (1995): *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. 5., völlig neu bearbeitete Auflage. Bd. 4. Dudenverlag, Mannheim / Leipzig / Wien / Zürich.
- Schüler Duden (2000): *Literatur*. 3., neu bearbeitete Auflage. Dudenverlag, Mannheim / Leipzig / Wien / Zürich.
- Ebert, R. P. (1978): *Historische Syntax des Deutschen*. Metzler, Stuttgart (Sammlung Metzler Band 167).
- Eichler, W./Bünting, K.-D. (1996): *Deutsche Grammatik. Form, Leistung und Gebrauch der Gegenwartssprache*. 6.Auflage. Beltz Athenäum Verlag, Weinheim.
- Eisenberg, P. (1994): *Grundriß der deutschen Grammatik*. 3., überarbeitete Auflage. J. B. Metzler, Stuttgart/Weimar.
- Engel, U. (1988): *Deutsche Grammatik*. Julius Groos, Heidelberg/Sansyusha, Tokyo.

- Erben, J. (1972): *Deutsche Grammatik*. Ein Abriss. 11., völlig neubearbeitete Auflage. Max Hueber, München.
- Erdmann, O. (1973): *Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids*. Georg Olms, Hildesheim / New York. (Nachdruck der Ausgabe Halle 1874-76)
- Erdmann, O. (1985): *Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung*. Georg Olms, Hildesheim / Zürich / New York. (Nachdruck der Ausgabe Stuttgart 1886 und 1898).
- Eroms, H-W. (1997): Verbale Paarigkeit im Althochdeutschen und das ‚Tempussystem‘ im ‚Isidor‘. In: *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur*. Herausgegeben von Franz Josef Worstbrock. 126. Band. 1-31.
- Feist, S. (1923): *Etymologisches Wörterbuch der gotischen Sprache*. Mit Einschluss des Krimgotischen und sonstiger gotischer Sprachreste. 2., gänzlich neubearbeitete Auflage. Max Niemeyer, Halle (Saale).
- Flämig, W. (1991): *Grammatik des Deutschen*. Einführung in Struktur- und Wirkungszusammenhänge. Akademie, Berlin.
- Fleischer, J. (2011): *Historische Syntax des Deutschen*. Eine Einführung. Narr, Tübingen.
- Gerdes, U. / Spellerberg, G. (1983): *Althochdeutsch-Mittelhochdeutsch. Grammatischer Grundkurs zur Einführung und Textlektüre*. 5.Auflage. Athenäum, Königstein.
- Grønvik, O. (1986): Über den Ursprung und die Entwicklung der aktiven Perfekt und Plusquamperfekt Konstruktionen des Hochdeutschen und ihre Eigenart innerhalb des germanischen Sprachraumes. Solum, Oslo.
- Härd, J. E. (2003): Hauptaspekte der syntaktischen Entwicklung in der Geschichte des Deutschen. In: *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*. 2.Auflage. Herausgegeben von Werner Besch, Anne Betten, Oskar Reichmann, Stefan Sonderegger. 3.Teilband. de Gruyter, Berlin, New York, 2569-2582.
- Heine, B. / Kuteva, T. (2006): *The Changing Language of Europe*. Oxford, New York.
- Helbig, G./Buscha, J. (1994): *Deutsche Grammatik*. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Langenscheidt/Verlag Enzyklopädie, Leipzig/Berlin/München/Wien/Zürich/New York.
- Hentschel, E. / Weydt, H. (1994): *Handbuch der deutschen Grammatik*. 2. Auflage. Walter de Gruyter, Berlin / New York. Hentschel, E. / Weydt, H. (1990): E. ヘンツェル/H. ヴァイト『ハンドブック 現代ドイツ文法の解説』西本美彦、高田博行、河崎靖訳、同学社、1994.
- Jung, W. (1973): *Grammatik der deutschen Sprache*. 5., durchgesehene Auflage. VEB Bibliographisches Institut Leipzig.
- Kelle, J. (1963): *Otfrids von Weissenburg. Evangelienbuch. Text, Einleitung, Grammatik, Metrik, Glossar*. Dritter Band. Glossar der Sprache Otfrids. Otto Zeller, Aalen. (Neudruck der Ausgabe

- 1881)
- Kotin, M. L. (1997): Die analytischen Formen und Fügungen im deutschen Verbalsystem: Herausbildung und Status (unter Berücksichtigung des Gotischen). In: *Sprachwissenschaft* Bd.22 Heft 4. Carl Winter, Heidelberg. S.479-500.
- Krahe, H. (1966): *Germanische Sprachwissenschaft*. I: Einleitung und Lautlehre. Walter de Gruyter, Berlin. (Sammlung Göschen Band 238)
- Krahe, H. (1967): *Germanische Sprachwissenschaft*. II: Formenlehre. Walter de Gruyter, Berlin. (Sammlung Göschen Band 780) (= Krahe¹)
- Krahe, H. / Meid, W. (1969): *Germanische Sprachwissenschaft*. III: Wortbildungslehre. Walter de Gruyter, Berlin / New York. (Sammlung Göschen Band 2234)
- Krahe, H. (1972): *Grundzüge der vergleichenden Syntax der indogermanischen Sprachen*. Herausgegeben von W. Meid und H. Schmeja. Innsbruck.
- Krahe, H. (1967): *Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen*. Zweite Auflage bearbeitet von E. Seebold. Carl Winter, Heidelberg. (= Krahe²)
- Krahe, H. (1985): *Indogermanische Sprachwissenschaft*. Sechste, unveränderte Auflage des I. und II. Teils in einem Band. Walter de Gruyter, Berlin. (Sammlung Göschen Band 59)
- Kuroda, S. (1997): Zum System der Partizip II-Konstruktion im Althochdeutschen. In: *Sprachwissenschaft* Bd.22 Heft 3. Carl Winter, Heidelberg. S.287-307.
- Kuroda, S. (1999): *Die historische Entwicklung der Perfektbildungen im Deutschen*. Hermut Buske, Hamburg. (Beiträge zur germanistischen Sprachwissenschaft 15)
- Meier-Brügger, M. (2002): *Indogermanische Sprachwissenschaft*. 8., überarbeitete und ergänzte Auflage der früheren Darstellung von Hans Krahe. Walter de Gruyter, Berlin / New York.
- Metzler Lexikon Sprache* (1993): Herausgegeben von Helmut Glück, Verlag J.B. Metzler, Stuttgart/Weimar.
- Nishimoto, Y. (2004): Über das Passiv im Indogermanischen und im Finnisch-ugrischen unter Berücksichtigung des Japanischen. Nakanishiya, Kyoto.
- Nübling, D/Dammel, A./Duke, J/Szczepaniak, R. (2008): *Historische Sprachwissenschaft des Deutschen*. Eine Einführung in die Prinzipien des Sprachwandels. 2.Aufl. Gunter Narr, Tübingen.
- Oubouzar, E. (1974): Über die Ausbildung der zusammengesetzten Verbformen im deutschen Verbalsystem. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 95, Halle, 5-96.
- Paul, H. (1958): *Deutsche Grammatik*. 4.Auflage. Bd. IV. VEB Max Niemeyer, Halle (Saale).
- Paul, H./Mitzka, W. (1960): *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 18.Auflage. Bearbeitet von Walther Mitzka. Max Niemeyer, Tübingen.
- Paul, H. (2007): *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 25.Auflage. Neu bearbeitet von Thomas Klein,

- Hans-Joachim Solms und Klaus-Peter Wegera. Max Niemeyer, Tübingen.
- Piper, P. (1887): *Otfrids Evangelienbuch. Mit Einleitung, erklärenden Anmerkungen, ausführlichem Glossar und einem Abriss der Grammatik.* II. Theil: Glossar und Abriss der Grammatik. J.C.B. Mohr, Freiburg i. B.
- Radtke, P. (1998): *Die Kategorien des deutschen Verbs. Zur Semantik grammatischer Kategorien.* Gunter Narr, Tübingen.
- Reichenbach, H. (1947): *Elements of Symbolic Logic.* The Macmillan Company, New York.
- Reichenbach, H. (1947) : H. ライヘンバツハ 『記号論理学の原理』 石本新訳、大修館書店、1982.
- Saran, F. (1975): *Das Übersetzen aus dem Mittelhochdeutschen.* 6. Auflage. Tübingen.
- Schmidt, W. (1973): *Grundfragen der deutschen Grammatik. Eine Einführung in die funktionale Sprachlehre.* Volk und Wissen volkseigener Verlag Berlin.
- Schmidt, W. (2007): *Geschichte der deutschen Sprache. Ein Lehrbuch für das germanistische Studium.* 10. Auflage. S. Hirzel, Stuttgart. Schmidt, W. (2000) : ヴェイルヘルム・シュミット 『総論 ドイツ語の歴史』 西本美彦他訳、朝日出版社、2004.
- Schrodt, R. (2004): *Althochdeutsche Grammatik II. Syntax.* Max Niemeyer Verlag, Tübingen.
- Schrodt, R/Dornhauser, K. (2003): Tempus, Aktionsart/Aspekt und Modus im Deutschen. In: *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Forschung.* 2.Auflage. Herausgegeben von Werner Besch, Anne Betten, Oskar Reichmann, Stefan Sonderegger. 3.Teilband. de Gruyter, Berlin/New York, 2504-2525.
- Sommer, F. (1959): *Vergleichende Syntax der Schulsprachen. Mit Besonderer Berücksichtigung des Deutschen.* 4.Auflage. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt.
- Sommerfeldt, K.-E./Starke, G. (1998): *Einführung in die Grammatik der deutschen Gegenwartssprache.* 3., neu bearbeitete Auflage unter Mitwirkung von Werner Hackel. Max Niemeyer Verlag, Tübingen.
- Sonderegger, S. (1979): *Grundzüge deutscher Sprachgeschichte. Diachronie des Sprachsystems.* Band I. de Gruyter, Berlin/New York.
- Sonderegger, S. (1987): *Althochdeutsche Sprache und Literatur.* Zweite, durchgesehene und erweiterte Auflage. Walter de Gruyter, Berlin / New York. (=Sammlung Göschen Band 8005)
- Sonderegger, S. (2000): Morphologie des Althochdeutschen. In: *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung.* 2.Auflage. 2.Teilband. Herausgegeben von Werner Besch, Anne Betten, Oskar Reichmann, Stefan Sonderegger. Walter de Gruyter, Berlin/New York, 1171-1196.
- Streitberg, W. (1920): *Gotisches Elementarbuch.* 5. und 6. neubearbeitete Auflage. Carl Winter, Heidelberg.
- Szczepaniak, R. (2009): *Grammatikalisierung im Deutschen. Eine Einführung.* Gunter Narr,

- Tübingen.
- Thieroff, R. (1992): *Das finite Verb im Deutschen. Tempus-Modus-Distanz*. Gunther Narr Verlag, Tübingen. (Studien zur deutschen Grammatik Band 40)
- Traugott, E.C. (1995): Subjectification in grammaticalization. In: *Subjectivity and subjectivisation. Linguistic perspectives*. Cambridge University Press. Cambridge. 31-54.
- Weinlich, H. (1994): *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*. 5.Auflage. Kohlhammer, Stuttgart.
- Weinlich, H. (1977): ヴァインリヒ・ハラルト『時制論 文学テキストの分析』脇阪豊、大瀧敏夫、竹島俊之、原野昇共訳、紀伊國屋書店、1982.
- Wilmanns, W. (1906): *Deutsche Grammatik. Gotisch, Alt-, Mittel-, und Neuhochdeutsch*. Dritte Abteilung: Flexion. Karl J. Trübner, Strassburg.
- Wunderlich, D. (1970): *Tempus und Zeitreferenz im Deutschen*. Max Hueber Verlag, München.
- Zadorožny, B. (1974): Zur Frage der Bedeutung und des Gebrauchs der Partizipien im Altgermanischen. II. Teil. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 95, Halle, 339-387.
- 秋元 実治 (2011): 「文法化と主観化」 In: 澤田治美編『ひつじ意味論講座 主観性と主体性』、ひつじ書房、93-110 頁。
- 岩隈 直 (1996): 『増補・改訂 新約ギリシャ語辞典』山本書店。
- ヴァルター・フォン・ヴァルトブルク (1976): 『フランス語の進化と構造』田島、高塚、小方、矢島共訳、白水社。
- 荻野 蔵平 (2003): 「助動詞表現と文法化の歴史」 In: 『ドイツ語助動詞構造の歴史的発展をめぐって』(日本独文学会研究叢書 015 号)、57-66 頁。
- 金子 哲太 (2008): 「現在完了の『主観的』意味について —通時的考察にもとづいて—」 In: 東北ドイツ文学会・日本独文学会東北支部『東北ドイツ文学研究』第 51 号、87-104 頁。
- 金子 哲太 (2009): 「現在完了の非過去の用法について —その通時的考察—」 In: 阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』第 51 号、109-128 頁。
- 金子 哲太 (2011): 「現在完了の語用論的意味について —古高ドイツ語から中高ドイツ語にかけて—」 In: 『ゲルマン祖語から現代ドイツ語へ —歴史的発展における駆流とその反動』(日本独文学会研究叢書 081 号)、20-44 頁。
- 塩見 浩司 (1993): 「接頭辞 ga-を持つゴート語の動詞 (1)」 In: 関西大学独逸文学会『独逸文学』37 号、1-37 頁。
- 重藤 実 (1985): 「中高ドイツ語の複合的動詞句について」 In: 『ドイツ語学研究 I』クロノス、359 - 375 頁。
- 志田 章 (1994): 「受動と完了 —史的—考察—」 In: 関西大学独逸文学会『独逸文学』38 号、57-79 頁。
- 嶋崎 啓 (1992): 「ドイツ語完了形の成立と歴史的変化」 In: 九州大学独文学会『九州

- ドイツ文学』6、1-71 頁。
- 嶋崎 啓 (2003) : 「完了形と受動形の歴史的発展」 In : 重藤実編『ドイツ語助動詞構造の歴史的発展をめぐって』(日本独文学会研究叢書 015 号)、3-20 頁。
- 嶋崎 啓 (2004) : 『ドイツ語現在完了形の歴史的変化』(博士論文、九州大学)。
- 嶋崎 啓 (2011) : 「西・北・東ゲルマン語の諸相」 In : 齋藤治之編『ゲルマン祖語から現代ドイツ語へ—歴史的発展における駆流とその反動—』(日本独文学会研究叢書 081 号)、1-19 頁。
- 清水 誠 (1984) : 「Gottfried の „Tristan“ における中高ドイツ語動詞接頭辞 GE - の研究」 In : 『ドイツ文学』72、96 - 110 頁。
- 鈴木 孝夫(1968) : 「言語と社会」 In: 『岩波講座 哲学』(岩波書店)第 11 巻第 9 章 339-368 頁。
- 武市 修 (2006) : 『中世ドイツ叙事文学の表現形式 —押韻技法の観点から—』近代文芸社。
- 『ドイツ言語学辞典』(1994) : 編集主幹 川島淳夫、紀伊國屋書店。
- 『ドイツ語史小辞典』(2005) : 荻野蔵平、齋藤治之、同学社。
- 中村 雅美 (2000) : 「現代ドイツ語時制論における混乱とその原因について」 In : 日本独文学会京都支部『Germanistik Kyoto』1、61-80 頁。
- パトータ、ジョゼッペ (2007) : 『イタリア語の起源 歴史文法入門』岩倉、橋本共訳、京都大学学術出版会。
- バンヴェニスト, É. (2000) : 『一般言語学の諸問題』岸本通夫監訳、みすず書房。
- 深田 智 (2001) : 「“Subjectification” とは何か : 言語表現の意味の根源を探る」 In : 京都大学『言語科学論集』第 7 号、61-89 頁。
- 深田 智・仲本康一郎 (2008) : 『概念化と意味の世界 —認知意味論のアプローチ—』(講座 認知言語学のフロンティア③)、研究社。
- ホッパー, P. J.・トラウゴット, E. C. (2003) : 『文法化』日野資成訳、九州大学出版会。
- 宮下 博幸 (2006) : 「文法化研究とは何か」 In : 『早稲田言語研究会会報』第 10 号 (Travaux du Cercle linguistique de Waseda vol.10)、20-47 頁。
- 森田 貞雄 (1981) : 『アイスランド語文法』、大学書林。
- 吉田 和彦 (1978) : 「ゴート語 preverb ga-の研究」 In : 日本言語学会発行『言語研究』第 78 号、85-113 頁。
- 浜崎 長寿・野入 逸彦・八本木 薫 (2008) : 『動詞』大学書林。
- 湯浅 博章 (2009) : 「中高ドイツ語の動詞接頭辞 ge-の機能について — „Der arme Heinrich“ におけるテンスとアスペクトの相関関係—」 In : 姫路獨協大学『外国語学部紀要』第 22 号、1-21 頁。